

G&Kの獵犬

試作型機龍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サイボーグと化したティス・エーベルヴァインの日常的なやつ

本編（ミツシヨン）と本編裏の出来事（アウターミツシヨン）とあります

更新どちらも不定期です

目次

オリジナルや各種設定紹介

BLACKWATCH所属の戦術人形 | 1

BLACKWATCH所属の戦術人形その2（後半に簡単に部隊紹介） | 5

BLACKWATCH所属の戦術人形 オリジナル人形及び設定

| 9

ミッション

ミッション1 | 15

ミッション2 | 19

ミッション3（コラボ回） | 23

ミッション4 | 30

ミッション5 | 33

ミッション6 | 36

ミッション7 | 39

ミッション8 | 42

ミッション9 | 45

ミッション10 | 48

ミッション11 | 51

ミッション12 | 54

ミッション13 | 57

ミッション14 | 60

ミッション15 | 62

ミッション16 | 66

ミッション17 | 70

ミツシヨン	18		
ミツシヨン	19		
ミツシヨン	20		
ミツシヨン	21		
ミツシヨン	21.5		
ミツシヨン	22		
ミツシヨン	22	(コラボ準備回)	
ミツシヨン	23	(コラボ回)	
ミツシヨン	24	(コラボ回)	
ミツシヨン	25		
ミツシヨン	26		
ミツシヨン	27		
ミツシヨン	28		
ミツシヨン	29		
ミツシヨン	30		
アウターミツシヨン			
アウターミツシヨン	1		129
アウターミツシヨン	2		133
アウターミツシヨン	3		136
アウターミツシヨン	4		139
アウターミツシヨン	5	(コラボ回)	142
アウターミツシヨン	6		147
アウターミツシヨン	7		151
アウターミツシヨン	8		154
アウターミツシヨン	9		158

アウターミッション	10	(コラボ回)	161
アウターミッション	11		167
アウターミッション	12		170
アウターミッション	13		174
アウターミッション	14		177
アウターミッション	15		181
アウターミッション	16		184
アウターミッション	17		189
アウターミッション	18		192
アウターミッション	19	(長編コラボ回)	195
アウターミッション	20		199
アウターミッション	21		202
アウターミッション	22		206
アウターミッション	23		209
アウターミッション	24		211
アウターミッション	25		215
アウターミッション	26		218
アウターミッション	27		221
アウターミッション	28		224
アウターミッション	29		228
アウターミッション	30		233
アウターミッション	31		236
アウターミッション	31	(コラボ回ラスト)	240
アウターミッション	32		245
アウターミッション	32		248

アウターミツシヨン	3	3		252
アウターミツシヨン	3	4		255
アウターミツシヨン	3	5		258
アウターミツシヨン	3	6		261
アウターミツシヨン	3	7		264
アウターミツシヨン	3	8		267
アウターミツシヨン	3	9		269
アンダーミツシヨン	4	0		271
アンダーミツシヨン	4	1		274
アウターミツシヨン	4	2		278
アウターミツシヨン	4	3		281
アウターミツシヨン	4	4		284
アウターミツシヨン	4	5		287
アウターミツシヨン	4	6		289
アウターミツシヨン	4	7		292
アウターミツシヨン	4	8		295
アウターミツシヨン	4	9		302
アウターミツシヨン	5	0		305
アウターミツシヨン	5	1		308
アウターミツシヨン	5	2		310
アウターミツシヨン	5	3		313
アウターミツシヨン	5	4	(コラボ回)	316
アウターミツシヨン	5	5	(コラボ中)	320
アウターミツシヨン	5	6	(コラボ中)	324

アウターミッション57	(コラボ中)	328
アウターミッション58	(コラボ中)	332
アウターミッション59	(コラボ回)	336
アウターミッション60		339
アウターミッション61		342
アウターミッション62		345
アウターミッション63		348
アウターミッション64		351

オリジナルや各種設定紹介

BLACKWATCH所属の戦術人形

UMP45

所属部隊、フェンリル

戦術人形の中ではかなりの古参

フェンリルのリーダー

戦術人形で1番の権限を持つ

むねの事は小さい方が戦闘に有利と考えて逆に巨乳をバカにしている

酔うと鉄血のハイエンドモデルが逃げるレベルの狂気を含んだ笑いをする

ティスと背合わせで座るのが好き

一番の貧乳

使用武器、メイン、UMP45 サブ、ソーコムピストル

UMP9

所属部隊、フェンリル

フェンリルの中では遅く入った戦術人形

フェンリルの中で一番まとも

姉のパンチラを拝むのが生き甲斐

45の妹

その拳は全てを家族にする

使用武器、メイン、UMP9 サブ、USPマッチ

HK416

所属部隊、フェンリル

45同様の古参の戦術人形

フェンリル1の乳を持つ

G11のお母さん(厳しい)

テイスに膝枕されたい

酔うとエロくなる

少々ヤンデレ気味で刃物を禁止された

使用武器、メイン、HK416 サブ、USPタクティカル

G11

所属部隊、フェンリル

BLACKWATCHの大罪、怠惰のコードネームを持つ戦術人形

ナマケモノ

枕は身体の一部

フェンリルのヤバイ奴

つまみ食いのプロ

今日も敵をグチャグチャにする

趣味はテイスの寝床奪いと奪った寝床で■■■■■（この文は削除されました）

1番テイスと■■■■■、この為416はG11に厳しい（この文は削除されました）

使用武器、メイン、G11 サブ、VP70

アリス

所属部隊、フェンリル

（閲覧禁止）

閲覧にはLv6以上の権限が必要です

PKP

所属部隊、ブラックドック

ブラックドックのリーダーで酒屑人形の筆頭

50以下は酒じやない

酒屑の筆頭だがまともな方、しかし飲む量は異常
煙管を愛用している

MGをARの用に扱う

ビーストに拾われBLACKWATCH入りを果たす
飲み会ではビーストの隣が定位置
使用武器、メイン、PKP サブ、VAG73

AEK999

所属部隊、ブラックドック

酒盾人形の1人

アルコールがあれば全て酒

酒盾のヤバイ奴

アルコール100%の酒を造った(ただのアルコール原液では無く
一応酒に分類される)

MGはARじゃありません

PKP同様にビーストに拾われBLACKWATCH入り

密造酒造りが本職

飲み会の席はビーストの正面

使用武器、メイン、AEK999 サブ、AF2011A1

9A91

所属部隊、ブラックドック、特戦隊

酒盾人形の1人

全ては酒に通づる

酒盾のかなりヤバイ奴

燃料を酒に変える程度の能力

燃料タンクは酒タンク

今日も酒になるものを探し基地をさまよう

この身体はきつと酒で出来ていた

ヤンデレだが刃物の禁止はされていない

特戦隊へは新人の教育官として着く事がある

常時メイド服スキン

PKP、AEK、9A91はBLACKWATCHに入る前は別の
所で同じだったので仲が良い(?)

ビーストに拾われBLACKWATCH入り

飲み会の席はビーストの隣

使用武器、メイン、9A91(30発マガジン)

サブ、TP84

(ストック兼マチェットは別で持っている)

イングラムM10

所属部隊、ブラックドック

ブラックドック唯一無二のまとも

バトルギャンキー

自分はまともじゃないと思っていたがブラックドックではかなりまともだったので困っている

一番実戦の多いブラックドックに志願したがメンツが濃すぎてかなり浮いている

転属願いが受理されない(16回目)

最近胃薬常習者同盟に入った

使用武器、メイン、イングラムM10二丁持ち

サブ、無し

百式

所属部隊、特戦隊

特戦隊リーダーにして戦術人形の訓練教官

ティスの訓練を受け大和魂に目覚めた(感情が高ぶった時のみ)奇襲が得意

最近私服を持っていない事に気付いた

南部式は使わない

他の戦術人形に大和魂を叩き込もうとした為教官職を無期限凍結された

使用武器、メイン、改造百式短機関銃

サブ、コルトガバメント、

軍刀

BLACKWATCH所属の戦術人形その2（後半に簡単に部隊紹介）

K S G

所属部隊、特戦隊

そこそこ新参の人形

かなりまともで人間を殺すのに慣れておらず日々葛藤している

但し人形相手なら容赦は無い

最近ドラゴンブレス弾にハマった

目覚めのコーヒーが無いと不機嫌になる

ジャンクな食事が好き

使用武器、メイン、K S G、K S G 2 5 サブ、M a x i m 9（4

5口径カスタム）

グリズリーマグナム

所属部隊、特戦隊

ハンドガンの人形の最古参

酒クズ予備軍

ムーンシャインが好きでA E K 9 9 9と一緒に密造酒を作ってる

朝食はベーコンマフィン

基地内に蜂の巣が出来ると必ず呼ばれるのが悩み

ホットケーキに蜂蜜はかけない

甘い物より肉が好き

使用武器、グリズリーマグナム357マグナム仕様を2丁持ち、サ

プレッサー、BLACKWATCH製ロングマガジン サブ、無し

クリスベクター

所属部隊、特戦隊

少しミステリアスな雰囲気
BLACKWATCH内では人気がある

タバコを始めようとしたが失敗しココアシガレットを啜えている
隠れオタク

厨二病になれなかった

格好つけてブラックコーヒーを飲んで敗北、それ以降コーヒーは飲
まない

紅茶の方が絵になった、今日もカフェのテラス席で紅茶を飲む

海に行きたくて水着を買ったが2年も着れてない

使用武器、メイン、クリスベクター サブ、水平二連ショットガン

SVDドラグノフ

所属部隊、特戦隊

幹部メンバーに頼って欲しくて特戦隊に入るも書類仕事が遅く
頼ってくれない

人をダメに出来なかった人形

テキーラに入っている芋虫が好物

その為か虫食にハマった

タランチュラは直火で焼いた脚が美味しい

使用武器、メイン、SVDドラグノフ、20発マガジン、サブレッツ

サー サブ、スチエツキン45口径仕様

M D R

所属部隊、無し

新人戦術人形

単独での実力は人形の中では上位に入る程高いが仲間との連携が
取れない上に仲間がいると実力を発揮出来ない

開発などもやっているが基本1人でやっている

通称ぼっち人形

現在リホーマーの所にスパイとして入っている

若干守銭奴

B L A C K W A T C H 内の情報掲示板をやっている

嘘も書かれるので最後まで見ないといけない

嘘をつくのが得意で嘘の中にホントも混ぜる為嘘だと分かりずらくバれない

端末を他が使うと怒る

エロ配信はしない

使用武器、メイン、アンダーレイルにM203グレネードランチャーを付けたMDR サブ、ベレッタM93R

余ったので部隊紹介

フエンリル隊

戦術人形部隊の中で1番の権限を持つ部隊

メンバーはUMP45をリーダーにUMP9、HK416、G11、アリス、BLM37の6人

表から裏まで様々な任務をこなす部隊

表向きには幹部であるティスの護衛部隊となっている

その為実質的なリーダーはティス

ブラックドック隊

裏で高い実力の部隊

メンバーはリーダーのPKPを始め9A91、AEK999とロシアの戦術人形で構成されていたがイングラムM10が入ったので特に決まりはないらしい

主に殲滅戦等をメインにこなしている

イングラムを除いて全員が酒クズ

特戦隊

幹部直属の部隊で幹部メンバーのみが動かす事が出来る

フエンリル隊同様に表と裏をこなす

メンバーはリーダーに百式でクリスベクター、グリズリーマグナム、KSG、SVDドラグノフ

また新人が入った場合9 A 9 1が合流する

部隊全員の銃が改造されたりしている

他にも複数の特戦隊の部隊がある

基本的には表には出来ない任務が多いが幹部の護衛等もやる

BLACKWATCH所属の戦術人形 オリジナル 人形及び設定

BML37

所属部隊、フェンリル

火力、S

命中、A

射速、A―

回避、B―

装甲、D

破甲、A〓S+

初のグレネードランチャーの戦術人形（モデルはリドルジョーカー
の壬生千咲）

フェンリルの新人

元々フェンリルへは実戦テストでの一時的な配属だったがエア
バーストを組み込んだBML37の性能の高さにティスが無理矢理
フェンリルへ正式所属にした

鉄血人形のDSIシリーズをベースにしている

服装は赤のパーカーベストに黒のTシャツ

ジーンズのハーフパンツにミリタリーブーツ

元気いっぱいのがレネーダー

隠れた場所はキルゾーン

えげつない攻撃を良くする

グレネードランチャー以外にも多数の爆発物を所持している

まだBLACKWATCHに毒されていない

見た目に（145cm）に反して意外と力持ち

たまにやらかす爆弾魔

グレネードランチャーはハンドガンでは無い

使用武器、メイン BML37（エアバースト機能付き）、サブ、V

P9タクティカル

爆発物、セムテクス、手榴弾、ダイナマイト、パイプ爆弾、バンガ
ローレットc……

キラー（殺人鬼）

所属部隊、無し

火力、A+

命中、B-

射速、S

回避、D+

装甲、C

破甲、C<B+

BLACKWATCH製の鉄血ハイエンドモデル（モデルは艦これ
の戦艦レ級）

本来なら1年前に配備される予定だったが実戦テスト前にピース
トとインセクトに喧嘩を売りフルボッコにされた挙句両足を切断さ
れた（この時2人はある理由で半ギレ状態だった為）

実力は高いものの喧嘩を売る相手が悪すぎた

両足は新たに作られた

黒のブレザーの下に黒のパーカーを着ている

処刑人と同じく俺っ子

その名の通りの殺し専門の戦術人形

実は酒が弱い

酔う前にダウンする

使用武器、不明

チーフ（首領）（モデルはレクリエーターズのアルタイル）

所属部隊、無し

ステータス不明

BLACKWATCHに來た一番最初の戦術人形にて幹部唯一の

戦術人形

訓練教官（鬼）

鉄血工造株式会社と企業提携していた時に鉄血工造からテストも兼ねてBLACKWATCHに送られた

テスト内容は戦術人形が何処まで成長し戦場で活躍出来るかと言うもので来た当初は純粋な戦術人形だった

だがBLACKWATCH（主にビースト）が張り切って様々な訓練等をした結果幹部に負けず劣らずの実力者になった

因みに鉄血工造はこの結果にかなり驚きBLACKWATCHはやり過ぎたと少し後悔した

これらの結果戦術人形が幹部になると言うイレギュラーが起きた
現在の性格は締めるところはとことん締めて緩める所はとことん緩める

しかし変な所で融通が効かないので下の社員達を困らせる
（社員を困らせるのは幹部共通）

しかし戦闘時はどんなに絶望的な状況でも堂々としている
若干面倒な性格だがBLACKWATCHのお祭り騒ぎには普通に便乗する

たまにボケをかます

チーフの名に恥じぬ高い指揮権（鉄血）を持っておりその指揮権はエルダーブレインの次に強くハイエンドモデルでも気を抜けばチーフに従う事になる

何故未だに鉄血の指揮権を持っているのかは不明

エルダーブレインに興味を持たれているがチーフはかなりウザがつてる

エルザが人間は不要と結論した理由が解らず日々考えてる

（一度、地球の自然を取り戻す為と結論した事がある）

格好は黒の軍服に両手に黒のガントレットを付けている

軍服は元はダブルコート状のワンピース風になっていたが前の部分を取り取りマントのようにしてズボン履いている

軍服はマントの様になっているスカートを除けば男物だったりする

この見た目と堂々とした姿勢から軍姫の異名を持つ

チーフの軍服を元にBLACKWATCHの制服が作られたが着ている者は少ない

様々な戦闘訓練を教わったからかビーストの事をマスターと言いついて慕っている

2本の黒い刀を持っており、両儀と巴の名がついている

新人等の訓練教官をしているがかなり厳しく鬼教官と言われている

だが得るものは大きく様々な者達が彼女の訓練を受けたがる

使用武器、黒い刀2本（両儀、巴）

サイバーブレイン

所属、無し

BLACKWATCHの管理AI

元は鉄血工造株式会社の管理AIで蝶事件後はシャットダウンされていたが鉄血の蠱毒の為に再起動させられ蠱毒に参加させられる

だが自力でBLACKWATCHのネットワークに逃げ込みいくつかの情報を提供しそのままBLACKWATCHの管理AIとして落ち着く

主にBLACKWATCHの各種情報の管理やネットワークと各通信の監視、各所のハッキングや監視、そして警備システム等BLACKWATCHのネットワーク全般を担っている

BLACKWATCHの独自ネットワークであるラビリンスは彼女が作ったものでラビリンスは文字通りかなり複雑な上に強力な攻勢防壁と強固なファイアウォールが何重にも掛けられておりBLACKWATCHへのハッキングは逆にBLACKWATCHにハッキングされ情報を盗るつもりが逆に盗られるという事になる

BLACKWATCHのネットワークには量子コンピュータ等も使われておりサイバーブレインは非常に高い演算能力と異常な並列処理能力を持っている

サイバーブレインという名は仮の名称であり専用のボディが出来れば名称が変わる

因みに専用ボディはかなりえげつない設計らしい

BLACKWATCHと鉄血工造株式会社の企業提携

この企業提携は鉄血工造株式会社が提案したもの

企業提携理由は不明だがBLACKWATCHはこれに同意し企業提携が始まった

当初は試作人形の性能テストや鉄血の警備だけだったが後に人形開発や装備開発に関わったりしていった

開発に関わった人形にはハイエンドモデルのエクスキューションやハンター等がいる

提携していた時に鉄血人形の各工場等がBLACKWATCHの敷地内に作られた

今も残っているが規模は少し小さくなりBLACKWATCHの研究所も兼ねている

BLACKWATCHに居る元鉄血工造の人物達は蝶事件が起きた際にBLACKWATCHに居た者が殆どで残りは鉄血工造にいたが運良く生き残りBLACKWATCHに保護された者達

BLACKWATCHが蝶事件の時に何をしていたのかは不明で一部からはBLACKWATCHが引き起こしたとも言われている
これに対しBLACKWATCHは口を閉ざしている

BLACKWATCHのダミーカンパニー

個人経営の小さいものからそこそ有名なもの、代理店まである会社によっては社長や幹部にBLACKWATCHの初期メンバーがいる

世界中に存在し主な任務は各所の情報収集やBLACKWATCHの後方支援がメイン

表向きは真つ当な会社で下の者はダミーカンパニーという事を知らない

ダミーカンパニーは基本使い捨てで何かあったら潰したり普通の

会社に戻ったりする

主な会社はP M C、アウトドア ミリタリーショップ、ホテル、飲食店、運送会社、人形販売代理店、車及びバイクメンテナンスショップ
P e t c ……

また成り行きで芸能事務所や学校、孤児院等もやっているがこの辺はかなりマトモだったりする

因みにミッション2に登場した引越し業者もBLACKWATC
Hのダミーカンパニーだったりする

ミツシヨン

ミツシヨン1

G地区の森から銃声、それに混じってバイクのエンジン音が響く。バイクに乗る人物は左手に持っているP90を後方に向けてフルオートで撃つ

弾数が多く反動も少ないこのP90だが足場が悪い上にバイクで走りながらでは余り当たらない

「…チツ」

その男は弾の切れたP90を投げ捨て運転に集中する

P90で倒せたのは1体だけ

当たったのはそれなりに居たが倒せたのはたった1本、男は笑いそうになる

後ろから追ってくるのは同じくバイクに乗った鉄血人形共

森に入る前まで車に乗ったのも居たが入って来なかつたらしい

男はバイクに付けられた端末を確認する

端末には地図が表示されており自分の位置から残り500mで街に出れる

街は無人なので反撃に転じられる

「街は吉と出るか凶と出るか…」

呟きながらスピードを上げる

街に入ると男はバイクを建物内に隠し武器を確認する

コンペイセイターが付けられロングマガジンが挿入された2丁のSOCOM, Mk23カスタム

CQRストックとフォアグリップにサプレッサーが付けられたHK416

4面レイルシステム下部にM203グレネードランチャー、右にフラッシュライต์、上部にホロサイトが付けられたフルオートショット

ガン（トールハンマー）

2本のカランビットナイフに2本の大型マチェーテ（ブラットラスト）

「弾は心許無いが何とかなるか」

男、ティス・エーベルヴァインはコートを脱ぎ捨て背中につけられた8枚の装甲板を展開し腰の下から出てる尻尾の様なアームで地面を叩きつつトールハンマーのコツキングレバーを引く

それと同時に曲がり角から鉄血人形が現れるがティスは全く動かない

「来な、愉快的オブジェクトにしてやるよ」

むしろ笑っている

数分後

最後の1本をブラットラストで胴体をぶった切った

「……これが最後だな？もう弾切れだぞ」

確認する、動く鉄血はおらず音も無い

銃は2分と持たず弾切れし殆どをブラットラストで倒した

鉄血がないのを確認するとブラットラストを鞘も兼用している装甲板にしまいバイクを建物から出す

「タバコタバ……fuck!」

流れ弾が当たったのかタバコの箱は真つ二つになっており全滅していた

穴の空いたポーチの中にはタバコの葉が散乱しているがティスからすればどうでもいい事だ

問題はタバコが吸えない事だ

「クソがつー」

八つ当たりで鉄血人形の頭が踏み砕かれる

それと同時に無線が入った

『こちらラグーン、間もなくランディングゾーンに到着する』

八つ当たりを止め応答する

「こちらハウンド、1分で到着する、ラグーンタバコ持つてるか？」
『了解、タバコは無いが葉巻ならあるぞ、着いたらやるからランディン
グゾーンで待つてろ』

「ナイス、すぐ向かって確保しとく、アウト」

ティスはすぐにバイクに跨りランディングゾーンに向かう

途中はぐれの鉄血人形が居たが通りすがりざまに装甲板でぶつ飛
ばされた、哀れ鉄血人形

ヘリが着陸しティスはバイクを押しながらヘリに入る

ラグーンがそれを確認しヘリは飛び立つ

バイクのスタンドを立てすぐにコックピットに向かう

「ラグーン、はよ葉巻くれ」

「落ち着け、…ほらよ」

「サンキュー」

適当な座席に座り葉巻に火をつける

1口大きく吸うとティスは無線を入れる

「司令部こちらハウンド、パッケージロメオ回収完了、現在帰投中、
オーバー」

『こちら司令部、了解です、くれぐれも壊さぬようお願いします、アウ
ト』

無線を切り葉巻を啜える

「葉巻は肺まで入れるもんじゃねえが…言っても無駄か、そういやあ
ハウンド、ヘリアンが帰投次第来るように言ってたがまたなんかやつ
たのか？」

「なんも、合コン連敗記録はまだ未発表だし…」

「因みに連敗は？」

「52」

「52でwww」

帰投するまでヘリは合コン連敗の話で盛り上がった

何故テイスが詳しく知っているかは不明だがこの事をヘリアンが知るのには先の事だ

ミツシヨン2

本部に戻ったティスはバイクを適当な場所に置きヘリアンを探していた

そろそろ1時間経つが何故かヘリアンが見当たらない

ティスはヘリアン探しをやめ自室に戻ると常備してあるタバコを取り火をつける

そしてそのまま銃のクリーニングを始める

「♪」

鼻歌交じりにやりつつツールハンマーとHk416をのクリーニングを終わらせソーコムをバラしたところで部屋の扉が開く

振り返るとG11が中に入ってきて来る所だった

G11は寝ぼけているのかは分からないがふらふらとティスの横を通り過ぎベットに入り込む

数秒後には寝息が聞こえてきた

それを気にせずクリーニングを再開する

ソーコムのクリーニングを終わらせ組み立て軽く動作確認をし根元まで吸い火の消えたタバコを灰皿に入れ新たなタバコに火をつける

吸いながら銃を片し冷蔵庫に入っている度数の低い酒を数本取り出し机に置きパソコンを起動させる

ネットサーフィンをしているとまたしてもドアが開けられる

今度は乱暴にだ

「ノックの仕方知ってるか？」

酒を飲みつつ聞いてみる

「マスターキーで3発撃つんでしょ」

「3以外何も合ってねえよ、てか壊す気か」

マスターキーとはアンダーバレルショットガンの事で建物内へ侵入する際にショットガンで錠前を破壊し、侵入後はアサルトライフルに持ち変える。というシチュエーションの際に使われるシステムでどのような鍵でも（錠前を壊して）開けられることから付けられた

入って来たのはHK416とUMP45そしてその妹のUMP9の3人

「それで？何の用だ」

聞きつつ酒瓶を3人に投げ渡す

「暇だったから♪」

「右に同じく！」

「G11の回収よ」

上から45、9、416が酒をキャッチして答える

ティスが諦め勝手にしろと言うと45と9は部屋にあるゲーム機を起動させ416はG11を起こそうとする、が起きない

「そっぴやあ、誰かヘリアン見たか？呼んどいて居ねえんだけど」

「こつちもよ、だから暇潰しに来たのよ」

聞くが同じらしい

「それであるの人の異動の方は？」

「できる限りの事はやった、手を廻したし圧もかけた、後はブランの胃痛被害が増えれば完璧、それと同時にアリスもこつちに合流する」

「社長も可哀想に」

45はそう言うがクスクスと笑っている

因みに社長とはグリフィンのクルーガーでは無くこの部屋にいるものが所属するBLACKWATCHの社長

彼等はブラックウオッチ所属でグリフィンに居るのは派遣されている為

「それでヘリアンはどこかしら」

416が話を戻す

「合コンでしょ」

「サボって合コンか」

「誰がサボるか！」

パンツと扉が勢いよく開き噂のヘリアンが入って来た

「どうとう顔合わせでハブられたか…可哀想に」

「貴様ら…！」

ヘリアンが怒りをあらわにするが怒った所で意味は無いのは分

かっているようであらため息をつき

「…まあいい、それよりも」

ヘリアンは書類ををティスに投げ渡す

「なんだ？合コンでお前をフツた男のリストか？」

「違う！異動についてだ」

そう言われG11以外が書類を見る

紙には異動場所ややる事などが書かれていた

「異動は良いが何でG地区なんだよ」

G地区はハイエンドモデルが少ないが鉄血人形がかなり多い事で有名な地区でヘリや車両等で強襲して来る等面倒だらけの場所だ

「てか何で今なんだよ、さっきまでG地区にいたのに」

「其方の社長と話がついたのはついさっきだからな」

ヘリアンが言い終わると同時に引越し業者の制服を着た人形が入って来る

「今からかよ！」

「今からだ、なにぶん時間が無かったのだな」

「荷物もまとめられねえーのか！」

「ご心配無く、荷物梱包も我々の仕事です」

「お前らにきいてねえよ！てか雇い主は誰だ！」

「BLACKWATH様です」

「あのロリガキがア！だアー！銃と一部の物はこっちで運ぶから日用品からにしろー！」

「分かりました」

「屋上ヘリポートにチヌークが止まっているのでそれに積んでくれ、お前らはハインドだ、何処からあの絶版品を手に入れたんだか…後、お前たちの部屋のは既に積んであるからな」

そう言い残してヘリアンはティス達、フェンリル隊を残し去って行った

「あの合コン52連敗がア！」

ティスの叫びはヘリアンには聞こえなかったが騒ぎを聞きつけてやって来たシスターの様な恰好をしたハンドガンの戦術人形が聞いて

ていた
後日、グリフィン本部はヘリアンの合コン連敗の話で持ちきりになつた

ミツシヨン3 (コラボ回)

1時間後荷物をブラックウオッチのチヌークに積み終わりティス達は地上へリポートに向かう

「あのロリはいつかシメた方が良い気がするんだが」

「取り敢えず落ち着けば？尻尾が危ないわよ」

45の言う通り、ティスの尻尾はブンブンと縦横無尽に暴れていた床や壁の当たった部分が抉れる位に強くだ

「尻尾が、というか床や壁が、ね」

416も言うがティスは聞いてない

「そういえばG地区だけど輸送へり大丈夫だっけ？」

そんな中9が話を变える

G地区の鉄血はへりを使うしジュピターこそ無いが対空兵器も使う

ブラックウオッチの輸送へり、チヌークにはドアガン等でM2とM134ミニガン、ミサイル対策にフレアが搭載されているものものあくまでも自衛用で基本は護衛機が居る事を前提にしている

ハインドが居るが一機だけ、護れる保証は一切無い

「ラグーンに丸投げ」

「異議なし」

ラグーンはブラックウオッチ所属のへりパイロットでブラックウオッチ随一の操縦テクニックをもつ

「それに輸送へりには全機にEMPミサイル積んでんだろ、それも飛びつきり強いヤツ」

「あれって本当の意味で最終兵器じゃ無かった？」

ブラックウオッチが開発したEMPミサイル

元々は追尾ミサイルや無人機用が開発された物だが出来たのはかなりの高威力で人形にも危険な代物だ

「キルゾーンは発生地点から100mだ、この中に居なければ問題ない、因みに俺にも効く」

何やかんや話していたらへりポートについた

ヘリポートにはスーパーハインドがとまっており近付くと後部ドアが開き中から2人降りてきた

降りてきたのは謎多き戦術人形、アリスと唯一のグレネードランチャーの戦術人形、BLM37だ

「ここに居るってことは…!」

「はい!正式にフェンリル隊に配属となりました!」

「社長が胃痛で倒レカケタヨ」

機械音声でアリスが言うが

「ご愁傷さまね」

「相手が悪かったわね」

「眠い…」

「んなもん知るか、これで戦術の幅が広がるぞお」

誰一人気にしなかった、哀れブラックウオッチ社長

フェンリル隊は正式配属されたBLM37を祝いつつヘリに乗り込みティスはコックピットに向かう

タンDEM形状のコックピットは操縦士と攻撃手に別れているが有事の際には1人で両方を行える様に再設計されている

操縦士席にはラグーンのコンビであるレッサーが座っていた

「よろしくお願いします!」

レッサーは近付いてきたティスに敬礼する

軽く手を上げコックピットに乗り込む

「軽く指示を飛ばすかもしれないんが何も無ければお前に任せる」

「はっ!お任せ下さい!」

ブラックウオッチにはいってそれなりに長い筈だが未だ堅苦しいレッサーに溜息をつくティス

レッサーはそれに気付かずヘリを起動させる

『そんじゃ出るぞ〜』

ティスの間の抜けた声と共にヘリは飛び出す

少し間を置いてチヌークも飛び出した

チヌークには荷物と業者の人形が乗っているがチヌークの最大積載量には程遠いのでスピードは問題ない

ハインドとチヌークは速度を合わせG地区へと飛行する

グリフィン本部から2時間ほど飛んだ所でヘリの地上レーダーが反応した事にレッサーはいち早く気付いた

『ティスさん、地上に反応があるのですが…これは?』

『ハツキリしろ、ラグリーン、何時でもEMP撃てるようにしとけ』

『了解、こちらのレーダーも探知した…鉄血の反応なんだが鉄血じゃない?』

『裏切った鉄血か、全員戦闘準備』

『すまん、こつちに戦闘員は居ないんだ』

『fuck、お前から聞いたな?チヌークはフレアとEMPしか撃てない邪魔者とかした…なんか反応でかくね?』

指示を出しながらレーダーを見たティスはそのデカさに疑問しか浮かばなかった

その規模はジュピターよりも遥かにデカイ

最初は近距离に密集してるのかと思ったがそうでも無い

少なくともハインドだけでどうにかなる大きさでは無い

『ハウンドよりHQ…恐らく鉄血と思われる巨大兵器を確認した、ポイントを送るのでそこにAC-130で攻撃してくれ』

『HQ了解、A-10及びF-22を出します、其方の護衛は入りませんか?』

『問題ない』

『了解、武運を』

通信が切れると同時にティスは指示を出す

『ラグリーン、距離2000でEMP発射しろその後は最高高度にてこの距離を維持しEMPの次弾をを発射可能にしておけ』

『了解』

『フェンリル隊は40mmと20mmにつけ、規模的に小火器は効か

ない、37は自前ので応戦だ』

『了解よ』

『レツサーは戦闘開始と共に回避に専念しろ、攻撃の事は考えるな』

『了解です！』

目標の距離は12200

対空兵器があれば攻撃されているはずだがまだアクションは無い

余裕からなのか何なのかは分からないが巡航速度を維持しつつも最大限の警戒をして近付く

目標との距離が5000を切った時それは動き出した、いや、正確には浮かび始めた

それを見た瞬間、ティスは動き出した

『ラグーン！EMP発射！』

チヌークからEMPミサイルが5発連続発射された

それ、空中要塞は迎撃する為に機銃を撃つが迎撃出来たのは1発だけで残りは着弾と同時に強力なEMPを発生させた

EMP対策があつたのか空中要塞は傾くだけだった

ティスは様子見で30mmチェーンガンを撃ち出す

撃ち出された徹甲榴弾は着弾と同時に小さく爆発し表面を少し破壊する

『ちっ、硬えな！だが無敵って訳ではなさそ：fuck！回避だ！』

要塞から突如としてジュピターが出て来た、それも4機もだ、要塞はそれ等を一齐に撃ち出した

レツサーは直ぐに回避行動を取り交わすが今度は一機ずつ撃ち出す

ハインドは回避しつつ高度を上げる

そこで回り込んだチヌークからEMPの援護射撃が入った

ジュピターはEMPで動かなくなったが本体は相変わらず傾くだけ

要塞は地上に降りてジュピターをしまい対空砲を撃ち出す

2機のヘリは何とか回避しハインドは反撃するが空対地ミサイル

では歯が立たない

『せめて対戦車ミサイルがあれば…』

『無いもの強請つてもいみないわよ!』

無線越しに416が怒鳴るがティスは聞いておらずニヤリと笑った

『ラグーン! レッサー! 高度を落とせ! 対空レーダーが使えない高度だ、急げ!』

『え?! りよ、了解!』

突然の指示に困惑する2人

戦闘区域は廃都市で高度を下げればビルが邪魔して見えづらいがこちらは攻撃出来ない

ビルの間に入ったへりに攻撃では無く無線が飛んでくる

『ちよつと! 何でブラックウオッチがおるんねん! グリフィンと対立してるんちゃうの?!』

『誰だテメエ、てか対立してねえよ』

『うちは改造者言うもんや! よろしゅうな!』

『自分、ハウンド言う者です、以後よろしゅう』

『あつ、これはどうもご丁寧に…ってちやうは! なんでブラックウオッチがおるんか聞いとんねん!』

『ピクニックの最中に変なのが居たのでやばいと思い攻撃した、反省はした事ない』

『うちはあんなブラック企業抜けたんや! なのになんでやねん! しかもハウンドとか! ブラックウオッチとは関わりとうないねん! 見逃すからどつか行つてえな!』

『なら攻撃された時お前は逃げるんだったな、後、俺らが敵認定した奴を逃がすでも?』

言い終わった瞬間、要塞、もといりホーマーの上部が爆発した

『な、砲撃!? 何処から!』

リホーマーは地上レーダーを全開にするがレーダーにはへり以外に何も写っていない

探している間にも砲撃は続く

『砲撃Ⅱ地上とか（笑）』

ティスの言葉にリホーマーは疑問を浮かべたが直ぐに気付き対空レーダーを見た

高度8500にそれはいた、かつてアメリカが保有した攻撃機が『AC—130!?!何でこんなんあるんや!』

AC—130、かつて絶対的制空権を持っていたアメリカのみが持つ対地専用攻撃機で世界唯一のガンシップ

その武装は25mmガトリング砲、40mm砲、そして105mm砲だ

現在はブラックウオッチのみが保有している

流石にリホーマーも焦った

通常の砲撃ならともかくAC—130は不味い

（アカンアカン！あんなのあるとかアカン！高高度からの砲撃とか流石に防げへん！しかも徹甲榴弾とか！）

考えてる間にも攻撃は止まない

一定間隔で撃たれる弾はまるで嵐だ

雨のように降る25mm弾

雷の如く撃ち込まれる105mm砲弾

40mmは弾が無いのか撃たれないがそれに意味は無い

（逃げられへんやん！コイツを囷にしてもサーマルで直ぐにバレる！攻撃しようにも砲撃で武器が使えへんし、降参したところで…?）

リホーマーはレーダーが反応したのに気付いた

レーダーには新たな機影が写ってる

しかも高速で移動している

「もう堪忍してよ…」

誰に言う訳でもなく呟く

そしてカメラに写ったのはA—10サンダーボルト、そしてF—22ラプターだ

完全に逃げ場は無くなった

A—10とラプターは対戦車ミサイルを発射した

複数発発射されたミサイルはリホーマーに直撃し爆発する

それを確認しAC―130は後部ハッチを開きそこからバンカーバスターを落とす

バンカーバスターはリホーマーに向かって落ちていきリホーマーの上空で爆発した

その爆発は要塞を貫き地面を崩した

どうやら地下があったらしい

AC―130は念の為に105mm砲を1発だけ撃った

弾は直撃したがリホーマーに反応は無い

『こちらイーグル、対象の沈黙を確認』

『ハウンドだ支援に感謝する、近くに居たのか?』

『ああ、F地区で演習してたんだ』

『道理で早かった訳だ、ラプターはイーグルと一緒に帰投しろ、A―1

0は俺らを頼む、ほぼ弾切れだ』

『アドラー了解、これより帰投する』

『レイブン了解、先行する』

全機が飛び去って行った

その数分後リホーマーはゆっくりと動き出した

まだ破壊されてなかったのだ

「…生きてるって素晴らしい…」

リホーマーはバン位の大きさまで身体を削り取ってバレないようにその場から逃げ去って行った

ミッション4

リホーマーとの戦闘終了から更に1時間たった頃ようやく目的地のG05の基地について

ふたつあるヘリポートそれぞれ着陸しヘリから降りる

だが業者を除いて全員が座り込んだ

「…だー、疲れたア、なんなんだったんだよアレ…」

「ガンシップ無かったらヤバかった…」

硬さとふざけた武装に定評のあるリホーマー

「本部からの情報は?…」

「鉄血のハイエンドモデル、リホーマー、簡単に言えば兵器やら何やらを取り込む能力を持つてるわ」

「次見つけたらヘルハウンド隊出してやる」

ヘルハウンド隊、ブラックウオッチの対装甲部隊で機甲師団や戦車大隊を僅か3人で全滅させる程の部隊で絶滅主義者

問題が多く命令不服従や味方への戦闘行為等で現在はブラックウオッチ管轄の刑務所に入れている

「「……………」」

その上ブラックウオッチ内部でも苦手意識を持つ者が多い
だが統括しているのがティスなので刑務所に入れられる程度です
んでいる

「次は地上戦だ、ミキサーにかけてペーストにしてやる」

もつともヘルハウンド隊より遥かにヤバい奴がいるが…

「とりあえずグリフィンにあの違法建築の事で苦情いれとけ」

「了解です!」

37がヘリに入り無線をいじる

「終わったら行くぞ〜」

「寝たい…」

「残念ね、寝れる場所はさっきの戦闘で地雷原になったわ」

「どういう事……誰かこっちに来るぞ」

ティスの言葉に全員が見る

こちらに小走りで来るのは制服的にここの指揮官だろう

その後ろには業者に指示をしているスプリングフィールド、恐らく副官だろう

「初めまして！G—06地区指揮官のマクベと言います！よろしくお願ひします！」

「声がでけえ」

「うるさい」

「声大きいね」

「黙って」

「うるさい…」

「うるさいです！」

「耳障り」

「酷くないですか?！」

ブラックウオッチ流の返しで落ち込むマクベを無視し

「私は副官のスプリングフィールドです、よろしくお願ひしますね」

「選ばれたのは母性^胸でした」

「性格じゃないんだ」

「胸でしょ、あんなの戦闘中邪魔なだけなのに」

「変態ね」

「胸なんて飾り…」

「ここの指揮官は変態です！」

「オツパイリロード（笑）デモスルンデシヨ」

「しません！」

「ブラックウオッチのスプリングフィールドは宴会の鉄板ネタにして
いるぞ、この前はRPG7でやってた」

「あれは凄かったね！」

「何人か直後に居なくなつたし」

「最低ね」

「其方のスプリングフィールドは知りませんが私はやりません！」

「そんじゃ、荷物整理すんぞ〜」

「」「」「うゝつす」「」「」

「無視!？」

フェンリル隊は業者の人形と共に中に入っていく

落ち込むマクベと混乱するスプリングフィールドを残して

『…だから攻撃されたって言うてんだろ!……合コン?んなもん知るか!……そうだ、リホーマーだが匠だが知らんがああ違法建築だ!なんだ?ジュピター4機とか馬鹿なの?死ぬの?……:EA小隊?知らんよ……:今なんつた?……161ab?……ふざけんな!あんな所の尻拭いさせられたのか!?……:分かればいい、あれの情報は直ぐにブラックウオッチと共有しろ……:EA小隊のもだ!あとあのデカブツに使った弾代もだ!……:使い過ぎ?こっちはヘリだったんだよ!護衛対象が居るのにヘリ降りられつか!……:確認?そつちで勝手にやれ!以上だ、じゃーな!』

ティスは無線機を握りつぶし会話を終える

「少シ落ち着イタラ?」

「無理、16んとこの尻拭いさせられたんだ」

ティスはとある理由で161abを非常に嫌っている

今すぐにも潰したいくらいに嫌っている

16のお抱えであるAR小隊もそして先程判明したEA小隊も殺したいほどでは無いが嫌いだ

その理由を知っているフェンリル隊は溜息をつく

実際少し前にティスがグリフィンのキルハウスで訓練してた時知らずに入ってきたAR小隊と戦闘になった

45が気付き止めに入ったので両者軽い負傷程度ですんだが止めなければどうなっていたことか:

45は頭を抱えつつ用意された部屋に向かうのであった

ミツシヨン5

『地道?』

『正確には地下鉄ですね』

基地に用意された部屋について直後にブラックウオッチから連絡が入る

何でも地下鉄を発見したらしい

『使えるのか?』

『まだ詳しく調べた訳ではありませんのでなんとも、ただ列車の残骸や元乗客が多く詳しく調べるには時間がいりります、それにほぼ密閉されていたらしく酸素量が少ないですね、まあお陰で腐敗も少なくハエも湧いてないので楽ではありますが』

『確かに、乗客は適当に焼いとけ、ELIDになられても厄介だ、列車は使えるのは回収使えないのは適当に再利用だな、輸送用にエンジン類を改造しとけよ』

『了解です、メンバーは特戦隊を予定しています、あの隊でしたら夜目が効きますし、それとグリフィンよりいくつかの情報と振り込みが来たのでデータはそちらに転送しておきました、地下鉄の事はどうします?』

『ラヴエジャー達も同行させるロボには俺が言っておくから、戦闘はともかく偵察においてはアイツらが一番だ、あと状況次第でフェンリル隊も出ると言っておけ、地下鉄の事は黙っとけ、地下鉄の地図は?』

『了解です、ロボの方は任せます、地下鉄に関する情報はありません、戦時中のEMPでデータは飛んでますし資料も搜索中ですが戦時に焼けたのかまるで見つかりません、地下鉄の駅にある事を願います』

『無ければ徒歩だなGPS持って』

『それと駅の活用として様々な中継基地にしようという話があります』

『その辺は任せる、後は何かあるか?』

『未確認の情報が一件、先程ほどこちらのターゲットの男が死亡しているとの情報があります、詳しくは確認中です』

『分かった、詳しい情報が入り次第送れ』

『了解、それでは』

「地下鉄…ね」

無線を切ったティスは考える、リホーマーにバンカーバスターが当たった時地下の空間があった記憶がある

「一応あの辺も調べさせるか」

本部にメールを送り部屋に向かう

とは言っても数メートルしか無いが

部屋に入るとまずその広さに驚く

広さは多分20畳ほどでキッチンが完備されていた

部屋の中ではフェンリル隊の面々が運ばれた荷物を整理していた

(そう言えばアリスと37の荷物は?)

そう考えるが2人ともとくに困っている訳でもないので放っておく

部屋を出ようとすると

「ティス? あなたの部屋もここよ」

「同室かよ、G11に寝床奪われるからやなんだけど」

本来なら爆弾発言になる事を45に言われるがティスは至って冷静だ

と言うのも良くある事なのでなれている感じである

「この娘達に聞いたんだけど部屋が無いらしいわよ、基地の改修しようにも立地的に厳しいから断念したらしいわ」

「まあいいや、ハンモックとかも設置しとこ」

「それより何かあったの?」

416が聞いてきたので先程のことを伝える

「へえー、私たち行く意味あるの?」

「G11に同意ね、特戦隊にラヴェジヤーも行かせるのに」

「言いたい事はわかる、幹部直属部隊にブラックウオッチ最高の偵察部隊、確かに安心だろうが場所がほぼ密閉されていた地下鉄だぞ?、放射線やらなんやらがどうなってるかすら分からんし鉄血だけならともかくELIDがいる可能性がある、常に最悪を想定しなきゃなら

ん場所だ、なら俺らはそれより更に最悪を想定して動く、まあもつと適任がいるが…」

「?何か言った」

「何も」

最後の呟きは小さく誰にも聞こえなかった

テイスはそのまま荷物整理に入り他にも整理を再開する

途中G11が寝始め416がキレる、いつもの事が起きたが整理は30分で終わった

ミッション6

「RPGっ！」

そんな誰かの声が聞こえた気がし目を開けると乗っていた車両が倒れているのがわかった

微妙に困惑しながら呆れていると45が俺の顔を覗いた

「説明いる？」

「何となく分かるが一応聞いておこう」

「RPGが車の横つ腹を直撃して倒れた、幸い貫通しなかったけどね、
だけどM2に付いてた416が頭打ったらしく寝てる」

「叩き起こせ、先に出てる」

自分の銃が問題ない事を確認し近くに転がっているソフトガン
ケースを取り出口を見て溜息をつく

この車は元はただのトラックでそこに装甲を付けたりして使われている

出口は後続車が突っ込んだらしくひしゃげている、しかもそのまま
なのかライトが隙間から見える

見上げるとそこにスライドドアがあるがそこに丁度RPGが直撃
したのか大きく凹んでいる

溜息をつきつつ37をみる

それに気づいた37が疑問を持ちながら俺を見るがドアを指差す
と分かったらしくBML37をドアに向けて構え37mmグレネー
ド弾を撃ち出す

グレネード弾は直撃すると爆発しドアを吹き飛ばす

その爆発音で耳がイカれそうになる
なんでブリーチング弾を使わなかったのかはとりあえず後にする

抗議の声が聞こえた気がしたが無視し外に出る

外に出ると同時にHK416を構え警戒する

少し待つと中から声が聞こえる

それを聞いて中に手をのばす

その手を掴んで45が上がった

上がってきた45は残りを上げるために手をのばす
俺はその間警戒する

最後に416が上がると45はトラックから降りる

416は見た感じ大丈夫そうだ

416と一緒に降り60連のドラムマガジンを投げ渡す

416はそれをキャッチし自身の銃に装填しチャージングハンド
ルを引く

「目標はこっから1000m！今から徒歩だ！行くぞ！」

任務は戦闘中の街中に鉄血が設置した広域型ジャマーの破壊だ

戦闘中と言っても各地で起きている小規模のモノではなく街全体
で起きている、殆ど戦争と変わらない

動き出し道の左右に別れる

道にはどちらが設置したのかは分からないがバリケードが設置さ
れている

それ等を見無視しビルの影から攻撃する

隙が出来たと同時にHK416を指切りでバースト射撃をしながら
ら前に出る

別のビルの影に入り後ろを見ると45がこちらの部隊長と思われる
トンプソンと話していた

二、三話すと45から合図が出る

それを見て俺は37に指示を出す、声は出さずにハンドサインで
指示を見た37はエアバースト弾を撃ち出しバリケードに隠れて

いる敵を攻撃する

バリケードに隠れている敵の真上でグレネード弾が爆発し隠れて
いたリツパーが吹き飛ばされる

鉄血は何が起きたのか分からない様だがフェンリル隊は気にせず
に出て来た人形に弾を当てて行く

ここにいる鉄血はリツパー、スズメバチ、イエーガー、ストライカー
の4種

だが数はこちらよりも多くこっちが俺ら含めて20人ちよつとに
対し鉄血は3倍以上の60オーバーいる

だが関係ない
全て食い殺す！

テイスがテンションを上げているさなかトンプソンは考えていた
交代の部隊と共に援軍が来るとは聞いていたものの来たのはたつ
たの7人

彼らの乗ったトラックが攻撃された時は焦ったが直ぐに出て来た
ので大丈夫なのだろう

出て来た彼らは直ぐに道の左右に展開し自分達よりも前に出た
何も言わず聞かずに勝手に前に出た彼等だったが1人だけ自分の
所にやって来た

確かUMP45だったはず

彼女はトンプソンが話すよりも早く言った

「こっちが前に出るから援護して」

確認とかでは無く指示を出して来た

は？と思うがいこちらが言葉を出すより早く前に出た仲間にハン
ドサインを送り仲間の所に向かって行った

自分勝手すぎる

無線で文句を言おうにも鉄血のジャマーの所為で出来ない、そもそ
も周波数も何も知らないのだが

だがトンプソンが戦線を見ると彼等がどんどん押し上げていた
言うだけあって実力は確かみたいだ

トンプソンは自分の部隊に指示を出しながらそう思った

ミツシヨン7

ティス達フェンリル隊は荷物整理が終わった後基地の案内をされてその後には飯を食っていた

「地味に美味え」

「グリフィン本部より美味しいかも」

「なんでだろ？」

「まあ、うちには負けるが」

「一緒にするのは流石に可哀想よ」

ブラックウオッチでの飯はプロまでは言わないがかなり美味しい

というのも食事が隊員達の士気にかなりを影響を与えるのを知っているので食事はレベルが高い

食堂以外でも戦闘食等もだ

「確かに、そういえばピューパの実戦配備が始まったらしいぞ」

「意外と早かったわね、無人機？それとも有人機？」

「両方だ、人員輸送のに関してはまだらしいが」

「流石ニアケツパハドウカト思ウヨ」

「あれはしようがないよ、だって箱付けると折角の水陸両用が意味無くなつちやうし」

「箱の軽量化をどうするかだな、まあ対空砲、ミサイル、レールガン、対人があるから人員輸送は別でも大丈夫だがな」

「プレデターとかのUAVは？」
無人航空機

「その辺は問題無い、後はA10のドローン化とかだがジャマーで使えなくなるしな」

「ソレハ今後ノ課題ネ」

「無人機はどうして問題になるよね」

「AC-130は？なんか改修するって聞いたよ」

「あれはエンジンのパワーアップと武装の変更だな」

「案はあるの？」

「幾つかある、主砲の120mm化と88mmを2連で付けるとか初期モデルのミニガンを3連とか」

「ミニガンと120mm化はともかく88mmって？」

「あの〜」

声をかけられ振り返るとそこにはsuperSASSがいた

「ん？なんだ、まさかこれから任務か？」

「え〜やだよ〜」

「いえいえ！他の方がシューティングレンジ等を案内し忘れたのでこの後案内しようかと思ひまして！あ、ですがまだ食事中ですよね！！すみません！すみません！また日を改めて！！」

「落ち着きなさい」

「凄い早口だね」

「はわわ〜！すみません！」

「すぐ食い終わるからそれまでに落ち着け」

「ナンデソンナニ興奮シテルノ？」

「興奮だったのね…」

「えーとですね…皆さんはあのフェンリル隊何ですよ？」

「俺ら以外にフェンリル隊がいないんならそうだろうけど」

そう言うときsuperSASSは目を輝かせ興奮しだした

まるで憧れの有名人を見ている様な感じで

ティスが周囲を見る

昼食には遅い時間だがそれなりの人数がいる食堂

だが見渡すと大半から目を逸らされた

逸らしていないのは殆どがスナイパーでそのスナイパー全員がs

uperSASS程では無いが目を輝かせいる

「ヨカッタナ、モテモテダゾ」

「嬉しかねえな」

「やっぱりそうなんです！あの空港奪還作戦は凄かったです！たったの7人で4人のハイエンドモデル率いる千近くの装甲兵を全て倒し制圧するなんて！！それにハウンドさんの史上最高記録の6629mの狙撃成功なんて感動しちゃいました！！」

「あれか」

「あんなのブラックウオッチの部隊なら大半が出来るわ」

「狙撃はテイスだから出来た事よね」

「あの狙撃は銃の性能とある程度の技術でどうにかなる」

「……出来るか!」

食堂にいる者（テイスを除く）の心が1つになった瞬間である

因みに現状最長の狙撃距離は3540 m（記事により違ったり更新されている場合もあります）

ミッション8

数分後

テイス達はシューティングレンジに来ていた

スナイパー組から狙撃を見たいと言われたので来た

「まあ、スコープの調整やら出来るし良いけど」

テイスはそう言うのとコートの中からソフトガンケースを取り出しそれを開ける

中には分解されたスナイパーライフルと複数のマガジン、スコープそしてケースのポケットに大量の弾薬

「?これって12.7mmですか?」

M14が弾を手に取りテイスに聞く

「残念、正解は14.5mmだ」

「あれ?でもこれDSRですよね?ハンドガードとか違いはありますけど」

「ウチで魔改造した14.5mm使用のDSRだ」

ほへくとそんな感じで見ているM14とsuperSASSだが

「……へ?」

「…あれ?バレル長すぎませんか?」

「そりやそうだ、アウトレンジカスタムだし、バレルの長さは1300mm」

「長っ!」

参考までにDSR1とPSG1のバレルの長さは650mm

superSASSが508mm、

スプリングフィールドM1903が610mm

白い死神御用達のモシン・ナガンが802mm

そしてダネルNTW20が1000mmで同じくダネルのNTW14.5で1220mmだ

同じバレルの長さの銃はラハティL39の1300.5mmだ

どれ程か分かりずらいかもしれないがとにかく長い

「でもバレルの長さ≡命中率じゃ無いはずだけだ」

「確かにバレルが長くても上がるのは射程距離だけで命中率は別物、だが弾がアウトレンジ用に造られていたら?」

「14. 5mmは確かに長距離用だけど…まさか」

「そのまさか、何度も試しては別の方法で作り返してを繰り返して専用のアウトレンジ用に作らせた、そこから更に俺が弾頭と火薬量をチェックして初めて使われる」

「……うわぁー」

M14が引いているがティスは気にしない

「まあ、お陰で銃本体が約1650mmとでかくなつたが……しかし、近くね?」

スナイパー用のレンジにいるのだがティスはお気に召さないようだ

「一応1000mはあるんですが…」

「1000ならスコープ無しでいける、てかスコープもオリジナルだから付けると逆に近すぎて見えん」

「ええー」

「貴方のは遠すぎ無のよ、もつと近く狙いなさい、主に400〜900」

「無理」

「!?」

「こいつ、遠くを攻めすぎてミドルが酷いのよ、スナイパー以外の他の銃もいっても400弱、まあ5. 56mmでバレルが短いからしょうが無いけど」

そう言つて416はティスのHK416を取り出し見せる

そしてショートカラムされたそのサブレッサーをとる

サブレッサーは長くバレルは15cmあるかないかの長さ

「しょうがねえーだろ、それは元々インドア用にカラムしたんだから」

「別に5. 56じゃなくても良いでしょ……確かAK無かつた?」

「有るけど俺のじゃねえ」

「…VSSデモ持タセル? カタログスペックハ400ダガソレ以上デ

モイケタハズダヨ」

「それもいいんだけど…いつその事、MG持たせれば？」

「ソレダ」

「確かに火力は私がありますが擲弾ですからどうしても撃てない場面がありますし…MGがあれば色々解決ですね！」

「何持たせる？」

「近代改修されたM60で良いんじゃない？」

「イツソノ事ミートチョツパーデ良いジャン」

「んなもん持つか！」

グリフィン所属の人形達はフェンリル隊のやり取りを苦笑いしながら見ていた

ミッシェン9

ティスの新たな銃火器は30分たって今後の課題として話は終わり武器調整も予想外の事があったが1時間で終わった

予想外の事とはティスのスナイパーのスコープが滅茶苦茶に合わせられていたのだ

誰がやったのか予想は付いたようで

「忘れた頃に腹パンからのアイアンクロードだな」

と、物騒な事を呟いていた

この日は初日だった事もあり何事も無く終わった

次の日

「すいませんが頼みます!」

早朝、ここの指揮官であるマクベに呼び出されいきなり頭を下げられた

なんでも鉄血の大軍との戦闘区域で鉄血が広域ジャマーを使い始めたとの事

高高度からUAVで戦況は把握しているが無線は使えない上に鉄血の拠点へのミサイル攻撃が出来なくなったらしい

ミサイル攻撃はグリフィンがやるらしい

「ウチからガンシップ出そうか?」

「それは嬉しいのですがいつまでもそちらに頼っていてはダメです!我々もできる所を見せなくては!」

「まあそれで派遣されたとはいえ俺らに頼るのもどうかと思うが」

「それは言わないお約束です」

「とはいえここでの初仕事だ、クライアントに無様は見せられんな」

「よろしく願います、UAVの映像ではジャマーの位置は街の東にある公民館の屋上です」

「あいよ、とつと切つて来る」

「頼みます!現地まではこちらのトラックと護衛に装甲車を出します、後交代の部隊も一緒です」

「リョーかい」

テイスは無線でこの事を伝え部屋に戻るとG11を除いて全員が準備出来ていた

G11はベッドに寝っ転がっては居るが準備は出来ているのでG11を担いでトラックまで向かう

トラックが民間の箱付きだった事に驚いたが気にせず荷台に乗り込む

HK416を前に付いているM2に着かせるとトラックは出発する

到着は1時間後、その間に軽くブリーフィングをし着くまで軽く寝る

(この先はミッション6の続きです)

「45!37!スモークをやれ!」

45がスモークグレネードを鉄血に投げ37がスモーク弾を撃つ
数秒で鉄血はスモークで見えなくなるがテイスは装甲板を展開し
トールハンマーを構え突撃する

スモークは赤外線を使えなくするタイプなのでサーマルゴーグルは意味がない

テイスが突撃するのを見て味方は慌てて射撃を中断する

フェンリル隊はテイスに続いてスモークに入っていく

複数の銃声と爆発音がしてその1分後

「クリア!」

「オールクリア!大通りに出るぞ!」

スモークが薄れると大通り手前まで前進したフェンリル隊がいた

途中の鉄血部隊を殲滅して

「次からは何をやるか言ってくれ」

「んな事やってたら日が暮れちまう、こっからが本番だ」

トンプソンの言葉を蹴って大通りに出ると瓦礫の上から鉄血が

撃ってくる

装甲板でそれをガードし416が撃ち敵を沈める

すぐにバリケードやビル影に移動し瓦礫上の鉄血を撃つ
数は少なかつたのですぐに倒し瓦礫の上に移動する

だが瓦礫の山の向こうはかなりの鉄血が待ち伏せていた

「クソツタレ、戻れ！」

幸いにも登ったのはフェンリル隊だけで全員がすぐに降りた
それと同時に大量の銃弾が瓦礫の山を崩さん勢いで放たれる

「ミンチになる所だったぞ」

「どうするんだ？」

「簡単だ、45、416、アリスで右のビルから先に進め、G11、9、
37は左のビルだ、暇だったら道の掃除を手伝え、てかやれ、進めん」

「りよ〜かい」

「そんじゃとつと行け」

45達は分かれそれぞれ左右のビルに入っていく

「お前らも準備しろ、頭は出すなよ？M2合つたから出したら頭がシ
ベリアまで吹っ飛ぶぞ」

言いながらテイスはタバコに火を付ける

トンプソンが呆れているがテイスは無視する

「合図と共に俺が前が出るから援護頼む」

そう言ってテイスは大型のマチェット、ブラットラストを抜く
数十秒後反対側から複数の爆発音がした

それが合図だ

ミツシヨン10

ティスが瓦礫から出て鉄血に突っ込んで行く

トンプソン達は援護しようとして頭を出すのが鉄血からの攻撃にすぐに隠す

ティスは四方八方からくる鉄血の弾を避けたり切り落としたり逸らしたりしていた

しかも逸らした弾は別の鉄血に当たり数が減らされている

ティスを止めようとゴリアテやダイナゲートが近付くが切り刻まれゴリアテは爆発することなく倒されていく

「雑魚が幾ら来たって邪魔な……うおっ!? ジャガーにストライカー?!」

ハイになってるティスだがジャガーの迫撃砲にストライカーの弾幕で少しだけ落ち着く

上からの援護があるがジャガーやストライカーは狙われていない

45達を見るが明らかに狙ってやっている

「雑魚は片すから頑張つてね♡」

「ジャガーもストライカーも雑魚だろ!!」

ジャガーから撃たれた迫撃砲弾を掴み取り45に投げ付ける

ゞ(〃▽〃) ツ キャー…っ♪つと顔文字が見える位余裕で逃げる

ジャガーは2・3体だがストライカーは6体いる

砲撃は良かれるが問題はストライカーの弾幕だ

装甲板をフル稼働させて残りを切り落しているが如何せん隙間が少ない

そう思っていたがグレネード弾がストライカーに直撃し状況が変わる

直撃弾を受けたストライカーのガトリングが他のストライカーを襲い隙が出来る

ティスはすぐに動き近くのストライカーの首を刎ねガトリングを奪い撃ちまくる

レートはそこまで高くは無いが全てのストライカーを破壊し次いでにテクニカルを破壊する

ジャガーを撃とうとした時ヘリが脇道から現れた
出てきたヘリは戦闘ヘリのコブラ

コブラはテイスを無視しビルに機銃を撃つ

ビルのメンバーがどうなったかは知らんがテイスもコブラを無視しジャガーを撃ち破壊する

だが最後の1体になった時弾が切れる

テイスはガトリングをジャガーに投げつけ倒す

テイスがガトリングを投げると同時に装甲板で背中をガードする

そこに攻撃が当たると同時に別の装甲板で相手を吹き飛ばして振り返る

ガードかブルートかと思っていたがそこに居たのは2体のイージスだった

テイスはイージスだった事に少し驚くがすぐに動く

近づいて来たイージスを盾ごと切り首を落とす

吹き飛ばされたイージスが起き上がると同時にコブラがテイスにミサイルを撃ってきた

ミサイルが着弾し爆発する、イージスは爆風になんとか耐え着弾地点に向かい攻撃する

槍のような物でそこをつくが手応えが無かった

煙が流れ視界が開けるがそこにはなにも無かった

いくらミサイルが直撃したとはいえ何も無い筈が無い
だが周囲にテイスは居ない

その時上から音がした

ヘリのローター音ではなくバキツ、とかそんな音だ

見上げるとヘリの下部にテイスがおりさっきの音はテイスがヘリ
のガトリングを無理やり取る音

パイロットが気付くよりも早くテイスは無理やり取ったガトリン
グで下からコックピットを撃った

ある程度の装甲が付いている攻撃ヘリだが至近距離の20mm弾

を止める事は出来ない

真下からの攻撃になすすべ無くパイロットは倒されヘリはコントロールを失ってビルに突っ込み爆散した

ティスはビルに突っ込むよりも早くヘリから離れ地面に降りガトリングでテクニカルを撃つ

1台だけだったのですぐに終わる

次いでと言わんばかりに先にいる鉄血を撃つが2秒も持たず弾切れになった

ガトリングを投げ捨てようとした瞬間にイージスが襲いかかる

だがティスの方が早かった

ガトリングをそのままイージスに投げ捨てる

イージスは盾で防いだが数十kgのガトリングはイージスを後にやる、そして

「ガラ空きだ」

後ろから首を何かで挟まれる

イージスがゆっくりと振り返るとブラッドラストを鋏の様にしたティスがいた

1本はちゃんと手で持っているがもう一本は右手首辺りにアタツチメントが付いておりそれに付けられ鋏になっていた

「!?!?!」

イージスは攻撃しようとするがあと少し届かない前に出ようとした瞬間、イージスの首は落とされた

ミツシヨニー

イージスの首を蹴飛ばしブラッドラストをしまう

そしてトールハンマーに持ち替えドラムマガジンをセットする

「ジャマーまで直線だ、とつとと行くぞー！」

ティスが言うと瓦礫の上から援護していた人形達が降りてくる

スナイパーとMGは良い場所を見つけて支援攻撃の準備をする

ハンドガンはそれの護衛に入りSMGとARが前に出る

それを見てティスも先に進む

「残り400、支援組はそつから狙え、高々400だいけるだろ？ハン

ドガンは後ろを警戒だ」

言うとティスはまだ使えるM2が付いているテクニカルに乗りM

2を撃つ

それと同時にARやSMGが前に出る

たまにビルから援護が入る

M2を撃ちまくっていたティスだが耐久の限界か弾が出なくなる

すぐにテクニカルから降り前が出る

37のグレネード弾が遮蔽物諸共鉄血を吹き飛ばす

その為遮蔽物は少ないが鉄血も後退しだしている

ジャマーまで300といったところでジャマーに小型ミサイルが

撃ち込まれた

「はっ！」

ティスが止まった事で鉄血も振り返りそして固まる

ジャマーはミサイルが直撃し爆発、そして倒れた

一瞬遅れて倒れた音が響き渡る

「…っ！撃ちまくれ！」

ティスの声にフェンリルが唾然と突っ立っている鉄血を撃つ

少し遅れてグリフィンの部隊も撃つ

鉄血は銃声で我に返るが遅かった

そして1分も掛からずジャマーまでの道に居た鉄血人形は全滅し

た

全滅を確認するとティスはマクベに連絡する

その数分後戦闘機が街の鉄血基地に向けてミサイル攻撃をした
だが喜んでいる余裕は無い

グリフィンの部隊は何人か残して残党狩りに向かう

「ではあのミサイルはBLACKWATCHでは無いと?」

「俺らだったらジャマーが形も残ってねえよ」

残った理由はあのミサイルについてだ

「現状一番近いのはラグーンだがアイツはまだ射程圏外だ」

「そもそもあの大きさはハインドには無いわ」

結局結論は出ずそのまま残党狩りに向かうのであった

数時間後

「助かりました!ありがとうございます!」

「俺ら多分半分も働いてねえぞ?」

残党狩りを終えたティス達は本部から戻る途中のハインドに乗っ
て戻って来た

マクベに報告すると感謝された

だが役立ったのはジャマーに向かう途中までで残党狩りはグリ
フィンの方が役に立った

「こんなんじゃないただの実践演習だ、あのミサイルについてなんか知っ
てるか?」

「いえ、こちらでも分かりません、敵か味方かも」

「解った、そんじゃこちらは勝手にやってるから何かあれば呼んでく
れ」

「解りました!」

ティスが部屋を出ると45が待っていた

45はそのままティスの隣を歩く

「実はあのミサイルについて目星は付いてるんでしょ?」

「…まあな、てか1人しか居ねえしお前も気付いてんだろ?」

45からの直球にそのまま返す

45はテイスの言葉にふふつと笑うが何も言わなかった

ミッション12

BLACKWATCHがソ連の秘密設計局に向かっている時

「……ん〜」

ティスはグリフィンのG-05基地の作戦室で悩んでいた
部屋にはフェンリル隊の面々とその基地の指揮官のマクベ、そして
副官のスプリングフィールドがいた

鉄血の基地が見つかったのでそこへの攻撃計画を立てているのだ
が場所が悪かった

「3方向は45みたいな絶壁に囲まれ後の1方向は幅1000mの川で
唯一基地に行くにはトンネルだけと来たか…」

45からのナイフを躲しながらため息を吐くティス
因みに今ティスは装甲板を付けていない

その光景にどう反応すればいいのか分からないマクベとスプリン
グフィールド

他のフェンリルは止めるどころが

「そこだ！ やっちゃえ45姉え！」

「手伝ウゾ」

9は煽っておりアリスは45に加勢し出す

尚、アリスの胸はフェンリルの中では2番目に大きかったりする
何故加勢したのかは不明

416は無視しG11は立ったまま寝ている

37だけはどうかすればいいのか分からないのかオロオロしている

「まさにティスの出番よねえ…！」

アリスに足を引っ掛けられ倒されたティスのマウントを取りナイ
フを振り下ろしながら言う45

「…ああ…そーいやあこんな時用のボディがあつたな！」

振り下ろされた45のナイフとアリスのトマホークを受け止めな
がらティスがボヤク

「前回使ツタノハ半年前ダシナ…」

「あれなら川から攻められるでしょ…だからこのボディが壊れても大

「丈夫でしょ…!!」バシバシ

「ナイフ叩くんじゃねえ！後コレ壊されると強制的にロリボディになるからやめr…危ねっ!!」ガギッ

「安心しなさい…ロリボディになったら可愛がってあげるカラッ!!」

「んあの嬉しか…45、落ち着け、出てるぞ」

「っ?!」

ティスのその言葉に45は止まりティスから離れる

「…悪かったわ…」

落ち込んでる様な悲しんでる様な表情を浮かべながら45はフードを深く被り壁に寄りかかりそのままズルズルと床に座り込む

「…適当にやっというて…」

「…はあ…こっちは俺とアリスと37でやっとか、ブレイン、どっかあるか？」

『少々お待ちを』

ブレインが探している間にティスは指示を出そうとするが

「…私達も？」

「念の為だ、45が1番強いがお前らも似たり寄ったりだろ、いつ来ても不思議じゃないしな、てか9に來ると面倒だからってのがある」

「私だけ?!」

「45が1番面倒だがお前のは別の意味で面倒だろ」

9は反論できないのか唸っている

『ありました、S地区にて団体の動きが活発化して来ています、P.

A. S. Cがかなり生産されています』

「そこでもいいか、『ラグーン、ヘリの準備だ』任務は簡単だ、バラし壊し汚し尽くせ」

ティスが言い終わると同時に座り込んでいた45が立ち上がった
フードで表情は口元しか見えないがその口元には歪んだ笑みが見えた

「…好きに殺って良いんだア」

「好きに殺れ、他はこっちで何とかする」

言い終わると同時に45は部屋を出る

それを見た9とG11も出ていく

「……後悔しても知らないわよ……」

含みのある言葉をティースに投げ416も出ていく

「……後悔したって何も変わらねえよ」

ティースの言葉が416に聞こえたかは誰にも分からない

ミツシヨン13

2時間後

ティス達は発見された鉄血基地から離れた場所にいた
いい案が出ずとりあえず偵察、という形になった

メンバーはティス、アリス、37のフェンリルと何故かロリスキンの
ネゲブとG36の5人だ

場所は川の反対側にある森の中

『2kmあるとはいえ馬鹿な事すんなよ…』

『ダレガスルノ?』

『ネゲヴさんじゃないですか?』

『やらないわよ!』

『正解は37だ』

『私ですか?!』

『ソノ心ハ?』

『C-03地区』

『アレハ酷カッタ』

『…あれ、あなた達のせいだったのですか』

『俺らのじゃねえ、主に37のせいだ』

『アンタらも入ってんじゃない!』

『オイ、連中ジュピターヲ撃ツ気ダゾ』

『話逸らすな!』

『試射か?てかこんな所にジュピターかよ』

ジュピターの砲口はティス達の方に向けられる

全員の位置はバラバラなので直接じゃ無ければ多分問題無いが

『…ねえ、こつち狙ってない…』

『向けられてんな…やべ、ピンポイントで俺狙ってる、砲門の中が見えるし』

『ただの試し撃ちとバレてるのどっちですか?』

『知るか、逃げ…やべ』

ジュピターが撃った

ティスはすぐさまブラットラストを抜き砲弾を切る
砲弾は真つ二つに切られ爆発し爆炎がティスを隠した

『っ?!』

G36がティスの方へ向かおうとするが

『……問題ねえよ』

煙が晴れると服が所々焦げてはいるがほぼ無傷のティスがいた

ティスがジユピターを見るがジユピターは砲口をティスに向けた
まま

鉄血人形も特に動きはない

『試射にしてはピンポイントだったが…』

思考を巡らせるがジユピターの影から出て来たら人形を見て確信
する

『……何でアイツがいるんだ…』

G36とネゲヴがティスの見ている人形を見て驚く

『…何でエージエントがこんな所に居るのよ?!』

鉄血の最上級指揮人形のエージエントがそこにいた

こんな辺境に近いG地区にだ

だがティスは特に驚いた様子はなかった

『出て来なさい』

『Shut up Now!! Bitch!!』

無線からエージエントが言うがティスが条件反射の如く中指を立てながら暴言を吐き間をいれずジユピターが2発目を撃ち出し崖の上に設置されていた短SAMを3発発射した

ティスは全て叩き切ったがコートがボロボロになり破り捨てる

「ちよつとー巻き添え喰らいたくないんだから辞めてくれる!!?」

ネゲヴが大声で叫ぶ

バレてると分かった以上無線で話す意味は無い

「挨拶みてえなもんだ気にすんな」

「気にするわよー!」

『出て来なさい』

2km離れているが無線はそのままなのでエージエントに会話は

丸聞こえだがエージェントは無視した

『話を遮ってんじゃねえよ!』

『落ち着いて、エージェントは構ってちゃんなんだから』

無線から別の声が聞こえると同時に今度は短SAM5発と固定銃座に改造されたM61バルカン3丁の一斉射撃がティスを襲う

流星のティスもこれに苦笑しながら逃げる

いくら命中率の高い短SAMでも森の中の人1人に直撃弾を与える事は出来ない

とは言ってもバルカンの雨のように降り注ぐ20mm弾は木々を貫通、破壊して飛んで来る

逃げながら別の声の主、サイバーブレインにキレる

『テメエボディ出来たら真っ先にぶっ壊して殺るからな!』

『残念です、私のボディの完成は半年延長されました(泣)』

『仏の顔も三度までです、出て来なさい、次は全弾撃ちます』

『鉄仮面の下は仏だったのか、なら仏さんよ、1つ願いを聴いてくれや』

『聴くだけならタダです』

『あの……なんだっけ?妄想家?のダミー含めた全てに発信機付けてくれや、使える全てを使って全力で叩き潰すから』

『良いですね、それを理由に主要な基地に近付けさせなければエルダーブレイン様に近付かなくて個人的にも助かります、次いでに言うのであれば夢想家です』

『後、懸賞金もかけるか』

『金は?』

『こつち持ち』

親しげにエージェントと会話するティスにネゲヴとG36はティスに疑いの目を向け

アリスと37は巻き添えを喰らわないようにティスから離れつつ鉄血基地に近付いていた

この話でドリーマー包囲網が作られた

ミッション14

5人が川まで来ると対岸には相当数の鉄血人形
そしてエーリエントがいる

ティス「：殺りがいがありそうだな」

そんなティスの呟きに反応したのかエーリエントだけが移動し橋
の上に立つ

それを見たティスはコートを脱ぎ捨て銃を捨てながら橋に向かう
アリスと37はそれを見てネゲヴとG36を止める

ティスはハンドガン以外の銃を捨てるとブラットラストを抜くと
装甲板が全て外れた

アリスと37はそれらを回収しながらティスを見る

ティスは橋の上に来るとブラットラストを橋に突き刺しタバコに
火をつける

大きく吸いゆつくりと煙を吐き出す

全て吐き出しティスはソーコムを抜きエーリエントへ向けて撃つ
ガシャン！

しかしどこからともなく現れたドラグリーンに乗っている人形が
エーリエントの前に立ち弾を代わりに受けた

ガキンツ

2丁のソーコムから計24発の弾が人形に撃ち込まれるが人形は
意に介さずティスを見る

ティス「……ああ、皮膚の下に外骨格か…内骨格か？」

エーリエント「テストモデルです、かなり強固に作ってあります、少
なくともそれ位では足止めにもなりませんよ？」

ティス「ご忠告どうも」

ティスはマガジンチェンジをしてソーコムをホルスターに戻しブ
ラットラストを抜き取る

啞えているタバコを吐き捨てドラグリーン？に向かう

ドラグリーンは大きくジャンプしティスを踏みつけようとするがそ
れを難なく避けドラグリーンは橋を踏み付けた

ドオン

すると橋が大きく揺れた

ドラグーンが踏み付けた場所は大きく凹み川の水が流れる

ティス「重過ぎだ、ダイエツトしろよ」

ティス軽口を無視しドラグーンはティスに殴り掛かるが全て避けられる

ティス「動きが単調だな、さては近接戦のプログラム入れてないな？こんな素人じゃあ…」

ティスはブラットラストを上投げるとドラグーンの腕を掴み橋の凹みへ背負い投げのように叩き付けた

それに耐えられなかった橋は凹んだ部分が大きく裂けた

ティスは寸前で後ろに飛び退き37のバックパックから何かをとる

そして振り返るとドラグーンが橋を掴んでいた

どうやら橋からは落ちなかったようだ

何とかよじ登ろうとするも重い体重と早い川の流れで登れない

そんな中ドラグーンに影が差した

ドラグーンが見上げるとティスがいた

その手には手榴弾がある

ティスがピンを抜きそれをドラグーンの口に突っ込んだ

ティス「アディオス、駄作品」

いやいなやティスはドラグーンの顔面を蹴飛ばし川へ沈めた

その2秒後爆発音と共に水柱が上がった

ティス「……NEXT？」

欠伸をしながらティスは言った

ミッション15

ティス「NEXT?」

ティスの言葉にエージェントが前に出る

橋の裂け目に来た所でティスは構えるがエージェントは裂け目を超えてティスを素通りした

ティス「…ヤラないのか?」

ティスの言葉にエージェントはティスの後ろで止まる

エージェント「やるだけ無駄です、それに貴方もその気は無いでしょう?」

ティス「まあな、ダミー何か切っても意味ねえしな」

ティスは構えを解きタバコを啜える

エージェント「それに此方の目的は終わりました」

ティス「ああ、そうかい…ならコイツら連れてとっと失せろ」

エージェント「そのつもりです…次は二人とも本体で」

ティス「…それまで生きていけばな」

言うときエージェントは歩き出した

それと同時に鉄血の人形もティスを無視して橋を渡る

ネゲヴ達が撃とうとするがアリスに止められ鉄血が森に消えていくのを黙って見ている

鉄血が森に消えるとティスは啞えてたタバコに火をつける

ティス「これ爆破して戻んぞ」

言うときアリス達はティスの装甲板を付け装備を渡すと無人の基地に入る

ネゲヴ「…ちよつと…どういふ事よ!なんでわざわざエージェントを見逃したのよ!」

ティス「あれはただのダミーだ、殺りあったところでイタズラに被害を増やすだけだ…それともお前らなら無傷でアイツを倒せたのか?」

ネゲヴは黙る

確かに自分は強いとは思っているがエージェントに勝てるなどと

は思っていない

例えG36と一緒だったとしても恐らく無理だ

ティスの反応的にBLACKWATCHの3人がやらないのは分かっている

ネゲヴはティスを見る

恐らくティスが戦っていればティスは勝っていたはずだ

だがやらなかった

ネゲヴ達は勝つ為の事を考えティスは状況を見て先の事を考えた

ネゲヴ「……この後はどうするの」

ネゲヴは考えをある程度まとめティスに聞く

ティスは装備を付け直してネゲヴに振り返る

ティス「さつきも言ったようにここの爆破だ、爆弾はBML37が持っている」

ネゲヴが基地の方を見ると37が自身のバックパックから爆薬を取り出していた

ティスが37に近付いて行つたのでネゲヴ達もついて行く

ティス「爆薬は足りるか？」

37「C4をもう少し持ってくるんですけど……まあ幾つかはバンガロールで行けますよ、こう……砲身に突っ込んでやれば」

ティス「Dチャージャーは？」

37「2個だけです、まあ崖ごとなら十分に行けますね」

G36「？Dチャージャーってなんですか？」

聞いた事のない名前に疑問を浮かべるG36

ネゲヴも同じらしく首をかしげている

ティス「Dチャージャー、俺らBLACKWATCHが創った爆薬で2kg程の設置型爆薬だがある程度平らな所じやないと設置出来ないし物もそれなりにデカイ、だが威力は同量のC4の6〜10倍で大型の建造物等の破壊で良く使われる、少し前のジャマー破壊でも使う予定だったが何処そのミサイルに出番奪われてな」

ネゲヴ「……うわあ……」

ティス「そんじや37はDチャージャーの設置、アリスとネゲヴで

下の爆薬設置しろ、俺は上で周囲の監視をする、G36は基地を探索して乗り物見つけろ、じゃないと帰りは徒歩だ」

ネゲヴが引いているがティスは無視する

だがティスの言葉にネゲヴはすぐに反応した

ネゲヴ「なんで?!ヘリは!?!」

ティス「基地が忙しくて迎えが出せんらしい、帰ったらマクベにでも文句言ってくれ、ウチのは向こうがまだ終わってないのか連絡がつかん」

ネゲヴ「G36!何がなんでも見つけてよ!?!」

G36「もちろんです!私も歩きたく無いので!」

G36は走って基地周辺の確認に向かった

37がアリスとネゲヴに爆薬を渡していると川から水柱が上がり何かが出て来た

振り返ると先程ティスが破壊したはずのドラグリーンがいた

ネゲヴ「アレでまだ動けるの?!」

ネゲヴが驚くのも無理はない

何せドラグーンの顔の半分以上が無くなっているのだから

ティスは溜め息をつきながらブラットラストを抜く

ティス「後始末しとくから爆薬設置してろ」

ネゲヴ「頑丈そうだけど大丈夫なの?」

ティス「もっと頑丈なのを知ってるからな」

ティスが言い終わるとドラグリーンが動く

先程よりも早くティスに接近する

ティス「……ハエが止まんぞ?」

だがティスの方が早かった

ドラグリーンがティスの1m手前まで来た瞬間ティスがドラグーンの目から消え後ろから声が聞こえた

ティス「頑丈でももう動けねえだろ?」

ドラグリーンが振り返るよりも早くドラグーンの意識は消えた

流星にバラバラにされればBLACKWATCHの幹部辺りでも

ない限り生きては無いだろう

ティスはそれを見てジュピターの横に移動する

ティス「そこ危ねえぞ」

ティスが言うとジュピターの砲身が動いた

アリス達はすぐに避難すると砲身はバラバラになったドラグーンに向く

ティス「念には念を、だ」

言うやいなやジュピターから爆音と共に弾が撃ち出されバラバラのドラグーンを跡形もなく消した

ティス「…これでやった方が良いんじゃないやね？」

ティスの呟きは誰にも聞こえなかった

ミッション16

1時間後

37「設置完了、タイマーセット確認」

37がG36の見つけたジープに乗る

本来なら10分もあれば設置は終わったが37がネゲヴに爆薬の設置位置等を教えたり基地内部で見つけたミサイルや砲弾等を爆弾にしていた為時間がかかったのだ

そのお陰か37が持つて来ていた爆薬はかなり余った

もっとも余ったからといって困る事も無駄に設置することも無いが

テイスは37が乗つたのを確認すると車を走らせる

見つけたジープは軍用モデルで上部にミニガンが付いている

しかし壁やドアが無く安全性はほぼ皆無だが一応後は爆発を確認して戻るだけなので問題はないはずだ

テイスは少し走らせ爆発範囲外である基地から200m程離れた場所に車を止める

テイス「残りは」

37「30秒」

テイス「10でカウントしろ」

37「了解……………:10、9」

37がカウントを始め全員が車の影に隠れる
爆発範囲外ではあるが念の為だ

37「……………5……………4……………3……………2……………1……………0!」

0カウントと共に基地は大爆発した

だが予想外の大爆発で爆風がテイス達を襲う

フェンリル隊は何とか耐えたが子供スキンのネゲヴとG36は少し飛ばされた

爆風が収まり確認すると周囲を囲っていた崖が無くなっていた

テイス「……………どんだけ爆薬があつたんだよ……」

どうやら想定よりもミサイル等があったようだ

ティスは全員を確認する

アリス達は大丈夫のようだ

ネゲヴ達も数メートル程飛ばされたが問題は無いらしい

ティス「爆破したし戻んぞ」

ネゲヴ「爆薬多すぎよ！」

37「基地に想定よりかなりのミサイルがあったんですよ、仕掛けた物だけならここまでの威力にはなりません」

ネゲヴはまだ言いたげだったが37がエンジンを掛けたことで車に乗り込む

10分後

無線が入る

ティス「ハウンドだ」

マクベ『マクベです、そっちの状況は大丈夫ですか？』

ティス「問題なし、いまさつき爆破して今は帰宅途中だ」

マクベ『ありがとうございます、どれくらいかかりますか？』

ティス「何も無ければ50分位で戻れるはず……?」

マクベ『どうしました？』

ティスが何かに気づき周囲を見渡す

マクベの声はティスには聞こえていない

そしてソレを見つけた

ティス「:?!9時方向ミサイル接近！車から降りろオ！」

ティスの言葉に運転していた37とミニガンについていたアリスは車から飛び降りる

ネゲヴ達は咄嗟のことで反応が遅れたがティスが引つ張り出した
そしてミサイルが車に着弾した

真横から直撃したミサイルは爆発と同時に車を吹き飛ばす
すぐにティスが状況を確認する

アリスと37は問題なかったがネゲヴとG36が負傷した
ネゲヴは両足に破片が突き刺さり動ける状況ではなく

G36は爆風で吹き飛ばされ岩に激突し気絶していた

ティスが2人を引っ張って岩に隠れると何かの上を高速で通った
戦闘機だ

ティス「ミグ35だ！隠れろ！」

ティスは負傷したネゲヴから銃を奪い取る

ただのMGだが無いよりかマシだ

せめてミニガンが使えれば…

ティス「37！俺のDSRを組み立てとけ！アリスはG36のAR
で応戦だ！」

ティスは旋回してきたミグに向けて撃つが変態的な軌道でまるで
当たらない

アリスも同様だ

ティス「問題発生！ミグに襲われている！ネゲヴとG36は負傷し
た！」

ティスが無線を入れるが無線からはノイズしか聞こえない

ティス「妨害されている！俺らで切り抜けろとよ！」

アリス「武器ガタリナイヨ?!」

ティス「何とかしろ！」

アリス「出来ルカ!!」

言いながらも2人は撃つがミグが機銃を撃ってきたので隠れる

ミグ35の機銃は30mm、弾数は少ないが当たればひとたまりも
ない

ある程度撃つとミグは頭上を通り過ぎる

その瞬間を狙うも安定の変態軌道で躲しそのまま高度をあげてい
く

アリス「腹二爆弾積ンデタンダケド?!」

ティス「爆撃でもする気か!?!」

37「組みました！」

ティス「アリス！ライフルを37に渡せ！お前はMGだ!!」

ティスはMGをアリスに投げ渡しDSRを構える

ミグが引き返して来るが高高度なので弾は届かない

と思つたらティス達へと急降下してきた

ティス「マジでやる気かよ?! たつた5人に本気出し過ぎだろ!？」

37「ピンポイントで来ます！」

ティス「分かっているからとつとと2人を移動させろ！アリスはアイツに弾をバラ撒いとけ！」

37がG36とネゲヴを移動させる

アリスは急降下爆撃をしようとするミグに向けて撃ちティスがスナイパーで何とか当てようとする

ネゲヴ「早く当てなさいよ！スナイパーで航空機墜すヤツが居るの出来ないの?!」

ティス「映画と現実を一緒にすんじゃねえ！だいたい墜してんのへりかUAVだろ!?! それなら俺も落とせるは！あんな変態軌道描く戦闘機をボルトアクションスナイパーで落とした奴なんていねえよ！」

そんな事を言っているとミグが爆弾を落とした

ティス「撤退！」

落としたのは1発だけだが急降下爆撃で落とす爆弾はかなりの速度で落ちてくる

そして

D a w n !!

着弾した

ミッション17

D a w n !!

着弾を確認したミグは被害の確認の為に軌道を変える
そしてある程度の高さから目視で確認するが流石にすぐの為か殆ど分からない

赤外線カメラでも確認するが爆発の炎等でまるで役にたたない
ミグは周囲を警戒しながら着弾地点を中心に旋回し続ける
そして煙が晴れて来たので再確認の為に近付く
残り500mのところまで三体の人影を確認した
わかりづらいが恐らく死に体だ
その時、煙の中に光、反射光が見えた
パイロットはそれを見た瞬間、回避行動に移る
それと同時に煙の中に一瞬、スナイパーライフルを構える男が見えた

ダンッ!

タイミングギリギリでティスはDSRの引き金を引いた
だが僅かに向こうの方が早く弾は左翼に当たっただけで終わった
そこから煙は出ているが墜落する程の影響は無いらしい
ティス「……fuck、外した」
アリス「向こうの方が早かったね……」
ティスの横には仮面の下半分が無くなったアリスがいる
声が普通なのは仮面の影響の様だ
アリスは動かない3人を物陰に移動させる
ネゲヴは爆発で両足があらぬ方向に曲がり頭から出血している
G36は頭に爆弾か何かの破片が刺さっている、恐らく死んでいる
がコアは無事だろう

37は左半身がヤバい、左手足は無くなり左の殆どが焼けただれて
いる

アリス「ネゲヴと37は生きてるか解らないから」

ティス「コアが無事なら修復は可能だ」

アリス「なら良いんだけどね…」

ティス「…戻ってくんぞ」

ティスの言葉にアリスはティスのHK416を構える

射程はG36より短いが無いよりかマシだ

ミグが旋回して来る、2人は構える、距離はだいたい2000

ティスはDSRを撃つ

この距離なら当てられる、変態軌道さえ無ければだが

ティス「1500…1000…500…300!撃て
!」

合図と共にアリスが撃つ

当てる必要はない

ティスがスナイプしやすい様にスキさえ出来ればそれでいい

だがそれをあざ笑うかのようにミグは躲し何もせずに2人の頭上を通り過ぎる

ティス「…確認か、それとも煽つてんのか…特に意味は無いが単座だったからミグ35か35Sだな」

言いながらも射程圏外まで撃ち続ける

爆撃で2人は冷静になれたらしく先程よりかは弾道はミグの近くを通る

アリス「ほんとに関係ね…まあ、少しは役に立つかな?…状況は
変わらな…お?」

そんな中旋回中のミグが軌道を大きく変えた

疑問に思いながら警戒していると2発のミサイルがミグを襲う

ティス「…あれはウチのだな…て事は…」

2人が見渡すとスパーハインドがこちらに近付いていた

僅かにBLACKWATCHのロゴが見える

アリス「ナイスだよグリーン!愛してるよお!」

アリスの言葉に反応したかのようにハインドは更にミサイルを撃つ

見るとミグが先のミサイルを落とした様だが更なるミサイルでま

た離れていく

そんな中でハインドは近くに着陸し4人、UMP45と9、そしてHk416、G11が降りて来る

45「状況は？」

ティス「3人が虫の息、対空装備無し」

45「把握、とりあえずハインドあるんだけど乗ってく？」

ティス「乗せねえんなら撃ち落とす」

45「5名様ごあんない♡」

ティスとアリスが乗り込むと9達が虫の息のネゲヴ達をへりに乗せへりは飛び立つ

ラグーン『アイツ落とさねえとストーカー見てえについてくるぞ』

ティス「弾はあるんだろうな？」

ラグーン『コイツの装備なら問題無いがドアガンは知らん』

その言葉にティスとアリスはドアガンのM2とミニガンを調べる

M2は100発程あるがミニガンは空だ

ティス「……………Fuck!……………ラグーン！テメエの変態軌道でタイミングをつくれ、後は俺がやる、後ろは気にするな」

ラグーン『了解だあ！ドア閉めて口閉じろよ?……………舌が墜ちるか
らなあ!』

ミグとスーパーハインドの変態軌道対決が始まった

ミッション18

ティス「…ケツにつかれてんぞ、早くしねえとアナが増えっから何とかしろ」

ラグーン『黙つてろよ!?そもそもハインドとミグだぞ!速度差どんだけあると思つてんだ!』

ティス「ミグは高高度で2400、低空で1450、そんでウチで改修したこのスーパーハインドは巡航速度が350、超過禁止速度が395、だいたい6〜7倍かな」

ラグーン『説明どうも!クソがつ!!』

ハインドとミグの空中戦が始まって15分程たった

双方共に変態軌道でほぼ無傷だったがミグがスキをつけて後ろに付いたことでハインドが僅かに追い込まれていた

ハインドは強力な赤外線ジャマーにフレア、そして兵員室に積まれた多数の信号弾でミグのミサイルに対処しているが攻撃手段が殆どない

そもそも後方への攻撃が出来るのはドアガンに乗っている者だけなのだが

現状の攻撃手段は乗っているフェンリル隊だけでM2は弾切れで今はフェンリルの盾になっている

ティス「……そろそろか?」

ラグーン『後500!』

ティス「なら戻るか」

ハインドのガンポッドでミグを射撃していたティスが兵員室に戻る

ティス「全員ちゃんとベルトしとけよ?じゃねえとブルに振り落とされんぞ?」

それを聞いたフェンリル隊はすぐに行動する

落ちそうなものを適当に積めて怪我人をキツく固定する

それが終わると席に座りベルトをしキツめに絞める

ラグーン『 ロックンロール? 』

ティス「YEAH!!」

言うやいなやハインドは急上昇する

ベルトで固定していなかったら壁に激突していた

ティスはドアの手すりに捕まってその時を待つ

ミグはハインドの急上昇には対応出来たのかハインドと共に急上昇するもハインドが急上昇ギリギリの速度まで落としたのでミグはハインドを抜かして上昇して雲の中に消えていった

その数秒後

ラグーン『 ミサイルアラート!ミグがのってきたぞ!』

ラグーンの言葉にティスは信号弾を数発撃ち出した

それと同時にラグーンはハインドのエンジンを切った

ミサイルはエンジンの切れたハインドを掠め信号弾に向かって飛んでいく

そしてミグが雲の中から出てきたがハインドと直撃コースだったので慌ててハインドの横にそれ回避した

……だが

ティス「残念、ハズレだ」

ミグのパイロットが最後に見たのは片手でツールハンマーを構えるティスの姿だった

ミグがハインドの真横に來た瞬間、ティスはツールハンマーをフルオートで全弾撃つ

ティスの持つてるツールハンマーはフルオート機能がある

それもレートは900というサブマシンガン並の連射速度でだ

それがミグのコックピットを襲う

ある程度の強度はあるコックピットの風防だが近距離からのショットガンのフルオート、しかもスラッグ弾を防げる程の強度はない

スラッグ弾はコックピットの風防を容易く破壊しパイロットに当たる

ほぼ一瞬の出来事ではあったがスラッグ弾はパイロットやミグ本

体に命中し数ヶ所から黒煙を出しながら落ちていく

ラグーンはハインドのエンジンを再始動し空中で安定させる

その間もテイスはミグから目を離さない

弾は確かにパイロットに命中したが生死は分からない

テイスはハインドが安定するとDSRに持ち替える

そして構えた時ミグが立て直そうとしているのが見えテイスは狙いを定める

ミグが立て直そうとしていると右翼のフラップとスラットが外れた

それでも立て直そうとしているのかパイロットは脱出しない

テイスは僅かに見えるパイロットに狙いを定め

テイス「ゲームオーバーだ」

撃った

14・5mm弾は残った風防と座席を容易く貫きパイロットに命中する

パイロットが死んだのかミグは抵抗を無くしそのまま地面に激突し爆散した

テイス「ミグの墜落を確認、ラグーン、近くに着陸しろ」

テイスの指示にラグーンは降下していく

フェンリル隊は疑問を浮かべるが

テイス「ブラックボックスを回収するぞ」

その言葉に納得した

そしてハインドはある程度離れた場所に着陸し降りたテイス達が炎上する残骸からブラックボックスを探す

ヘリに備え付けてある消化器を使いながら探しているとパイロットの一部が見つかった

テイス「：ロシア空軍？」

テイスは残骸を更に探す

そしてパイロットの他の部分やブラックボックスを見つける

見つけたパイロットは部分的だったがほぼ確実にロシア空軍である事が解った

テイス達は疑問に思いながらもG05基地に戻ることにした
途中基地に無線を入れて報告したらマグベがかなり焦っててい
たがテイスは無線を切った

ミッション19

ハインド内部

ティス「……てな訳で準備よろしく」

ブレイン『いや、まるで意味分かりませんよ』

ネゲヴとG36をG05基地に任せてフェンリル隊の乗るハインドはBLACKWATCH本部へと飛んで行く

BLACKWATCHオリジナルである37は本部の施設でなければ治せない

それにBLACKWATCH製の人形は基本的に企業秘密が盛り沢山の為他の設備には任せられない、という本音もある

因みにアリスに関しては全てに置いて秘匿事項が多いので他にやらせるという事自体が論外なのだが

ティス「分かれよポンコツ」

ブレイン『最新です、まあヘリの映像で状況は理解していますが……ですがこつちではなく蛇屋敷に向かってください、向こうには連絡入れていますので問題はないかと』

ティス「なんか問題でもあったが」

ブレイン『大アリです……まあ問題もありますがG地区なら本部に戻るよりも蛇屋敷の方が近いんですよ……それはそうとブラックボックスのGPSは切りましたよね?』

ティス「回収した時点で引っこ抜いて捨ててある」

ブレイン『ならいいです、とりあえず蛇屋敷で修復をしてください』

ティス「あいよ……ラグーン、聞いたな? 蛇屋敷に向かってくれ」

ラグーン『了解』

ハインドが軌道を変える

ティスは37を見る

37の意識はまだ戻っていない

左手足は無くなり左半身は重度の火傷状態だが恐らくコアは無事な筈だが調べない事にはわからない

ティス「ラグーン、出来るだけ急げ」

ティスの言葉にラグーンはハインドの速度を上げた

それから1時間位で山に入りそれから更に10分程飛んでそれが見えてきた

山の山中にぽっかりと空いた場所に日本風の屋敷が見えた
ラグーンは屋敷の前にハインドを着陸させる

着陸するとティスはすぐにドアを開け37を連れて出る

続いてアリスが半壊しているBML37を持って出てきた

残りの4人も出るとハインドは本部に向けて飛んで行った

ティス「……久しぶりに来たがなんも変わらねえな」

庭を見渡せば至る所に蛇がいる

ここが蛇屋敷と呼ばれているのは敷地内に世界中の蛇がいる為で
中には絶滅危惧種もいる

ここまで蛇がいる理由はここの主人が蛇が好きだからという単純
明快なもの

その蛇を踏まないようにして建物に進んでいく

この蛇は本来なら気性が荒い個体だろうが何もしない限り襲つ
ては来ない

興味を持って近付いてきたり体を登ってきたりはするが攻撃され
る事は敵対しない限りない

現にキングゴブラがティスに近付いて体をよじ登り頭の上に乗つ
ている

このキングゴブラは来るメンバー中で一番上の者の頭に登る、そし
て登ったキングゴブラの顔は心無しかドヤつて見える

そんなキングゴブラを無視し搬入口のシャッターを開けようとす
るが開かない

ガシヤガシヤツ、とシャッターを持ち上げようとするが鍵が掛かつ
てるらしく開かない

ティス「……………下がれ」

言うのと少し下がりティスは45に37を渡しトルハンマーを持
ちアンダーレイルに付いているM203グレネードランチャーに弾

を入れ構える

テイス「3……2……1……」

カウントをするが一切反応が無い、そして

テイス「Fire」

擲弾が撃たれた

弾はちようど鍵がある所に当たり1秒程おいて爆発した

シャツターに人が通れる程の大穴が開きテイス達はそこから中に入る

中にはシャツターの破片が散らばっているが中の物には被害はない

最後のG11が入ると奥の扉が開き10人程のミニガンを持ったメイド人形達が入って来てミニガンをテイス達に向ける

テイス「：相変わらずリザード^断人形^蠍か」

リザードドールとはその名の通りのトカゲ人形で蛇屋敷の主人が造った唯一無二の人形で全身が強固なウロコに覆われ指先には鋼をも引裂く爪があり尻尾がある

口はせり出しており眼は蛇等の様に瞳孔が細長いのが特徴

因みにスネークドールではなくリザードドールなのは蛇には手足が無いのでメイドにはならないと言う理由があつたりする

リザードドール「……次は玄関からお越しく下さい」

リザードドール達はテイス達だと解るとミニガンを下ろした

テイス「急ぎでな」

45が背負っている37を指差しながら言う

リザードドール「：わかっております」

??「ウチが連れて行くから修理頼みますわ」

声の方に向くとそこには5m程の緑のコブラが居た

頸部のフードからコブラだと分かるがその太さはニシキヘビ並に太い

何より喋った

テイス「スカルか、居たんなら開けてくれても良かったんだが？」

スカル「堪忍してや、手足がないのにどう開けるんや?」

このコブラの名前はスカル、フードの模様がドクロに見える事からつけられたらしい

スカルもコーラップスに汚染されたELIDで喋る事が出来るが何故かエセ関西弁で喋る

スカル「まあええは、ついて来いや」

スカルが鎌首を持ち上げ倉庫の奥へと向かっていったのでテイス達もそれについて行く

ミッション20

スカルについて行き倉庫の奥にある階段を降り地下室に入ると様々な機材等が設置されているガレージの様な部屋につく

スカル「リーリヤく何処やく？」

呼びながら進むと

？「こつちです、左奥に居ます」

奥から目的のリーリヤと思われる声が聞こえそこへ向かう

スカル「……あー、大丈夫？」

2分ほど歩くがまだ着かない

というのも様々な機材が所狭しとあるだけでなく唯一の通れる所も荷物やらで塞がっているためだ

部屋自体は20m×10mとガレージ位の広さだがこれらの要因の為まるでたどり着かない

スカルは蛇である為簡単に進めるがフェンリル隊の面々はそうはいかない

ティス「整理くらいしやがれ！」

リーリヤ「無理です、やったらどこに何があるのか分からなくなるので」

ティス「ほんっと！他はポンコツだなア！」

言いながら機材の下を通り37を受け取る

そして他のメンバーが下を通り抜ける

最早迷路だ

そしてリーリヤの所へは5分も掛けてやっとたどり着いた

疲労感漂うティスが顔を上げる

そこに銀髪の色白の少女、リーリヤがいる

世間的に可愛い、と言われるリーリヤだが今の格好はデニムのツナギの上半身部分を腰に巻き日本の龍が刺繍された黒いTシャツ

そして頭にはタオル地の黒いヘルメットインナー

男ならバイクが似合いそうな格好だ

そんなリーリヤはパソコンに何かを打ち込んでおりティス達の方を見向きもしない

リーリヤ「37をそこへ」

ティスは37を作業台に乗せる

それから1分程してリーリヤは打ち終わったのか移動し37を診る

リーリヤ「……何と殺りあつたんですか？ 貴方達がここまでヤラれるとは……」

ティス「まともな装備無しでミグと殺りあつたんだよ、その時の急降下爆撃でこのザマだ」

リーリヤ「装備は？」

ティス「俺と37はいつも通り、アリスはMP5とUSP、まあMP5は最初のミサイルで亡くなったが……後はネゲヴとG36がいたが2人とも最初の攻撃で虫の息、G36に関しては爆撃でやられた」
リーリヤ「なるほど、アリスの仮面が壊れているのもティスの指が少ないのもそのせいですか」

ティス「……マジだ、指すくねえ……」

ティスが自分の指を確認すると右手の小指と左手の中指と薬指が無くなっていた

ティスには痛覚機能はある筈だが気が付かなかったのか

416「普通は気付くわよ……」

ティス「いや、爆撃で感覚器官が少しやられたのかと思ってた」

この言葉に全員が呆れる

そんな中でもリーリヤは37の状態を診る

リーリヤ「……37は最優先ですがついでに貴方たちも修復しますね、勿論全員です、45は特に……スカル、コレお願いします」

45「私達も？とゆうか何で私だけ念入りなの？」

リーリヤ「バグを忘れたとは言わせませんよ、ただでさえ貴女は特殊なのですから」

45「……分かってるわよ、でもアリスはどうなのよ」

リーリヤ「アリスは問題ありません、一応は見ますがメインは爆撃

での損傷の確認と仮面の修復ですので、そもそも貴女の場合何故かは分かりませんがリミッターとの相性が最悪ですので余計にです」

45は黙る

リミッターとの相性が最悪のレベルでバグが起こりやすく何故リミッター10まで外せるのか分からないくらいだ

リーリヤ「…とりあえずコアは無事ですがパーツが足りないのので2週間はかかります、貴方たちも含めてですが…ですがその前に…」

ティス「そのまe…?…」

ティスが喋っている時いきなり止まる

そして

バタン

ティスが倒れた

フェンリル隊「「「「……………」」」」

リーリヤ「まともな整備なしで動ける程そのボディは高性能ではありません」

言うとなティスの後ろからスカルが滲み出てきた

透明になれるスカルがティスに何かしたらしい

リーリヤ「彼をそっちの台に」

何をされるか分からない5人は大人しくティスを台に乗せる

リーリヤ「まずは彼の中身を移し替えます」

作業が始まった

1時間後

ティスが台の上で起きる

ティス「……最悪の目覚めだ」

起き上がったフェンリル隊の方を向いて違和感を覚える

45と9、そしてアリスが端末をティスに向けている

性格には端末に付いているカメラだ

そしてそれを見て何かに気付き自身の体を見る

服装は殆ど変わってないが体が全体的に小さい

ティス「……………f u c k!!何入れ替えてんだア!!」

ティスは幼女になっていた

何故か黒い狼の尻尾と耳を付けて

リーリヤ「元のボデイに色々とガタが来ていたんですよ、これは半年以上かかるので定期メンテナンスでこちらに合ったそのボデイに移し替えました」

ティス「何でコツチ何だよ!？」

リーリヤ「水戦ボデイはソツチの本部で改修中だからです、ついでにそのボデイが女子なのは私の趣味です」

ティス「クタバレ」

ティスは女の子になった!

ミッション21

ティスが女の子になって2時間後

ティスは先に終わった416を連れて武器を調達して来ると言つて屋敷にある車をかつぱらつて出かけて行つた

残つたメンバーは37の可能な限りの修復が終わるまで屋敷をぶらついていた

45 「ここつてほんとやる事ないわよね…」

4人は退屈していた

ただしG11の場合は寝れそうな場所探したが場所を間違えると自分が蛇の寢床になる為ちやんと場所を吟味している

9 「ねえ！G11、あそこなんて良さそうだよ！」

3人は9の指差す所を見る

そこは中庭にある大きい池のほとりで木がほどよく日光を遮っている

地面は芝生で寢床としてはいい感じではあるが…

G11 「…9、あそこに居るの何か解る？」

今度はG11が指差す、それは池に浮いておりいい感じのほとりのすぐ側だ

9 「勿論！ワニだね！多分いい感じの枕代わりになるよ！」

9はニツコリと笑いながら言う

種類は分からないが池にはワニが見えるだけで10匹程いる
小さくて2m程だが大きいのはその数倍の8mは優に超える

蛇は大人しいがワニが大人しいかは分からないのに近付くのは無理だ

もし噛まれれば幾ら戦術人形だとしても無事では済まない

45 「9、落ち着きなさい、流石に可哀想よ…」

9 「大丈夫だよ！大人しいし可愛いよ！」

そう言つて行こうとする9だが

45 「止めるわよ！」

3人が9を止める

その後偶然通りかかったスカルがワニも大人しいと話たのでG1はほとりで寝始め残りの3人はワニと戯れた
因みにG11は蛇の寝床にはならなかったがワニの子供たちの寝床になった

2時間後位後

416とティスはI地区にある富裕層向けの街に来ていた
富裕層向けとは行っても少し前の事で今では観光地となっている
そんな所を416が運転するジープは走る
本来ならティス1人で行くはずだったがまともにロリボディになつた事でまともに運転出来ないので416を先に終わらせ運転させている

416「…それで？何処へ向かえば良いの？」

416が助っ席でタバコを吸っているティスに聞く

見た目はアレだがティスなのでそれは無視する

I地区の観光地とは聞いたが正確な場所は聞かされていない

ティス「…ああ、ホテル・ハイブンに向かってくれ」

416「…なるほどね」

ホテル・ハイブンとは会員制の高級ホテルだ

会員に成れなければどんな人物でも入る事すら出来ないので1部では最高級のサービスが受けられるとか色んな噂が飛び交うホテルだが実際は全く違う

その実態は殺し屋等の裏稼業専用のホテルだ

裏の人間だからといって会員になれるわけではないが

BLACKWATCHはホテル・ハイブンの警備をやっており1部ではあるがBLACKWATCHの社員ならほぼ強制的にこの会員になる

そんなこんなでハイブンに着くと416は車を正面ロータリーに
止め2人は車を降りる

416は自身のARが入っているバックを取り車の鍵をホテルマ

ンに渡す

ティスは歩道に移動し伸びをしながら軽く周りを見る

姿は見えないがBLACKWATCHの人間がちゃんと警備をしている

416「…ちゃんとやってるの？」

ティス「4人いるし大丈夫だろう、中にもいるはずだ、いなかったら先方からクレームが来てるだろうし」

言いながら中に入り受付に行くが受付はティス達を一瞥して

受付「ガキが来る所じゃねえぞ、ここは選ばれた人間だけが来る事を許されるホテルだ、痛い目に合いたくなければとっとと消えな」

このザマだ

ティス「…こんな奴をよく受付にしたな、経営難か？」

受付「…ガキ、てめえ今なんつた？」

416「ホテルの名が泣くわね…経営方針を変えたんじゃない？」

ティス「それは盲点だった、そこん所どうなんだ？オーナー？」

受付「このクソガキ」カシュンツ

後ろから頭を撃ち抜かれた受付はそのまま倒れる

撃った人物はスーツを着た初老の人物、ここI地区のホテル・ハイブンのオーナーだ

オーナー「申し訳ありません、この…ティス「それは良いから通してくれ、やる事が山積み何だ」…わかりました、要件は？」

ティス「ティステイングだ、なんでも416でも問題ないのが入ったって聞いてな」

オーナー「ハッハッハ！彼女の酒癖はこちらも良く把握しています、仕入れたのはそんな彼女でも大丈夫な1品ですよ」

416「どういう意味よ！」

オーナー「…ではこちらへ、ご案内します」

ティス「頼むぞ」

416「無視するんじゃないわよ！」

416を無視して行く2人に納得いかないもついて行く416

受付の死体は2人が帰る頃には綺麗に無くなっていた

オーナー「こちらです、私はバーに居ますので後で少し話しましょう」

ティス「それはいいが416には酒渡すなよ？」

2人を地下の一室に案内したオーナーはそう言つて去つていった中に入ると所狭しとワインケースが並んでおりその中にはワインではなく銃が入っている

奥に進むと一人の男が銃のチェックをしている

彼はホテル・ヘイブンのソムリエだワイン等のソムリエもやつているがメインは銃のソムリエだ

ソムリエ「いらつしやいませ416様、それと…ティス様」

ソムリエはティス達に気付くと銃を棚にしまいお辞儀をする

ティス「一瞬悩んだが気付いたから目を瞑ろう」

ソムリエ「悩んだ、と言うよりも驚いたが正解ですね」

ティス「…まあいいか、ティストしたいんだが良いのはあるか？」

ソムリエ「勿論です」

ティステイニングが始まった

ミッション21.5

ソムリエ「貴方がドイツやロシア産をお好きなのは重々承知していますがその身体ですので選択肢は多い方が良いでしょう」

ティステイングが始まりソムリエは一丁のハンドガンを取り出しティスの前に置く

ハンドガンはグロック18Cでカスタマイズされている

ティスはグロックを手に取ると各所を確認する

ソムリエはそんなティスを見ながら説明する

ソムリエ「オーストリア産の高級品です、スライドは金属製の強化スライドです」

ティス「フレームも金属製か、スライドのフロントにもコツキングセレーション」

ソムリエ「フレームは溶接しては削りを繰り返し徹底的に精度を上げてあるのでガタツキ等はありません、グリップ等のフレーム部は特殊な布張りで濡れた手でも滑りませんしフィンガーチャンネルをギリギリまで深くしてあり貴方の手にも馴染むはず、またセレクターを無くし射撃はバーストのみにしています」

ティス「マグウエル付き…トリガーセーフティは解除してある、サイトはホワイトの3ドットタイプ…最高だな」

ソムリエ「ありがとうございます、続いてのオススメは…こちらです」

ソムリエが出したのは見た事のない銃だ

ティス「これは？大体は416だがマガジン挿入部はヴェクターだが…」

ソムリエ「まさにその通りです、こちらはC416Bといって貴方が好きな416にクリスヴェクターを組み合わせた物です、弾は45ACPを30発とヴェクターと同じです、こちらはBLACKWATCHから提供された物をこちらでカスタマイズ致しました、勿論サイレンサー標準装備です」

ティス「マガジンキャッチにボルトリリースは左右に、チャージン

グハンドルも左右対称の物に変えてある…全体的に左右対称か、いい出来だな」

ソムリエ「ありがとうございます、因みにチャージングハンドルは素材を変えて肉抜きをしてありますが強度はそのままにハンドル操作は軽くなっております」

オプシオンでホロサイト等もありますが如何なさいます？」

ティス「フリップアップサイトとホロサイトを頼む、アンダーレイルにはアングルフォアグリップを付けてくれ」

ソムリエ「かしこまりました、こちらのオススメは以上です、何かリクエストはありますか？」

ティス「…火力が欲しいな、1m以下で7・62を使うマークスマンライフル」

ソムリエ「…7・62…マークスマン…」

ソムリエは呟き少し考えると柵からドラグノフに似たライフルを取り出す

ソムリエ「こちらはドラグノフをベースにフルカスタムをしたマークスマンライフル、XM6ハイブンは、見た目はバルメに似ていますが別物と捉えて良いです、全長930mm、弾は7・62×54Rで20から75発の各種マガジンが使えます、ストックとハンドガードはポリマーでストックはドラグノフの物を使ってチークパットも付いています」

ティス「ハンドガードはAK風のオリジナル、スコープはイルミネーションか…射程は？」

ソムリエ「有効射程なら700ですが貴方なら1000以上を狙えます、ドラグノフベースの為セミオートでは高い命中制度があります」

ティス「よくやった、後は土産だな」

ソムリエ「その前に一つ、オススメがあります」

そう言うとソムリエはハンドガンのホルスターを出す

パツと見ではホルスターの先に四角い何かが付いているのを除けば普通のホルスターだ

ティス「…これは？」

ソムリエ「これは先程のグロック用のホルスターでこの四角いのはサイレンサーです」

ソムリエは説明しながら先のグロックと同じ物を出す

殆ど同じだがバレルの先端が少し飛び出ている

ソムリエ「こちらをホルスターに入れ横のツマミを回転させてから取り出すと…」

ソムリエがツマミを回転させグロックを取り出すとグロックには四角いサイレンサーが付いて出て来た

ティス「…なるほど…サイレンサーはFD917か」

ソムリエ「サイレンサーが付いた状態でまた回せばサイレンサーは外れます、サイレンサーは内部に手を加えてますので消音効果は折り紙付きです、こちらは専用グロックとセットです」

ティス「なら両方貰う」

ソムリエ「かしこまりました、お土産は如何なさいますか？」

ティスは棚を軽く物色して迷彩柄の包帯を柄事に幾つか取る

ティス「俺のはこれくらいだな、416は何かあるか？」

416「ないわよ、それに私だけ買ったら後でうるさいわよ？」

ティス「違ういな」

後ろで暇そうに商品を見ていた416に言うが本心かはともかく特にないらしい

それを特に気にせずにティスは金貨を数枚出す

ティス「ハンドガン2丁にマークスマンライフル一丁、それにサブが一丁だからこれくらいだな」

ソムリエ「確かに…お部屋にお持ちすれば？」

ティス「車に頼む、泊まりに来た訳じゃ無いからな、この後オーナーと話すから急がなくても大丈夫な筈だ」

ソムリエ「かしこまりました…ティス様」

出て行くこうとする2人をソムリエは止める

ソムリエ「…どうぞ素敵なパーティーを」

ティスは頷いて部屋を出た

その後オーナーと軽く話して2人はホテルを出た

ミッション22

ホテルから戻ったティスと416だがまだやる事は山ずみだ

416は手の空いているリザードドールと共にブラックボックスの解析に入りティスは新兵器のテストに付き合わされる

外で新兵器を待っているティスはそれが来るまで蛇と戯れている意味も無くニシキヘビを持ち上げてみたりボデイのチェックをしたりしているとりザードドールが2人やってくる

その内の1人がバカでかいライフルと弾薬箱を持っている恐らくそのライフルが新兵器だろう

ティスの横に來るとライフルのバイポッドを立て地面に置くライフルは軽く2mを超えている

付いているのはスコープなのだろうがカメラの長距離レンズ並にデカく50cmはある

そして弾薬箱を開けると奇妙な大口径の弾が入っている

その弾頭は30mm弾より少しデカく薬莖部分がかなり太い銃口にはこれまたデカイマズルブレーキ

ティス「……なんだこれ？」

リザードドール「リーリヤ様が設計製造した対強化装甲のライフルです、使用弾薬はオリジナル36.6mm弾で炸薬の量を最大限に増やしてあるのでこの様な薬莖の太さになったのです、想定では有効射程が8kmで最大射程に関しては15kmを超えると見ていますがなにぶんまだテストも行っていないので……弾薬の方は問題ありませんが銃本体は何とも言えません」

ティス「…威力は？」

リザードドール「それに関してはライフル本体が完成しなくては何とも言えません、想定では主力戦車の装甲を難なく貫けます」

ティス「……全て想定か…やるしかないか」

リザードドール「ではターゲットを設置してきます、彼女がスポッターをやります」

そう言うとりザードドールの1人はターゲットを設置にバギーで

森の中に消えていった

その間にライフルを見る

ブルパップでボルトアクション方式の単発ライフルで何処と無くDSRに似ている

ライフルの右側に弾薬ホルダーが付いている

ティスはホルダーに弾を入れ本体に装填する

一息入れボルトを引いてホルダーから弾を再装填する

ティス「……流石に2秒は掛からんが遅いな……」

リザードドール「……1秒76……2秒切っている事に驚きですよ……」

しかしこれで納得出来ないのであれば何度もやるしかありません」

ティス「確かに……」

ティスはスコープを覗く

スコープには距離計レーザーが付いており距離がスコープ内に表示されている

測定可能距離は20km

スコープのピント合わせをしているとターゲット設置に向かったリザードドールがターゲットを設置していた

距離は8km

このライフルの有効射程だ

リザードドール『：設置しました、見えますか？』

ティス「良く見える、ターゲットは戦車の装甲か？」

リザードドール『そうです、斜めに設置しました』

ティス「……1番貫きにくい場所を想定したか……撃つから離れてろ」

リザードドールが安全圏まで離れて行くのを確認し狙いを定める

リザードドール「距離8000、風は東北から微弱、5300地点で西北からになっています」

ティスはスポッターからの情報を頼りにスコープを調整していく

スナイパーは距離があればあるほど当てづらい

風は距離によって方向等が代わる

勿論風だけでなく湿度等も影響するし障害物があればそれに当てないように位置を調整する

リザードドール「……………撃て」

ティスがトリガーを引く

バカげた発射音が周囲に響き渡る

発射音は銃声と言うより至近距離での砲弾の爆発音の方が近い

その爆発音にも似た発射音によりスポッターのリザードドールは聴覚が良いのが災いして気絶

ティスはその異常なまでの反動により右肩を粉碎骨折し吹き飛ばされた

そして十分な程離していたスコープが右眼を襲い失明する

これらを1度に受けたティスは少し飛ばされ意識朦朧状態

周囲にいた蛇達も大半が気絶し1部は暴れてる

そんな状態のティスがライフルを見ると発射の衝撃に耐えられなかったのかバラバラになっている

少しして騒ぎを聞きつけた416トリザードドール達、そしてライフルを造ったリーリヤがスカルと共にやって来る

ティス「…………リーリヤ…バラバラになるのは兎も角せめて反動制御位付けろ…………」

言うとティスは気絶した

リーリヤ「…………付け忘れしました…………」

リーリヤが呟くと同時にリザードドール達が2人を搬送した

因みに弾はちゃんとターゲットに命中し装甲をぶち抜いてその奥の岩を貫通し弾は最終的に発射位置から様々な障害物を貫通し14km先で見つかった

弾は想定以上の性能を発揮した

ミッション22（コラボ準備回）

戦闘機の襲撃から半年近くたったが今の所何も変わらない

そう、何も変わりはないのだ

ティス達フェンリル隊は修復後G05基地へ戻って来た

ブラックは蛇屋敷の施設では解析出来なかったのでBLACKW
ATCH本部に持っていかれたが飛行ルート、無線記録等全てが書き
換えられていたのだ

飛行ルートは無補給では太平洋1周してからティス達を襲撃する
というありえないもので

無線記録はオーストラリアのラジオ番組のものになっていた

最早ブラックボックスの意味をなしてはいなかった

これだけなら兎も角何故かティスのボディもまだ戻ってない

リーリヤ曰く、まともな整備もしないで使い続けたのでオーバー
ホールしないといけない、との事

お陰で未だにロリボディだ

G05基地に戻った時に可愛がられ一悶着あったが割愛する

そんなティス達が任務も無く暇を持て余しているとマクベから呼
び出しを受ける

ティス「入んぞ」

ノックも無しにティスは入る

マクベは忙しいらしく特に驚かなかった

マクベ「…すいません、なんか他の所の書類を回されて…あつ、こ
れは呼び出しとは関係ありません」

ティス「そいつは良かった」

マクベ「…実は本部から仕事を頼まれたんです、内容は他の地区基
地に物資を届けると言うものなのですが…」

マクベは少し困った様に言う

マクベ「その…場所がS13地区なんです…」

ティス「…ああ、あそこか、確かに普通の人形部隊じゃキツイな」

S13地区、S地区事態が鉄血との最前線のようなところだがS1

3は治安が非常に悪い

歩けばスリにあい声をかければ荷物が消える

某漫画の港町みたいなところだ

ティス「確かにあそこは俺らならある程度行けるが確実に批難されるだろうな」

ティスが笑いながら言う

それを見たマクベはだいたい予想はついたようだ

マクベ「……その辺は私が言っておきます、安心してくださいとは言いませんが……」

ティス「構わん、いつ行けばいい?」

マクベ「明日ですが物資は本部なので本部に向かって下さい、本部でヘリアンさんから詳しく聞けるはずですので、本部まではこちらでヘリを出します」

ティス「了解、そんじゃこっちは準備しとく」

マクベ「お願い致します」

ティスは部屋を出て自室に向かう

他のメンバーへの通達と準備をしないといけない

物資輸送は恐らく陸路だ

用意するに越したことはない

翌日、ティス達フェンリル隊とG05基地の二部隊を乗せたヘリがグリフィン本部に着く

G05の部隊はトンプソン、スコープオン、MG3、LWMMG、M2、Supersass、M14、コンテンドー、AK47、M1014の10人とダミーがそれぞれ1人ずつ

近くに居た本部の人形にヘリアンを呼んでもらう

トラックがあるので陸路で確定だが問題があるかもしれない

と言うのもあるのはトラック5台と軽装甲車が1台だけだ

トラックは座席の後ろに寝るスペースがあるタイプなのでダミー含めて27人は問題ないが護衛車両が1台だけ

ヘリアン「遅れてすまない……少し見ないうちに随分と小さくなつたな……若返りの薬でも作ったのか？なら是非とも私にも……」

ティス「クタバレいき遅れ、つてんな事はどうでもいい、護衛車両が1台、しかも軽装甲車とか舐めてんのか？」

ティスからすれば最低でも後2台は欲しいところだ

ヘリアン「……仕方ないだろ、こっちもギリギリなんだ」

ティス「……ギリギリ、ねえ」

嘘だとティスは確信する

恐らく車両はあるが帰って来ないから出したくない、そんなところだろう

しかしそれで失敗したらティス達の責任にされる

ティス「……出さないんならてめえの合コン連敗記録掲示板に張り出すぞ」

ヘリアン「……わかった！だが2台が限界だ！ミニガンも付けるからそれだけはやめろ！やめてください！」

ティス「ならとつとと出しやがれ、こっちは準備しとく」

ヘリアンが慌てて戻っていく

それを見てフェンリル隊は動くがG05基地の部隊は疑問を浮かべるが無視する

ティス「エンジンチェックしとくからお前らは物資を確認しろ」

そう言つてティスはトラックのキャビンを上げる

本来なら物資のチェックだけがトラックのマフラーや足回りが妙にボロいのでエンジンを見る事にしたのだが

ティス「……ギリギリ……か？」

エンジンも交換レベルの状態だった

流石に二日三日は持つ筈だが……

ティス「……荷物はどうだ？」

ティスは無視した

動けなくなったらグリフィンに苦情を入れる算段をつけて

アリス「大丈夫ダガ……」

ティス「？どうした」

45 「このブラックホークってウチのじゃない？」

そう言つて45が指さす荷台を見るとBLACKWATCHの口ゴである鎖を噛みちぎる狼の絵が描かれたブラックホークがのつていた

ドアガンにはGAU19が付いている

ブレイン『それはS13基地へのウチからの荷物です、ヘリを欲しいとの事で其方の荷物に加えました、因みにガッツリ貰いました』
(嘘)

ティス「死ぬ、そつちで運び屋がれ」

ブレイン『なのでブラックドックを3人合流させていますのでご安心を』

ティス達は見渡すが姿は見えない

ティス「居ねえぞ？てか3人？」

ブレイン『イングラムがストレス等で体調不良になりました今治療中です、

ベツトスペースで寝てるのでは？』

416「：居たわよ、次いでにG11も寝てる」

ティス「：俺さつきキャビン上げたんだがあれで起きなかつたのかよ：とりあえず全員叩き起こせ」

ブラックドックを叩き起した数分後護衛車両の2台が来たので出発した

ミッション23 (コラボ回)

出発した後ティスはPKPと45を呼んでトラックの荷台の上でルート等の確認をする

状況によつて変えるルートも確認する

問題はS13に入ってからだ

市街地を通らないと行けないのでBLACKWATCH組が警戒しないといけない

恐らくグリフィン組では何も出来ない

ティス「…これが最短ルートでこの場合遅くなったら夜は車中泊だな、勿論ながら交代で警戒をだす」

PKP「この橋は絶好の襲撃ポイントだな、ここは警戒するに越したことはないだろう」

45「そういえば燃料もつの？」

ティス「量的に微妙だがこの位置に軍や俺らみたいなの向けのスタンドがあるから大丈夫だ、値は張るが仕方ない」

M1014「すいません、少しよろしいでしょうか？」

ティス「ん？向こうと連絡出来たのか？」

M1014はS13基地と連絡をとっていたはずだ

M1014「それが…何故か繋がらなくて…」

ティス「……………本部に言つとけ、こつちからも可能な限り呼び続けろ」

M1014「了解です！」

そんなこんなで1時間ほど話し合い終わるとそれぞれの位置に戻っていく

コンテナを詰んだトラックが5台と軽装甲車1台、そしてミニガンを搭載したハマーが2台の8台編成

問題は無いはずだ

37「ハウンド、この先にIEDの設置ポイントがあります、今の速度なら1時間ほどでポイントです」

ティス「…了解」

輸送護衛は始まったばかりだ

そんなこんなで1時間後

ポイントの300m手前で止まりテイスは指示を出す

テイス「そんなじゃ37はAEKと一緒に確認に迎え、こっちは周囲を警戒する、AEK!どうせバイク積んでんだろ?出せ」

AEK「あ、バレた?」

テイス「ブラックホークと一緒に積んでんだろ?変なスペースあったぞ」

AEK「しょうがねえな…37、ついてきな」

そう言うのと2人は荷台に入っていく

そして2分後荷台からバイクが飛び出して行った

トンプソン「あつた場合どうするんだ?」

テイス「37が解除出来るからそれを待つて出発だ、ちゃんと周囲警戒しろよ?」

トンプソン「当たり前だ」

その後僅か数分で解除した37はAEKと一緒に戻って来た
輸送隊は進み出す

その後は特に何も無く走りそして夕方頃にS地区に入った

そこから更に数時間でS13基地近くに着いた

残り1kmと言った所でヒカルナニかが輸送隊の近くに飛んでくる

何かと最初に気付いたテイスが確認するとそれは光るバカデカイハエだった

テイス「…キモっ!」

テイスがハエに向かってグロツクを撃つ

バーストで発射された弾はハエに当たるが余り効果はないらしい

ハエはテイスに襲いかかろうとするがトラックの助っ席からM1014が撃ち落とす

M1014「なんですかアレ?!」

テイス「知るかつ!全員警戒し…っ?!」

テイスがC416BWを構えた時テイスが乗っているトラックが

前のトラックに追突した

ティス「どうした!」

スコープオン「装甲車が何か踏んでスリップしたんだよ!それで追突したんだけどトラックのエンジンがかからないだけだ!?」

ティス「目の前だつてのに!全員警戒してハエは全て撃ち落とせ!俺はやる事がある」

言うとなティスは茂みに入ってしまった

数分後、ハエを落としながらティスが戻って来た

ティス「37!スモーク弾を全部寄越せ!」

37「え?!……あ、はい!」

37が弾を渡すとティスは弾頭部を分解し中身を出し何かと一緒に混ぜてそれが終わると戻していく

20発あつたスモーク弾全てにやる

それが終わると同時に複数のハエが迫ってきた

ティス「37、コイツを使え」

37は渡されたスモーク弾を受け取りハエに向かって撃つ

弾は通常通り軽く爆発し煙を撒き散らす

だがそれだけでは終わらずハエが面白いように落ちていく

トンプソン「……何を入れたんだ?」

ティス「殺虫効果の高い草と香辛料混ぜた手製の殺虫弾、俺らが食らうと軽い催涙スプレー位の症状だが連中には猛毒だ」

トンプソン「……恐ろしいな」

ティス「因みにこの草だがコーラップスだか放射能だからで突然変異起こした物だから」

トンプソン「……」

37は風向きに注意しながらハエに向かって撃つ

そんな中基地の方からサイレンサー付きの銃声が聞こえて来てそれが近付いてくる

ティス「こんな夜中でも出迎えてくれるのか?」

?「仕方ないでしょ?銃声が聞こえるしハエが向かっていったんだもの、心待ちにしてたわよ?G05基地の皆様」

やって来たのは45と416の2人

BLACKWATCHではなくS13の人形だとテイスはわかった

因みにテイスはBLACKWATCH所属の人形とそれ以外の人形を何故か見分けられる

狼耳付きのロリボディなら尚更（匂いでわかる模様）

BLACKWATCHの幹部ならこれは誰でも出来る

テイス「出迎えご苦労、と言いたい所だがトラック引ける重機とかあるか？ヘリアンがまともなトラック渡さないからエンジンがかからないんだが」

S13、45「あるわよ、それじゃ指揮官呼んでくるから少し待っててね」

2人は基地に戻って行った

数分後暗闇の中からシヨベルカーがやって来てトラック等を1台ずつ引つ張って行く

全て基地までは引つ張るのに1時間かかったがGamenメンバーは無事？S13基地の着いた

S13指揮官「いや〜ほんまに届けてくれるとは」

S13指揮官が色々と言っているが光がなく何も見えない

テイス（なんか聞いた事ある声な気が…）

S13指揮官「自己紹介まだでしたね、ウチはS13の指揮官のりホ・ワイルダーです」

テイス「（りホ…）ああ、りホーマーか」

テイスの呟きのような言葉は近くにいたフェンリル隊とブラックドック隊、そしてほぼ目の前のりホーマーにのみ聞こえた

呟いた瞬間37を除くBLACKWATCHの人形達はボルトを引いた

りホーマーは一瞬遅れたがすぐに理解し逃げようとテレポートした、だがそこはBLACKWATCHの幹部

テイスはりホーマーの転移位置を先読みしりホーマーを押さえつけ口を塞ぐ

リホ「ムグツ（テレポートを先読み?!なんで…この幼女見た事ある様な…まさかハウンド!?なんで小さく?!）」

ティス「…久しぶりだな」

言うとな、ティスは自身の首元からコードを引っ張り出しリホーマーに無理やり接続する

リホーマーは抵抗しようとするが身体は動かず何も起きない

テレポートもナノマシンも使えない

リホ（なんで…！サイバーブレインか!?!）

ブレイン『（お久しぶりですね）』

リホ（アカン！殺られ…?）

覚悟したその時、リホーマーの拘束が緩んだ

身体は動かないがティスが手を緩めた

リホ「（な、なんでや?）…へ?」

驚いてるリホーマーだがティスはコードを外すとリホーマーの首根っこを持つて全員の所に戻っていく

リホ「…なんでなん?」

ティス「シラケた」

リホーマーの疑問にティスはそれだけ言うとりホーマーをみんなの前に投げ出してた

ティス「お前らの指揮官はアレか?引きこもりかコミ障か?流石にテレポートで逃げるとは思わなかったぞ」

言いつつトラックのヘッドライトをバンバン、と叩くティス

するとヘッドライトがつき辺りを照らす

BLACKWATCHの面々はリホーマーだけを見る

リホ「逃げられへんやん…:…いやうちとびっくりしてな、アハハ…とりあえず今日の所は休んでいってや」

ティス「…この糸みたいなのに寝ればいいのか?新しいな、まあ俺らは遠慮するがな」

言うとな、ティスはトラックホーク入っているトラックの荷台に45とPKPと共に入って行く

ティス「アリス、そっちは任せる」

アリス「ワカッタ」

アリスは別のトラックからテントを幾つか出す

アリス「テントカ車中泊カ好キナ方ヲ選ベ、37ハソノ間ニ基地ノ殺虫ヲシテオケ」

37「了解です！」

37は殺虫弾を装填し撃ちながら基地？に入っっていった

リホ「…アレ効くんか？」

416「かなり効くわよ、朝中を見てきなさい、虫の死骸しか無いから」

416は言うのとテントの組み立てに向かう

リホーマーは少し悩んだがとりあえずテントの組み立てを手伝う

その頃荷台では

ティス「…ああ、間違いない……だが本人は記憶を持ってはいるが思い出していないようだ……そっちは任せる」

ティスが無線を切るとPKPが話しかけてくる

PKP「確かなのか？アレが鉄血の元社員だと言うのは」

ティス「間違いない、名前は知らんがアイツの記憶にあったのは間違いなく鉄血で見た顔だ」

ティスがリホーマーの拘束を解いたのはリホーマー自信が覚えていない記憶を見たからだ

45「どうするの？ここで破壊する？」

ティス「変わりなくとりあえず放置だ」

PKP「しかしお前の話を聞くにアイツはサイボーグか？」

ティス「いや、肉を完全に捨ててるから人形ではある、精神も電脳に置き換えてな」

PKP「良くやるな…失敗を考えなかったのか？」

45「考えてないのか考える余裕がなかったのか、どちらにせよ完璧とは言えなくても成功はした、こんなところでしょ」

PKP「結果は人間だった記憶が奥にしまわれたか、ところでアイ

ツはエリザの初期AIを持ってるんだろ？そんなのに無理矢理接続して良く無事だったな」

テイス「ブレインがいたのと別のを使ってたからな、それに俺らはアレより上があるんだ」

45 「確かに、それじゃ普通にやるのね？」

テイス「普通にやるさ、見ちまった以上殺すのはめんどい」

言ってテイスはブラックホークに入り寝る

PKPと45はそれを見て軽く笑い外に出た

明日は朝から荷降ろしだ

翌朝

テイスが持ってきたMREをアレンジして料理を作っていたが通常のMREより遥かに美味しく好評を得ていた

ミッション24 (コラボ回)

翌朝

荷台のブラックホーク内で目覚めたティスはそのまま外に出る

外はまだ日が昇ってはおらず誰も起きては居なかった

ティスはボディの様子がおかしい事に気付くが理由は解っている

確実にリホーマーと無理矢理接続したからだろう

それを無視し外に出たティスは別のトラックからMREを取り出し人数分の飯を作る

作り終わる頃には全員が起きて日が昇り始めた

アレンジしたMREは好評だった

食後少しして荷卸を始める

1部は手で降ろせるがブラックホーク等デカイのはフォークリフトを使う

何故あるのかは知らんが荷卸が楽になるので気にしない事にする

タチャンカに人形修復機器関係をどこに置くか聞きその場所に置いて行く

ヘリは適当に邪魔にならなそうな場所に置きプロペラを取り付けて行く

それが終わるとエンジンを始動させ軽く飛びチェックをする

ティス「…この身体でも飛ばせるもんだな…とりあえず問題は無い」

チェックを終え着陸すると何故かBLACKWATCH以外の面々から驚かれた

トンプソン「…お前ってなんでも出来るのか?」

M1014「フォークリフト運転出来てヘリまでも運転出来るとは思いませんでした…」

S13、45「貴女何者なのよ…」

ティス「化物を見た顔をすんなよ、こんくらい出来るは、戦車や戦闘機それに軍艦も出来るぞ、まあ限度はあるがな、てかBLACKW

ATC H舐めんな」

ええ……（困惑）、という顔だが知らん

ティスは驚いている面々を通り過ぎ仮設住宅を建てていく

S13、416「他のPCMは凄いわね……」

ティス「褒め言葉として受け取っておこう」

S13、416「……いえ、こんな子供でも……ティス「次それ言ったら解体（物理）すんぞ、俺はサイボーグで生身ならここに居る連中より長生きしてんだよ、後俺は男だ」……男……」

S13の面々がショックを受けているがティスがグロックのスライドを引いたことにより考えるのを辞める

仮設住宅が2棟ほど建った時にタチヤンカから呼ばれる

ティス「どうした？」

タチヤンカ「すまない……指揮官が倒れた……」

ティス「……は？」

タチヤンカ「だから指揮官が倒れたんだ」

ティス「理由は？」（俺らが着たストレスだろうが……）

タチヤンカ「恐らくだが無理が祟ったのだろう、前々から無茶をしているから……」

ティス「お、おう……」

ティスはブレインからある程度聞いてはいたので余り驚かない

ティス「……まあ軽く見ておくか」

タチヤンカ「？何か言ったか？」

ティス「いや、とりあえず見舞いにも行ってやるか」

ティスはタチヤンカから場所を聞いてリホームの所に向かう

見舞いはするが目的は別だ

少しふらつく身体にむち打ってリホームの所へ行く

着いて誰もいないことを確認するとティスはまたリホームに無理矢理接続する

……まるで懲りていない

可能な限りの情報やらを自信にコピーする

サイバールブレインは応答がない

本部で何かあったのか

リホーマーとの接続している間ボデイが悲鳴を上げる

そして2分で限界に達し接続を切る

ティス「…ハア…ハア…：…流石にサイボーグじゃあキツイな……」

リホーマーはうなざれている様だが知らん

ティスは先程よりもヤバイボデイを無理矢理動かし戻って行く

外からは爆発音が聞こえるが37が上下水道の為にバンガロール
を使って居るのだろう

それを聴きながらティスは平静を装ってから外に出る

まだやる事がある

とりあえず昼までに可能な限り仮設住宅を建てなければ

幸いにもマクベからはS13の復興を手伝って欲しい、と言われて
いる

戻るのは明日だな

尚、BLACKWATCHの面々には体調不良がすぐに気付かれた
が何も言われなかった

ミッション25

とある地区

荒野の様な道をG05基地の人形とBLACKWATCHのメンバーが乗ったトラックとジープが通る

トラックはリホーマーに言っただけで直させたがエンジンの寿命が4台も途中で動かなくなり

軽装甲車はタイヤが使えなくなり

もう1台のジープは潰されて完全に使えなくなった

ティスはこれらを適当に乗り捨てて残りのトラックとジープの1台ずつでG05基地まで戻っているところだ

そんな中BLACKWATCHのメンバーはある者を見ていた

言わずもがなそれはティスだった

というのも2日目の時点で明らかにおかしかったティスだが今なんて見てられない程だ

ティスはトラックの荷台の横の扉を開けてそこに座っているのだがトラックの揺れ以上にティスは揺れている

その上S13基地を出てから6時間近くたっているのにタバコを1度も吸っていない

そもそも今日になってから吸ってない

45『(…どうする?)』

流石に見かねた45がどうするかBLACKWATCHメンバーに体内無線で聞く

PKP『何かあり次第すぐに動ける様にするしかないだろうな、AEKはバイク出せるようにしておけ』

AEK『いつでも行けるけど…こればかりは使わないに越したことはないよね』

45『そりゃあね、ここからだとな蛇屋敷が近いからそっちに向かつてよね』

AEK『あいよ』

AEKが端末に経路を入れている間もBLACKWATCHの

面々は誰一人テイスから目を離さない

トラックの前を走るジープに乗っているアリスと37も

そして普段やる気のないG11ですら戦闘中並に集中している

そんな中、リホーマーの頭脳に侵されたテイスは

テイス「:Я、поддельный:пустой:кукла
:nigrum pluviam:Machen Sie:Tue
z l'ennemi:????」

意味がある様 नाहीような事を片言で呟いていた

PKP 『(ロシア語やらラテン語やら:末期だな)』

AEK 『(ちよつと待って、最後の何語なの?)』

45 『(アラビア語でしょ:多分)』

PKP 『(それでリーリエには連絡したのか?)』

45 『(アリスに頼んだわ)』

PKP 『(なら大丈夫か、何かあったらAEKが運んで他はグリフィンに一旦戻ってから蛇屋敷に向かう、邪魔者はすぐに片すぞ)』

アリス『(妥当だね、もちろんだけどリミッター全て外すからね、それとリーリエからでブリッツを向かわせるって)』

PKP 『(勝手にしろ、ブリッツには護衛してもらうか)』

そしてそれから15分たった時テイスはトラックが大きく揺れると共に荷台から落ちた

石か何かを踏んだタイミングだったので見ていたメンバーは一瞬だけ反応が遅れた

PKP 『トラックを止めろ!』

テイスが落ちたと同時にPKPは無線に叫ぶ

45はPKPが叫ぶよりも少し早く走るトラックから外に出る

それと同時にAEKはバイクに跨りエンジンを吹かす

無線が聞こえた瞬間にアリスはジープを飛び降り416とG11、そして9A91は荷台の後方のドアを蹴り破りバイクの道を作る

45 「ハウンド!」

飛び降りた45はテイスの容態を確認する

意識は分からないがかなり呼吸は荒く恐らくヤバイ状態だとは分

かるが分かるのはそれだけでもしかしたら深刻なのかもしれない

だが怪我はない

結構な速度だったトラックから落ちてほぼ無傷なのは流石と言うべきか：

振り返るとバイクに乗ったA E Kがロープを持って荷台から飛び出てきた

A E K「ハウンドを私に固定しな！荒い運転だが文句は言わせないよ！」

A E Kとほぼ同タイミングで来たアリスと共にテイスをA E Kにロープで固定する

アリス「：ヨシ、行ケエ!!」

A E K「飛ばすぜえ！」

言うやいなやA E Kは法定速度ぶつちぎりの速度で荒野を爆音と土煙を上げながら突っ切っていく

アリスと45はそれを見送りトラックに戻る

P K P「私らが運転するから変われ！」

P K Pは運転していたトンプソンを退かし運転席に座る

アリスもジープの運転席に座りアクセル全開でジープを走らせる
そして1秒遅れてP K Pもトラックをアクセル全開で走らせる

法定速度もクソもない

邪魔者は誰であろうと即座に殲滅する

B L A C K W A T C Hのメンバーは各自が外せる最大のリミッターを外し狂犬の様な眼で周囲を警戒する

その状況を理解出来ないG O 5基地のメンバーはこの状況にただ黙るしかなかった

下手に喋れば殺されかねない

フェンリル隊とブラックドック隊：いや

ティンダロス隊とバスカヴィル隊は待つ

グリフィンに着くのを、そして敵が来るのを

ミッション26

A E Kは今日ほどバイクの性能に感謝したことはない

というのも輸送隊と別れてテイスを運んでいるがバイクの最大速度で走っている

タコメーターはレッドゾーンをぶつちぎっているが今の所問題ない

日々仲間達と改装している自身のバイクに感謝しつつ飛ばす

チラツとミラー越しにテイスを見るがA E Kよりも小さいテイスの表情は見えず代わりに力無くゆらゆらと揺れている手が見える

目線を戻すとちょうど廃都市に入った

だが廃都市の道は戦闘があつたのかかなり悪くA E Kは速度を落とす

A E K「…チツ、こんな時に…」

A E Kのバイクはスポーツタイプで悪路走破性は低く基本オンロードメインのバイクだ

一応タイヤはある程度なら問題ないがサスペンションは変えてないので悪路走行時にはかなり振動が来る

A E K「こんな事ならオフロードかアドベンチャーも買っておくべきだった…」

A E K自身、カツコイイという理由で買ったがこんな時に仇となるとは…

A E Kは頭を振り走りに集中する

A E K「っ!?!: fuck!!」

少し冷静になったから気が付けた

毒づきながらA E Kはバイクを飛び降りる

その瞬間、バイクにレーザーが当たり爆散する

バイクの小さな破片がA E Kに突き刺さるがそれを無視しビルの影に隠れる

A E K「夢見なクソガキがア！」

撃ってきたのは間違いなくドリーマーだ

おおよその位置は分かったが射程範囲外
しかしA E Kは止まってはいられない
すぐに路地に入り先へと進む
多少遠回りになるが相手にしている暇はない

10分程路地裏を進んでいるが最初の狙撃以降何もアクションが
ない

ドリーマーが簡単に諦めるとは思っていない

A E Kは路地裏から建物内に入る

昨日から何故か繋がらないサイバーブレインの愚痴を零しつつラ
ビリンスにアクセスしルートを決める

都市の外までの最短ルートをたたき出し路地に出た瞬間後方から
右足を熱いナニカが貫き転倒する

見つかった

転倒したA E Kはすぐに左足で地面を蹴り影に隠れる

A E K「ツツ?!……クツソ」

だが隠れた時に別の方向から更に撃たれる

今度は脇腹をカスただけだから位置が悪ければティスに当たっ
ていた

A E K「……ダミーか、アの性悪女ガア……!」

状況が状況なだけに冷静になれないA E K

このままではドリーマーの思うツボだと分かっているでも怒りを抑
えられない遮蔽物にしているビルを攻撃し崩す

何とか避けたA E Kだがそこをタイミングよく狙われレーザーが
右腕を貫く

A E K「………フウ」

怒りを通り越して冷静になったA E Kは静かに息を吐く
そして確信した

ドリーマー「……つまんないわよ……もっと慌てなさいよ」

どこからともなくドリーマーが50近いダイナゲートを引き連れ
て現れた

だがA E Kが冷静な事に苛立っている

A E Kはそれを無視する

ドリーマー「……慌てろってんでしょ！わざわざ1人になるのを待ってジャマーまで設置したのに何余裕ぶって………ナニ笑ってんの……」

A E Kがニヤリと嫌な笑みを浮かべたのをドリーマーは見逃さなかった

A E K「なーに、もう地位も何も無くなって来てるんでしょ？だから起死回生を狙って弱ったハウンドをわざわざ狙ったんでしょ？もう従ってくれるのダイナゲートしかいないの？」

ニヤニヤしながらドリーマーを逆撫でするA E Kにドリーマーはキレた

ドリーマーが自身の銃を向けようとした瞬間、A E Kは左手を横に振る、まるで剣を振るう様に

その行動にドリーマーは一瞬だけ動きを止めた

ガシヤ

足元からの音にドリーマーが頭を下げると自身の銃が真つ二つになっっていた

ドリーマー「……は??」

まるで意味が分からない

A E Kとの距離は3 m程

手を降ったくらいで届くはずがない

顔を上げた時ドリーマーの視界は暗転した

暗転する直前に見えたのは黒い大鎌の様なものを持ったA E Kだった

ミッション27

鉄血の基地の1つでエージェントは映像を見ていた

映像は唯一ドリーマーが動かす事の出来る監視用のダイナゲートの一体のカメラ映像だ

ドリーマーには本当なら謹慎処分若しくは辺境への異動を出す所なのだがエルダーブレインの慈悲により免れたのだが命令無視をしてよりもよってBLACKWATCHへ強襲を仕掛けるという最早廃棄処分も視野に入れる事を仕出かしたのだ

BLACKWATCHへの表立っての戦闘を禁止にしたのはエルダーブレインだ

モニターにはAEKが実体の無い正体不明の大鎌で届かない場所にいるドリーマーのダミーの首をどうやってか切り落としたところが流れている

エージェント「……………」

彼女はこれが何なのかは大凡想像出来ていた

エージェント「……ホント、デタラメですね…BLACKWATCHのリミッターは…」

???「それがBLACKWATCHというものだ、本部の者達は殆どが化け物、ならば人形も然り、だ」

独り言を返されるとは思っていなかったエージェントが驚きながら振り返ると暗がりにはエリザがいた

エージェント「エルダーブレイン様!どうしてここへ?」

エリザ「彼女がチャンスが欲しい、と言ってね、何をやるのか見に来たのだが…」

暗がりにいるエリザの表情は見えないが恐らく呆れている

エリザ「しかもよりにもよって彼に手を出すとは…コレを私が喜ぶとも思ったのか?」

エージェントは背中を冷や汗が流れるのがわかった

エリザは確実に怒っている

エージェント「……ドリーマーをどうしますか?」

エリザ「ドリーマーの他のボディは全て破壊、中身はダイナゲートにでも入れておいて、」

エージェント「??:呼び戻さないのですか?」

エリザの対応に少し疑問を持ち聞いてみる

エリザ「近くにブリッツがいたので放っておいても戻って来る」

エージェント「わかりました、ボディの方はアルケミストにやってもらいます」

エリザ「頼むよ」

エリザが出て行くのを見送り1人考える

蝶事件後人類抹殺の為に何度かハイエンドモデルで会議をしたが毎回エリザはBLACKWATCHへの表立っての戦闘行為禁止を言っていた

表立っての、と言うのは相当数いる下の人形への徹底が出来ないためだが

理由は誰も知らないがドリーマーを除く全てのハイエンドモデルはそれを守っていた

エージェント「:まだ理由は教えては下さらないのですね」

エージェントはいなくなったエリザへ問いながらアルケミストに連絡を取った

??? 音声通話記録

記録再生

? 『?:私です:はい、今回の件は:?:やはりドリーマーの命令無視ですか:?:いえ、此方も問題がありました:?:ええ、そうです:?:はい、まさか本体の方に影響が出るとは:?:ええ、リホーマーの中を見た影響かと:?:今は安定しています:?:はい:?:恐らくバレています:泳がされているのか、それとも:?:どちらにせよ可能性は高いです:?:あの人に殺されるのであれば本望です:?:ええ、それは貴女もでしょ?:?:失礼しました:?:それ

に關しては私からはなんとも……私からすればその感情があるかす
ら……：……わかりました……：……そうですね、私は裏切りません、秘密は誰
もが持つています……：……貴女とも利害の一致だけです……：……其方につくこと
は有り得ません……：……はい、それでは……：……貴女も、いつか直にお会いし
ましょう』

再生終了

ミッション28

A E K 「……さてと……」

A E K がゆっくり立ち上がる

足が痛むがそれを無視し見渡す

周囲を群がっているダイナゲートはドリーマーのダミーとA E Kを交互に見ている

A E K 「…ふくん…なるほどねエ」

実体の無い大鎌を振りながら1人納得するA E K

A E K がダイナゲートを見るとダイナゲートは一目散に逃げ出した

A E K 「ダイナゲートじゃこんなもんかア…」

溜息をつきつつ大通りに出ると空が鳴り始めた

A E K 「…遅せエよ」

A E K は誰に言うでもなく1人ボヤいた

その頃ドリーマーは焦っていた

最後のチャンスであるこの襲撃でティスの首で名誉挽回をしようとしていたがこのタイミングでA E K がリミッター10を解放出来るようになり、それにより能力を持つてしまった

B L A C K W A T C H の人形が付けているリミッターの意味は分からないがリミッター10を解放すると何らかの能力を発動してしまいう事だけは分かる

ドリーマーはA E K を見る

どんな能力かは分からないが実体の無い大鎌に当たらない筈の攻撃が当たる

ドリーマーはA E K を見ながら考える

ドリーマー（落ち着け！弱点はある筈！その弱点さえ分かれば…！）

A E Kに意識を集中していたドリーマーは気付かなかった
自身のダミーが全滅している事に

そして後ろにソレが居ることに

ソレはゆつくりとドリーマーへ近付いていく

すぐ後ろにまで来てドリーマーは気付いたが既に遅く振り返ると
同時に三本の爪で掴まれる

ドリーマー「っ?!雷帝!？」

ドリーマーを拘束したのは《雷帝》ブリッツと呼ばれるリヴァイア
サンと同じBLACKWATCHにいるELIDの上位種だ

カブト虫の様な角に三本の爪と虫の様なELIDだが二本足で
立っている

掴まれ拘束されたドリーマーは解こうとするがビクともしない

ブリッツはドリーマーのライフルを奪い捨てる

そしてブリッツの身体にバチバチ、と電気が走る

ドリーマー「クソがあー!!？」

ドリーマーが叫ぶと同時に雷がドリーマーに直撃しドリーマーは
破壊された

ブリッツはドリーマーの残骸を投げ捨て

ブリッツ「グオオオオオオ!!!」

咆哮を上げた

A E K「ブリッツ！暇なら私ら運べ!!」

ブリッツが下を見るとテイスを背負ったA E Kがいた

下に降り2人を抱えるとバチツと音と共にブリッツ達は消えその
場には小さな雷が残ったがすぐに消えた

その頃

輸送隊はアリスとPKPの暴走運転によりグリフィン本部に到着
した

そして着くと同時にBLACKWATCHメンバーは出迎えてい

たヘリアンを無視しヘリポートへ向かう

ヘリポートに着くと一機オスプレイが止まっていた

しかもBLACKWATERのだ

誰か来ているらしいがティンダロス隊とバスカヴィル隊はハイジャックよろしくオスプレイに乗り込みパイロットに銃を突き付ける

PKP「今すぐに蛇屋敷に飛べ、最速でな、じやなきや殺す」

パイロットは状況を理解するよりも早くエンジンを始動しオスプレイを飛ばした

パイロット達はこれは賢明な判断と思ったが会議の為に来ていた幹部達をどうするかまでは頭に無かった

トラチヨ「おや？我々のヘリは？もしや帰りは歩きですか？」

アツチ「ええ……（困惑）ワシら虐められておるのか？」

その後暴走気味の人形達を送ったオスプレイが戻ってきたのは2

時間後だった

ミッション29

蛇屋敷に着いたティンダロス隊とバスカヴィル隊はオスプレイが着陸体制に入ると同時にオスプレイから飛び降りる

1秒たりとも無駄に出来ない彼女達は着地し屋敷へと走り出そうとした瞬間、彼女達の身体は固まった様に動かなくなった

「コッツ?!」

動かそうとするが動くのは目と口だけで他は縛り付けられたかのように動かない

A E K 「……一応怪我人だから無理させないでくれる?」

近くの木陰からA E Kが顔を出す

負傷したのか所々に包帯が巻かれている

45 「……なんのつもり」

A E K 「今行ったら邪魔になるだけだしね、それに精密作業だから下手するとハウンドの状態が悪化するよ?」

P K P 「……ハウンドの状態は?」

A E K 「今はなんともだけど脳の方は大丈夫みたい」

アリス 「コレハA E Kノ能力?」

A E K 「そうだよ、影操作みたいだけど詳しくはまだ分からない、今やってるのは影縛り」

P K P 「役にたちそうだな」

A E K 「まあ、夜は余り使えないかもだけど影さえあれば多分行けるよ」

416 「とりあえず離してくれる?」

A E K 「冷静になったらねえ」

結局A E Kが能力を解いたのは1時間後だった

その1時間何とか動こうと抵抗していたメンバーとA E Kは解いたと同時に倒れ抵抗しなかったメンバーに介抱される事となった

A E K 「ゼエ…ゼエ…だから…疲れるって…言ったじゃん……」

P K P 「……ゼエ…強すぎだ……」

再生機

■■■■は黒く塗り潰されたカセットテープを再生機にセットし再生する

《……………これをお前達が聞いているのなら俺らはここにはいないんだな》

再生機から男とも女とも言えない声流れる

話し方的には男のようだ

《俺らがどうなったのかは知らないし興味もない、だがもしかしたらお前らは居ない理由を良く知っているのかもな》

愉快そうな声流れるが4人の誰一人反応しない

《さて、知っているだろうがお前らはアイツらのドツベルゲンガーだ、アイツらを生かす為だけにお前らは造られた、知つての通りアイツらの過去は非常に胸糞悪いモノがありそれが理由で各所から追われていた、だがお前らが同様に裏で動いたおかげでアイツらは堂々と生き残れた》

それを聞いて4人の表情が変わる

《報酬…とは言わないがあるモノを残しておいた、鏡の後ろだ》

それを聞いて鏡の近くにいた1人が鏡を殴り割る

中には隠し収納的なのがありそこにはそれぞれの名前が書かれたケースがあつた

《中にあるのは記録、そしてある種の特権、それを使えば事実上お前らが本物になり特権を使えば今よりも自由に行動が出来る、最もバカをやらなければ、だがな》

それぞれにケースが行き渡り開けるとハードディスクの様な記録媒体とカードが入っている、恐らくカードが特権なのだろう

《記録は…アイツが出来るだろう、特権での一応の上司はアイツだが実質的な上司は……まあ言わなくてもソレを見ればわかるか、それがあればグリフィンに縛られる必要はない、それにアイツらならお前らを悪い様には使わない筈だ》

4人は話し合う

内容は分からないが納得はしていないようだ

《それと下の方にキャリーケースがある、中にはそれなりの金と俺らが使ってたいくつかのセーフハウスの地図とセキュリティ関係のモノが入ってる、使いたければ勝手に使ってくれ、いくつかはお前らでも腰を据えられる筈だ》

その言葉に4人は止まる

《金は最低でも5年は遊べる程度には入ってる、ついでに口座やら何やらを人数分用意しておいた、それ等をどう使うかはお前らしだしだ、そして最後に言っておく

お前らはドツペルゲンガーと言ったがそれでもお前らは一個人だ、例え影でも意思が違えばそれは個だ、誰かの影でもお前らは誰かの道具ではなく自分の意思で戦い行動して来た、これからもお前らは自分達の意思で行動しろ》

カチツと言う音が聞こえ再生が終わると■■■はテープをひっくり返しました再生をおす

今度は音声が流れなかったが変わりに壁にあつたデジタル時計がカウントダウンを始める

時間は30分

それを見た4人は荷物を持ち唯一の出口に向かった

30分後

カウントがゼロになると同時にそこを中心に500m程の黒いナニかが発生した

それは10秒程で消えるとぽっかりと穴が出来ており地下は完全に無くなっていた

ミッション30

数時間後

リーリヤに叩き起されフェンリルとブラックドックの両チームは地下の訓練所に連れてこられた

リーリヤ「やるのはハウンドのテストです、今回のボディはメインに加えてもう1つのボディもテストします」

45 「もう1つのボディ？」

リーリヤ「ええ、ハウンドにはエリザのAIに耐えられる程のモノがなかったのでボディを二つに分けてそれぞれの役割を、という感じですよ」

PKP「……つまりハウンドは1つの脳で2つの身体を動かすと？耐えられるのか？」

リーリヤ「動作チェックでは問題なく行けました」

416 「テストだけなら私達要らないでしょ？他に何させる気？」

416 が話を変え本題を聞こうとするとリーリヤは答える

リーリヤ「反逆小隊の改修をしたのでそっちも一緒にやろうと思いまして相手をお願いします」

45 「反逆つて言ったらAK12とAN94の2人よね？何したの？」

リーリヤ「それとAR15もです」

416 「……………生きてたのね……」

リーリヤの言葉に微妙な空気になりながら訓練所に入る

大体100×100程度の広さのこの訓練所はリーリヤがBLACKWATCHと協力関係になった時にリーリヤが要求したものだ
人形等のテスト等に使われるこの訓練所は地下深くにある
蛇屋敷の場所も含めてよほどのことがない限り見つかる事はない

45 「まだ来てないの？」

リーリヤ「向こうのシャッターの中にいます」

リーリヤは言うとりモコンを取り出しボタンを押しシャッターを開く

勢いよく開いたシャッターの奥には反逆小隊……ではなくRAYが2機いた

「「「「「「……………」」」」」」」

全員が固まっているとRAYの目が光り2機とも起動する

リーリヤ「……………間違えました」

そう言うも持っているリモコンのスイッチを押しシャッターを閉めた

「「「「「「……………」」」」」」」

シャッターが閉まると大きな音と元にシャッターからRAYの足が突き出てきた

PKP「……………随分と大きく改装したんだな……」

リーリヤ「本気で言ってます?」

PKP「まさか、1機はビーストのだったしな、なんでここにあるんだ?」

リーリヤ「実験的な改修をしたんですよ、小型化した反物質炉とかレーザー核融合炉とかメーサー砲とか」

言ってる間もRAYはシャッターを突き破ろうとタックルをしているのかシャッターが大きく揺れている

2機のRAYは無人機と有人機だが両方とも高度なAIが入っているので指示がなくても動ける

なんだったら対話も出来る

PKP「動力の小型化は出来ていたのか……」

リーリヤ「試作ですが性能は問題ありません、現状の問題はあの2機をどうするかです」

リーリヤが言い終わると同時にシャッターが爆発し吹き飛ば

そして中から2機のRAYが出て来た

45「停止装置は?」

リーリヤ「あると思いますか?因みにビースト機体を停めれば何とかかなりですがビーストの機体の武装は口内に2連装ハイパーメーサー、両腕先端に連射可能の小型レールガン、両腕付け根に2連装の30ミリバルカル両足の付け根には2連装の125ミリ砲」

416「……付け過ぎよ」

リーリヤ「まだありますよ？右手はアースブレード搭載の超高周波ブレード、左手は多目的多連装榴弾、両膝に対艦ミサイル、背中に対空、対地ミサイルとクラスター爆弾がありますがやります？因みに装甲は弱いとは言っても戦車砲程度なら無傷で防げます、それと逆コーラップス技術も投入しているので全ての弾や砲弾、ミサイルは実質無限ですし装甲も自動修復します」

45「……やり過ぎ」

リーリヤ「ビーストからの注文でしたので、まだありましたが流石に無茶でしたので付けてませんが」

PKP「……まだあったのか……」

リーリヤ「後は高性能魚雷とか超長距離用のレールガンとかアブソリュートゼロとかがありました、まあビーストの機体は実験機も含めていますし」

最早呆れるしかない面々はそっ閉じされて怒っているであろう2機のRAYをどうにかする方法を考える

アウトターミツション アウトターミツション1

ブラックウオッチが地下鉄を見つけてから3時間後
特戦隊及びラヴェジヤーが地下鉄に入った

『無線チエック』

『9A91、感度良好です』

『グリズリーマグナム、感度良好だよ』

『ドラグノフ、感度良好だ』

『ベクター、感度良好』

『KSG、感度良好です』

『百式、感度良好です、ロボ、応答を』

『ロボだ、感度良好、ラヴェジヤー10機確認』

『特戦隊、及びラヴェジヤーのセンサー確認、今回の任務は地下鉄内の探索です』

『そんな簡単な任務他に回せなかったの？』

ベクターが聞く

『内容は簡単ですが地下鉄内部の状況が全く把握出来ていません、鉄血ならまだしもELIDが居る可能性があります、それに放射線等の確認もあり人間の隊員は向かわせられません』

『久しぶりの任務だし頼ってくれただけでもいいわよ』

ドラグノフが返す

『しかしラヴェジヤーを、しかも10機も出してくれるとは』

KSGが驚く

『先程も言った通り状況が全く掴めません、ラヴェジヤーの3機はマッピングや内部状況の把握に装備を変更してあります』

『マッピングという事は地下鉄の地図は無いのですか？』

9A91が聞く

『データは戦時中のEMPで吹っ飛んでおり紙媒体は恐らく焼けて消失したでしょう、今も探してはいますが無い可能性の方が高いで

す、恐らく駅に行けば可能性は高いのですが…』

『了解です、通信終了』

百式が無線を切り周りを見る

「聞いた通りです、敵は人間に人形もしかしたらELIIDの可能性もあります、全ての戦闘行為は許可されていますが可能な限り隠密で行きます、爆発物は使用禁止です」

「殺傷は？」

グリズリーが確認する

「全て許可されています、邪魔であるなら全て殺してください生かす理由はありません、もちろん隠密ですが」

「了解」

「では装備変更したラヴェジヤー2機とショットガン、アサルトライフルのラヴェジヤー4機は先行して下さい」

狼に似た四足歩行のロボットが6機先行する

少し間を空けて百式とKSGがその後ろをグリズリーと装備変更したラヴェジヤーがそこから更に間を空けてベクターとドラグノフそして残りのラヴェジヤーが着いてくる

ラヴェジヤー統括のロボは状況に応じて場所を変える

「そういえば反対側は調べなくていいのかしら？」

「反対側はここを見つけた隊員達が既に調べています、あちらは終点だったのでホームが完全に崩れていたそうです」

「なるほどね、それじゃ少なくとも発見口から終点までは安全なのね」

ベクターの疑問に百式が答える

「ロボ、先行はどうですか」

「今の所何も無い、駅も非常口さえも」

狼型の戦術人形、ロボが答える

「駅は兎も角非常口位はあるのでは？」

「経費ケチってつけなかったのだろう、結果はコレだけだな」

ドラグノフが周囲を見渡す

すぐ横に脱線した列車があり列車のドアは全て開いている

線路上には大量の元乗客、全員が苦しんだ表情を浮かべて居るが中

には服がボロボロのモノや血塗れたモノも居る

「相当切羽詰まったのか、それとも民度の低さか？」

「そこまでよドラグノフ」

笑いながら経緯を考えるドラグノフだがグリズリーに止められる

ドラグノフは特に反応せず周囲を警戒する

「この先に酸素濃度が高い所がある、生体反応もある」

ロボの言葉に隊は止まる

「確認出来ますか？」

「……恐らくここの住人だ」

「生きていたの？」

「ああ、共食いで生き延びた様だ、今も食っている、どうする？」

「目標までは？」

「300だ、障害が無くなってから250、数は36」

「分かりました、全員準備して下さい」

百式の言葉に全員が改造された銃を確認する

「ラヴェジジャーにまかせられないの？」

「ラヴェジジャーは予想外の対象に対してのみ攻撃を許可されていま

す、それ以外は我々だけで対処する様にです」

「面倒ね、それにしてもこの暗闇で良くもまあ生きていけるわね」

百式の言葉に溜息をつきつつベクターは銃を確認する

ベクターの言う通り地下鉄内部は完全な暗闇で暗視ゴーグルと専

用ライトで人形達は普通に見えるが無ければ1ミリも見えない

そんな中K S Gが複雑な表情をしている

百式は気付いたが何も言わない

少し進むと嫌な音が聞こえ始める

何かを貪る音

何かを啜る音

それを聴きつつ進むとソレはいた

一心不乱に人間を貪るここの住人

1つの死体に群がる5匹の亡者

他は貪る亡者の方を向いているが動く気配は無い

「…完全に人型のナニか、ね」

「ああなったらもう手遅れだね」

全員は銃を構える、そして

「撃て」

百式の無慈悲な声と共に殺戮が始まった

アウターミッション2

百式の言葉に全員が銃を撃ち地下鉄内部に銃声が響く

いくらサプレッサーを付けているとはいえ地下のトンネルでは余り意味をなさない様だ

最初に撃たれたのは死肉を貪る亡者達

反応する間も無く蜂の巣にされる

銃声を聞いて様々な場所から飛び出して来る亡者

発砲主に理由は分からないが近付こうとするも弾丸の雨に為す術なく倒れていく

少し離れて狙撃をしていたドラグノフは逃げて行く亡者が居る事に気づきその後頭部に7.62mm弾を叩き込む

百式、ベクター、9A91フルオート組は指切りでバースト射撃をし確実に殺していく

グリズリーは近づくモノ、殺し損ねたモノを優先して殺していくそんな中KSGは躊躇しているのか撃つ感覚が誰よりも長い

ポンプアクションショットガンだからと言えばそれまでだが明らかに遅かった

百式と後方のドラグノフはそれに気付くが何も言わない亡者達は1分足らずで全て倒れる、しかし生きているのも少なからずいた

百式はソレに近づきサブマシンガンに付けられた銃剣で躊躇い無くトドメをさす

9A91もナタを取り出しそれに参加する

ベクターとグリズリーは銃を構えながらソレを強く蹴って確認する

KSGはそれを複雑な表情でみていた

この部隊に入ったばかりのKSGだがさつきやった事、今やっている事の意味は分かっている

いや、分かっているつもりだったのかも知れない

そう思った時何かに脚を掴まれた

それは撃ち損じた亡者だった、そして亡者は泣いていた
「ッ?!」

ショットガンを亡者に向けたKSGだったがそれを見て撃つのを躊躇った

亡者はKSGに何かを訴えているが呻き声だけで何を言っているか分からない

「躊躇っては駄目です」

KSGがショットガンを降ろそうとした時その声が聞こえ次の瞬間には亡者の頭は肉片と化していた

声の方向に向くと9A91がTP82を持って立っていた

その銃口からは紫煙が立ち込めていた

「貴女の思っている事は分かりませんが、さすが躊躇うのではなく殺して下さい、でなくては次に死ぬのは仲間です、でなくともコレらはもう普通の生活を送れません」

そう言い9A91は戻って行く

それと入れ替わるように後ろからドラグノフが近づいて来た

「この後来るのは味方だ、今は敵意が無かったとしても味方が来た時はどうなっているかは分からない、我々は必要悪だ、ブラックウオツチに我々という必要悪があるから味方が生きて行けるんだ」

そう言うドラグノフはKSGの背中を押し前に進む

KSGはまだ悩んでいるがドラグノフに押されているので進むしかない

「今どれくらいですか?」

「大体1kmだ、日本なら駅に着く頃だが反対側の距離を入れれば1km圏内に駅がある筈だ」

「日本なら1km以内に次の駅がありますしね」

「駅ではどうするの?」

「駅の状況次第ですがとりあえず着いたら一旦休憩します」

「早くない?」

「先は長いので」

進みながら会話するが周囲を警戒してるい

但し一応のレベルだが

と言うのも前進を再開してから酸素濃度が一気に下がったのだ
現在は生物の住める濃度ではなく一呼吸で気絶する程低い

『こちらHQ、シャドー、応答を』

無線が入る、シャドーは特戦隊のコールサイン

『こちらシャドー0、どうしました』

『先程、ハウンドより通信が入りリホームーとの戦闘場所を衛星で確認した所、地下鉄がある事が判明しました、位置はラヴェジャーに送信しましたので後程確認して下さい』

『了解です、そちらには誰が?』

『ブラックドッグです、あちらの制御はハウンドに投げました』

『お疲れ様です』

ブラックドッグ、ティスがどこからか連れて来た戦術人形達の部隊
ヘルハウンド同様の問題部隊プラス絶滅主義者である

『我々は?』

『そのまま進んで下さい、ブラックドッグの目的は周辺の調査です、地下には入らない……はずです』

『確信持って言ってください……』

『無理です(キツパリ)、距離はかなり離れていますしブラックドッグのポイント到着は1時間後ですので問題ないかと……ですが気を付けて下さい、彼等レールガンや個人携行型の40mm砲を持ち出したので』

言い終わると無線は切れて百式は頭を抱えた

とりあえず駅に着いても休む暇は無くなった

アウターミッション3

頭を抱えた百式だが無線が来たので落ち着き無線をとる

『こちら百式、どうしました?』

HQからと思つたが

『こちらブラックドッグだ』

頭を抱えた原因からだった

『……なんです』

『嫌そうな声を出すな、お前に良い話がある』

『なんですか…』

『お前らの地点から3km行つた所に1度地上に出る所がある、そこでこちらが地下には潜る、代わりにお前らが向こうに向かえ』

正直、悪い話では無い

入って日の浅いKSGのメンタルが気になるので良い話ではあるが…

『レールガンやらを持ち出した貴女達が地下を調査すると?』

『そうだ、あんな鉄屑調べるより面白い、それに新型のテストに丁度いい』

『ちよつと待つててください!アレの実戦テストですか?!』

『ハウンドに頼まれてな、リホームとやらが生きているなら丁度いいテストになるだろ』

『地下鉄はこちらで再利用するんですよ!?!』

『少しなら問題ないだろ』

『少しで済めば……本部からです、貴女も聞いておいて下さい』

『今情報が入りました、正規軍から試作反物質炉が盗まれたそうです、盗んだのはリホーム、これにより任務変更です、特戦隊は直ちにリホームの残骸に向かいこれの搜索及び回収して下さい、ボスの指令により全ての兵器使用権限があります、地下鉄探索はブラックドッグと交代してください、尚、試作反物質炉回収は最重要事項です』

『聞いた通りだ、こつちが乗ってきたハインドを使え、こちらはもうすぐだ、着いたらそのまま』

地下鉄に進行する、それとラヴェンジャーを先行させておけ」

『了解です、直ぐに地上に向かいます』

『お願いします、ブラックドッグももし地下鉄内にリホーマーを確認したら試作反物質炉を壊さないように戦闘し回収して下さい』

『ヤツに言ってくれ』

ブラックドッグの無線が切れる

『既にACC-130、ハリヤー、アパッチ、コブラを2機つつ向かわせました、特戦隊も急いで下さい、161abに動きがあるかも知れません』

無線が切れると同時に百式は指示を出す

「ラヴェンジャーは先行し地上に出る所でブラックドッグと合流して下さい、先行しているのはそのまま先行して下さい、そこまでの地図はこちらに送信して下さい」

「わかった」

ロボが返事をするのと全てのラヴェンジャーは駆け出し暗闇に消えていった

「我々も走りますよ！理由は走りながらです！」

百式の言葉に訳も分からず走り出す特戦隊であった

所変わって上空のハインド

「しかし反物質炉何て何に使うんですかね？」

イングラムはブラックドッグのメンバーに聞く

イングラムは自分から志願してブラックドッグに入った変わり者だがそう思っているのは周りだけ

「地下でデカいのを造ってるらしいからそのだろ」

ブラックドッグ隊長のPKPが答える

「どうだろうねえくもしかしたら本部のエネルギー問題に使うのかもだね」

ケラケラとAEKがヘッドホンをずらし答える

ブラックウオッチは大战で無人の街を丸々パクった

つまり街全体がブラックウオッチの土地なのだ

そのためエネルギー問題が深刻だった

「確か反物質はあるんですけどよね」

「あるね、確かレールガンの実験中に偶然出来たって話だけど」

「どうでもいい、サイバーブレインからなにか来ているか？」

「リホーマーの情報と161abが何か企んでる事だけです」

「新作情報はないから、そろそろ着くけど行けるかい？キラ」

A E Kの言葉にイングラムとPKPがその人物を見る

黒いブレザーに黒いパーカーを来たBLACKWATCHE製の鉄
血人形に

アウターミッション4

目標ポイントに到着し先に着いていたロボ達と合流後軽くブリーフィングを行なう

「内部の状況は」

「亡者共の群れが少なからずいた」

「サイバーブレインから新たに入った情報だとELEDが居るみたいですが、それと16の人形が地下鉄に入ったとの情報も」

「例のEAか？」

「それとは別のようです、目的は反物質炉の回収です」

「入ったって事はリホーマーは生きてるみたいだね、サイバーブレインに情報を止めさせといて」

「言っておきました、反物質炉はどうでもいいですがリホーマーはこちらで潰したいので」

イングラムが笑いながら答えAEKもニヤリと笑う

「キラー、ある意味初の実戦だ、身体は問題ないな？」

「ああ、寧ろ快調過ぎるくらいだ、足が別物なのが気になるが…」

キラーの足は太腿の真ん中辺りまで金属で覆われていた

一年前にある幹部にフルボッコにされた時に切り落とさてたのだ

「それは貴女自身の責任です、まさかよりにもよってビーストとインセクトに喧嘩を売るとは…良く生きてましたね」

「俺も起きた事に生まれて1番ビックリしたな…」

「ブラックウオッチで喧嘩を売ってはいけないランキングの2トップの2人だしね」

AEKはケラケラ笑いながら言うがキラーからすればトラウマも
のだ

「改造マイクロガンが無いが大丈夫なのか？」

「お前らがレールガンと40mmを持ち出したからだろ、これも使えるから問題ない」

「ならそれを実戦で証明してみせろ、行くぞ」

「りよ〜かい」

PKPの声にAEKが気の抜けた声で返事をするると一斉に地下鉄内に入っていた

所変わってブラックウオッチが見つけた地下鉄入口及び内部には多数の部隊が集結していた

死体処理と内部の状況確認だ

死体処理は地下鉄内部の死体が完全に死んでいる事を確認し地下鉄に居れたバケツトに積み外に運び出す

その後近くに掘った穴に投げ入れ燃やす

内部の確認は線路や地下鉄の壁等の調査だ

線路は曲がっていたりしたらその部分を取り替えるだけで良いが壁等の補習は時間がかかる

「地上の連中に穴を増やすか深くするか言ってくれ、死体が多過ぎる」
「了解です」

「終点はまだ酸素が薄いから人形達にやらせろ！」

「電車で隠されてるがこつちに非常口があるぞ！」

「第2先遣隊はどの地点だ」

「現在駅まで残り2kmと言ったところです」

「重機が到着したぞ！暇人共は電車運びすんぞ！」

「二ういゝ(、・ω・)ノ」

「人数足んねえよ！もつと連れてこい！主に脳筋連中！」

「おい！電車に挟まってるがELIDが生きてんぞ！武器持ってこい！」
「！」

「俺がやる！……クタバレやア！」↑ツルハシ装備

「ツルハシなんかで殺せるかよ！コイツで殺す！」↑スコップ装備

「誰か火炎放射器持ってこい！後このバカ共を終点に逝かせろ！」

「警備！ELIDを早く始末してくれ！」

「今向かって……アイツらツルハシとスコップで本当に殺しやがった！」

「クツソ！非常口の階段にELIDがウヨウヨ居んぞ！」

「俺が殺る！」↑スコップ or ツルハシ装備の2人

「そんなんで殺れるか！この非常口は爆破しておけ！」

「重機降ろすぞー」

「待て！俺を潰す気か!？」

「皆さくん、差し入れです」

「作業中断！」

「」「」「了解!!」「」「」

いろいろとカオスだった

アウターミッション5（コラボ回）

ブラックドッグは駅に着くとサイバーストレインからの情報を見る
為ホームに登った

情報はリホーマーに関するものと発見された駅の場所だ

「駅の場所は良いとしてリホーマーの情報は使えるな」

「駅はどこが見つけたのでしょうか？」

「まあ予想は着くけどねえ、しかし独自に生産ライン確保出来るのは
良いねえ」

『……了解、それじゃその方向で』ハウンドからよ、可能ならリホー
マーを確保、無理なら破壊して良いとの事よ」

「……………」

そんな中ロボは何かに気付き線路を見た

「どつたの？」

「先行していたラヴェジャーが何かに破壊、いや、轢かれた」

「轢かれた？」

「ああ、ELIDに見つかり戦闘していたのだが突如現れた何かに轢
かれた、相当のスピードだ」

「……………リホーマーか！」

PKPの言葉に動こうとした時それは来た

一瞬だったが先頭車両に乗った人影も見えた

「キラー！レールガンチャージ！AEKは40mm！」

すぐさま行動する

キラーは線路に降りると同時にレールガンを撃つ

音速の数十倍で発射された弾頭は既に500m以上離れていた電
車の最後尾の車両に向けて飛んで行くがまともに狙わなかったので
かすり地面に着弾する

最後尾の車両は着弾の衝撃で跳ね上がり脱線しスピードが落ちる

うちに怨みでもあんのかく、と声が聞こえた気がしたがブラック
ドッグは無視する

スピードが落ちた武装電車に向けて今度はAEKが40mm砲を

撃つ

レールガンに比べれば弾速は遅いが今度は当たった

脱線していた最後尾は40mm砲の着弾に装甲はもったが車両は横転した

横転した事により更にスピードがおちた上に横転した車両が壁などに当たって余計に遅くなる

「追うぞー！」

「そんな急がなくても大丈夫よ、この先には脱線した電車がわんさかあるんだから、それに第2先遣隊やらがもう地下に入っているわ」
「逃げられたら面倒ですよ…」

リホーマーは焦っていた

ブラックウオッチに遭遇した上に攻撃され車両が横転した

「あかんあかんあかんあかん！」

リホーマーは横転した車両を切り離そうと電車の上を移動する

元は普通の電車のため切り離しは手動だ

「こんな事ならもつと時間かけて造るんやったあ…!!？」

もう少しと言う所で電車は外に出た

トンネルを抜けた事により横転した車両は先程よりも暴れる

そして更に速度が落ちる

「ちよっ!?アカンヤツヤー！」

切り離そうした時地下に入り横転した車両が入口に当たり連結部分が悪れた

「オツシヤアアアー!!!」

勢いがあつたらしく外れた車両は入口を塞ぐようにして止まった

「速度は落ちてもうたがこれなら…?…?…何や?」

先頭からの音に振り返ると前方に横転した電車があつた

そしてその上には装甲を着た兵士達がおりLMGをこちらに撃ってきた

「一難去つてまた一難ンン！なんでこんなにブラックウオッチがおんねん!？」

リホームマーはブレーキをかけるも間に合わず電車に激突した
リホームマーは投げ出され壁に激突するが運良く無事だった

「……うちの運も馬鹿に出来んな」

電車を見るが先頭車両が電車に突っ込んだ為動かす事は出来ない
反物質炉のある第2車両は弾かれたのか横転した車両の上にあっ
た

リホームマーは第3車両に向かう

扉を開けると子供達がふらつきながらも物陰から出て来た
適当に突っ込んだ椅子とかがクッションになったようだ

「急いでずらかるで！地下はヤバい奴で溢れかえつとる！」

リホームマーは言いながら使えそうな物を持って出る

そのまま第4車両に行く

車両は損傷はしていないが内部は衝撃でめちゃくちゃだった

その中から使えるP・A・S・Cを着込んで子供達も中に入る

食料や使える物を適当なボックスに詰め込んで持つ

反物質炉を持って行こうか考えたが止めておく

今の所ブラックウォッチは見えないが車両の向こうから大勢の
声がする

だが運はリホームマーに味方した

近くに非常口を見つけたのだ

「ほんとうちって悪運強いな」

非常口の近くには今にも崩れそうな車両がある

直ぐに非常口に入り階段を駆け上がる

少し登った所で後ろから何かが落ちる音がし振り返ると非常口が
塞がれていた

「ヨッシャアアー！早く逃げるで！」

そのまま進み外に出る

場所は分からないが近くにトラックをみつける

軍用ではなく民間用なので追われれば逃げられないが問題はない
だろう

リホームマーは荷台にボックスとP・A・S・Cをいれ運転席に入

る

「うごいてよお…」

祈りながらキーを回すと3回目でエンジンがかかった

「もう地下は懲り懲りや……」

リホームマーはトラックを運転しながらボヤク

今度こそ快適な旅をする為に

「……逃げられたか」

ブラックドッグはリホームマーの電車に着いたが誰も居なかった

入口を塞いだ車両を乗り越えて地下に入ったが遅かったようだ

ブラックドッグの到着とほぼ同時に第2先遣隊等と合流したが無駄となった

だが完全に無駄となった訳では無かった

試作の反物質炉は手に入り他にもリホームマーの良い意味での置き

土産があった

リホームマーの使つてた車両も使えるらしい

「とりあえず主要任務は達成ですね」

「リホームマーに逃げられたけどね」

『反物質炉の回収ありがとうございます』

『特戦隊はむだだったねえ』

『それでも無いです、破壊したりリホームマーの要塞ですがまだ使えるのが結構あり回収部隊を送りました』

『それは良かったな、リホームマーはどうする』

『現状追跡手段がありませんのでしばらくは放置されますが確認され次第回収若しくは破壊任務が出ます』

『わかりました、それじゃあ、我々は地下鉄探索に戻ります』

『了解です、必要な物があればそちらの部隊に言ってください、大抵の物は用意出来るはずです』

「イングラム、任せた」

イングラムに補給を任せたPKPは適当な瓦礫に腰を下ろす
そしてあるものをみつけた

それはムカデだった

ムカデは頭を上げ蛇のようになってPKPを見つめていた

「……監視はしておけ、何かあればビーストかハウンドから連絡がいく、それまで待ってろ」

PKPがそう言うのとムカデは首を下ろし瓦礫の中に消えていった

「やっぱり情報は彼女達か？」

「だろうな」

PKPは煙管を取り出し皿に煙草の葉をつめマッチで火をつける

近づいて来たAEKに返事をしつつ煙管を吸う

煙を吐き出すとそこに蜂が来た

蜂は吐き出された煙を突っ切って奥に飛んで行った

PKPはそれを見ながら煙管を吸い煙を吐き出した

アウターミッション6

補給をすませ地下鉄探索を再開したブラックドッグはリホームと遭遇した駅まで戻っていた

駅でラヴェジヤーの破壊された場所の確認中サイバーブレインから無線が入った

『ハウンド、ブラックドッグ、聞こえますか』

『聞こえる』

『ハウンド良好』

『先程、本部に試作反物質炉が届きました、既に研究開発班が解析に入っています、まだ途中ですが量産及び小型化も視野に入れ解析しているとの事です』

『それはいいが一体何に使うか位は教えてくなくてもバチは当たらないと思うが?』

『お前らはうちのエネルギー不足の原因を知ってるか?』

『発電所が少ないからじゃないのか?』

『いんや、発電所自体はあるが発電量が少ないんだ、原子力発電もあるがそっちは研究所を優先にしているし』

『発電量?』

『本来なら敷地内で使いまくってもお釣りが来る程度には発電量はあるんだが大型のレールガンやメーサー砲が思いのほか電気を食っているんだ』

『大型レールガンは知っていたがメーサー砲は初耳だ』

『一応基地防衛の最終兵器だしな、知っているのは幹部組と研究所メンバーだけだ、そこでそれ等のエネルギーの個別化等で使われるって訳だ、試作反物質炉の小型、量産されればメーサー砲の小型化も期待出来るぞ、メーサー砲の理論は分かっているしな』

『その内メーサー砲が個人携行出来るのか』

『流石にそれはキツイが車両や航空機に搭載は考えてる、その内4割の戦車を改修してメーサータンクにする予定だ』

『怪獣とでも戦うのか私達は』

『いれば楽しそうだが…俺らの敵は多いぞ？最終的には世界とも戦うの事を想定して軍備拡大しているしな、最も本当に戦うかは別だがな』

『…なるほどな、それで量産はどれくらいかかるんだ？』

『研究所曰く1年以内に小型、量産出来る様にするとの事です』

『アイツらなら半年でやり遂げそう…』

『確かにな、残りを更なる小型化や生産に費やしてな』

『そういや、試作反物質炉ってどれ位の大きさなん？』

『リホーマーが手を加えたのかも知れませんがこちらに運ばれて来たのは大体電車1両程です、ブラックドッグの攻撃や衝突等で使えない可能性もあったのですが普通に使えたとの事です』

『意外と耐久性があるのかりホーマーが付け加えたのかは知らんがそれはいいか』

『そっちは任せる、それでこっちに何か新しい情報は？』

『それについて一つだけ、先程万能者と蛮族戦士が地下から出て来るのが衛星で確認されました、その後2人は別れています』

『何やってんだ？』

『それはわかりませんが天井ぶち抜いて出て来ました、もしかしたら何かいるのではと数分前にビーストとインセクトが向かいました、そろそろ着きます』

『おいハウンド、あの暇人共を止めろ』

『無理、止めたら勲章ものだ』

『あ、着きました』

『場所はまだ先か？』

『結構先です』

『アイツらが満足して出て行ったらこちらも探索を再開する』

『頑張れ〜』

『黙れ』

無線は切られた

敗北した我々が移動しようとした時それは起きた

先程逃げられ塞がった穴が崩れた

幸いにも瓦礫が当たる事は無かったが開いた穴からソレは入って来た

ソレは先程逃げた獲物より大きく我々に近い姿のソレは入って来ると同胞達を喰い始めた

我々はソレに攻撃をしようとするが穴から砂のようなものが降って来た

ソレがかかった同胞達はいきなり悶え苦しみそしてバラバラなつて死んだ

何が起こったのか考えるよりも早く更に穴から入って来た

ソレは逃げた獲物より小さかった

その内の1匹が死んだ同胞を喰い始めた

攻撃しようにも最初に入ってきた奴が暴れていて何も出来ない

集団で襲おうにも砂のようなものソレが体につき喰われる

そんな中気づいた

最初に入ってきた奴がアレに似ていると

あれは我々よりも小さかったが牙に毒を持ち同胞を苦しめた奴だ

だが気づいた所で状況は変わらない

我々は逃げる事にした

同胞達が一目散に逃げる

だが地面からアレと同じ奴が出て来た、アレよりかは小さいが

飛んで逃げようとしたら穴から小さく飛んでいる奴が入って来て

飛んでいる同胞達の羽を破く

落ちた所をアレに喰われる

我々は同胞達を見捨てる覚悟でヤツらから逃げた

我々は頂点では無かった、我々が頂点だと思っていたのはただの高台だったのだ

我々はこのでは頂点かもしれないが外には我々よりも強いのがいた

我々は群れという事、速いという事を利用して逃げ出す事に成功した

た

だが逃げれたのは群れの1割にも満たなかったが他の同胞達が少ないが卵を運び出した

しかし喜んでいる暇は無い、すぐに移動する、ヤツらが来ない場所に……

数分後、そこはゴキブリ型のELIDの残骸が転がっていた

その1つに腰掛け葉巻を吸う人物とELIDの残骸を喰らう人物がいた

黒のスーツに黒のロングコート、赤の長いマフラー、そして顔には四つ目の黒い狐面を被ったビースト

残骸を喰らうのは同じ様な格好だがマフラーは白く被っている面は四つ目の白い狐面のインセクト

BLACK WATCHの最高幹部にして実質BLACK WATCHトップ

PKPの言う所の暇人共、ここに来た理由はまさに暇だったから

「結局はこんだけか、退屈しのぎにもならないな」

「……ん、確かにね、ちよつと期待したのに残念だよ」

ビーストの呟きにインセクトは食べるのを辞めて答える

「コーラップスの味がするから被爆したんだろうけど」

「……あれって味すんのか？お前らは解るか？」

「我等にはわかりませんが味の違いはありますね、どれがそうなのかわかりませんが」

暗闇から答えが返って来る

天井の穴から月明かりが入って来るが殆ど意味が無い

「まあどうでもいいか、インセクト、喰い終わったら行くぞ」

ビーストはまだ生きているゴキブリを持って奥に消えていった

アウターミッション7

暗闇の中ビーストとゴキブリを喰い終わったらインセクトが地下鉄を歩く

だが死骸だけで生きているのは何もいない

「流石にアイツらが通った後だと何もいないな」

ビーストが葉巻を投げ捨て言う

正確に言うと言っているのはいるのだがハエなどの死肉に群がっている虫だけだ

『……それで、何が目的だ』

無線からはPKP呆れたような諦めているような声が聞こえる

『そりゃあ万能者の目撃が合ったしな』

『本音は？』

『俺らにも遊ばせろ』

『だろうな』

『ですが仮にも最高幹部が護衛も無しに勝手に出るのには頂けませんね』

『仮言うな、五月蠅かったから付けてるぞ』

『珍しいね、邪魔だからいらなくなって言ってたのに』

『テストも兼ねてな、ジャックザリッパ切り裂きジャックを連れて来た』

『……うわあ』

『言いたい事あるならちゃんと見えや』

『相手に同情する』

『呼んだ？』

『呼んでねえ』

上を向くと天井に少女がしゃがみ込んでいる

この少女がジャックザリッパ

「調子はどうだ？」

「大丈夫だよ、早く解体したい！」

「その相手が居ないんだがな」

「ちえー、早く来ないかなあ〜♪」

『鼻歌でも歌いそうだな』

『歌ってるよ、そういえば、16labがやつとこっちのハッキングに気付いたらしいぞ』

『今更？遅くない？』

『気付いた事を褒めてやれ、サイバーブレインに量子コンピューターのコラボだ、本来なら気付く方がおかしい』

『ですが鉄血は早い段階で気付いて居ましたよね？』

『サイバーブレインも元は鉄血のAIだからだろ』

『なるほどな……何だ今は……』

地下鉄内に唸り声の様なのが響く

これを聞いたビーストは一応警戒する

ジャックは何が出るのかワクワクしている

そんな中、インセクトは暇だったのか死骸をイジったり死骸に群がったハエを食べている

唸り声を聞いても一瞬止まるがすぐに死骸イジりを再開する

唸り声はどんどん大きくなっていきそしてドンツ、と壁が爆ぜた

そして崩れた壁から巨大な何かが出て来た

ゴオオオオオ!!!

恐竜の様な咆哮を上げ出てきたのは恐竜と見間違える程巨大化したワニだった

『なんだ？ゴ○ラでも出てきたのか？』

『ゴ○ラじゃ地下鉄には入れねえよ、見た感じワニだな』

『ホワイトアリゲーターか』

『下水じゃ無いから違うな、似たようなものか』

ワニはビースト達を見つけると咆哮を上げながら地下鉄内に入ってきた

全長15mはありそうだ

『デケエなあ、インセクトのメシでも1週間は持ちそう』

『半月は持つよ？』

『嘘つけ、下手すりゃ3日で食い切るだろ』

『解体して良い？』

「そうだな、殺つちまえ、皮は売れたら売るからあまり傷付けんなよ」
「はくい……それじゃあ解体するよ！」
ジャックが巨大ワニに向かっていった

アウターミツシヨン8

「つまんなかった」

「15超えるワニバラして何言ってやがる」

ジャックは15m超のワニを30秒程で殺し3分ちよつとで解体した

四肢は切り落とされてる上にバラバラにされ、頭も落とされ顎を上
下で裂かれ、腹は開かれ内臓が全て外に出されている

そしてその内臓をインセクトが食べている

「食い過ぎだ」

「まだ半分もいってないよ……あ、胃の中にELIIDが合った」

「この内臓くさいから嫌い」

「そりゃ、こんな腐った下水に住んでりゃ臭くもなるだろ」

ビーストがワニの出て来た穴を除くと同時にこの世とは思えない
酷い臭いがした

多分様々な腐臭を黄金比率で混ぜ合わせたらこの臭いになるだろ
う

フレアを焚き下水に投げ込むと水路が燃えた

どうやら下水に流れ込んだ油やら何やらが水路を満たし外部から
遮断された事で流れる事も薄まることも無く残っていたのだろう

『サイバー、下水を見つけたぞ、水路が燃えているが調べさせておけ』

『何故燃えているのかはともかく了解です』

「先進むぞ」

しかし朝まで進み続けたが特に何も無くりホーマーの要塞墜落現
場まで着きビースト達は溜息を吐きながら帰投した

ブラックドックも同様だった様で適当に切り上げ帰投した

ビーストとインセクトは本部に着くと中に作られたカフェバーに
向かう

ジャックは部屋に戻っていった

喫煙者オンリーと書かれた看板を横目に中に入る

中は仕事前のタバコを楽しむ隊員がそこそこ居る

隊員からの挨拶を軽く流しつつ注文し席につく

『後程社長がグリフィンに地下鉄の封鎖等を連絡します、警備はこちらで出しますが各駅を基地にするので問題ありません』

『161abを警戒しとけ、連中適当な理由付けて中に入ろうとするからな』

『問題ありません、止めるネタは幾つもありますので』

『なるほどな、工事は急がせるのと持って来たゴキブリとワニ皮も調べさせておけ、後死骸は燃やさずにリヴァイアサンに渡してやれ』

『了解です』

無線を切ってインセクトを見ると注文したピザを丸めてホットドッグみたく食べていた

「おま!? 1人で食ってんじゃねえ!」

しかし既に遅くピザを平らげた

「f?ck、ピザ三枚追加で」

ビーストは準備できた水タバコを吸いインセクトに煙を吐きかける

煙をもらに浴びたインセクトがむせ抗議する

「流石にエッシェンシャルは酷くない?!」

インセクトはエッシェンシャルオイルの匂いが嫌いなので怒っては居るがピザを1人で食べたので強くは言えない

インセクトはピザを持って来た店員に水タバコフレーバーの交換を言う

「正に虫除けだな」クッククックツ

「笑い事じゃ無いんだけど」

少し怒っているインセクトだが注文したピザを食べ怒りをピザ事飲み込む

そんなインセクトを後目にビーストはウオツカを飲む

本部内では平和に過ごせる……訳もなく、1人の少女が店に入ってくる

至福のひとつときを過ごしていた隊員達は少女を見るや慌てて立ち上がって少女に敬礼する

少女の名はブラン・エストワール、BLACKWATCHの社長だ
しかし会社としての立場はブランの方が上だが実際はビーストや
インセクトの方が上だ

ブランが社長をやっている理由は初期メンバーの中で一番頭が良いから、という色々とおかしかったりする

「ガキが来る所じゃねえぞ、ほら、プリンやるから早く出なさい」

ビーストの言葉に店に居た人物の三割が笑いを堪え一割が堪えきれずに笑い残り六割が冷汗を流す

「今笑ってる奴は四割減給な、堪えてる奴は三割だ」

「ちよっ!? 酷いですよ!」

「おーぼーだ!」

「わがままボデイー!」

「なら減給かあたしにボコられたいか選べ、後わがままボデイーって
言った奴は殺す」

「二「ビーストが言いました」三」

「俺が言った」(ドンツ)

「よーし、ぶっ殺す!!」

BLACKWATCHは今日も平和です

同時刻

グリフィン本部

「……分かった、各基地に通達しておく……ああ、それでは」

電話を切るとヘリアンが聞いてくる

「BLACKWATCHですか?」

「ああ、対戦前の地下鉄で大量のELIDを見つけたので地下鉄をBLACKWATCHが封鎖するとの事だ、各駅に隊員を送るようだ」
「よろしいのですか?」

「良くは無いが未知のELIIDも確認されている、BLACKWAT
CHはELIIDに対抗出来るだけの力がある、それにこちらは万能者
等の問題が山積みだ、面倒事を引き受けてくれるのなら願ったり叶っ
たりだ、だが無視は出来ない」

「それではどうしますか」

「少し様子を見て何かあれば404かEA小隊を出す」

「分かりました、161abに伝えておきます」

ヘリアンが部屋を出る

クルーガーはパソコンを弄りある画像を出す

「貴様は何をするつもりだ？」

画像にはビーストとインセクトが映っていた

アウターミッション9

「ん？」

ある物を取りにBLACKWATCH本部に戻っていたラグーンは物の入ったキャリアケースを引いて腹ごしらえにカフェバーに向かっていた所不意にキャリアケースが重くなった

振り返るとキャリアケースに四つ目の狐面を被り裾がボロボロの巫女服を着た少女が座っていた

少女の名前はシキ、殆どの事が分からない少女

シキはなにも喋らないがラグーンは見なかったことにしてカフェバーに向かった

ラグーンはカフェバーに来て後悔した

カフェバーが見えてきた時扉を突き破って隊員が投げ飛ばされて出て来た

中を見るとビースト、インセクト、隊員を踏んずけている社長が居たくアリガトウゴザイマス!!

他には床に後何人が倒れているが

ラグーンは中に入り

「……マフィンのセットとホットドッグ、飲み物はコーヒーで」

とりあえず注文した

キャリアケースを見るとシキは移動しビーストの隣に座りテーブルにあつたピザを食べる

ブランは座っているビーストと取っ組み合いをしている

シキに気付いているのかは分からない

『二人とも落ち着いてください』

店内のスピーカーからサイバーブレインが話してくる

二人は無視しているのか相変わらずた

『……そのままが良いです、開発部より先程ゼノモーフシリーズが計500体生産完了したとの事です、自動量産の方は各シリーズの若干の違いによりまだですが』

「量産はバトルとウオーリアーシリーズにしろ、クイーンとプレトリアン、プレデリアンはどうなってる」

『クイーンは三体、プレトリアンは12、プレデリアンが25です、プレデリアンは内5体が人型に改造し専用装備を持たせています、会話も可能です、現在は訓練中です』

「装備は？」

『全員に持たせているのがコンピュータガントレット、シヨルダープラズマキャノン×2、リストブレイドにヘルメット、コンビステイツクにレイザーディスク、ダガーナイフです』

『後は個人の考えで持っている装備がガントレットプラズマボルト、シミターブレイドにネットランチャー、スラッシュシューウイップで2人にメデイコンプを持たせました、スキャッターガンは何故か不評でした』

「何で？」

『せめて食~~々~~終わってから話して下さい、恐らく遅いチャージ時間でしよう、ハンドガンより少し大きいサイズで威力は変わりませんが次弾発射までの時間がかかる上に連射した場合更にかかりますから』

「ふくん」モキユモキユ

『それとラグリーン、ハウンド達に無線が繋がらないのですが理由は知ってますか？』

まさか自分に来るとは思っていなかったラグリーンは盛大に咽る

インセクトはそれを見て笑いマスターがタオルを持って来る

「…確か広域ジャマーを破壊するって言ってましたからそのせいでは？そのうち繋がりますよ」

『了解、ビースト、スキャッターガンとゼノモーフシリーズの写真を贈りたい所が有るのですが贈っても良いですか？』

「何処だ？」

『リホーマーの所です、反物質炉のお礼です、まあスキャッターガンを解析出来るかは不明ですが、とりあえずお歳暮的な物で』

「やっちまえ、お歳暮なら菓子とか食材とかも入れてやれ」

『了解です、無人機に持って行かせます』

その後

外からの音に気付いたG36が扉を開けるとパラシュートの付いたコンテナがありその上に金属のカラスが手紙を持っていた

手紙には

4割の善意と6割の悪意を持って贈ります

食料類に毒などは一切ありません

悪意は写真を参照してください

スキヤッターガンは使う人が居ないので上げます

p. s : ついでに無線機上げます(ニツコリ)

蠱毒の生き残り、サイバーブレインより

G36が顔を上げるとカラスは飛んで行った

アウターミッション10（コラボ回）

「奇妙な動き？」

地下鉄から戻って以降何もやる事なく暇な日々を過ごしていた
ビーストは百式の言葉を退屈そうに聞いていた

「はい、F05地区で鉄血の部隊が集結しつつあります、衛星画像では
ジュピターも確認されています」

「F05って確か廃工場団地だよな？奇襲には良い場所だが奇襲に
ジュピターはやり過ぎだろ」

「奇襲かどうかは分かりませんが、ハイエンドモデルが確認されてい
ます」

「ほつとけ、一応戦争しないって暗黙の了解があるんだ」

これは百式も知っている

これがあるから各地区はバカ連中が動けるのだ

B L A C K W A T C Hと鉄血が戦争をすれば両者の被害は甚大だ、
それにF地区は壊滅するだろうし隣接する地区にも飛火して大惨事
だろう

同じく部屋で寝っ転がっていたインセクトも乗り気では無さそう
だ

だが鉄血を野放しにしておけばそれこそ面倒事しか起きない
なので百式は

「確認されているハイエンドモデルですがドリーマーとアルケミスト
です」

ジョーカーを出す

アルケミストは問題無いがドリーマーは問題だ

過去に起きた大規模な抗争の原因の殆どがドリーマーによるもの
基本B L A C K W A T C Hの部隊が鉄血を見つけても攻撃され無
ければ見て見ぬ振りだ

ハイエンドモデルが入ればまず戦闘は起きない

だがドリーマーは別だ

ドリーマーは見て見ぬ振りをした部隊を後ろから撃つたのだ

これにより幹部がキレて戦争1歩手前までいったのだ
そのドリーマーの名前を出せば

「…サイバー、ゼノモーフの部隊を貸せ！ブラックドックは出撃準備
！HarryHarry！」

当然こうなる

『まだ実戦投入は速いと思いますが？』

「問題ねえよ」

そう言っつてビーストは部屋を出た

インセクトは行かないらしくソファで寝始めた

「サイバーブレイン、彼女に連絡を」

残された百式は戦争にならない様に手を打つのであった

1時間後

ブラックホーク内部にはビースト、PKP, AEK, 9A91, イ
ングラム・キラーそして異様な出で立ちのゼノモーフ部隊4名が居
た

「ゼノモーフは俺とこい、ブラックドックはジュピターやらの破壊で
可能ならジュピターを回収しろ」

「ジュピターの回収って…無茶言いますね…」

「安心しろ、話は通したから回収は楽な筈だ、回収したらイーグルが回
収チームを連れて来る手筈だ」

「わかった、お前はとうするんだ？」

PKPの言葉にビーストが殺気立つ

一瞬へりがブレる

「妄想芋砂のガラクタをちよつとな」

「……………了解、アルケミストはどうする？」

「着いた頃にいるか居ないかな、ほつといて良い」

「わかりました、終わったら気分転換に飲み会しましょう」

ハハハハハ!!」

ドリーマーは狂ったように笑い始めた

「こんなのに警戒していたの？ バツカみたい！ ハハハハ！」

ドリーマーは振り返る、そして吹き飛ばされた

「ガッ?!」

何があった、ドリーマーが起き上が…れなかった

「?!?...?!?」

動けない上に声も出せない

(何?! なんなのよ!!!?)

そして視界にそれが写った

黒い軍服に鉄の仮面を付けた者達

それはドリーマーを見下ろしていた

(何?! いくら...何見下ろして...!!?)

見下ろしていた連中の後ろにビーストが居た

先程自分が撃ちそして屋上から落ちた筈なのにビーストは先程と

変わらない姿でそこに居る

(なんで！ なんで生きてんのよ!!)」

「もう喋れんのか、少し弱いな…まあ良いか」

「何1人で納得してんのよ！ なんて生きて居るのか聞いてんのよ！」

「うるせえな…さつきより多く入れろ」

黒い軍服、ゼノモーフ隊の1人の背後から尻尾現れドリーマーを突き刺す

そして先程と同様に喋れなくなった

「?...?!?...?!?」

「てめえは暗黙のルールを無視し抗争を引き起こし自分は蚊帳の外でほくそ笑んでいた、舐めてんなよ、ガラクタ風情が」

ビーストが指示を出すとゼノモーフの1人がパイロードを担いで外壁を降りていく

ビーストはそれを確認すると端末を弄る

数秒で空中に画面が現れる、そこにはエージェントが映っていた
「?!?!?」

『ドリーマー、貴女の出した損害は最悪よ、まさかビーストに手を出すとは思わなかったわ、この件は最早見過ごせないわよ、それとアルケミストからの伝言よ、「やる事はやった後は勝手にしろ」よ』

「ウロボロスの方がこんなカスよりよっぽど役にたったしな、エルダーブレインがコイツを切らない意味がわからん」

『あの御方は優しいですから、ですのであの御方はBLACKWATCHとの抗争も望んでおりません』

「これでコイツはエルダーブレインに近づけなくなったな（笑）」

『近付けさせません、今後ドリーマーはこちらで監視します』

「ちゃんとやれよ？次は全面戦争だからな？こつちが核撃つても文句言うなよ」

ビーストは通信を切った

そしてゼノモーフが戻ってきたのを確認して

「表面の肉は喰っていいぞ、殺さない程度にな」

言うどゼノモーフ達は仮面を外しドリーマーに貪り着いた

それを見ながら通信を飛ばす

「そつちはどうだ？」

『既に終わってる、ジュピターは移動するとは思わなかったが、今さっきチームがジュピターを回収した私達も戻るがそつちはどうだ』

「今ゼノモーフが食事中だがすぐに終わるだろう、ヘリをこつちにまわせ」

『わかった、10分で着く』

通信を切りゼノモーフを見ると喰い終わったらしくそこには中身が剥き出しになったドリーマーが居た

ちゃんとまだ生きている

「10分で回収のヘリがくる、ドリーマーと武器は持って行くぞ」

その後迎えに来たヘリにドリーマーを乗せたらイングラムが吐いたが特に気にしなかった

一週間後

F地区の廃協会で逆十字架に括り付けられたドリーマーが発見された

ドリーマーはバラバラの状態で括り付けられており頭部は祭壇にナイフで固定されていた

また、ドリーマーは識別が不可能なほど焼かれていた
(頭部は焼かれていなかった)

アウターミッション11

「現状、クリサリスが6機、その内配備可能なのがレールガンを搭載した2機です、まだな機体の内2機がジューピターを搭載して試験中で残りが専用の防衛兵器の開発に手間取っています。設置後それぞれ4発づつ“アレ”を装備させて地下に格納予定です」

百式がビーストに説明する

現状まだ大規模に動けない

動けば国を、或いは世界を相手にする事になる

だがどちらにしろ今はまだその時では無い

「ピューパの方はどうなってる」

「現在80が配備済みです、残りはジューピターとメーサー砲の量産が完了し次第配備されます」

「反物質炉の小型を急がせろ、後あのクリサリス2機にレーダー、衛星対策にステルス迷彩を付けさせろ、あの2機はやられる訳にはいかねえからな、RAYの方はどうだ?」

「無人機、有人機両方に言えますが全力での稼働時間が30分と短いですが、しかし配備は可能です、全機サイボーグ技術によって各所性能向上しています、またそれに伴い武装も増やす事が可能です、開発チームの話ですと反物質炉の小型を搭載すればメーサーも使えるとの事です」

「有人機の操縦士はどうだ?」

「現状貴方含めても9人です」

「新型は?」

「DNAコンピュータでかなり手こずっています、装甲もまだです、計画ではDNAコンピュータで生物的な動きを出し量子コンピュータで各種機能を制御するというものなので現在の開発チーム人数ですと早くても数年掛かるといわれています」

「手が空き次第手伝わせる、最悪リホームマーを攫ってこい」

「ですがパッチワークアヴァロンの方が…」

「あつちは八割出来ている、アヴァロンのチームから何人か戻せ、まず

は炉の開発を急がせろ、あれがなければアヴァロンが棺桶になるし新型なんてただのオブジェクトだぞ」

「了解です、チームリーダーに連絡しておきます」

百式が部屋を出ると同時にサイバーブレインが部屋のスピーカーから話してきた

『リホーマーは今止めた方が良いです、今何かやれば最悪イギリスから攻撃を受けます』

「ちっ、しばらく放っておくか、アメリカからはどうなってる」

『エリア51から使えそうな物を幾つか発見したとの事です、回収チームを編成しています』

「他はどうだ」

『かなりホットなアフリカは今の所いい感じですが、ある程度使える闇武器を売り捌いているのでかなり順調ですね、現在約2トンのダイヤモンドが手に入りました、ついでに原油の採掘場も手に入りました、しばらくは安泰ですが少々気になる事が』

「なんだ？」

『劣化ウランが相当数出回っているのと、正体不明のヘリを見たときアフリカの客から情報がありました』

「劣化ウランは採掘場を奪取した連中が居るんだろうな、ヘリの方は探りを入れておけ、南米はどういう状況だ」

『ダメですね、未だにカルテルが幅を利かせてかなり不安です、麻薬自体は南米からは出ていません、各カルテルが独占しようと毎日戦争です、軍や警察は使い物になりません』

「アメリカの探索を急がせろ、カルテルがいつ北上して来てもおかしくないぞ、中東は」

『相も変わらず紛争、内乱のオンパレードです、正直まともなのはアジアとヨーロッパ位です』

「そこら辺の現状は？」

『比較的表は安定しています、裏はアレですが、アジアは台湾等の一部だけが戦前並に回復しています、南側は無傷の所が多いですが第三世界が少々不安定です、オーストラリアは回復していますが完全中立を

穿いています』

「ロシアは？」

『相変わらず真っ赤、つまりいつも通りです』

「流石ロシア、支部は大丈夫か？」

『問題ありませんが放棄は考えた方がいいです』

「異動は？」

『現状場所が…あるとすればアラスカですがまだ未探索が多いです』

はあ、とビーストはため息を吐く

問題ややる事が多すぎる

本来はビーストの仕事では無いのだがブランがビーストや他の幹部に無理矢理回して来たのだ

「…炉の小型化にメーサー砲、新型、クリサリス、パッチワークアヴァロン、支部の異動に各所の状況…：F u c k」

またため息を吐きタバコに火をつけ深く吸い

そして煙をゆっくり吐き出す

「…この煙見てえに消えないかねえ」

『現実を見てください、…：そういえば新人が入りましたよ、しかも3人も』

「現状どうでもいい…」

吐き出した煙はビーストの魂のように見えた

アウターミッション12

「……は？」

頭を抱えていたビーストだったがサイバーブレインからの報告に思考が止まる

「…すまん、もう1回言ってくれ」

『何度でも、リホーマーの所が求人していました』

「ええ……（困惑）」

『今はどうか分かりませんがこれはチャンスです』

リホーマーへの嫌がらせを日々探求するのが日課になったサイバーブレインの声は凄く楽しそうだった

「嫌がらせのチャンスか？」

『それもありませんが監視と情報収集のです』

「リホーマーの所に誰か送んのか？」

『はい、送るとしても開発に入らなければダメです、リホーマーの得意分野である開発に入れれば新たな武器兵器、装備等がこちらで開発出来ます』

「それはいいが誰送るんだ？ウチの研究開発チームを送れるほど暇じゃねえぞ」

『いえ、戦術人形を送ります、人間だとバレる可能性があるのです』

「粗方決まってんのか、誰だ？」

『MDRです』

「…確かに適任ではあるが」

MDR、2ヶ月ほど前に入ったARタイプの戦術人形

グレーゾーンに入らない程度の書き込みをしている微妙な問題児

「大丈夫か？」

『彼女の実力は知っていますでしょう、特に単独では人形の中では上位に入るほどです、それに彼女の使っている端末は自作した物です、しかも無駄に高性能、他にも武器の魔改造や通信端末の開発等もやっています、そして何より怖いもの知らずです』

「…アイツがボロ出さねえかを心配してんだよ」

『その辺は問題ないかと、取り敢えず少し時間を下さい』

「勝手にやってくれ」

通信が切れるとビーストはため息を吐く

「…BLACKWATCHは問題だらけだ」

引き出しを明け中からジャックダニエルを取り出しラッパ飲みするのであった

数日後

ビーストはBLACKWATCH内にある研究所にいた

MDRの調整が完了したので念の為に確認しに来たのだ

MDRの居る部屋に入るとMDRはベットの所で自撮りをして
いた

そしてそのまま書き込み

“ 改造完了、でも見た目の変化は無かったよ(・ω・)、ちよつと期待したのに…”

『BLACKWATCHだとバレたらダメですので、因みに潜入中は給料が上がります、そして情報にもよりますがものによってはかなりの手当が付きますので更に上がります』

「給料アップ!？」

『しかも潜入期間が長くなると更に上がります、半年バレなければ潜入手当てだけで20万アップです、そこにこちらに流した情報手当がプラスされます、因みに最初の潜入手当ては8万です』

「(*。D。)オオオ…」

『尚、場合によっては一切の手当てが消えたりするので気をつけてください』

「絶対情報送るからそれだけはっ?!」

「……ホント大丈夫か？」

最早不安しか無かった

数時間後

とある場所

M D R はリホーマーの会社 H & a m p R 社の面接に徒歩で向かっていた

『最終確認です、設定は前にいた P M C が B L A C K W A T C H に喧嘩を売り完膚なきまでに叩きのめされた際に命からがら逃げた、という殆ど実際にあった事と余り変わらない設定です、もし B L A C K W A T C H の情報を欲しがった場合はステルス機に爆撃されたので分からないとでも言っておいてください、面接の際は開発や魔改造を出ることをアピールして下さい』

「大丈夫大丈夫、嘘は得意だし、それに給料アップするんでしょ」

『まあ、貴女次第ですが、それと新たに開発等をする際はバレない程度にスペックダウンを忘れずに』

「それは大丈夫、でもこの組み込んだ装置大丈夫なの？」

M D R に組み込まれたのは M D R の五感情報と M D R の端末に入る写真などを常時サイバーストレインに送り続けるものだ

これにより様々な情報等をリアルタイムで B L A C K W A T C H に送れバレる危険性を最小限にするものだ

『大丈夫です、貴女が変な欲を出さない限りバレません、送られた情報は私が選別するので不要なものも誰にも見られません、そういえば武器は何を持っていますか？』

「メインの M D R にサブでベレッタ 9 3 R とソウドオフの上下二連ショットガン、アーミナイフ一本とスローイングアックス 2 本、武装以外だと改造した T 外骨格」

『……追いつ返された場合徒歩で戻って来てください』

「こっから 2 0 k m 以上あるんだけど?!」

『知りません』

因みに面接場所から 1 0 k m のところで念の為に降ろされた

「…確認だけど戦闘になった場合は？」

『リホーマーの敵対者であれば B L A C K W A T C H だとバレなければ制限はありません、バレてリホーマー等と戦闘になった場合は殺さ

ない様に注意してください、すぐに回収チームを送るのでそれまでは生き延びてください、因みにわざとミスしてバレた場合は潜入中の貴女の全ての行動をBLACKWATCH内で配信します、ですのでオ○○ーとかしてくれると助かるのですが、出来れば鏡の前で』

「しないから！エロ配信とかしないから！しかも盗撮物とか！」

『受容はあります、それはともかく通信は絶対にしないように、バレる危険性を出来る限り少なくしたいので、こちらからは緊急時を除いて一切通信しないので』

「……了解、ところであとどれ位でつくの？」

『今の速度だと大体1時間ほどです』

「……泣きたい」

面接場所に着いたのは1時間半後だった

アウターミッション13

MDRが面接を受けている頃BLACKWATCH内では社長のブランが頭を抱えていた

BLACKWATCH内での兵器やらの事をビーストに投げ付けBLACKWATCHの外からの面倒事、つまり仕事の依頼に関する事や社員の報告書等の確認をやっていた

ふと顔を上げると百式が来客用テーブルでブランの仕事の手伝いをしている

来る依頼内容を見て受けるなら部隊を選定しサイバードレインに伝える

受けない依頼は担当部署に言って断らせる

単純そうに見えるがかなり頭を使う

報告書は誤字脱字等もチェックしながら内容の確認

正直これらだけならそこまで問題では無い

1番の問題は始末書関係だ

内容は些細なことから結構ヤバいものまでピンキリだ

些細なものは作戦中に酒を呑み酔っ払って作戦中止になったり

ヤバいのは表に出せないレベルのものでかなりヤバい

戦前にこれをやらかしたら大戦1歩手前の国際問題レベルだ

そんなヤバいモノの中に報告書を見つける

先にヤバいかヤバくないかある程度分けられている書類の束だが

この報告書はヤバいモノに分けられている

報告書のヤバいモノという時点で嫌な予感しかしない

それを取って内容を見る

「……クソがつっもつとマシなの残しやがれっ!!」

いきなりキレたブランに百式がビクツと反応する

「なんでソ連の負の遺産が普通に残ってんだよ!」

内容は旧ソ連の秘密設計局を発見し、残っていた資料等から生物兵器や毒兵器の類を作っていたと判明した

施設は地上部は壊れているが地下はほぼ無傷で残っていたらしく

現状詳しくは調べられなかったが状況次第ではかなりヤバいらしい
「ホントウゼエなア!!!ブレイン!チーフとブラックドックを向かわせ
ろ!後バイオ連中といくつかの部隊もだ!」

地上部で発見された資料は全てこちらにあるが進捗状況やらは一
切分からない

『了解です、防護服と火炎放射器の準備で少し時間がかかります』

「出来る限り急がせろ!後、エージェントに繋げ!」

『少々お待ちを』

これが表に出れば最悪の事態が発生する

それより先に消滅させなくては

数時間後

「最近私ら出ずっぱりじゃない?酒作れないんだけど」

「グリズリーがやつてるだろ」

「そうなんだけどねえ、グリズリーってムーンシャインをメインで
作ってるんだよ」

A E KとP K Pが密造酒の話をしている

現在7機のブラックホークと護衛のアパッチ4機でソ連の秘密設
計局に向かっている

P K P達が乗っているブラックホークにブラックドックの3人だ
け、パイロットはいるが

キラーはブラックドックでは無いので居なくイングラムは別件で
来ていない

「私のを呑みますか?結構ありますよ?」

「……靴クリームやら燃料やらじゃ無ければ考えるよ」

「大丈夫ですよ、靴クリームは塗る物なので、液体はキュウリローショ
ンやポリッシュなので」

「せめてオーデコロンにしろ!」

「そういう問題じゃないよね……」

「あ、サマゴンもあります」

後にパイロットは語る

酒クズとは聞いていたがまさかムーンシャインとサマゴンがまともな酒って思える日が来るなんてな…

アウターミッション14

この日とある全体放送の後BLACKWATCH内の空気が若干ピリピリしていた

その理由は社長であるブランが幹部達が召集されたのだ

その為ピリピリしているのだがピリピリしているのはBLACKWATCH創設後に入った者達だけで創設メンバーの古参組はいつも通りだった

幹部達が入った会議室の前では数名の古参組が武装して立っていた

物々しい雰囲気ではなくいつも通りの若干ダラけた感じで

そんな会議室の中では

「このカップ麺旨くね？」ズルズル

「確かに、出来れば家系のこってりラーメンが良かったけど」ズルズル
「カップ麺で家系って出来るのか？」ズルズル

ビーストとインセクトがカップ麺を食べていた

この2人は小腹が空いたのでカップ麺を食べようとお湯を入れていた時に召集されたのでそのままカップ麺を持ってきたのだ

「他の連中遅くね？」

「今居るの誰だっけ？」

「チーフはブラックドックと一緒にア○ブ○ラの研究所に行った、ティスは相変わらず、残りの初期メンツは来るだろ」ズズズ

「ア○ブ○ラだっけ？ト○イ○ルじやなかったっけ？」ズゾオオオ

「ア○ブ○ラだ、みんな大好き地下研究所だし」ズズズ

「ふーん、そういえばなんで召集されたの？」ズゾオオオ

「麺すすりながら汁を呑むな喋るなむせるぞ、リホーマーの所と万能者のことらしい」ズルズル

「へ〜」ズゾオオオ!!

「勢い増すな」ズズズ

そんなこんなで食べ終わると同時に扉が開く

入って来たのは甲冑の上から白いマントの様な物着て紅い般若の

面を付けた少女、トラチヨが入って来る

両手に大きなポテチ3つと腰に二升は入る酒壺を2つ紐で括り付けて

「すいませーん、少し遅れました?」

「まだお前で3人目だ、来れるなら後4人」

「いや、武器の手入れをキリのいいところで終わらせようと思ってたのですが後少しだったのでなんなら終わらせちゃおうと」

「だからまだ来れる奴全員来てねえよ」

「ああそうでしたか、所で呑みます?」

「もちろん、だが4升で足りるか?」

ビーストとトラチヨはツートップの酒クズだ

それもブラックドックの酒クズ達が可愛く見える程の

因みにインセクトはそこまで呑まない

「会議なら足りですよ♪」

「それもそうか」

ビーストは酒壺を1つ貰いポテチをツマミに呑み始める

それと同時にブランが入って来た

「……てめえら、会議だってんだろがア!酒盛りしてえんなら出てけ!」

「呑み始めたばっかだ、問題ねえよ、まあ他の連中がいつ来るかによるがな」

「アイツらが来ると思ってたのか?」

「………だよな」

「酒クズ共が酔う前にやるぞ」

幹部会が始まった

「本題の前に兵器関連はどうなってる」

「まずは炉の小型化を優先させた、アヴァロンの方が結構出来るからそつちを少し減らして炉の方にまわしたから少しは早くなるはずだ、最もアイツらが遊ばなければの話だがな」

「ゴーストにメさせるから問題ねえな、本題だがリホームーと万能者についてだ、ブレイン」

『はい、まずはリホーマーの方ですがMDRから随時送られてくる情報ですとどうやら新たなボディに入ったようです、身体的なスペックまでは分かりませんがかなり高いハッキング能力を持っています、それと液体金属の様な物を自在に操る能力も持っています』

「ハッキングはどれくらいだ？」

『正規軍の人形が1分未満で堕ちました』

「どれ程か分らんがとりあえずハッキング対策を可能な限り強化しろ」

『了解』

「万能者の方はどうだ」

『正直少し混乱しています』

「は？」

『万能者の変装した姿があるのですがそれをリホーマーの所で確認したのですが衛星が外で活動する万能者を確認しました、それもほぼ同時に』

「面倒だな…二人いたのか…あるいは…」

「とりあえずMDRに変装した万能者を可能な限り監視する様に言えば？」

『それは出来ません、バレる可能性を考慮し一切の連絡を絶っています』

「現状なら尚更ですね、ならMDRが1人で外に出た時に接触出来ませんか？」

「ならカラスを使うか、何羽か飛ばしてリホーマーの会社周辺の監視とMDRへの通信として」

『あれは一応幹部専用のホットラインなのですが…』

「使ってる奴なんて殆ど居ねえだろ」

「確かに、殆ど近衛団の連絡手段と化してるし」

『……まあそちらに任せます、それでこの2人はどうしますか？』

「リホーマーは適当に商談話を掛ければ釣れそうだな…やるならダメーカンパニー使うか、とりあえず放置」

「万能者は戦闘にならない限り見つけても放置しろ、戦闘になった場

合はずぐに1番近い幹部の誰かを向かわせる、これを全員に伝えとけ」

『了解です』

「そういえば万能者は今の所どれだけ強いんですか？」

『なんとも言えませんがハイエンドモデルなら楽に倒せます、監視映像を見る限りでは進化している様にも見えます』

「リヴァイアサン見てえにか？」

『そこまでではないですが…現在対万能者の人形を作ってはいますが万能者の詳細な戦闘データが無いのでどこまで通じるか……そういうえぱリホーマーが面白いモノを作っていました』

「あの人型か？なんかプラズマ何たらかんたらを搭載してたな、どっかと契約してたからこっちは来ないだろうが、監視はしておけ」

『もちろんです、願わくばMDRのエロ配信も一緒に…』

「……AIの個性って素晴らしいよな」（目そらし）

「目逸らしながら言ってるじゃねえよ、どう考えてもぶっ壊れてんだろ」

『正常です』（ドンッ）

「変な効果音つけんな！」

会議は続く

アウターミッション15

幹部会が始まった頃

ブラックドック達は目的の秘密設計局から少し離れた場所防護服を着た人物がおりそこにブラックホークを着陸させた

PKPが外に出ると防護服を着た人物、BLACKWATCHの兵が近付いて来てくぐもった声で話す

「お疲れ様です」

「挨拶はいいから状況を教えろ」

「了解、念の為に防護服を着ていますが現状問題ありません」

「中はどうだ」

「詳細は解りませんがかなり広いです、まあウイルス兵器やらを作っているので当然ちや当然ですが、中も今のところはクリーンです」

周りを見るとヘリから降りて来た兵達がテントやら除染室を組み立てていた

その中に周りから設営を止められている軍服を着た女子がいる

それを見てPKPはため息をつく

「俺たちがやりますからPKPと案を練っていきましょう！」

「私が勝手にやってる事だ、後案なんて無い」

「設営は俺達の仕事ですから！」

「仕事が減って良いだろう」

「幹部連中はほんと突発的に俺らの仕事奪っていくよなあ!?頼むから話を聞け！いや、聞いて下さい!!」

「黙ってる、今いい所なんだ、早くペグを打て」

「テント張りのいい所って何だよ!？」

彼女の名前はチーフ、BLACKWATCHに初めて入った戦術人形で戦術人形初の幹部

「……止めないんですか?」

「BLACKWATCHの幹部連中は社員を困らせるのが仕事何だろ、気にするな」

「イヤイヤ、それは無いですよ」

「筆頭はビースト」

「あつ??:(察し)」

「分かって貰えて何よr…来たか」

兵がPKPの見ている方を見ると鉄血人形の1団が見える

数は50程

距離はだいたい2〜3km

「……大丈夫でしょうか…」

「そこは社長と来る連中次第だな」

「…ハイエンドが3人いますね、アルケミストにハンターとエクス
キューショナー……大丈夫ですか…」

「……知るか、チーフ！出番だぞ！」

PKPが言うのとチーフは設営を止めへりに向かう

今回の仕事は鉄血と合同で行うので一応敵ではないはずだが

「自分、あの幹部の事は良く知らないのですが…」

「アイツは鉄血工造と企業提携していた時に来た鉄血のハイエンドモ
デルだ、実力は他の幹部に負けず劣らずで今でも鉄血人形への高い指
揮権を持っている、指揮権はエージェント以上でハイエンドモデルで
も従わせられる、まあ抵抗するだろうがな」

「…鉄血と合同でやる意味ってあるんですか？」

「最もだが何かがあるのか分からない所で襲撃を受けウイルスが漏れた
らどうするんだ？一応非公式の停戦はあるがドリーマーが護ると思
うか？」

「…確かに」

ドリーマーはこれを何度も破っている

BLACKWATCHがドリーマーを嫌う理由の1つだったりす
る

因みにエクスキューショナーとハンターは結構評価が高かったり
する

アルケミストはビーストやジャック等の1部(拷問好き等)に評価
されている

尚、エージェントは攻撃時に高確率で下着が見えるので変な意味で

評価が高い

(因みにエージェントに恥じらいがあった場合別の意味で評価が上がる)

「まあ、誰が来ても確実に一悶着あるが」

「……」

彼は悩むのをやめた

アウターミッション16

幹部会2日目

本来なら1日で終わる筈だったがビーストとトラチヨが休憩中ブルンが目を離れた隙に飲み会を始めた為2日目をやる羽目になった

「2日目なんてやらなくて良いだろ、つまんねえし」

「つまんねえなら2日目をやる羽目になった理由でも言ってみようか？・ゴルア」

『私のボディが半年延長された話でもしましょうか（泣）』

「正直どうでもいい、とっとと終わらせんぞ」

『その前に1つ面白い話が』

「何だ？」

『正規軍が万能者の捕獲若しくは討伐作戦をやるらしいです、そこで参加者を募っています』

「……チャンスではあるな」

「実戦データが入りますし何だったら他の連中のデータも入りますしね」

「まあ、誰を派遣するかって問題があるが」

「特戦隊が妥当だろ、後は監視と回収の部隊を幾つか」

「そうと決まれば即行動」

「会議終了」

「勝手に終わらしてんじゃねえよ！」

2日目の幹部会は10分もしないで終わった（勝手に終わらせた）

そしてビーストは直ぐに特戦隊へ召集をかける

数分後別の会議室に百式、KSG、グリズリー、ベクター、ドラグノフの5人と後方部隊の隊長3人が集まる

「お前らの任務は正規軍と協力し万能者の捕獲若しくは撃破だ、まあ表向きはだが」

「実際は？」

「特戦隊は万能者の戦闘データだ、後は万能者の組織片、裏方は特戦隊の援護、及び他の連中のデータ回収だ、なので勝てなくても構わん、て

か勝てる見込みが少ない」

「つまり使い捨てって事？」

「そうじゃない、ちゃんと逃げるプランも考えてある、使い捨ては他の連中だ」

『人形達はやられた時のことを考えて新しいボディを用意してあります、人間はやられないようにしてください』

「出来る限りのデータを集める為に無人機を用意する、物は戦車10とラプターとハリヤーだ、ただしラプターとハリヤーはAC-130の護衛がメインだ、AC-130は撤退にも使うから落とされんよ」

『手段は問いませんので可能な限り多くの戦闘データと組織片を回収して下さい、他の連中がどうなるかが構いません、組織片は何でも構いません、爪でも髪でも皮膚でも血液でもどれでもですが種類豊富な大歓迎です』

「質問いいですか？」

ビーストとサイバードブレインが説明している中KSGが手を上げる

「なんだ？」

「新人が言うのもアレですが貴方が出た方が確実なのは？」

その言葉に隊長3名と百式が反対する

「KSG?!馬鹿な事言わないで下さい!」

「おまつ?!コイツが出たら戦闘予定地域が減ぶぞ!」

「なんなら地図が変わるぞ!下手すりゃ消し飛ばんだぞ!!?」

「俺らが出る理由考えろ?!つても俺らが殺られたら万能者と全面戦争だけどな!」

「因みに最悪の事態として蛮族戦士が出てくる可能性もあるからな」

「全面戦争待ったなし?!」

「まあ不確定要素が多過ぎるから可能な限りの戦力をすぐ出せるようにはする」

「頼むからテメエは出てくんよ…」

「そこまで言うならヘルハウンドをすぐ出せr」「やめろよ!!?」「……」

しようがねえな…」

ビーストは溜息をつきながら机の下からいくつかの物を出す

50cm程のボックスと銃型の注射器、そして手榴弾の様なものが2種類

「これは？」

「特戦隊の物だ、ボックスはフルトン回収、注射器はそのまま使い方は相手に刺してトリガーを引けば1秒でカートリッジが満タンになる、カートリッジは幾つか渡しておく、手榴弾はAC-130へのポイント指定のスモークと発信機だ、ピンを抜いて相手に当てると引く付く」

「つまり？」

「ピンを抜いて3秒後に作動し発信機に向けて本部からミサイルがポイントに向けて撃ち込まれる、範囲内にお前らが居なければフレシエットミサイルが来るからな、通常は対艦ミサイル」

「すいません、フルトンって何ですか？」

「それは後でやってもらおう」

「ただただ不安」

「諦めな、それで後方は…コイツを持ってけ」

ビーストが出したのはRPG7の様なもの

違いは肩に担いで撃つのでは無く腰だめ撃ちという事と弾頭が赤く丸い事

「……………おい、これってまさか……………」

「そのまさかのデイビー・クロケットだ、特戦隊の撤退後万能者へぶつぱなせ」

デイビー・クロケット、戦術核兵器の1つで手軽な核兵器とも言われている

威力は通常の核兵器よりも低いながらも通常兵器に比べたらかなり強い（TNT爆薬換算で10トン〜20トン）

また発生する放射線強度も400m離れていてもほぼ死亡するレベルで150m圏内は即死レベル

因みに無反動砲ではあるが物によっては100kgを超える為個

人使用は不可能

「正規軍が黙っちゃいねえぞ！」

「先に通達する無理なら諦めるが、安心しろ射程は10kmまで伸ばしたし命中率も上がってるからお前らが被爆する事は無い、何だったら何処ぞの大佐見たく撃つても構わんぞ」

「そういう問題じゃねえよ！」

デイビー・クロケットはとりあえず正規軍の回答待ちになった

1時間後

ビーストは特戦隊と外に出た

隊長達は準備の為戻った

「そんじゃフルトンの使い方の説明だ、ボックスを開けつと中にバルーンが入ってるからそれを取り出しバルーンの下に付いてるバルブを開く、するとバルーンが膨らみ上に飛ぶ、バルブを開いて必要高度に行くまで約20秒、その間にボックス内にあるハーネスを着る」

ビーストは説明しながら実演し特戦隊もそれを見ながらやる

「ハーネスはキツイくらいで丁度いいからな、緩いと回収時の勢いで落ちるぞ」

「?勢い、どれくらいなの?」

ベクターが最もな質問をする

「体感した方が早い但至少ともパラシュート降下時よりは少ない、後出来ればバルーン膨らませるのは出来れば50m以内に何も無い所にしろ」

「何で……ねえ、輸送機がこっちに突っ込んで来てるんだけど…」

「あれが回収機だ、ほら後ろの方に僅かにフックが見えるだろ?」

グリズリーの言う通り輸送機のC-130が高度を下げながらこっちに来ている

「…待ってください、フックってまさか…」

百式が気付くが時すでに遅し

C-130のフックがバルーンのワイヤーを引っ掛けかなりの速度で引っ張られる

そしてそのワイヤーの先にはビーストと特戦隊
特戦隊は直ぐにハーネスを外そうとするが

「もう遅い」

ビーストが言うと同時にビーストはワイヤーに引っ張られ飛んで
行く

そして百式、グリズリー、KSG、ベクター、ドラグノフの順にら
れた

「ギヤああああああああああああああああああああああ
!?!?!?!
」

6人は引っ張られながら飛んで行った

特戦隊はフルトン回収を二度としないと心に誓った

アウターミッション17

フルトン回収の実演を終えたビーストは特戦隊の非難を無視して自身の執務室で作戦の準備の為サイバーブレインと調整していた

別にビーストが出る訳では無いが念の為だ

『リホーマーがカーターと接触しました』

「ホント自殺志願者か？」

『話の内容までは分かりませんが万能者捕獲作戦の時に正規軍にコンピュータウィルスをまいて混乱させるつもりです』

「あくまでも万能者につくか、まあいい、万能者の組織サンプルが手に入れば何しようが構わん」

『万能者の組織サンプルだけでいいのですか？』

「まっさかあ、どうせ混乱に乗じて正規軍にちよっかい出すんだろ、ならこっちもリホーマーの奢りでこっちも喰わして貰うぞ」

『了解です、データは私がやります、基地へは誰が？』

「既に呼んであるがいつ来るんだか……つと来たか」

ビーストが来客用のテーブルを見ると誰も居なかったはずのテーブルの上に1人の少女が座っていた

灰色のパーカーに灰色のミニスカート、灰色の半ズボンジャージにソックスの少女

全身灰色だが眼は紅く髪は金の少女の名はゴースト、幹部の1人だ
神出鬼没で誰もその行動が読めない上に何処にいるかも分からない

い

誰も見つけられず誰にも気付かれない

誰もが知っているのに誰も知らない

存在があやふや

故にゴースト

「……………」

ゴーストは何も言わずテーブルにある菓子を食べる

ビーストは特に気にしないがサイバーブレインは驚いていた

サイバーブレインの目は監視カメラ

BLACKWATCHの敷地内には至る所に監視カメラがあるが
ゴーストは1度も映ったことがない

勿論死角はあるが何年も映らないのはありえない

『…ゴーストは今まで何処に?』

「BLACKWATCHが出来てからは任務を除いてずっと基地内に
いたぞ」

『私の眼に映ったのは今が初めてなのですが…』

「だからゴーストなんだよ、まともに認識出来てんのは10人も居
ねえし」

『……』

「理解しようがしまいがどうでもいいさ、ゴースト仕事だ、サボってた
分ちやんと働け」

言い終わるとビーストは端末をゴーストに投げ渡す

ゴーストはそれをキャッチすると元から居なかったかのように消
えた

サイバーブレインは驚くがビーストは気にしない

「アイツの仕事は正規軍で動くだろうリホーマーの監視、リホーマー
の事だからあの鎧が出て来るだろうがそれはどうでもいい事だ」

『大丈夫なのですか?』

「ゴーストも初期幹部だ、まともな訳ねえだろ、あの鎧じや認識すら出
来ん」

『はあ…』

「お前こそ大丈夫なんだろうな?リホーマーのウイルスにやられたな
んて洒落になんねえからな」

『万全の体制を整えています、複数のダミーを付けたのでもしウイル
スにやられたとしてもそれはダミーですので大丈夫です』

「ならいいが、MDRの方はどうだ」

『まだです』

「リホーマーん所ブラックなのか?その辺はいいか」

『接触したらどうしますか?』

「タナカの監視強化だけでいい、他は保留だ」

『了解』

「それとジュピターはどうなってる」

『ピューパへの取り付けはまだ出来てませんが若しかしたら作戦に間に合うかもしれない』

「なら急がせろ、最悪の想定には最悪をぶつけるしかねえからな」

『心得ています』

サイバーブレインが通信を切る

そしてビーストは眩く

黒い雨はまだ降らせない、と

アウターミッション18

万能者がテーブルにのる少し前

B L A C K W A T C H内は少しぎわめいていた

と言うのもビーストがある放送を全職員にしたからだ

内容は

しばらくは小規模で動き、可能な限り潜む

依頼以外の戦闘は鉄血や正規軍との小競り合い以外は無しだ

期間は半年から1年だ

それ以降は……………

というものだ

まだ万能者との戦闘は始まっていないのにこの放送だ

戦争をする、という噂も出ている

この噂は今まで小競り合いは鉄血としか無かったのに正規軍が加わった事にある

だが放送の内容が明らかに抜けている部分があり出ている噂は憶測の域を出ない

しかし確信に近い噂はある

それはこの期間は準備だ、というものだ

なんの準備なのかは分からない

だが期間後は確実に嵐が起きる

それも飛びつきりデカい、それこそ大陸に深い爪痕を残すレベルの嵐が黒い雨を降らせながら

そんな中ビーストの執務室では幹部4名と各幹部の副官8名がいた

先の放送は他の幹部にも黙って放送したビーストの独断だった

そんな事をやれば他の幹部は黙ってはいない

しかしビーストの予想に反して言いたげなのはブランだけで持ってきた大斧を床に刺している

インセクトは気にせず菓子を食べているしトラチヨは困った様に

考える振りをしている

副官達はビーストの言い分次第なのか悩んでいる

「……で？あの放送はなんだ……」

「言った通りだ、半年から1年、なりを潜める」

「何でそうしたのかって聞いてんだよ！」

ブランはキレル寸前だ、ビーストの回答次第では大斧でビーストをたたつ斬るだろう

しかしビーストは落ち着いて葉巻に火をつけ大きく吸い

「簡単な事だ……ほれ、あれを見ろ」

ビーストが煙を吐きながら指を指した方に全員が見る

そこにあるのは液体タイプの砂時計

中には黒い液体が入っているがそれは下ではなく上に溜まっている

結構な量が溜まっており何時垂れてもおかしくない

「言いたい事は分かるな？」

「……チツ、ならいいが何でゴーストを行かせた」

納得はしたようだがゴーストを正規軍に行かせた理由が分からないようだ

「向かわせたのはアサルターのデータ収集とりホーマーがカーターに渡した物の回収だ、因みにアイツに行かせた理由は最近仕事してねえからだ」

「その辺はいい……分かったのか？」

「正規軍がネットデータに入れてくれたおかげでな、渡したのはエリザの初期A Iデータだ」

「「……?!」」

副官達が驚く

だがビーストは止めないずに葉巻を消す

「あれを連中に使われる訳には行かないからな、それに初期データにはかなり嚴重に隠してはあるが俺らにとってかなりヤバいのが入っている」

「……あの野郎、隠し持ってやがったのか」

「アサルターが襲う所に無かったらカーターを襲わせるつもりだ、あれは鉄血工造崩壊後俺らが回収する筈だった」

「ですがその時には既に無かった、一体誰が…」

「そんな事はどうでもいい事だ、問題は正規軍がそれを持っているというこだけだ」

「この件で正規軍がどうするか分かってんのか？」

「連中は俺らが反物質炉を持っている事も知ってる、正規軍との小競り合いはそれだ」

「…小競り合いですむのか？」

「すむかじゃなくて済ませんだよ」

ビーストは新たな葉巻に火を付けながら笑った

アウターミッション19（長編コラボ回）

AC-130内

特戦隊の5名は戦車隊の後に本部を出た

戦車で行っても良かったがこちらの方が速くまだ不明なポイントに分かったと同時に迎える

後衛部隊は戦車隊と一緒にだ

特戦隊はそれぞれの武器の最終確認を行う

必要以上に持って来た弾薬にマガジン、渡された装備品など

AC-130のクルー達も搭載されている105mm砲、40mm機関砲、25mmバルカンの最終チェックを行う

このガンシップに積まれた砲弾も通常の2倍近く積まれているバルカンの25mm弾に関しては3倍はある

通常よりも積まれているとはいえこの機体のベースは輸送機だ

これだけ積まれていてもまだまだ余裕はある

しかし相手はまだ未知数の万能者、効かなければ無駄になる

だからBLACKWATERCHは高確率で効果がありそうな弾を積んできた

105mm砲弾は通常弾の他に何発かは着弾と同時に赤リンの煙を周囲に撒き散らすスモーク弾

そして半数が運用が議論されている白リン弾

40mm砲は3分の2が通常のELIDにはかなり効果的だった硫酸弾

25mm弾は全て鉄甲焼夷弾

少なくともスモーク弾以外のどれかひとつは効くはずのものだ特に硫酸弾はそこそこ期待されている

硫酸弾、正確には濃硫酸弾は酸化力や脱水作用を有している

これにより万能者の装甲や武器を酸化させ使い物にならなくし他の攻撃で破壊及び本体へのダメージを期待している、つまり濃硫酸弾はあくまでもサポートウエポンなのだ

通常のELIDには硫酸弾だが万能者の為に濃硫酸弾にしたのだ

そこに白リン弾や鉄甲焼夷弾を喰らわせれば確実にダメージを与えられると思う：

勿論ながらデメリツトもある

赤リンのスモーク弾は赤外線を阻害するのでサーマル等が使えない

ガンシップや特戦隊はその辺の対策はしてきているが他は恐らくしていない

そして白リン弾と濃硫酸弾は着弾と同時に周囲にそれらを撒き散らす

白リン弾はそこまで撒き散らさないが濃硫酸弾は最低デモ10mは離れてないと巻き添えを喰らう

「……これ、私達よりもブラックドックの方が適任じゃない？」

そんな注意書きを見ながらベクターが言う

ベクターの言いたい事は全員が分かっている

今いる特戦隊はハンドガン、ショットガン、スナイパーが1人ずつでザブマシンガンが2人だ

しかも万能者の装甲や組織サンプルを回収しないといけない

つまり否が応でも接近戦をしなくてはいけない

しかもE A小隊も来るらしい

巻き添えを喰らう可能性が高いのだ

「ですが幹部達が仲間を捨て駒にする事や死ぬ事を嫌っているのは知っているでしょう」

百式の言葉にベクターは悩む

BLACKWATCHは仲間の危機ならばどんな危険を侵しても助けに来る

場合によっては大部隊が動く事もあるし幹部に至っては高確率で来る

それが例えバックアップをとった人形であってもBLACKWATCHに認められた新人であつてもだ

この救出劇で戦争一歩手前までいったこともある

『安心しな、お前らになんかある前に俺らが援護してちゃんと救出し

てやるから』

無線からパイロットのイーグルが言う

「私達の心配よりも先ずは自分の心配をして下さい、護衛がいるとはいえ一番狙われやすいのはこの機体ですから」

『俺のテクニックを舐めんじゃねえぞ？どんな暴れ牛でも大人しくなるんだぜ？』

「それただブルより暴れて暴れさせないだけでしょ…私達が降りてからやってよ？」

『女は逆に暴れさせるのが得意だぜ！俺の105mmの前には敵無しだ！』

『22口径デリンジャーが何言ってるんだ』

『黙ってるアメリカン180！女イカせられないからって出し過ぎなんだよ！早漏ゼツリン野郎が！』

『万能者より先にテメエ片してやろうかゴラア！』

「黙れポークビッツ共」

『ウツス』

百式がキレた所で謎会話は終わる

「…とりあえず私達が見捨てられる事はありませんよ」

『見捨てたら死が救いになるレベルの事をされるからな、だから撤退する時は早目にな、コレが落されたら折角のフルトンが台無しだ』

「…出来れば使いたくないんだけど」

『諦めな……つと、万能者が動き出したみてえだ』

イーグルの言葉に全員が臨戦態勢に入り特戦隊は降下準備をする

『座標確認、いいか！降下をバレないように少し離れた場所に降ろす！』

「それと喜べ、俺らが一番乗りだ！』

「戦車隊は?!」

『5分以内に到着する！今は後衛を降ろしてるところだ！』

『降下1分前、機内減圧完了…後部ハッチ、開きます』

ハッチが開くと同時に特戦隊はハッチに移動し装備を確認する

『……全て正常……オールグリーン』

『HALO降下じゃねえから開くタイミング間違えんなよ？』

「何度もやってます！高度は！」

『2500だ！ターゲットの場所は俺らの一番槍だ！』

『降下10秒前……8……7……6……5……4……3……2……1……降下！』

『幸運を祈る！』

「そっちこそ」

そして特戦隊はハッチから飛び降りた

2、3分後地面に降り立った特戦隊の耳に砲撃音が聞こえた
作戦は始まった

アウターミッション20

特戦隊が降下する少し前

ゴーストはとある正規軍基地内に居た

万能者捕縛作戦に関わってない基地だ

現状捜し物であるエリザの初期AIデータの入ったチップは見つかっていない

正規軍のネットワーク内にもないので恐らくまだ使われていないのだろう

今も正規軍のネットワークやらにアクセスしサイバーブレインが探っているが見つからない

『ダメです、ここもハズレです』

正規軍内にあったPCに接続されている端末からサイバーブレインがまるで興味なさげなゴーストに言う

ビーストの執務室に来た時とは違い灰色のチエック柄のミニスカートの袖や胸元にベルトが巻かれている白のパーカーに着替えていた

あの時の服装は私服だったのか？

フードを深く被っているので顔は見えずらいがその眼にやる気は見えない

サイバーブレインはゴーストと関わるのは初めての為行動が全く読めない

しかし実力はあるようでこの正規軍基地を一人で壊滅できる程度には強い

最も八割は気付かれずに殺し死体が見つかった時にはサイバーブレインが各回線を遮断していたので問題は無い

異常に気付くのは先の話だ

『そういえばどうして此処なのですか？』

捕縛作戦に関わってないこの基地に来たのはほぼゴーストの独断だ

まあBLACKWATCHでは幹部達の独断は珍しくないが

「作戦に関わっていない此処ならエリザのAI置いとけるからだがハズレたらしいな………つたく………あんなの持って作戦本部に居るか普通……」
サイバーブレインは正直無視されると思っていたが予想外な事に普通にかえされた

「終わってんならとつとと次行くぞ」

ゴーストは端末のケーブルを引き抜いて端末を回収し基地を出る
『…待って下さい』

基地から出た所でサイバーブレインが待ったをかける

『衛星が見えない機体を捉えました、近いです』

見えない機体とはステルス機等のレーダーに映らない機体の事ではなく目視出来ない機体の事だ

『恐らく熱光学迷彩ですね、ですがエンジンの排気熱かガスかは知りませんがで僅かに歪みがありますね、後気流の乱れも、この乱れ方はへりですね』

隠そうとすれば必ずなんかしらの見つけ方が出てくる

今回の場合はBLACKWATCHの異常な見つけ方を知っているサイバーブレインに軍配が上がった

「何処のだ？」

『恐らくリホーマーかと』

ゴーストは少し考えて

「ならなんかしらの情報を持ってんな」

そう言ってゴーストは消えた

アサルターが降下したのを確認したサーチャーがハッチを閉めようとした時また足音がした

このへりには自分以外誰もいないはずなのに……

サーチャーがゆっくり音のした方を見るとそこにはいないはずの学生のような見た目の少女がいた

しかもその少女が持っている端末から出ているケーブルはへりに繋がっていた

「……?!、誰だ!?!」

銃を抜いた時にはその少女はケーブルを抜き取り開いているハッチの前に立っていた

「動くなー!」

少女はゆつくりと手を上げポケットから手を出す

左手には端末

しかし右手には深緑色のボールの様なものが握られていた

サーチャーはそれがなんなのかすぐにわかった

「手榴弾!?!」

サーチャーが1歩下がるがここはヘリの中

逃げ場はない

『次からは排気熱等も消せる様にするんですね、後情報ありがとうございます』

端末から声が聞こえたと同時に少女は手榴弾のピンを抜きサーチャーに投げ渡す

手榴弾は投げられたと同時にレバーが外れる

サーチャーが手榴弾をキャッチすると少女はハッチから飛び降りた

「え?!」

サーチャーは驚くがすぐに手榴弾をハッチから投げ捨てた

その時には既に少女は見えなくなっていた

サーチャーはすぐにこの事をリホーマーに連絡した

アウターミッション21

ゴーストがH&Rのヘリから飛び降りる少し前
AC-130内ではブーイングが上がっていた

と言うのも特戦隊を降ろし一番槍を撃つ直前にアサルターが現れたのだ

「巫山戯んなー俺らの一番槍を返せ！」

大体はこんな感じだった

だがイーグルは違った

「…おい、無線をオープンチャンネルにしろ」

「え？しかし……」

「早くしろ、ビーストに許可は取ってある」

「りよ、了解、オープンチャンネルに切り替えます」

無線士は通信機を操作する

イーグルは初期メンバーの1人、そのコードネームは戦場を誰よりも広い目線で見ることから付けられた

「俺の予想が正しければ万能者とアサルターは見世物しかない、ならオープンチャンネルで俺らが逐一報告すればどうなる？」

リホーマーと万能者が一緒に居ることは既にBLACKWATH内では知れ渡っている
そんな中のこの作戦だ

現状リホーマーが万能者とやり合う意味は殆ど無い、最もリホーマーが裏切らない限りだが

しかし勝敗のない見世物に目撃者オーディエンスが入れば話は別だ
しかもそれが周りに言いふらしていれば尚更

「正規軍からはリホーマーが味方側に居ることは聞いている、ならあの鎧を援護するぞ、そうすればどちらからも攻撃されないだろう……想定外の事が起きなければの話だが」

「…もし起きた場合は……？」

「すぐに向こうの射程外に出る、そこから予定通りに特戦隊を援護しつつ万能者を潰す、鎧が攻撃して来たら鎧ごとだ」

「了解、オーブンチャンネルに切り替えました」

『コチライーグル、万能者を視認！H&a m p・Rの戦闘員と戦闘中これより戦闘と援護を開始する！』

AC—130の105mm砲が万能者へ撃ち出された

しかしこの作戦はすぐに意味をなさなくなる

そんな中特戦隊のK S Gとグリズリーは万能者とアサルターの戦闘を離れたビルから見ている

ドラグノフとベクターは別の場所でタイミングを見ながら狙撃している

百式は少し前に不穏な言葉を残し偵察に言った

「…本当に偵察だと思う？」

グリズリーがK S Gに聞くが

「あの人は隊長です、馬鹿な事はしないでしよう」

K S Gからは想定内の返答がかえってくる

だがグリズリーは確信している

確かに百式は特戦隊の体調だがそれ以前に何故か旧日本軍の影響を受けている

つまり絶対に偵察ではない

「…百式がなんて言っただか聞こえてた？」

「偵察に向かうと、言っていましたか？」

「その前は？」

「何か言っていましたか？」

どうやらK S Gには聞こえていなかったらしい

「百式は特攻して、と一撃カマしてくるって言ってたけど聞こえなかったの？」

「え?!ですが…」

「…多分だけど」

グリズリーが扉の近くに行き物陰に手をつ突つ込む

物陰から手を引き抜くと手には百式短機関銃が握られていた

「……………」

KSGは固まっていた

グリズリーは百式を持ってKSGの横に座る

「覚えておいて、百式が1人でどっか行ったらバカをやらかすサインよ」

AC—130内

「今の所俺の勝ちだな」

イーグルは戦況を見ながら誰に言うわけでもなく呟く

しかし戦況は刻一刻と変わる

それは時には味方の行動でも一気に変わる

『残念ながらそれもあと少しかもです』

無線からサイバーブレインが反応した

「…どういう事だ？」

『ゴーストがもうすぐ作戦本部にカチコミます、それとは関係ありませんが百式が特攻するみたいです』

「……………」

それを聞いたイーグルは呆れたりして声が出なかった

そんな中ゴーストは作戦本部施設の一室に居た

そこには幾つものサーバーコンピュータがあり少し暑かった

そこでゴーストはサーバーに端末を接続した

ネット関係はサイバーブレインがやる

ゴーストは準備する

大きめのダンブポーチ2つを腰ベルトに付け背中側で位置調整する

次にベルトの左側にショットガンのスピードローダーが複数入った筒を付ける

ベルト右側に専用ホルスターを付ける
そしてどこからともなく3丁の銃を取り出し弾を込める

バレルとストックを切り落としソードオフにした新SKB MJ
―9

ストックに黒いショットシエルホルダーの付いたベリネ M4
スーペル90

そしてフォアグリップの付いたKSG
と全てショットガンだ

勿論ながらダンプポーチの中身は全てショットシエル
全てに弾を入れ終わるとベリネM4とKSGの2丁はコッキング
し薬室に弾を送り更に一発つつ弾を込める

終わるとMJ9は右腰の専用ホルスターに入れKSGはストック
にスリングを付けスリングの反対側をを左肩に固定する

ベリネM4はメインの為そのまま持つ

『ハッキング完了です、これで外部には気付かれません』

サイバーブレインの言葉を聞き立ち上がる

端末をそのままにし扉へ向かおうとすると扉からカチャカチャと
音が聞こえる

話声かコッキング音が聞こえたらしい

ゴーストは扉の前に移動しベリネM4を構える

ガチャッと扉が開くと同時に開けた人間を撃つ

ドンツ！と銃声が響き渡り元々騒がしかった基地内が更に騒がし
くなる

「さっさと終わらせるか」

ゴーストの声は基地の騒がしい声にかき消された

アウターミッション22

作戦本部

基地内では銃声と悲鳴が響き渡っていた

軍の者は手持ちの銃でゴーストに応戦しているが大半の者はハンドガンのみで少数だけがサブマシンガンがアサルトライフルを使っている

手榴弾を持っている者も居るが味方の多い基地内で使う者はいなかった

武器庫から銃を取り出そうにも武器庫の電子ロックはハズレず人形はハッキングされて動かないか正規軍を攻撃している

ある者はゴーストやハッキングされた人形を攻撃し

ある者はハッキングを解こうとし

ある者は他の基地へ応援要請するも無線は繋がらず

正規軍の状況は最悪だった

そんな中ゴーストはベリネM4をメインにショットガンのみで正規軍の数を減らしていく

ゴーストが通った後にはかなりの数の軍人の死体があった

顔面が無くなっているものや四肢が取れかけているもの

胴に風穴が空いている者等がある

中には頭が無くなっているものもいる

横の通路から兵士が出て来てライフルを構えようとするがゴーストは兵士が構えるよりも速くベリネM4を撃つ

喉を撃たれた兵士の頭が落ちていく

頭が落ちると同時に兵士の体は後ろに倒れる

ゴーストは頭が落ちたのを確認すると近くの兵士の死体から手榴弾を拝借する

ピンがヒモに結ばれていたらしく死体が少し浮くがゴーストは死体を踏んずけて手榴弾をとるとピンが抜け安全レバーが外れる

ゴーストはそのまま兵士が出て来た通路に手榴弾を投げ込む

爆発する寸前に小さい悲鳴が聞こえたが爆発音に掻き消された

ゴーストはベリネM4にショットシエルをスピードローダーで装填する

カシヤカシヤとショットシエルが入っていく

装填し終わるとローダーをケースに戻しショットガンのボルトを引く

目的の物はまだ見つからない

その頃

偵察と言って1人単独行動をする百式は万能者とアサルターの戦ってるすぐ近くのビルに居た

万能者はアサルターと戦いながらBLACKWATCHの戦車を破壊していく

「……………」

百式はそれを見ながらため息をつく

特攻に使おうとしたが先に破壊されてしまった

他にも幾つか特攻案はあるがそれよりも万能者の戦い方が気になつた

今はただの見世物の戦闘だが万能者の戦い方はそれ以前だ

「……………戦い方がまるで素人ですね…」

万能者がどういう経緯で生まれたのか、はたまた造られたのかは知らないが戦い方が素人同然だった

まるで異世界転生しチート能力を持った一般人だ

チート能力を持って俺TUEEE、的な感じの

どんな最強武器を持っていようと素人には変わりない

強いのは武器であってそいつ自信が強い訳ではない

能力で強くなっても戦闘童貞が戦えば隙しか生まない

「…正直、鎧の方が何倍も面白そうです…任務ですし仕方ないですね」

百式は特攻案を全部消しビルを降りて行く
考えが合っているかいけないかは戦えば解る

百式は持つて来た黒い軍刀、黒桜を左腰にヒモで止め外へと出た
万能者とアサルターは戦闘をやめ百式を見る

「どうも、ちよつと確認の為に横槍を入りに来ました」

百式は2人に頭を下げた

百式はガバメントを抜くがすぐにそこらに投げ捨てる

2人は動かない

百式はアサルターの前に来て

「少し交代して下さい、本心を言えば貴方と戦いたかったのですが…
次回に取っておきます」

百式はアサルターの返答を待たずに万能者を見る

黒桜を抜いた

「どんなに強くても…」

2人からは一瞬百式が消えた様に見えた

万能者が反応した時には百式は万能者の目の前におりいくつかの
武装を切り落とした

装甲は傷付いただけで切れなかったが

「……?!?!」

「戦い方を知らなければ素人同然です…貴方が私を殺すのが速いか私
が満足出来るか速いか…来なさい、伊達に幹部直属部隊の隊長は
やっていますよ?」

百式は化け物揃いの幹部達から直接戦闘指導を受けている

そして百式の実力はかなり高く幹部を除くBLACKWATCH
全体で見ても上位に位置する

そして刀の扱いに関しては人形トップクラスを誇る

百式は一呼吸し黒桜を構える

百式が本気を出す

アウターミッション23

万能者との戦闘が始まる少し前

百式の後方100m程離れたビルに特戦隊の4人は合流していた

グリズリーとベクターは双眼鏡で百式と万能者の動きを見てKS

Gは周囲の警戒

そしてドラグノフは構えていつでも万能者を撃てるようにしていたがスコープを遮られ顔を上げる

見るとグリズリーが双眼鏡を覗きながらスコープを遮っている

「やめた方がいいわよ、この状況で手出ししたら」…ちよっと、誰か万能者撃つ気よ」……

グリズリーが慌てて確認と百式達の近くのビルからバルカンの砲身が突き出していた

2人はまだ気付いてない

「……知らないとはいえ馬鹿でしょ…自殺志願者なの？」

グリズリーが無線を入れるよりも速くバルカンから弾が打ち出された

弾は万能者へ撃たれるが万能者の装甲を突破する事は無かった

そしてバルカンが撃つのをやめた時AC—130からの25mmバルカンがそのビルへ向けて発射された

「あゝあ、死んだわね」

ドラグノフの感情のこもってない言葉が響くがグリズリーには聞こえていなかった

「……さっきのって16LABのバルカンじゃなかった…？」

「まあそうでしょうね、あんなの持つてる人形なんて他に居ないでしょ」

「確かEA小隊でしたよね、そのマードーも確かガトリンググレイルガンなんて物を使ってるって話だった気がします」

「そんな事はどうでもいいわよ、問題はまた面倒事が出来るって事よ！」

「いつもの事だろう？」

ドラグノフの言葉にため息をつきつつグリズリーは双眼鏡でビルを見る

ビルは粉塵等であまり見えないがとりあえず半壊している事はわかった

『次何かしたら105mmと40mmです』

百式のオーブンチャンネルの無線を聞きながらしばらく見ていると粉塵の中からバルカンが出てきてグリズリーは安堵する

その奥ももう1人見える

2人とも直撃弾は貫つてないようだが軽傷だ

グリズリーはこれなら大丈夫と思った

双眼鏡から目を離し一息入れ再び双眼鏡を覗きこみ思考が停止した

バルカンが百式に何か言ったようだがこの距離では聞こえない

それだけなら良かったがバルカンがM61を百式へ向けて構えた

「?!馬ッ鹿ー何やってんのよー」

グリズリーが叫ぶが既に遅い

バルカンが撃つよりも早く百式は万能者へ駆け出した

一瞬遅れてバルカンが撃つが百式には当たらない

百式は万能者へジャンプし万能者の肩へ飛び乗りそこからバルカン達の方へ更にジャンプした

バルカンが驚いて撃つのをやめた事で百式はバルカン達のいる階層に着地した

グリズリーは百式へ無線を飛ばす

『絶対に殺さないでよ!後々面倒なんだから!!』

『殺しませんよ、まあ腕の一本や二本落としますが』

無線は切られた

アウターミッション24

作戦本部内でゴーストはイラついていた

と言うのも作戦本部が地味に広く目的の物が全く見つからない為だ

サイバーブレインも監視カメラ等で探してはいるが監視カメラの数が少なく思う様に探せていないのが現状だ

その上ゴースト自身かなりの面倒くさがり屋、部屋に入っても軽く見るだけで探そうともしないし兵士が隠れていても出て来なければ無視している等やる事がかなりガバガバで監視カメラが動いたものを見つけても無視された兵士だったりしている

サイバーブレインはこれを見ながら呆れている

しかしそんなゴーストにも運が回ってきた

サイバーブレインがやつとエゴールを見つけたのだ

それはつまり近くにカーターがいるという事だ

ゴーストはサイバーブレインから場所を聞きだしそこへ向かう

因みにその場所はゴーストがガバガバ制圧した場所だった

エゴールまであと少しという所で曲がり角から2人の人形が出て

来た

フレイムとAN-94だ

この時、ゴーストは油断していたが2人よりも速くベリネM4を構える

フレイムへ撃つがAN-94がフレイムの首根っこを掴み後ろに引いた為当たらなかった

しかもAN-94はフレイムを引くと同時にゴーストをフルオートで撃つ

ゴーストはすぐに回避しフレイムとAN-94は隠れた

この間僅か2秒

回避したゴーストはすぐに柱の影に隠れる

ゴーストはベリネM4へ数発のショットシエルを込めながら考える

（1人は確か叛逆のANN-94だがもう1人の奴は誰だ？火炎放射器なんて持ってたがこんな場所で使う気か？）

ゴーストはEA小隊を知らない

と言うのも資料を読んでいないだけだが

（叛逆の新人か？どちらにしる叛逆は殺れねえし…考えるだけ無駄か、それに殺さなけりやいいだけだ）

「何なんですかアイツ!？」

「知らないわよ!どうせどつかの過激派でしょ?!正直BLACKWAT
TCHだったらどれだけ楽だったか!」

向こうの声が聞こえる

BLACKWATCHとはバレて居ないようだ

ゴーストは不敵な笑みを浮かべた

その頃サイバーブレインは正規軍のネットワーク内で暇をしてい
た

マンティコアやイージス等の装甲人形を起動させて物理的に基地を遮断しそれ以外の子周りの効く人形を基地内部でゴーストの後始末に回し自身は監視カメラやネットワークで情報を吸い出し本体に送るのを片手間ですしていた

正直言うとマンティコア等で外から施設を攻撃したい所だが目的の物が壊れては元も子もない

イージスのカメラ映像を見ると発電機と蓄電池があつたのでそれを破壊する

そんな中、本体経由でビーストから通信が入る

『百式、リミッター5まで解放して10秒以内にそいつ等を片せ、無理ならリミッター全解除して殺せ、あまり万能者を待たせるな、万能者はまたゼロからスタートでお前の独断で随時解除しろ』

『了解、リミッターを5まで解除します』

『後方部隊はヘリを飛ばしたから付きしだし撤退しろ、デイビー・クロ

ケットを忘れるな』

『了解』

『AC—130は周囲の掃除、残りの特戦隊はまだ確認出来てないE A小隊2名の捜索及び無力化だ、生死は問わん、それともしAC—130が落とされた時は生存者を回収して北北西2kmにある川に迎えりヴァイアサンを待機させてる』

『…良いの？絶対に面倒事になるんだけど、しかもリヴァイアサンが見つかったらヤバくない？』

『今更だ、それに押さえる方法はいくらでもし他からはリヴァイアサンに喰われたと思われるだけだ』

『…了解』

『ゴースト、チップの回収を急げ、今の所何も無いがこの先は分からんからな』

『チップ……わかってるよ』

通信が切れる

本体からの情報では百式が本気を出したとあるがリミッター解除はされていない

つまり百式はリミッターを外していない状態での本気を出した、という事になる

これでもまだリミッター解除とリミッター解除状態での本気があるのだから驚きだ

『戦場が血みどろになりますね』

サイバーブレインは誰に言うわけでもなく呟きながら衛星の映像を見る

映像は戦闘地域となった街全体を映している

そこから操作しビーストの言った川を見る

幅100m程の川だ、これなら大丈夫だろう

映像の川には不自然に大きい波とかなりの大きさの影が映っていた

サイバーブレインは幾つかの情報を確認する為端末に戻る

情報は全て抜き盗った

そしてちょうどサイバーブレインの動かしているイージスが来たサイバーブレインはイージスを操作し端末とケーブルを回収する部屋を出ると廊下には2体のイージスが待っていた

サイバーブレインはその2体を部屋に入れ部屋を破壊させる

武器や盾で殴って破壊していく

サイバーブレインはその間に近くの死体から手榴弾数発を回収する

粗方破壊し出て来たイージスに手榴弾を渡し一斉にピンを抜き部屋へ放り込み移動する

BLACKWATCHは止まらない

その命が尽きるその瞬間まで動き続ける

アウターミッション25

「……」

特戦隊の4人は固まっていた

百式からの連絡が途絶えたと思ったら万能者が百式の入ったビルに入って行き何を思ったのか百式をお姫様抱っこして自分達の目の前に現れたのだから

百式は生きてはいるが気絶しているのか全く動かない

「……ハッ！」

10秒程でグリズリーが正気に戻り万能者から百式をひったくる様に奪い万能者から少し離れた場所に寝かす

グリズリーは百式を調べるが特に怪我は無く打撲痕等も無い

「…薬物か！」

結論に至ったグリズリーは近くに置いてあった百式短機関銃を取り自身のリミッターを第5まで外し万能者へ銃を向ける

「うちの隊長に何しやがった！」

「おいおいおい!? 落ち着け! 俺じゃない俺じゃない! 俺がビルに入った時には寝てたんだ!」

万能者は両手をあげて誤解を解こうと言い訳にしか聞こえない事実を話す

と言うのもグリズリーからは百式と同等ぐらいの実力を感じていた

グリズリーだけならともかく残りの3人もそれに近いものを感じていた

(負ける事はないだろうが下手すればこっちも無傷じゃすまない!)

BLACKWATCHの情報はある程度分かっていたが個人の實力までは流石に分からない

(どんな経験積みばこうなるんだよ!)

誤解が解けるまでの約1分半、万能者は若干冷汗をかきながら事実を話し説得した

数分後

誤解が解けてからグリズリーが呼んだメディックとイーグルが部屋に入ってきた

2人は万能者を見るやいなや戦闘態勢に入るがグリズリーの無視しろの一言で戦闘態勢を解くがかなり警戒している

と言うか百式を心配しているが全員が万能者へ最大限の警戒をしている

万能者が念の為に回収していた百式の刀を出した時にもヤバイ殺気が万能者へ放たれた

「……人形用の麻酔薬の1種ですね、ただかなり強力です、生物でいえば象等の大型動物のもんですが……」

「…コイツじゃないとなると…EAの連中か」

「恐らく、それに万能者が持っていての意味は無い気がします」

「だから俺じゃn「黙ってる」……はい」

しかし万能者は別の事を考えていた

それは万能者自身を監視しているイーグルだ

話を聞いている限り同じBLACKWATCHの別部隊なのは分かった
はななくBLACKWATCHの別部隊なのは分かった

(なら人形達の指揮をしている人物がいるが…それ以前に……)

万能者はイーグルを見る

イーグル自身もかなりの実力者で指を僅かに動かしただけで殺気立ち警戒を強めている

(そもそもコイツ…本当に人間か?)

今まで見てきた人間とは何かが違う

まるで人間の皮を被った得体の知れないナニカだ

(BLACKWATCHは思ってた以上に仲間意識が強いな…正直使
い捨て、とまでは行かないが酷い物と思っていたが……しかしデカイ
ナニカを隠しているのは確かだ、それに敵に対しては個人にもよるだ
ろうが絶対に容赦はしない、警戒はするに越したことはないな)

万能者は考えることをやめ百式の方を見るとメディックが注射器
を取り出し薬品を入れる

話を聞いている限りどうやら、人形用のきつけ薬のようだ

そしてメディックはそれを人間でいう心臓辺りに突き刺し一気に薬品を投与した

「……………え？」

流石の万能者も思考が止まったが1秒もせず百式は飛び起きた

「はあはあ……………ソレ…改良出来ませんか…割と本気で」

「それは開発元に言っつて、とりあえず簡易的な物だけどバイタルチェックするからマフラー取っつて、後これ」

メディックは百式に袋を渡す

百式はマフラーを取ると袋をもらう

「？」

万能者が疑問に思うがメディックは百式の首の後ろにコードを刺してノートパソコンを操作する

操作をしまして1分くらいたった時百式の顔がどんどん真っ青になっつていく

しかし周りは同情の表情で見ているだけだ

そして

「■■■■■■■■■■ッ」

百式が吐き出した

アウターミッション26

「……………」

急に吐き出した百式に思考が止まる万能者

しかし周りは分かっていたのか同情しながら動く

メデイックから貰った袋に吐き出した百式はグリズリーから水筒を受け取り口を濯ぎ袋に吐き出す

百式は袋を縛り窓から投げ捨てる

そしてメデイックは薬の入った茶色い瓶を渡し百式はそれを開けて一気に飲む

「……………はあ、本当にデメリットが致命的ですね…」

「…人形も吐き出すんだな」

「良くも悪くもこれの副作用的なものですが」

「吐き出す必要があるのかよ…」

「ありますよ、アレの薬内に居るナノマシンが毒やら薬やら他のナノマシンやらを異物として胃袋に運びそれを吐き出すんですから」

「……………」

「まあ、気だるさ等で30分程まともに動けないので戦場では使い所が難しいものですが」

「お、おう：そうか、それじゃあ俺はこれだ」何言ってるんですか？私
が動ける様になったら仕切り直しですよ」…………マジかよ…」

百式の言葉は誰も予想していなかったのか全員が驚いている

百式はそれを気にもせず笑顔で言った

「大真面目です」

万能者は驚いて周りを見るが全員が万能者へ哀れみの目を向けている

BLACKWATCHが若干バトルジャンキーなのは知っていた
と思っていたが知っていたつもりだった様だ

万能者は逃げようとしたが先程以上の隠しきれない強さと殺気で
逃げられる事は無かった

「あつ…とりあえずあの鉄血の失敗作の…確か…何でしたっけ？なん

でもいいですね、あの火力馬鹿部隊を潰す為にハリアーとラプターを動かして高高度から狩らせますか、イーグルのAC—130もお願いしますね」(ニッコリ)

「りよ、了解です」

百式の異様な黒い笑みに止めるものはいなかった

その2分後、ラプターが3人を捕捉し爆撃が始まった

そんな中デストロイヤーは現状報告をしに作戦本部に向かっていった

途中運良く見つけた動く車で

本当はヘリを使ったかったがマードとバルカン、特にマードが重症の為仕方ない

「まあ…このボディだから余裕で運転できるんだけどね!」

大きく一言を言うデストロイヤーの目に作戦本部が見えた、がすぐに異変に気付く

「煙?それに窓も割れてる……まさか襲撃?!無線は……なんで通じないのよ!」

ペイロード達へ状況を知らせようとするが繋がらない

作戦本部も一緒だ

デストロイヤーは速度を上げた

基地のゲートが見えてきた時イージスやマンティコアがゲート付近に居るのが見えた

「よかった…まだ生き残りがいるのね」

デストロイヤーがゲート前に車を止めるとマンティコアは砲を向けてイージスは武器を突きつけた

「待つて待つて待つて!?!味方よ!16LABのデストロイヤーよ!」

デストロイヤーが言うのと数秒たって武器を下ろされた

安堵するがすぐにイージス達に状況を聞こうとするが喋れない事に気付कि代わりのため息をつく

「喋れないんだったわね…とりあえず軍の装甲人形が動いているって事はまだ生存者は居るわね!…待ってなさい、このデストロイヤー・ガイアが襲撃者をすぐに片付けてあげるわ!」

やる気満々のデストロイヤーは車から降り自身の武器を取って基地へ向かおうとする

……だが

「…ガっ?!」

デストロイヤーは後頭部を殴られ倒れる

後ろを見ると殴ったであろうイージスが近づいてくる

「…っ!?…なん、なの、よ………」

『簡単ですよ、敵だからです、今行かれても困りますので』

喋れないはずのイージスが喋った事に驚く

「誰、よ…アンタ……」

『直接、でもありませんが会うのは初めてですね、初めましてデストロ

イヤー・ガイア、サイバーブレインです』

サイバーブレイン

存在は鉄血に居た頃には既に知っていた

蠱毒から逃げ出したAI

つまりこの襲撃は

「BLACKWATCH…!」

デストロイヤーは気を失った

サイバーブレインがイージスに指示を出すとイージスはデストロ

イヤーとその武器を持ってどこかへ行った

『…少し急ぎますか』

サイバーブレインはハッキングした人形達には指示を出し移動する

幾つかの疑問を感じながら

アウターミッション27

作戦本部ではAN-94とフレイムが状況を変えられずにいた

「何か策は無いですか!？」

「無茶言わないで! アイツ、相当の腕よ!」

回り込んだらそこに手榴弾が複数投げ込まれ廊下自体を破壊され

AN-94が壁の向こうから襲撃者へ撃とうとするも逆に撃ち込まれ

手榴弾を投げるも空中で撃ち落とされるか撃ち返される

フレイムが催涙ガスを撃とうとした時には銃口を破壊された

銃口だけでガスは漏れなかったがガスは撃てなくなった

「その銃を使いなさい! どうせ誰も使わないんだから!」

AN-94は近くの死体の銃を指差す

当てられるかは分からないがよりかはマシだ

フレイムは改造火炎放射器を捨てて銃を取ろうとした時正面の壁が爆ぜた

「…なっ?!」

反応した時には遅く壁を破壊して現れたイージスの蹴りがフレイムの腹を直撃した

声を出す間もなくフレイムは後ろの壁を破壊して部屋に消えた

AN-94がイージスを撃とうとするがそれがいけなかった

AN-94は後頭部を掴まれそのまま床に顔を叩き付けられた

ギリギリ意識があったので反撃しようとするも勢いよく投げ捨てられ窓の外に落下していった

襲撃者、ゴーストは部屋に消えたフレイムを見るとピクリとも動かない

生きてはいるだろうが完全に伸びた様だ

『遅いですよ、先程デストロイヤーが来たので急がないと面倒になりますよ』

「分かってるよ、回収してとつとと帰んぞ」

『了解です、輸送機を準備してしますので回収したら滑走路に来て下さ

い』

「?へりでいいだろ?」

『色々と回収したので荷物が多いんですよ、因みに結構ギリギリなのでコックピットに来て下さい、後他の機体は破壊しました』

「…だつる」

ゴーストが移動しようとした時

『……通信です、少し待ってください』

サイバーブレインに通信が入った

遮断したのは基地の通信でBLACKWATCHの通信用に抜け穴を作ったのだ

『……了解です、こっちに居た万能者のもう一つは撤退したそうです、現状こっちはザルになりましたね』

「ならすぐに終わるな、生き残りは」

『後はカーターの護衛が9人とカーター本人だけです、少々手強いですが貴方なら問題ないですね』

「たかだか10人程度すぐ終わる、エンジン温めておけ」

『了解です』

ゴーストはそのまま消えてイージスだけが残った

イージスはフレームを抱え上げ歩き出す

そして地下へ降り部屋を探す

少し歩いて目的の部屋の扉を開ける

そこは倉庫のようでダンボール箱がそこらに置かれている

そしてダンボール箱の影には気を失っているデストロイヤーの姿もある

イージスはフレームを投げ入れ扉の鍵を掛けて地上階に戻った

そして廃墟となった都市には万能者がその時を待っていた

結構百式と戦闘する事になり百式が回復するまで待っていた

そんな中、ふと上を見上げるとビルの屋上から白いバルーンが浮かんでいた

「?何だあれ?」

疑問に思っていると低空で飛んでいたACC-130が後方から垂れているフックでバルーンのワイヤーを引っ掛けそのまま飛んで行く

バルーンのワイヤーには百式を除くBLACKWATCHの面々が居てそのまま一緒に飛んで行く

「……大丈夫か？」

悲鳴が聞こえ少し呆れるのが百式が出てきたのですぐに集中する

「…問答はいりません、理由もありません」

百式は万能者へ歩きながら言う

「ただ、殺し殺され切って切られ刺して刺され撃って撃たれる」

百式は立ち止まり黒桜を抜き構える

「……さあ、殺し合いましよう」

この日この作戦最後の殺し合いが始まった

アウターミッション28

BLACKWATCH本部

サイバーブレインは子機とハッキングした人形がやられてすぐに通達する

『緊急事態発生、作戦本部にて蛮族戦士出現！、繰り返します、蛮族戦士出現！』

驚く者達がいる中ビーストは呆れるが指示を出す

「：タイラントを向かわせろ、ゴーストにはそれまで時間稼ぎさせてタイラント到着後に万能者の方に行かせろ、百式と交代だ」

『ですが百式の戦闘を邪魔すれば…』

「今の任務はBLACKWATCHの任務だ、百式個人の任務じゃない」

『了解です、各所に通達しタイラントの出撃を急がせます』

「トラチヨがいれば向かわせたんだが仕方ない」

『ハッキング人形はまだ居ますので回収出来るものは回収します、幸いにも1番欲しいのはまだ回収してませんし、それとクロウラーを出します』

そして10分もしないでタイラントを載せたクリサリスが離陸した
行かせてはいけない者と一緒に

「クソツタレガア！」

作戦本部では通信を聞いたゴーストが毒づいていた

もうすぐ終わる筈だったのに蛮族戦士によって残業だけでなく幾つかの計画が狂った

修正可能と言えど可能だが楽では無くなった

だがチップはすでに回収した

しかし問題は蛮族戦士の時間稼ぎで壊れる可能性は高い

なのでゴーストはハッキング人形にチップを渡し逃げさせる

人形が見えなくなったのでゴーストは窓から飛び出す

蛮族戦士を人形に近付けさせられない

チップが破壊されれば全てがパーだ

「オマエガツヨキモノだな」

「…ホント、クソツタレだな」

ゴーストが降り立った近くに蛮族戦士がいた

確認してなかったゴーストにも非はあるが予想外で毒づく

だが蛮族戦士は待つてはくれない

蛮族戦士は一瞬でゴーストに接近し大剣を振り下ろす

大剣が振り下ろされた場所はクレーターになるがそこにゴーストは居ない

蛮族戦士が大剣を動かそうとした時横から衝撃が来て蛮族戦士は吹き飛ばされた

「グウツ！」

吹き飛ばされた蛮族戦士は大剣を地面に刺して無理矢理止まる

「…本当に面倒だな……おら来やがれカスが！前座として遊んでやるよ、クソガキ」

「ソレハオモシロソウダー！」

数十分後

作戦本部地下

フレイムとデストロイヤーは地下で嵐が過ぎるのを待っていた

少し前に地下から出れたのだが襲撃者と蛮族戦士の戦闘で地上は地獄だったので慌てて地下に逃げたのだ

「…地下に逃げたのは間違いだったかも知れません」

「……でもあの中基地外に逃げられると思う？」

「…ですがアレらが地下に来たら私達終わりですよ…」

「……………」

デストロイヤーは頭を抱える

地下からの出口は一つだけ

他にもあるかもと探したがアレらの戦闘で崩落していて出られない

い

今もズンズン、と基地が揺れ天井から小石がパラパラと落ちてくる

「……私達も終わりかしら……」

「ちよつと?!やな事言わないでくだ……ん?」

諦めムードのデストロイヤーだがフレイムは気付いた

「?どうかしたの?」

「なんか揺れてませんか?」

「アレらの戦闘で「違いますよ!」……なんなのよ」

「戦闘で揺れてるのは断片的ですが継続的な揺れですよ!」

言われてデストロイヤーは周りに集中すると確かに揺れていた

だがそれがどんどん大きくなっていくのも分かった

「ちよつ?!!どんだん大きくなっていくわよ!地震!」

「違いますよ!何かが近づいて来てるんですよ!」

「何かって何よ!」

そしてそれは壁を突き破って現れた

出て来たそれはゲーム等でだけ来る巨大なワームの様な生物を機械化した様な見た目でかなりのデカさだ

数秒たってそれは消えた

フレイム達はソレが出てきた穴を見る

向かった方は暗いが出て来た方の奥に光が見えた

「……ねえ、こっちって基地のゲートの方じゃない?!」

「た、多分そうですけど……」

「ならチャンスよ!ゲート前に車を停めてあるの!アレが何なのかは分からないけど脱出するチャンスよ!」

デストロイヤーは穴に入って光の方へ向かう

フレイムは少し迷ったがデストロイヤーに続いて穴に入る

2分程進むと光の場所につく

4 m程の縦穴だが間違いなく地上に繋がっていた

フレイム達は縦穴を何とか登り地上へと出た

柵の中なのでまだ基地の敷地内だが近くにゲートが見える

そしてその前にはデストロイヤーの乗って来た車も

「やったあ！早くここから逃げるわよ！」
2人は車に乗りこみ基地から離れる事に成功した

アウターミッション29

作戦本部

蛮族戦士相手に互角に戦っているゴーストだが
(ほんつと面倒だなあ！なんでどんどん強くなってるんだよ！)

正直言えばゴーストが本気を出せば蛮族戦士相手はかなり優位に戦えるのだがゴーストはやらない

ゴーストが本気を出すのはBLACKWATCHがかなりヤバい時かビーストに言われぬ限り先ず本気にならない

自信がヤバい時は別だが

(タイラントはまだかよ……つと危ねえ！)

大剣が直撃しそうになるが寸でかわす

蛮族戦士もゴーストが本気を出していないのは分かっているので出させようとするがゴーストは全く本気にならない

「コンナモノデハナイダロ！ホンキヲダセ！」

「知るかバーカ」

本気は出ていないが余裕があるゴースト

そんな中地面が揺れ始めた

「！来たか」

ゴーストが言うやいなや離れた場所で地面を突き破って巨大な機械ワーム、クロウラーが現れた

クロウラーが出てくると隠れていたハッキング人形がどこからとも無く現れ荷物を持ってクロウラーへ入って行く

荷物の中にはフレームやデストロイヤーの武器もあつた

そして黒い装甲人形も

全てが入り終わるとクロウラーは地面に潜っていった

「……居ねえのかよ！」

ゴーストが思わずツツコムが蛮族戦士はゴーストへ大剣でツツコミを入れた

勿論ながら簡単にかわすゴースト

「ノゾミハナクナツタナ、ホンキヲダコイ」

「とつとつと気やがれえ！」

ゴーストが叫ぶ

すると蛮族戦士へ多数のミサイルが降り注いだ

音も無く降り注いだミサイルは蛮族戦士へ直撃するがまるできいてない

蛮族戦士が見上げると上空に鳥のような巨大なヘリが飛んでいた

『タイラント投下』

ヘリのスピーカーから音声の流れるとヘリ、クリサリスから何か
蛮族戦士へ降ってきた

蛮族戦士はソレを難なく避ける

そしてソレは地面に着弾した

ドオン!!と爆音と共に着弾したソレは地面に巨大なクレーターを
作り大量の粉塵を舞い上がらせた

「…ナンダ？」

蛮族戦士が警戒しながら近付こうとした時

「^{突撃}ロース、蹴散らしなさい」

粉塵から声がした

そして粉塵から何かが蛮族戦士へ攻撃する

蛮族戦士はそれを大剣で受け止めるが止めれたのは一瞬だけで力
負けし蛮族戦士は吹き飛ばされた

「ウォ?!」

蛮族戦士は体制を整え着地する

そして粉塵から出て来たモノ、タイラントを見る

「ナンダアレハ？」

身長3mはある

そして全身は万能者以上の黒い装甲で固められている

恐らく万能者以上の装甲の硬さだろう

右手にはその身丈以上の巨大な楯がある

しかし蛮族戦士は全く別の事が気になった

(アノコドモハナンダ?)

タイラントの左肩には黒い浴衣を着た少女が座っている

浴衣は血飛沫や血の雫の模様が描かれている

その上4つ目の狐面も黒に血飛沫模様

はつきり言つて気味悪い

だが蛮族戦士が気になつたのは

(アノコドモ、カナリヤバイナ：アノデカイノヨリカクジツニツヨイ、モシカシタラオレヨリモツヨイ)

蛮族戦士は初めて冷や汗を垂らす

「ジョーカー・テメエなんでいやがる！」

ゴーストが叫ぶ

少女はジョーカーと言うようだ

しかし少女、ジョーカーは何も言わない

ゴーストは無駄と判断しその場から消えた

それと同時にクリサリスとどこかへ向かつていった

それを気にすること無く蛮族戦士はタイラントに攻撃を仕掛ける

「蹴散らしなさい、タイラント」

少女の声にタイラントは蛮族戦士の大剣を弾こうとするが蛮族戦士は素早くタイラントの右に周りにこむ

(ナルホド、パワーはアルガソノブンオソイナ)

蛮族戦士の大剣はタイラントの腰の装甲の隙間を切りさ…けなかつた

「ナ?!」

大剣は確かに装甲の隙間に直撃した

しかし装甲には傷ひとつない

それどころか大剣が少し欠けた

流石の蛮族戦士も驚くがタイラントの攻撃が来たのですぐに距離をとる

(ナンテカタサダ、マサカコノケンガカケルトハ…ナラバ)

「行きなさい！」

タイラントは蛮族戦士へ突撃する

しかし蛮族戦士は動かない

タイラントは楯を振りかぶつて蛮族戦士へ攻撃する

蛮族戦士は楯が目前に来た時自身の最速でタイラントの後ろへと回り込み大剣でジョーカーを背中から突き刺す

(トッター)

蛮族戦士はタイラントから離れ剣を見る

大剣はジョーカーを背中から刺し前まで貫通している

蛮族戦士は刺さったままのジョーカーを見て固まった

ジョーカーが蛮族戦士を見ていた

それだけならともかくジョーカーは動いた

「……………ナンダ…コイツハ……………」

蛮族戦士は状況が全く理解出来ず動けない

ジョーカーは剣を掴むとそのまま体を動かす

ズズズと少しづつ蛮族戦士へと近付いていく

そしてジョーカーの手が蛮族戦士の手を触れた時蛮族戦士は剣を

思いつ切り振った

ジョーカーは股を裂かれるように切られタイラントへ飛んで行く

タイラントの近くに落ちたジョーカーは何事も無かったかのように

に立ち上がる

「あーあ、この浴衣お気に入りだったのに……………」

切られた浴衣は最早服として機能しておらず素肌が見えている

因みに浴衣の下は何も来ていない

しかし蛮族戦士はそれどころでは無い

立ち上がったジョーカーの肌には傷が無くなっていたのだから

今まで戦ったELIDの中にも再生するものも居たがジョーカー

の再生はそのどれよりも早い

(…………アレハタオセルノカ?)

しかしそんな蛮族戦士の心境わ知ってか知らずかジョーカーは落

ちていたコードを切られた帯代わりになっている

しかしほとんど機能していない浴衣なので下半身の大事な部分が

見え隠れしている

ジョーカーは浴衣を動かして何とか見えない様にする

「ゴーストちゃんは本気出さなかったでしょ?代わりに私が出してあ

げるよ♪」

ジョーカーは蛮族戦士へゆつくり歩いて行く

蛮族戦士はタイラントを見る

何もする気は無いのかタイラントは動かない

蛮族戦士はゆつくり構えると手が少し震えているのに気付く

(……ナルホド、コレガキョウフトイウモノカ……キチヨウナケイケン
ダオボエテオコウ)

蛮族戦士は一呼吸おきジョーカーへ切り掛る

蛮族戦士は大剣を全力で振り下ろした

しかしジョーカーはそれを難なく白刃取りで受け止める

同時にジョーカーの足元の地面が凹みクレーターが出来る

蛮族戦士は少し驚くも想定内だった様でジョーカーを蹴ろうとする

だがジョーカーは蛮族戦士事大剣を白刃取りの状態を持ち上げ蹴りを空振りさせた

「……ナンダト？」

もう驚くはないと思っていた蛮族戦士だったが流石にこれには驚いた

そしてジョーカーはそのまま蛮族戦士を投げ飛ばした

蛮族戦士は50m程飛ばされ破壊された航空機に激突し止まる

「……アレハドウヤレバタオセルンダ？」

蛮族戦士はどうしようか悩んだ

アウターミッション30

作戦本部からゴーストが撤退した頃
戦闘地帯である廃都市

「……………」

万能者はどこかと通信している百式を待っていた
この隙に攻撃は出来るが万能者はやらなかった
何故かと言われればたまたま、としか言えない

「……………了解です」

百式は通信を切ると落胆した表情をするが深呼吸しその表情を捨てる

「では今から行儀良く戦うのは辞めます」

「……………という意味だ」

「……………そういう事です」

そう言うと百式は黒桜を鞘に戻した

万能者は疑問に思うがすぐに百式が万能者へ走り出す

（……………居合か！）

百式の行動に気付き様々な武器を撃つ

だが百式はそれらを全て躲す

（片目片腕で掠りもしないのかよ!?!）

驚く万能者だが百式が自身の間合いに入ったので撃つのを辞め
チェーンソーを振り下ろす

百式も間合いに入り屈んで黒桜を掴む

（……………こっちの方が早いのが向こうは居合!）

百式が黒桜抜いた瞬間、万能者の背中に砲弾が直撃し万能者は百式
の上を通り過ぎ5m吹き飛ばされた

「っ?!」

幾ら装甲があるとはいえ直撃の衝撃までは防げない

何が起きたかは明白だ

万能者は起き上がると同時に砲撃したAC—130を見る

上空を旋回しているAC —130だが砲門は全て万能者へ向け

られている

(…:)ういう事か！)

先程の百式の言葉は自分一人で戦うのは辞めると言う意味だった

「……いきなり辞めるとか卑怯じゃないか……」

「何言ってるんですか？ちゃんと宣言しましたよ？それにこちらは刀だけで銃も仲間の援護も使っていないのに貴方はチェーンソー以外を普通に使ってるんです、今まで行儀良く戦っていた事に感謝して欲しいものです」

「……あー」

万能者は覚えがあつた

百式は戦う前に銃を捨てた

そして今まで1度も援護射撃は無かつた

なのに自分はチェーンソー以外も使い百式を負傷させた

「……………」

万能者は反論出来なかつた

「ですがそれも終わりです、貴方は今まで通り使つて良いですよ、急がないと使えなくなりますしね」

(…挑発しているな、下手に突っ込むと不味い)

万能者はアナザーアイで空の動きを監視しようとするがアナザーアイからは何も来ない

(?…まさかこのタイミングで故障か…)

万能者が空を見上げるとちょうど少し前にどっかに行ったラプターとハリヤーが上空をとうりすぎた

(…まさか見つかつて破壊された？だが光学迷彩はちゃんと機能してたはず…)

考える万能者だが百式が向かつて来たので考えるのをやめ戦闘に集中する

百式は黒桜を抜き万能者を斬ろうとする

万能者は避けチェーンソーを振るうが避けられる

(どのタイミングで来るか…)

百式と斬り合いながら考えるが援護射撃はない

その時、百式がほんの少しだけ体制を崩した

考えながら斬り合いをしていた万能者が運良く気付いた僅かな隙

万能者はチェーンソーを振り下ろした

隙をつかれた百式は避ける事が出来ない

百式は黒桜を盾にする

黒桜は切られるが一瞬止まれば、と思っていた

だが良い意味で百式の予想外の事になった

黒桜が万能者のチェーンソーを受け止めたのだ

チェーンソーの回転で大量の火花が発生し刀身がどうなっている

かは見えない

万能者もまさか受け止められるとは思っておらず驚いた

予想外で一瞬気が抜けた百式だがすぐに黒桜の峰を蹴り上げ

チェーンソーを押し返しそのまま万能者の胸の装甲を切る

黒桜は装甲、そして万能者の生身まで届いたらしく少しだけ血が見

えた

火花がと万能者は同時に後ろに下がる

万能者は切られた場所を

百式は黒桜を見る

(装甲を完全に切りやがった……!あの状態だったから薄皮1枚ですんだが……てかホント何なんだよあの刀!)

(……本当にコレ何で出来てるんでしょうか……何か不安になってきます……とりあえず戻ったら聞いてみますか)

黒桜には傷どころか刃こぼれひとつない

よく分からない沈黙があったが百式が顔を叩いて沈黙を破りお互い構える

嵐はまだ続いている

アウターミッション31

廃都市

百式と万能者は静かに構えるが動かなかった

(…遅いですね)

百式はここにまだ来ていないゴーストに呆れる

百式の想定ではもう来ているはずなのだがゴーストはまだ来ていない

(ちゃんと時間通り来て欲しいものですね、とりあえず時間稼ぎしませるか)

百式の中では色々計画が出来てはいるがゴーストが来なければ意味が無い

なので百式は時間稼ぎをする為に黒桜を地面に突き刺す

万能者が疑問を持つが百式はそのまま歩き出す

3m程歩きそこで止まる

「…少し遊びましょうか」

そう言うのと百式は拳を構える

「……どういう意味だ？」

「戦いの基本は格闘です、武器や装備に頼ってはいは強くはなれないです、まあデバフ掛けさせて貰いますが」

万能者は少し考える

(明らかな挑発だが相手は片手片目無し、このタイミングでわざわざ格闘する意味は無い、てかデバフって何やるつもりだよ……とりあえず少し乗って見るか)

万能者はチェンソーを止め武器を外しバックパックに入れる

歩き出そうとした時目の前の地面が爆ぜた

万能者はすぐに後ろへと飛び爆ぜた場所を見る

そこには右腕が落ちていた

すぐに自身の手を確認するが右腕が無かった

振り返るが何もいない

それもそのはず

レールガン撃ったクリサリスは遙か彼方に居るのだから

「……………こういう事か」

「私は左腕と左目、貴方は右腕です、利き腕かは知りませんがちようど良いですよ」

百式が動く

万能者も百式へと走り出し間合いに近付いて百式は殴ろうとする
だが想定内だった百式はその左手を掴み万能者を投げ飛ばす

「ウオ?!」

投げられた万能者だが体制を整え着地する

顔を上げるがそこには百式はいなかった

それどころか自身落とされた腕も無かった

「……………は??」

見上げるがBLACKWATCHの戦闘機もガンシップもない

そんな中後ろから僅かなエンジン音が聴こえ振り返ると百式とも
う一人が乗ったジープが走り去っていくのが見えた

「……………」

あれ程啖呵切っていた百式が逃げた事に思考が停止した万能者だ
がジープが見えなくなりすぐに追いかけ始めた

「待ちやがれえ!」

危険な鬼ごっこが始まった

その頃

作戦本部は蛮族戦士がいなくなった事で静けさに包まれていたが
建物の瓦礫からタイラントが出てきた事でそれは終わった

タイラントは自身の確認を行いとりあえずは問題ない事を確認し
先程まで戦っていた場所に戻る

その途中上空にBLACKWATCHのヘリが複数現れ滑走路に
着陸する

ヘリはチヌーク3機

ブラックホーク4機

そして着陸していないがハインド2機とアパッチ5機が上空から周囲を警戒している

チヌークとブラックホークから出て来た隊員達は30名程で半分が銃を持ち施設に入っっていく残りはチヌークから荷物を取り出しそれを組み立てて行く

本部テントの様だ

「ん？ジョーカーが来ていると聞いたが？」

「どうでもいい、生きてるのはいるのか？」

そんな中2人がタイラントへ話しかける

1人は黒の軍服を来たアツチ

もう1人は黒のマントにペストマスクを付けた軍医ノーツ

2人ともBLACKWATCHの幹部だ

タイラントは近くの血溜まりを指差す

それを見てアツチは笑いノーツは興味無さげにどこかへ行く

「はっはっはっ!!勝手に出て結果がコレかとか!是非もなし!」

アツチは足で肉片を集める

「……ん?もしかして死んだ?」

肉片が何も起きないことに疑問を持つアツチ

そこでアツチは近くに落ちていた鉄パイプで肉片を叩く

少し叩いていると肉片が動き出した

肉片どんどん集まり人の形を作りそれはジョーカーになった

裸だが何故か仮面は元通りなのに誰も疑問を持たない

「んっ……っ!やっ!と戻れた」

「ほれ、本気(笑)で戦って負けるとは情けないのう」

アツチはジョーカーへ浴衣を渡して言う

「だっっていくなり覚醒っぽい事しちやっただもん!」

「油断したお主が悪い、ピーストの奴が呆れておったぞ?…しかしタイラントを切るとは…侮れんやっちゃん」

「私の心配は?」

「他にして貰え」

「ぶうー、そう言えば覚醒してからの攻撃で再生が遅かったんだけど
しらない?」

『随分と余裕だな、ジョーカー?』

「……………」(汗)

『勝手に出た挙句に遊んで負けるとか?』

「いやいや! 蛮族戦士が勝手に覚醒的なのするから!」

『とりあえず戻ったらゲンコツな』

「身長縮んどちゃう!」

「それで済めば良からう」

『すまさないがな』

「だれかたすけてえー!!」

ジョーカーの悲痛な叫びが作戦本部に響き渡った

アウターミッション31（コラボ回ラスト）

「…ホント今日は厄日ですね」

百式は隠れたビルの中で呟く

マーダーの不意打ちの薬から始まり

万能者の攻撃で左手と左目を無くし逃げる途中でアサルターの襲撃と来た

「誰かにお祓いでもしてもらいますか…?」

そんな中通信が入る

『生きとるか〜』

アツチだ

「…今死ぬか死なないかのいい所なんです」

『何が良いのかはともかくそっちに何か行ったようだがなんだったんじゃ?』

「アサルターですよ、全く今日は最高の日ですよ」

『なら最高の知らせじゃ、作戦本部の救出活動に出していたへりが全て落雷で落とされた、恐らくアサルターとやらの仕業で間違いなからう、なのでタイラントを向かわせられん』

「ホント、最高ですね」

『落ち着かんか、まだクリサリスは射程範囲内じゃ』

「向こうは磁力やら雷ですよ?」

『…是非も無いね!』

「ちっ!」

百式は無線を切る

正直何故このタイミングなのかが分からない

だがすぐに思い出す

「…そう言えば万能者とアサルターの戦闘は八百長でしたね、アサルターの援護ですかね…」

川まで逃げればなんとかなるがゴーストが来なければ話にならない

「…っ?!」

策を考えていた百式だが雷に気付き窓から飛び降りる

百式がさつきまでいた場所に複数の雷が落ちる

「……貴方とやり合う理由は無いのですが?」

百式は離れた所にいるアサルターに言うが喋れないアサルターからは声の代わりに雷が帰ってくる

「……面倒ですね、目前でコレはキツイです」

(川まで1kmは切っています、問題はそこまでどう逃げるか…前門のアサルター後門の万能者…笑えてきますね)

百式は近くのビルに入り逃げる

ビルからビルへと出来る限り外に出ないように

(……あつ、これってフラグじゃあ……)

百式が思った時壁を破壊し万能者が現れた

「見つけたぞお!腕返しやがれえ!!」

「しつこいとモテませんよ?」

言いながら位置を調整する

万能者が色々と撃つて来るが百式は全て避け窓から飛び出す

百式の後ろからは死角になる場所を選んで

万能者が追いかけてしようとするが百式のいた場所の壁を破壊しアサルターが入って来る

「え?!」

間の抜けた声を出す万能者だがアサルターの削岩槍が万能者を襲う

(今のうちに)

百式は2人が戦い始めたうちに逃げる

途中見つけたコードで万能者の腕と自身の体を固定し走る

2分ほど走りビルを曲がると橋が見えた

「!かなり近かった様ですね……これでいなくなったら怨みますよ、リヴァイアサン……」

川までは100mもない

百式は走るがすぐに後ろから破壊音が聞こえ振り返ると百式へアサルターが飛んで来た、正確には投げられて来た

(?!、避けられない！)

通常なら避けられるが万能者との戦闘で限界に近い上に気付くのが遅れた

万能者はアサルターを百式狙って投げた

タイミング的にも直撃する

そう思っていたが百式に当たる直前、アサルターが消えた

「……………は？」

代わりに百式の前にはパーカーを着た少女、ゴーストがいる

万能者が疑問に思う間もなく後ろからアサルターに突っ込まれた

「…………ヒーローは遅れて登場するらしいですが随分と疲労したヒーローですね」

「ゼエ…ゼエ…アレが…最後だ…急ぐぞ…」

万能者はアサルターに潰され動けない様だ

2人は走る

すぐに川に着き2人は橋を渡る

だが少し行ったところで後ろからの攻撃が橋の中央が崩れ落ちた

「…………いつまで少女を追いかけ回してるんですか？変態なんですか？」

振り返ったところで目の前に雷が落ちる

上にはアサルターがいる

「…………ボートとか潜水艇とかありますか？」

「ある訳ねえだろ、戻れないなら進むだけだ」

「…泳ぎは得意ですが片手では初めてですね」

「問題ない事に掛けとけ、ベツトは自分の命な」

「ですね…少女の尻追いかけた変態ストーカーやろう（笑）」

「くたばれ！」

2人が飛び降りると同時に万能者が撃つ

だが撃たれたレーザーは2人に当たるよりも早く2人を川から出て来て喰った巨大生物に当たる

しかも当たった場所がほんの少しだけ焦げただけだった

それは食った百式とゴーストを咀嚼しているのか口が動いている

「……おいおいおい、なんなんだよ……」

万能者はそれを見上げる

細長い胴体に細かな鱗が隈無く付いている

口はワニの様に長く巨大な牙が見え鼻の下辺りには長いヒゲの様なもの

そして小さな手が頭から少し離れた場所にある

その姿は龍にそっくりだった

万能者、そしてアサルターも固まる

この非現実的な生き物に

そして龍は大きく息を吸い

「■■■■■■■■■■ツ!!!」

巨大な咆哮として吐き出す

たったそれだけで万能者は後ろへと押されアサルターは飛行ユニットが止まり地面に落ちる

「……………!!?」

落ちたアサルターは龍に雷を当てるが全く効いていない

龍はお返しと言わんばかりに高音の炎を吐き出す

2人は難なく避けるが炎の当たった建物はすぐに溶け崩れ落ちた

「……………シャレにならねえぞ?」

避ける2人へ龍は首を動かし炎を当てようとする

そして炎の熱で橋が燃え、すぐに溶けだし橋が落ちる

2人は龍に近付こうとすると炎を止め咆哮を上げる

「■■■■■■■■■■ツ!!!」

先程よりも近くでくらった2人は吹き飛ばされる

「……………!!」

「うおあ!?!?」

2人を吹き飛ばした龍はまた大きく息を吸う

アウターミッション32

作戦本部

BLACKWATCHはヘリが無くなったものの持ってきた物が無事だったのでそのまま続けていた

いくつかの本部テントやテントフライが建てられその内のひとつの救護テントにノーツが入っていく

作戦本部内からの銃声は止みタンカーで兵士を運んでくる

「生きておる者はすくないの〜」

運ばれてきたのは20名程中にはカーターやエゴールもいる

タンカーで運ばれてきた者たちはそのまま救護テントに入れられる

それを見ながらアツチは離れた場所に設置されたテントに入る

中にはAN-94が簡易ベッドの上で氷嚢を額に当てながら倒れている

「…話をしたいんじゃないが構わんかのう?」

「……一方向的にどうぞ」

「良からう、今回の件はBLACKWATCH的には大成功じゃが逆にからすれば失敗じゃ、ここには例の件については何も無かったからう…カーターを尋問すれば何かしらは分かるかもじゃが…そちらの上に止められてのう……」

「……」

AN-94は喋らない

分かりきっていたのか否定も肯定もしない

「じゃが、あの爆弾の在処だけは分かった、今近衛団が確保に向かっておる」

「……貴女は行かなかったのですか?」

「我等鉄砲隊は休みじゃ、代わりにわしだけがここに派遣されたのじゃが是非も無いね」

「気楽そうでいいですね…」

「ククク」

「……………」

AN―94は何も言わない

BLACKWATCHという深淵は覗けない

覗いて何に認知されるか分からない

「失礼します」

そんな中BLACKWATCHの隊員が入って来る

「1時間後に搬送用にオスプレイが2機、こちらの撤退用にチヌーク3機とハインド6機が来ます」

「地味に待つので、生き残りは何人居た？」

「36名です、ただその中に裸で無傷の者がいました」

「ふむ…恐らく何処かが潜入させておったのじやろう、だがゴーストの襲撃で何も出来ず撤退した、そんな所じやな、無視して構わん」

「了解です」

隊員が出て行くとアツチは思い出した様にAN―94へと顔を向ける

「忘れておった、百式の死亡の情報を各所に流しておいてはくれぬか？」

「？それは構いませんが……………」

「どうやって死亡した、等は言わなくて構わん、少なくとも16はAR小隊が言わなければ大丈夫じや、リホーマーは無理だろうがどうとでもなる」

とりあえずARの口止めじやな、と言いながらアツチは出て行く

「……………」

AK―12について聞く事を忘れていたAN―94だけがテントに残された

その頃BLACKWATCH本部にはAC―130とラプター、ハリヤーが滑走路に入った

AC―130が止まると中から百式を除く特戦隊が降りてきた

イーグル達はAC—130の点検と武装清掃の為に残った

「私達何もやっていないと思うのは気の所為でしょうか…」

「…やってないわね、まあ殆ど百式の独断だけだ」

実際何もやっていない

殆ど百式のアドリブとそれに合わせただけだ

「殆どアドリブになる事はビーストも想定済みだろう、なら特に言わない筈だ」

「だといいいけどね…」

特戦隊の面々は溜息をつきながら本部へと入っていった

アウターミッション32

『……ん？』

ネットワーク内で今回の作戦に関しての情報整理をしていたサイバーブレインは161abから一般ネットワークへのアクセスに気が付いた

ただのアクセスなら気にも止めないがあの作戦後だ

裏切りやらなんやらを期待してそれを見てみたがネットワークに送られたのは加工された百式の画像

加工に気づいた理由はBLACKWATCHの百式は黒のパンツを持っていないから

『……てい』

サイバーブレインは誰かに閲覧されるよりも早くそれを消したが少しだけ考える

『これは恐らくマードー辺りでしょう、ダルマにされかけた恨みつてところですかね……逆に利用しますか』

サイバーブレインは画像の百式がBLACKWATCHだと分からないように再加工して同じ掲示板に再度流す

161abのネットワークを使って

『今回のMVPである百式には申し訳ありませんがこれの方が効きますから』

そして掲示板のURLをコピーし偽造した民間メールに乗せグリフィンへの苦情として各基地、特に百式がいる基地にばら撒く準備をする

これを見た各基地は画像の出処を探すだろう

しかし送信先が161aboと分かっただらどうなるか

そしてこの話がIOP社の耳に入ったらどうなるか

サイバーブレインは笑いながら各掲示板に載せるコピーを作る

内容は簡単に言ってしまうえば161abが百式のあられもない画像をアップロードした件についてのものだ

次いでに憶測も書いておく

161abが百式をセクサロイドにしようとしている、等だ

こんな事が出回ればIOPもタダでは済まない

必死に火消しをしにかかるだろう

『騒がれますね〜♪』

掲示板を見てみると閲覧数がどんどん伸びて行く

5分以内で1万は超えるだろう

中には保存して別の掲示板に載せているものもある筈だ

サイバブレインは頑張って笑いを抑える

マードーはこれを見て笑うだろうがそれがいつまで続くか見ものである

サイバブレインは161abの監視カメラに入り込み様子を見るが今の所何も無い

30分後

サイバブレインは各基地にメールを1枚1枚時間差を付けて送って行く

送った基地の1つを見ると百式と誓約をした指揮官がいる所だった

この画像を見た指揮官はキレてどこかへと電話をかける

そして更に30分後

画像が上がっている掲示板の二つに作ったコピペを載せる

載せた直後に噂好きの掲示板住人に火がついた

他にも様々な憶測が飛び交う

中にはこれはBLACKWATCHの仕業、とも書かれているがBLACKWATCHにも百式はいると書かれてすぐに他の憶測に埋れた

サイバブレインは堪えきれずにネットワーク内で腹を抱え笑う

尚、画像を見たBLACKWATCHの百式がブチ切れたのはい言までもない

そして最初の攻撃対象がサイバブレインで本部施設にかなりの被害が出たのはこれから2時間後だった

その頃にはサイバブレインのやった事は全て終わっておりグリ

フィンとIOPでかなり問題になった

その後、マードラーを殺そうと百式が修復もせずに出ようとしたが百式の偽の死亡情報を流した後なのでビースト達に止められた

その代わりに隠密性能が向上したジャックが161abに向かう事になった

百式はジャックの好きに解体していい、と要請したが殺害は許可され無かった

代わりにサイバブレインのマードラーの入浴中の動画の撮影は許可された

百式は文句を言うがサイバブレインの(幼女の入浴シーンは非常に需要があるという)説得に渋々同意した

その代わり百式は動画を無修正でネットに流すという条件を付けた

高いステルス性能を盗撮に使われる事になったジャックだが特に気にせず渡された高解像度の耐水ビデオカメラを弄るのであった

少し前

作戦本部だった正規軍基地の外

ジョーカーがタイラントの肩に乗り周りを見ていた
やる事がなくジョーカーは暇だった

最も帰ればビーストのお仕置が待っているのだが

アツチはM16に連絡をしているが名前を言わないので新手の詐欺と間違われている

「名前くらい言いなさいよ…」

アツチは詐欺でない事を言ってるがわしじやわし、と頑なに名乗ろうとしない

「暇だな〜」

ジョーカーは暇を持て余していたがふと見上げるとヘリが1機近付いてくる

BLACKWATCHでも正規軍のヘリでもない
政府のヘリだ

「来たんだ」

ジョーカーは呟くとタイラントから降りアツチに近づく
未だに名乗らないのでM16が切ろうとしている

ジョーカーはアツチから無線を奪い政府のヘリを指差す

アツチはすぐに理解し着陸しようとするヘリに向かう

「ジョーカーよ」

ジョーカーは無線にそれだけ言う

『……何の用だ』

明らかに警戒しているがジョーカーは気にしない

「簡単よ、こっちの百式の死亡情報を流すから誰にも何も言わないで
欲しいの」

『何するつもりだ』

「さあ？ 私には興味もないわ、だけどバラされるとこちらもそちらも
面倒になるわよ？」

嘘だ

M16は言おうとしたが止まった

グリフィン側の人形の中でビーストと付き合いが1番長い故に分
かる

『ビーストと話をさせてくれ…』

「自分が何をやったか考えて言う事ね、それじゃよろしくね」

『おい！ まっ……』

ジョーカーは何か言われる前に無線を切る

「……………」

物言いたげのジョーカーにタイラントが近づくがジョーカーは何
も言わずタイラントの肩に乗り寝てしまった

アウターミッション333

作戦本部

外にBLACKWATCHが設置したテントの1つ、救護テント
「私より先に閣下を治療しろと言っているのだ!」

エゴールが治療しているノーツに言う

「黙れ愚患者、カーターより貴様の方が重傷だから先にやってるんだ、
と言うより生き残りで1番の重傷者はお前だ、黙らないと麻酔を抜くぞ」

「抜きたきや抜け!私より先に閣下が治療されるならな!」

「奴は軽傷だからまだ先だ」

「?!…巫山戯るなあ!」

「私が思っていた以上に元気そうですね、エゴール大尉?」

そんな中1人の人物が救護テントに入ってくる

スーツ姿のその人物を見てエゴールは固まる

入ってきたのはキフス・ランバーク

元国連の重役にして国連軍の実質上のトップの男

「な、何故貴方がここに…」

「私が彼等に依頼しましたからね」

「……」

エゴールは黙る

元とはいえ国連の重役

その上現役の政府の人間

立場はエゴールよりも遥かに上だ

「おい、勝手に入ってくるな、愚患者とはいえ感染症でも出たらどうする気だ」

しかしノーツは変わらない

むしろ邪魔扱いしている

「嗚呼、すいません、彼を大人しくさせようと来たのですが…」

「ならいい、ついでに向こうも黙らせて来い」

「分かりました……エゴール大尉、大人しく治療を受けてください」

「……了解です」

キフスはテントを出ていった

数分後

キフスは待ち患者を黙らせアツチに状況を聞いていた

「……とりあえず生き残りはあ奴らだけじゃ、施設については見ての通り、向こうはまだじゃ」

「？、まだなのですか？」

「戦闘は終わつとる筈じゃがまだ万能者ヤラがおつてな」

「分かりました、其方はいなくなり次第で構いません」

「了解じゃ、それと問題が1つある、まだAK—12と連絡が着かん」

「……彼女はここには居ないのでですか？」

「リホーマーの所じゃ、向こうで問題があつたのかもしれない」

「……通信障害かも知れないのもう少しだけ待ってみましょう、何かあつたら追加で依頼をしますが大丈夫ですか？」

「その辺はビーストかブランにしとくれ」

「分かりました、それと破壊されたものですが……」

「戦車は大丈夫じゃ、元々使い捨てじゃしの」

「へりはどうします？、EMPで使えなくなつたへりならこちらでも用意は出来ませんが……」

「なんと！ではリストを貰えるか？」

「良いですよ、元々廃棄に困っていた物なので」

「是非もなし！」

その日の夜

戦地となつた街にクロウラーが現れた

現れたクロウラーは内部からは複数のハッキングされた装甲人形が出てくると倒壊した1つのビルを調べ始める

数分後

瓦礫の中からマードアのガトリンググレイルガンとバルカンのM6
1を発掘しクロウラー内に入れる

「……意外と見つからないものですね」

イージスが声の方に向くが誰もいない

『出て来て下さい、人形に貴女を見つける事は不可能ですの』

「……まあ万能者にも見つかりませんでしたし、今でます」

するとビルの一部が動き出した、いや人形がビルと同化していた

人形がそれを解除すると色や形がハッキリと出てくる

まるでアニメに出てくるくノ一のような格好をした人形

『貴女からのデータは百式からのと同レベルで貴重です、しかしここ
までやってやっと万能者から見つからないレベルですか……』

サイバーブレインが喋っているがくノ一はさっさとクロウラーに
入っていく

「何をしているんですか、主殿にこれらの情報を早く献上しなくては
！」

サイバーブレインは無いはずの胃が痛むのを感じた

(どうしてBLACKWATCHが作る人形は癖が強いのでしょうか
……)

サイバーブレインの操るイージスがクロウラーに入るとクロウ
ラーは地面に潜っていた

アウターミッション34

世間がハロウィンと騒いでいるがBLACKWATCHは色々時期が重なった、と言うのもありハロウィンの最中絶賛事中だ

正規軍、元作戦本部では治療が終わり負傷者達を本部からの補充として来たオスプレイに乗せ正規軍の病院へと運びBLACKWATCHはテント類を片しチヌークチヌークへと乗り込みタイラントとジョーカーは追加でやってきたC-130に乗りキフスとAN-94の乗った政府のヘリと一緒に本部へと戻っていく

そして戻りながら未だに連絡の付かないAK-12の搜索を本部と連絡しながら決める

少し進んで夜の161ab

とある一室でM16は自身の銃を整備していた

通常分解をしバレルクリーニングをし各所にオイルを塗る

終わると銃を元に戻し銃を耳に近付けてチャージングハンドルを何回か引く

異音は聞こえない

銃を置き次にマガジンに弾を込める

ローダーを使い迅速に込める

部屋にカチカチつと音が響く

20のマガジンに弾を込め終わると引き出しから60連ロングマガジンを取り出した弾を込めていく

込め終わるとロングマガジンをM16に挿入しボルトリリースボタンを押す

そしてチャージングハンドルを少しだけ引きエグゼクションポートを見て銃に弾が装填されているのを確認する

確認すると残りのマガジンをポーチやポケットに入れていく

入れ終わるとナイフ、正確にはM16の銃剣を取り出し軽く研いで

いく

時間を掛けた方がいいがそんな余裕はない

ある程度研ぐと銃に着剣し構える

ロングマガジンは初めて使うが少し重いだけでそれほど違和感はない

M16は銃をテーブルに置き近くに置いてある木箱へと手を伸ばすが触れる直前に手が止まる

「……意味は無いな……」

そう言うとう手を引つ込め代わりにARを取るとセレクターをフルオートにして立ち上がり部屋を出ようとする

その時端末にメッセージが入る

見るとSOPⅡからで準備が出来た、というものだ

M16は了解、と送り部屋を出る

「……出来ればビーストの方が良かったが……」

M16いや、AR小隊の目的はラボに侵入したBLACKWATHだ

なぜ気付いたのか、そう言われても分からないが何かM16達を確信させていた

だがM16個人的にはビーストであれば良かった

「……言っても仕方ないか」

M16は一息つき振り返るよりも早くライフルの銃剣で後ろを突く

それは銃剣を受け止めるがM16はそうなると想定済みだ

すぐにトリガーを引き5・56mm弾を撃ち出す

だが相手も想定済みだったようで全弾切り落とし後ろに下がる

「……やっぱ無理か」

ここまでは想定済みだったがワンチャン1発だけでもかすれば、と思っていたが無理だった様だ

M16は空になったロングマガジンを捨てすぐに新たなマガジンを挿入しボルトリリースボタンを押す

後ろから様々な声が聞こえるがM4の放送で声が離れていく

そして前にいるサイボーグ人形、ジャックを見る

「久しぶりなのに随分なご挨拶だね」

「…鈍ってないか確かめたんだ、しかし鈍るところか早くなってるか？ジャック・ザ・リツパー？」

「忘れたの？私は身体は無く脳や内蔵が入っている人形だけど元は人間、身体が追い付く限り成長するんだよ？」

「内蔵も入っていたか…てつきり脳だけかと思っていたよ」

「ふくん…まあいいや、それじゃあ…解体するよ♪」

ジャック・ザ・リツパーとM16の戦闘が始まる

アウターミッション35

「それじゃあ…解体するよ♪」

言うやいなやジャックは突っ込んでくる

距離は10m

普通なら馬鹿にするが相手がジャックなら話は別だ

ジャックからすれば10mという距離は無いに等しい

M16は撃ちながら後ろに下がるがジャックは既に構えている銃の下にいる

M16はストックで斬りかかってきたジャックの腕を殴り付け蹴る

だがジャックは余裕でかわすがそこに弾を撃ち込まれる

ジャックは動じずにかわす

「……早すぎだろ、なんで1m未満からのフルオートを全弾かわせるんだよ…」

「その銃なら10cmあれば十分避けられるよ」

「…ああそうかい」

M16はマガジンを変える

ビーストに近接戦闘術を教わっているが身体が僅かに追い付いていない

ジャックは持っているカランビットナイフを回しながら少しずつ近付いてくる

一瞬間を置いてM16が撃つ

ジャックは弾を切りながら近付いてくる

M16は銃の持ち方を変え銃剣術で接近戦に備える

近づいてきたジャックのナイフを捌きながら隙を伺う

しかしナイフとライフルではパワーは兎も角スピードは向こうが上

だがM16は負けじと無理矢理隙を作りそこを突く

「……♪」

それが畏だと気づいた時にはジャックに懐へと入り込まれていた

「解体するよ♪」

ジャックの早い連撃がM16を襲う

M16は複数回切られるもマガジンを落とし僅かな隙を作りジャックへ蹴りを入れる

ジャックはそれをガードするも数メートル飛ばされる

M16は新たなマガジンを掴もうとするが

カランカランっと金属音に下を見ると床には斬られたマガジンと弾が転がっていた

すぐにチャーミングハンドルを引くが弾は入っていない

「……コノヤロウ」

切られた箇所はほとんどマガジンのあった場所

ほとんどかすり傷だ

それを確認すると銃のピンを抜きストックとハンドガードを掴み一気に引く

すると本体部分の上下で別れ内部パーツが飛ぶ

右手でハンドガード付きの本体上部をキャリングハンドルを持ち剣のように

左手でストック付きの本体下部のグリップを逆手で掴みトンファー風にして構える

「…へえ、良く教わってるね」

ジャックは感心するがM16内心焦っている

と言うのもこのやり方は少ししか教わってない

正直言うとなんか忘れてる

やった方がいいがほぼ形だけ

「少しは出来るかな？」

ジャックが前に出た時外からの銃撃がジャックを襲う

ジャックは少し驚くも全て交わし柱に隠れる

外を見ると隣の建物にM4がいる

『姉さん！しっかりしてくださいー…まさかお酒を…』

「飲んでない！飲んでないぞ!?!」

無線からM4の声が聞こえる

否定するが声が裏返ってしまいM4は疑っている

禁酒なんてされたらたまつたもんじゃない

『ならちゃんと思ひ出してください！少しですが私達はビーストから戦術を学んでいたんですよ!?!』

「……確かに一方的に負けたら笑い物だな」

M16は深呼吸をしジャックに集中する

「……終わった？」

「ああ、それじゃ……第2回戦だ！」

2人は同時に動いた

アウターミッション36

161ab

「ああ、それじゃ…第2回戦だ!」

2人は同時に動いた

M16はハンドガード側でジャックを突くがジャックはそれを避け斬りかかるもストック側で止められる

そこへM16は頭突きを繰り返す

足が来ると思っていたジャックは少し驚くもギリギリ避けて後ろへ下がる

それと同時にM4が援護射撃を行うがジャックは片手で全て切り落とす

「…少しは手加減してくれても良いんだぞ?」

「なんで?それじゃ相手に悪いよ?」

「その相手が言ってるんだが…言うだけ無駄か」

M16はため息をつきつつ動く

だがジャックは動かずそのままナイフをしまい変わりに鎌を取り出す

「……やっぱ」

M16は動きを止めて下がる

別にナイフより鎌の方が得意、という訳では無い

だが2本の鎌から繰り出される攻撃は予測しづらい

現に鎌の後端にヒモが付けられている

鎌でジャックがやるのは振り鎌

リーチは伸びるは軌道が詠みづらくなるは…

正直めんどくさい

「……勘弁してくれ」

言うやいなやジャックが動いた

今は普通に持っているが振り鎌はいきなり来る

M16は警戒しながら鎌を捌く

今の所問題は無いが…

(来たっ！)

ジャックが鎌から手を離した

その瞬間鎌のリーチは伸び受け止めようとしたストックを超え刃が首に来る

M16は何とか前に出て首が狩られるのを避ける

刃は首の後ろを掠めただけで終わる

だがジャックは左にいる上に首の前にも鎌の刃がある

罨だ

「まずっ?!」

「ガザミ狩り」

ジャキンッ!

という音と共に刃が交差した

「…っ?!…あつぶねー!?!」

M16はハンドガードを間に入れて出来た僅かな隙で何とか回避したがハンドガードがバレル事切り落とされた

ガザミ狩り

ジャックの技で両方の鎌の刃で対象を挟み切断するもの

場合によっては左右から挟まれ逃げ道を無くす

「……危ねえ、首が落ち……?」

M16はジャックが全く別の場所を見ている事に気づいた

M4の方でもない、別の場所を

「…もう終わりく?それじゃ次で最後だね」

言うどジャックは鎌をしまいナイフを取り出す

そして低く構える

「……それはダメだろ……」

M16は何が来るか分かった

どう来るか解つていても速すぎて避ける事も受ける事も出来ない
光速の攻撃

「……………」

ジャックが何か言っているが小さ過ぎて聞こえない

そして

「……！」

「！今だ!!」

ジャックが消える直前にM16は後ろに倒れると同時に叫ぶ
ジャックは消えた瞬間に気づいた

M16の後方20mの所でSOPⅡがグレネードランチャーを撃つのを

そして

Dawn!

M16のすぐ近くでグレネード弾は爆発した

M16は後ろに飛ばされる

「M16！大丈夫?!」

「……流石にグレネード弾が来るとは思わなかったぞ……」

「だってジャックに切られちゃうじゃん」

M16が文句を言うが

『……すいません、逃げられました』

M4の通信で正面を見るがジャックはいなかった

「切られたか……」

M16が床を見るとグレネード弾の爆発で黒く焦げているがモゼの奇跡の様に綺麗に割れていた

「……まさか爆発事切ったの!?!」

「BLACKWATCHなら何人もこれをやる」

SOPⅡが驚くがM16はこれを見た事があるので驚かない

「とりあえず、言い訳を考えるか……」

無線からM4のため息が聞こえた

アウターミッション37

BLACKWATCH本部、会議室

今BLACKWATCHでは短期間で2度の幹部会が開かれるという前代未聞の事に古参メンバーですら動揺していた

その上招集を掛けたのがビーストという事もあって通常の幹部会よりも不穏な空気に包まれている

今回、招集に応じたメンバーもブランが招集するよりも出席率が高い

来たのは開催者のビーストに始まり、インセクト、ブラン、トラチヨ、ゴースト、ノーツ、アツチ、ティス、チーフ

なんとほぼ全員が揃っている、これも隊員達を不安にさせているのだが：

ビースト「……お前人望無いな……」

ブラン「くたばれ、てか元はてめえの創った部隊だろうが」

ノーツ「：貴様らのコントの為に呼ばれたのなら戻るぞ」

ビースト「なら戻らない話をするか、万能者の腕の解析結果が出た気がする」

アツチ「なんじゃ？気がするって」

ビースト「仕方ないだろ：なんとたつて解析不能が出たんだから」

ノーツ「ほう？」

ビースト「興味が出て何より、いくら解析しても正体不明、少なくとも地球上のものでは無い、と言うのが解析班の見解だ」

チーフ「では万能者は宇宙人、という事ですか？」

ビースト「そもそも生物なのかすらあやうい」

アツチ「ロボット、という事かろう？」

ビースト「寧ろサイボーグとかの方が近いかもな、出て来たのは配線関係で中核が無かったからなんとも言えんが：少なくともあの腕が義手じゃない限りアレは生物じゃない、因みにあの謎パワーは油圧式だ、他にもエネルギーバイパス等が見つかった、装甲に関しては鋼鉄なのは分かったがデタラメ過ぎて解析班が匙投げた、因みに腕の時

点で投げる寸前だった」

ブラン「それでどうするんだ？」

ビースト「今回の件で泳がせておく事は出来ねえからな、だが出来ることなんて万能者に対してはアレの拠点になつていいる所を潰すくらいしか出来ん、俺らが出れるなら別だがな」

ブラン「出させねえぞ、タダでさえジョーカーの肉片が蛮族戦士とアンノウンに盗まれてんだから」

ビースト「そのアンノウンについてなにか分かったか？」

サイバーブレイン『ダメです、正規軍基地で見つけられなかったのはあそこの監視カメラが古かったからです。ネットワークで見つからないとなると……』

トラチヨ「彼女のボディを急がせた方がいいのでは？」

ビースト「……………」

チーフ「マスター？」

ビースト「しゃーない、7%出すぞ」

ティス「…一気にか？出し過ぎじゃねえか？」

ビースト「仕方ないだろ…下手に様子見してたらそれこそ第四次大戦案件だ、それに現時点で百式があそこまでやられたんだ…もう無視は出来ねえな、てか出した所で合計10%だぞ？寧ろ3%でここまでやった事を褒めて欲しいものだ」

アヅチ「詳しくは知らんがそれだけでどうなったんじゃ？」

ブラン「3%で医療関係が3世代程先越し、メーサー技術に既存よりも強力且つ小型なレールガン、通常兵器では太刀打ち不可能な装甲、ナノマシンの小型化、その他もろもろ、因みに選んで情報出しているから出し方次第では一つに特化させることも出来る、前回は医療関係を多くし兵器関係はついでだ」

アヅチ「oh……ん？だったらあの反物質炉？なんて要らなかつたんじゃね？」

ブラン「全部アレでやってたら意味無いだろ、てか墮落の一方だ」

ノーツ「医療関係を出すなら賛成だ」

ビースト「ナノマシンの更なる小型化と蓄積情報量の増加、その他

もろもろ」

ノーツ「なら構わん、出来るまでが長いがそれは目を瞑ろう、後はその他もろもろ次第だが」

チーフ「あの…3%とは何ですか？」

ビースト「そういえばお前には言つてなかつたな…なあに、俺らが昔遺跡から見つけた他の何処よりも多い物さ」

チーフ「遺跡?…?!まさか!」

ビースト「そのまさかだ、北蘭島の遺跡にあつた物だ、オーパーツやらなんやら政府の調査でも無理だつた生体認証を開ける事が出来てな、中にあつたオーパーツやらを色々盗ってきたんだよ、残らず全てな、もう北蘭島の遺跡は空だ」

ツアーリ・ボンバ並の爆弾発言を平然とするビースト

アウターミッション38

BLACKWATCH本部、病棟

この一室でビーストは椅子に座りタブレットでブラックドックからの提出映像を見ていた

ベットには百式が未修復の状態で眠っている

百式は戻ってきて報告後に意識を失った

その後、修復しようとした時に1度意識を取り戻し修復を拒否した意識を失った

それ以降半月も意識を取り戻していない

未修復とは言っても最低限の修復はしている

しかし失った左目と左手はそのままだ

ビーストは百式を見ながら映像を見る

映像はちょうど地下施設から出てきた所だ

そこで正体不明の勢力から襲撃を受ける

しかしBLACKWATCHの幹部であるチーフがいる上に鉄血のハイエンドモデルが3人もいる

結果は襲撃は失敗し全滅

襲撃者については未だ調査中

ビースト「……」

ビーストは無言でタブレットをテーブルに投げ捨て葉巻に火をつける

病棟であるここは禁煙なのだがビーストはそれを無視している

因みに病棟でビーストを注意出来るのはノートだけだがそのノートは今病棟にはいない

そのため医師や看護師等はビーストが煙草を吸っていても見て見ぬ振りをする

それを後目にふと、百式を見ると意識を取り戻したのか半目でビーストを見ていた

ビースト「……半月も寝た気分はどうだ？」

百式「……最高に最悪ですね…頭の中が半分持っていかれた気

分です…」

ビースト「あながち間違っていないな…」

百式「……何かしたんですか…」

ビースト「それは後ほど、それで？修復を拒否したんだ、改造でもする気か？」

百式「…記憶がありませんがそれでお願ひします」

ビースト「眼と手は？」

百式「義眼と義手で」

ビースト「リクエストは？」

百式「改造後に」

ビースト「あいよ」

ビーストが端末を操作を操作し待つ事数分

PPsh—41がストレッツチャーを引っ張って入ってきた

それに続く様に数名の看護師が病室に入ってくる

看護師は手際良く百式をベットからストレッツチャーへと移し固定具で百式を固定という名の拘束をする

百式「……え？」

PPsh「す、すいません！少しチクってしますよ」

そう言うPPshは百式へ注射を打ち百式は直ぐに意識を失った

ビースト「……うわあ」

これは予想外だったのかビーストも呆れている

呆れつつ葉巻を吸おうとした時、看護師に葉巻をひったくられゴミ箱へ投げ捨てられた

直ぐに別の看護師が何かの薬液をゴミ箱へと注ぎ葉巻の火を消す

見て見ぬ振りはするが言わないだけで煙草は消される

そしてPPshと看護師達はストレッツチャーを引いて病室を出て行った

病室に1人残されたビーストは無言で窓から出て行った

アウターミッション39

今BLACKWATCH本部はちょっとしたお祭り騒ぎになっている

というのもグリフィンがリホーマーの所へ攻撃を仕掛けると言うのでH&Rへの監視に使っているカラスからの映像が各所で流されている

それを着に賭けが行われているのだ

BLACKWATCHとしてはリホーマーがやられるのは少し困るが、あえて監視のみにし各所の戦力を見ようと言うことになった

もしリホーマーが負けて敗走したらある程度の支援はするが、死んだ場合はH&Rにあるモノを全て奪う魂胆でいる

MDRと連絡が取れ無くしたのはBLACKWATCHのミスだが今更どうすることも出来ない

ビースト「……ハア……」

ビーストは映像を後目に溜息をつきながら地下に向かう

問題が発生したのだ

1分程で地下のコントロールルームに着いた

中に入るとオペレーターの一人在気付きビーストへと現状報告をする

オペレーター「現在、センチピード、スパイダー、スコープオン、バレットビーの4名が別々の戦闘を街中で起こしています、相手は不明ですが同じチャイルドソルジャーかと思われます、このままでは不味いです」

ビースト「場所は」

オペレーター「……ここです」

オペレーターが端末を操作するとモニターの一つにそれが表示される

ビースト「……グリフィンの城下町か……あのバカ共が」

オペレーター「こちらの部隊は市民の避難誘導に徹しています、後数分でグリフィンの人形が戦闘地域な入りますが可能な限り引き伸

ばすようには言っておりませんが…」

ビースト「近くの部隊は」

オペレーター「少し待ってk『すぐ近くにアタランテ隊の3名がいます、即応可能です』…との事です」

ビースト「こっちの指定したポイントにつかせろ、モニターに現場のライブをまわせ」

サイバーブレイン『カラスを現場に行かせてあるのでその映像を出します』

モニターに映像がでる

死傷者は不明だが少なくともまだ戦闘は続いている

他のモニターにはアタランテ隊のメンバーがビルを登っている映像があつたりする

そんな中に戦闘中の映像が4つ出てきた

ビースト「…全員と繋げるか?」

サイバーブレイン『…可能です、向こうが取れば…ですが』

ビースト「繋げ」

サイバーブレイン『了解……繋がりました』

ビースト「よう、馬鹿共、今すぐ戦闘を終わらせてこっちで指定したルートで家に帰んな」

???『…誰よ』

ビースト「誰だつて良いだろ?急がねえとグリフィンの人形共が出てきて全員仲良く指名手配だ、それとこれはお願いじゃなくて命令だ」

???『従う義理はn「撃て」?!ツツ?!』

?『左手ヒット』

ビースト「さつさと動けクソガキ共、テメエらがどれだけ早かろうが強かるが関係ねえんだよ」

言い終わると全員が移動し始めた

ビースト「ルート外れたら殺さない程度に撃て」

?『了解』

まだ油断は出来ない

アンダーミッション40

少し前

グリフィン本部から少し離れたビルの屋上

ここから1人の人形がグリフィンを見ていたしていた

その人形はステルス迷彩なのか姿は見えない

少なくとも通常の戦術人形や人間にはその姿は見えない

そんな中、遠くで銃声は爆発音が聞こえた

無視していたが1分もしないでサイバーブレインからの通信で現場に向かう

現場に着くと何ヶ所かで煙が上がっている

直ぐに近くのビルの壁を駆け上がり屋上に着くと自身のライフルを構えスコープで状況確認をする

全ての戦地で見知った女子高生達が知らない女子高生と戦闘を繰り広げていた

それを呆れながら見ていると別のビルに他のアタランテ隊が見えた

特に気にもせず電話しているJKソルジャーを見ていると

ビースト『撃て』

無線からビーストの合図が出た

狙いを少しずらし見ていたJKの肩を撃ち抜く

空薬莖を回収しながら見ていると端末に何か送られてくる

見ると戦闘をしていたJK達の撤退ルートの様だ

つまり撤退を監視しろ、という事だ

溜息をつきつつ撤退を監視する

数分後

? 『2人撤退完了です』

無線から他のアタランテ隊の声が聞こえる

自分の所も2組が撤退した

自分の監視は後見知ったJKのセンチピードだけだ

サイバーブレイン『問題発生です、スパイダーのルート上にA R小隊が入りました』

？「奥まった路地裏なら入って来ないと思いましたが？」

サイバーブレイン『表は逃げ惑う市民でごった返していますからね、それにウエルロッドが小隊を先導しています、スパイダーがルートから外れたら捕捉されます、接的まで1分』

？「直ぐにポイントを送ってください」

サイバーブレイン『……どうぞ』

？は接的ポイントを見ると屋上を走り出す

フリーランニングの要領で障害物を避けながら向かう

途中、10 m程空気があったが難なく飛び越える

接的まで20秒

？「：ギリギリですね」

眩きながらも急ぐ

そしてポイントの路地裏が見えたがA R小隊の音が聞こえる

？は狐の面を被り屋上の柵を超え飛び降りる

飛び降りながらほぼ真下にいるA R小隊を確認する

M4にM16、s o p m o dなウエルロッド、そして知らない人形が1人

？は自身のライフルのセレクトターをフルオートにする

そのタイミングでM16が気付いたと同時に声を上げながら回避運動をとる

それと同タイミングで撃ち始めた

A R小隊は直ぐに物陰に隠れる

知らない人形は一瞬遅れて隠れたがウエルロッドが遅れた

ウエルロッドは腕で頭を守る

弾は運良く当たらなかった

だが上から降ってくる？に潰された

？「着地の邪魔をするなど習いませんでしたか？」

ウエルロッドを踏み潰したがそれを気にせず？は着地と同時にロードをしA R小隊にライフルを向ける

？「どうして何時も面倒な時に出てくるんですか？」
？は問い掛けた

アンダーミッション41

? 「どうして何時も面倒な時に出てくるんですか?」

? の問いを聞きながらM16は様子を見ようとするが撃たれ直ぐに引込む

? 「……無視ですか」

? は言うやいなや右手でライフルを構えながら左手でMEUピストルを抜きウエルロッドに数発撃ち込む

? 「ッ?!」

M16 「RO動くな! : 喰われるぞ」

M16 は物陰から出ようとしたRO635を止める

撃たれたウエルロッドはダミーだ

しかしいくらダミーとは言え味方が殺されるのを見ているだけなのは最悪の状況だ

だが相手はBLACKWATCHだ

出て行けば殺される

ROは何か言いたげだが何も言わなかった

M16 「ようEBR! この騒ぎはBLACKWATCHか?」

EBR、正確にはMk14EBR、M14の近代化改修モデルのバトルライフル

理由は不明だがM14と呼ばれるのを嫌う

その見た目はまるで鉄血人形となったM14だ

しかもEBRは軍用モデルな上にBLACKWATCH所属、しかも部隊長

実力はAR小隊全員よりも上だ

EBR「正確に言えばそうですが大きく見れば違いますね、言ってしまうば年頃の女子高生達の火遊びが過ぎただけです」

M16 「虫達か : ちゃんと教えて無いのか? 人に迷惑をかけちゃ行けないって!」

EBR「言ってる聞いてないから何時までも虫何ですよ、せめて蟲、出来れば幻虫か幻蟲位にはなって欲しいものです」

M16「幻想種は無理だろうな！」

2人が話している間にSOPMODの準備が出来グレネードランチャーを上撃ち上げる

EBRは一瞬だけグレネード弾を目で追い直ぐに狙いに気付く
グレネードは注意を引く為ではなく当てる為に撃たれたのだ

EBRはMEUピストルでグレネード弾を撃ち落としホルスターに戻す

SOPMOD「嘘でしょ?!」

M16「想定内…だっ！」

M16は隠れていたダストボックスを乗り越えながらEBRを撃つ

僅かに遅れたEBRだが横へローリングしながら撃つ

双方共弾は当たらなかったがダストボックスからM4が援護射撃をする

ROもそれに加わる

EBRはそのままビルの影に隠れる

EBR「…多勢に無勢…:…:…:…:スパイダー！」

言うやいなや撃っている3人のハンドガード上部に

SOPMODの頭の上にそれは落ちてきた

RO「…:…:ツヒイ」

それは大型のタランチュラ

ギネスに乗りそうなレベルの大きさのタランチュラが目の前に落ちてきたのだ

SOPMODは頭の上だが

ROは何とか悲鳴を呑み込んでタランチュラを振り落とし踏み潰す

他の2人も同じ様に落とし踏み潰した

SOPMODは頭に落ちてきたのがタランチュラだと解ると泣き
そうなのを我慢しタランチュラを渾身の力を込めて思いつきりビルへと投げ付けた

だがタランチュラが出て来た事でEBRから目を離してしまった

M16が視線を戻すとすぐ目の前にEBRがいた
銃口の下に銃剣が見えている

M16はほぼ条件反射的に蹴りを加える

EBRはそれをライフルで受け止める

そして2人の動きが止まった

M16は自身の銃が弾切れな上にサブを持ってきていない

しかも足を戻せば撃たれるか突かれる

自身の銃で攻撃も出来るがやれば確実にM16の方が被害がでる

EBRはライフルには弾があるがM16を押し倒せば後ろの3人の銃撃が来る

今撃たれないのはM16が盾となっているからだ

そしてサブは弾切れ

他のBLACKWATCHの戦術人形ならどうにでもなるのだから
うがりミッターのないEBRにはそれは出来ない

スパイダーはAR小隊にタランチュラを落とすとそのまま進んで
行っただけもう居ない

2人とも予備のナイフはあるがタイミングを間違えればやられる

だが2人とも策はあった

それはM16の策の方が早く出た

EBRの後ろでウエルロッドのダミーが最後の力を振り絞って銃
を構えた

ウエルロッドのダミーはまだ殺られていなかったのだ

そして銃口がEBRを捉えトリガーを…

ドンッ！

引けなかった

ウエルロッドのダミーの頭部が吹き飛んだのだ

EBRの策が上をいった

M16「…：…なっ…」

M16、そして後ろの3人が驚き硬直する

EBRはその隙を逃さない

銃を動かしてM16のバランスを崩し腹を勢い良く蹴る

M16が蹴飛ばされると3人はEBRを撃とうとするがEBRは素早く動きながらライフルを撃ち物陰に隠れる
その弾はM16に直撃した

アウターミッション42

EBRはビルの影に隠れサブのマグチェンジをしながら様子を見る

M16は倒れたがすぐにEBR同様に隠れた

弾は当たったがアーマーの場所なので傷にはなっていない

EBR「……どうしますか……」

他のアタランテのメンバーに援護させても良いが2人とも対物ライフルなので当たれば致命傷だ

AR小隊は殺せないので援護はさっきので最後だろう

ここまで来てくれれば話は別だが……

EBR「……何か使えそうな物は……」

周囲を見渡す

ビルの上の方に脆そうな所があるがグレネード等の爆発系じゃないと無理だ

EBR「やっぱり付けるべきでしたね……」

そんな中AR小隊が隠れている所のビルの管が目に入った
なんの管かは分からないが

EBR「……かけてみますか……ダネル、右に18……撃て」

EBRが合図すると遠くから発砲音が聞こえ管が爆ぜた

見た感じ何も出てきていない様だが匂いが辺りに広がった

M4「?!ガスです!すぐに離れますよ!」

どうやらガス管だったらしい

AR小隊が引いたのでEBRも離れようとするが

M16「お前らは何がしたいんだ!」

M16が下がりながらEBR:嫌、BLACKWATCHへと叫ぶ

EBR「……何も、強いて言えば死ぬ為の準備ですかね」

そういうとEBRはビルの室外機や窓枠を足場に屋上へと駆け上がって消えた

M16「……矛盾した死にたがり……か」

この声は誰にも聞こえなかった

サイバーブレイン『……全員の離脱を確認、アタランテ及び虫達はそのまま教会に向かつてください』

E B R「了解です、その後は？」

サイバーブレイン『教会の地下にコチラの地下鉄を繋げてあります、そこから戻って来て下さい、列車はまだですがトロツコなら使えますので』

E B R「地下鉄が使える事にびっくりですが了解……全員聞こえましたね？教会に向かつてください」

E B Rは返事を待たず無線を切るとマントを被り姿を消した

少し前、BLACKWATCH本部

オペレーター「……磁場の渦を確認、恐らく渡航者です」

オペレーターからの報告にビーストは頭を抱えた

渡航者とは異世界若しくはパラレルワールドの地球から何らかの原因でこの世界に來た者達の事だ

BLACKWATCHでは渡航者を発見次第すぐに保護する事になっっている

と言うのも2回渡航者を倒してしまった際に最悪の事態が発生したので出来るのであればBLACKWATCHで保護する事にしたのだ

ビースト「……場所は？」

オペレーター「日本と太平洋上です」

ビースト「アイツらに連絡しろ、若しかしたら仲間が流れて來たって、日本は俺とノーツで行く」

オペレーター「了解です、時間はどうしますか？」

ビースト「1時間後だ」
ビーストはコントロールルームを出た

アウターミッション43

数時間後

日本海上空にはチヌークと護衛のスーパーハインドとアパッチロ
ングボウがそれぞれ一機つつ日本へ向けて飛んでいた

サイバーブレイン『虫達及びアタランテが本部に着きました』

ビースト「虫共は逃がすなよ？俺が戻ったら説教タイムだ」

サイバーブレイン『了解です、それとリホーマーの所が終わりまし
た』

ビースト「どうなった？」

サイバーブレイン『詳細は万能者のダミーがカラスにバグを起こさ
れたので分かりませんがリホーマーは撤退しました、現在はS09地
区5東部廃都市に潜伏しています』

ビースト「また厄介な場所に…会社はどうした」

サイバーブレイン『廃棄したようで爆破して今は瓦礫に埋もれてい
ます』

ビースト「部隊を送って発掘させろ、回収出来るのは全部回収だ」
サイバーブレイン『了解です、それと特戦隊が呆れていますよ？ま
た護衛も付けずにつて』

ビースト「トモエにジャック、ゼノモーフがバトルとウォーリアー
が10体づつ……」

チヌークの後部ハッチを開けてタバコを吸っているビーストが振
り返る

まず荷台の先頭にノーツ、そして向かい合って座る2本の角の生え
た白髪の武人、近衛隊所属のトモエ

そして天井や壁、床には20体のゼノモーフ
それに混じって天井にいるジャック

ビースト「他に誰が居れば良かったんだ？」

サイバーブレイン『…十分ですね、先程詳細な場所が特定出来たの
でパイロットに送って起きました、そろそろ日本に入ります、日本で
は無線が届かないので気を付けてください、通信終了』

サイバーブレインが通信を切って1分もしないで本部と通信が繋がらなくなる

そして眼下には荒れた港が現れた

ビースト「今日日本に入った、本部と通信出来ねえからな、いつも通り自己判断で切り抜ける、ハインドはそのまま太平洋上のポイントに迎え、何かあったらアパッチを向かわせる」

『『『了解』『』』』』

それから一時間程で反応があったポイントに着きハインドはそのまま太平洋に出る

チヌークは広い場所を見つけるとそこへ着陸する

ビースト「お前らは先遣だ、何か見つけ次第呼べ」

ビーストが言うのとゼノモーフ達は道路を駆け抜けたり建物の壁を登っていく

ビーストは残った4人を集めライトの様なデバイスを地面に向けてスイッチを入れる

すると地面に3Dマップが映る

ビースト「詳細斗は行っても100キロが10キロに狭まったただけだ、中心はここから西に2キロ程行った場所」

言っている時もマップは変化していく

反応の中心ポイントが表示され次にビースト達が

そしてゼノモーフ達が表示されゼノモーフが通った後のマップはある程度詳細化されていく

ノーツ「広過ぎだ、2機に空から監視させるぞ」

ノーツが言うのとチヌークは飛んでアパッチと共に捜索に向かう

トモエ「私はこのビルに上ります、この辺りで一番高いようですし…この範囲でしたら狙う事は可能です」

トモエは中心から少し外れたビルを中心に円を書く

大体半径3キロ程だ

ビースト「ならノーツも連れて行け、何かあった時に回収が楽だ」
ノーツ「仕方ないな」

ビースト「ジャックは俺と来い」

ジャック「ハイ」

ビースト「何かあったら無線入れろよ？行け！」

ビーストの声が響くと同時に4人は消えた

アウターミッション44

日本、とある街

ノーツ「まったく…なんで僕がこんな事やってるんだ」とあるビルの屋上でノーツはぼやくが

トモエ「仕方ないじゃないですか、渡航者が死んだりしては大変な事になりますし」

ノーツ「…ならせめて無傷じゃない事を祈るか…」

BLACKWATCHの医者であるノーツは怪我人や病人以外興味がない

そんなノーツがここにいる理由は渡航者を生かすためだけだ

ノーツ「戦闘でも始まればまだマシだが…」

言いながら双眼鏡で渡航者を探す

トモエはため息を吐きつつ周囲を見渡す

現在、日本は殆ど滅びている

生き残っている場所は一部の離島だけ

その他の場所にはELIIDが蔓延っている

ノーツ「…目印が居たぞ」

ノーツの言葉にトモエはノーツの見ている方向を見る

そこには複数のELIIDが居た

それらは南東に向けて走っている

それだけならわからなかったが他の場所でもELIIDが同じ方向に向かっていった

トモエ「…なるほど、ならこの先に…」

ELIIDを目で追っていく

そして見つけた

距離は2・5キロ程でそこには4人の子供達がELIIDと戦っていた

いや、死角にまだいるようだ

トモエ「…随分と可愛らしい渡航者ですね」

ノーツ「たまたま足元に陣ができるな…魔法使いか？」

トモエ「なら随分と近代的な魔法使いですね、今2丁の銃が双剣になりましたよ…あ、大剣になりました」

ノーツ「一番小さいのは悪魔か何かか？何も無い所からヤバそうな手を出しているぞ」

トモエ「とりあえずビーストに連絡ですね、すいませんがお願いします、無線機持ってくるのを忘れてしまっ…」

ノーツ「…医者が無線機持ってると思ってるのか？」

「……………」

沈黙が走る

まさかの2人とも無線機を持っていなかった

近衛隊であるトモエは基本的にクラス頼みでノーツの場合はそもそも戦場には出ず基本医務室か研究室に引きこもっているので無線機は必要ない

トモエ「……とりあえず渡航者を援護します、すぐにゼノモーフが気づくでしょう…」

ノーツ「…そうだな、ついでに渡航者も射抜け」

トモエ「お断りします」

言いながらトモエは弓矢を持ち矢をつがえ弦を引く
するとただの矢が燃え上がる

それが当然の如くトモエは気にせず更に引き、放つ

矢は渡航者から少し離れた場所にいたELIIDを射抜き爆炎を上げた

爆炎はすぐに消えたが火は多数のELIIDを焼いた

爆炎に呑み込まれながらも生きていたELIIDも居たが自身に付いた火が消えず悶え焼け死んだ

爆炎が上がり10秒もしないでゼノモーフの雄叫びが周囲に響き渡る

どうやら気付いた様だ

それから数秒でゼノモーフがELIIDに襲い掛かるのが見えた

渡航者は混乱している様だがすぐに状況を理解しゼノモーフを避けながらELIIDを攻撃していく

トモエ「状況判断が早いですね、良い兵士に育ちますよ」

ノーツ「言ってる場合か、とつとと行け」

トモエは関心していたがノーツの言葉に軽く返事をしビルから飛び降りて行った

ノーツ「……怪我人は……いないか……」

ノーツは双眼鏡で再度確認してみるが渡航者に怪我人はいないようだ

そんな中ジャックが戦闘に参戦した

ノーツ「……無傷で終わりか……向こうに期待す……愚患者は呼んでないぞ」

ノーツが振り向くと屋上出入口から三体のE L I Dが出てきた

E L I Dはノーツを見つけると雄叫びを上げながらノーツへ向けて走り出す

ノーツ「黙れ愚患者共」

いやいなや三体のE L I Dは固まった様に体が止まった

E L I Dが立ち止まったのではなくE L I Dだけが凍ったように止まったのだ

しかし走っていた勢いはそのまま急に止まったのでE L I Dは床に倒れノーツの横を滑りそのまま屋上から落ちていった

ノーツ「動くな、喋るな、口出しするな、僕の患者で居たいならこれくらい守れ、愚患者共が」

そういうとノーツは隣のビルに飛び移った

アウターミツシヨン45

?「……………」

私、シユテルは何も考えずにゾンビのような存在、ELIIDを前衛に当てないように砲撃魔法で倒していく

ただの人間ならこれだけで逃げて行くがELIIDは後退を知らないのか幾らでも湧いてくる

先程王、デИАーチエが範囲魔法を放ったが逃げる素振りもない
幾ら倒しても終わりは見えない

最悪飛んで逃げても良いと思うが彼らが来るまでの辛抱だ

そう思つて戦闘に入ったがそろそろ2時間経つ

前衛の4人の体力が心配になる

?「ハツハツハアア!これくらいじゃあ僕は倒せないぞお!」

前衛の1人、レヴィが高らかに言う

他の3人はともかくレヴィは心配無さそうだ

シユテルは考える

自分達がこの世界に来て1、2時間たつてこの持久戦が始まった

彼らがいっつ来るかは分からないが少なくとも私達が来たのは把握している筈だ

デИАーチエ「まだかあ奴等は!」

シユテル「王、彼らはへりなので時間はかかりま……………来たようですね」

遠くからへりのローター音が微かに聞こえる

彼らが来ればすぐに終わるだろう

来ているメンバーにもよるが…

?「シユテル!この音つて!」

シユテル「へりのローター音です、遅くとも10分以内には来てるでしょう」

誰が来るかは分からない

だが確実に幹部は来る

渡航者案件の場合必ず幹部が出てくる

…さて、どうするか

数分後、前衛の近くで爆炎が上がる

直撃したE L I Dは消し炭になり直撃しなかったのは消えない火が身体を焼く

消そうとするも火は消えずそのまま息絶える

そして火が無くなるとゼノモーフがE L I Dに襲いかかる

レヴィ達が少し戸惑うもすぐに動きゼノモーフを攻撃しない様にE L I Dを倒していく

シユテル達も砲撃魔法からシユーターに切り替え援護する

すばしっこいゼノモーフを避けて攻撃するのは正直疲れる

そんな中ジャックが乱入しシユーターすら撃てなくなる

シユテル達は支援攻撃を辞め不慣れな近接戦に入る

そして更にトモエも入り完全に混戦しだした

攻撃しようとしたらゼノモーフに敵を取られたり誰かの攻撃が自分に当たりかけたり

そんな状態が2分程続いた時E L I D達が急に動きを止める

いや、止まったというより止められたが正しいだろう

E L I D達は動こうと力んでいるのか震えている

トモエ達はそれを見てE L I Dから離れ近くのビルに入る

レヴィ達も離れ様子を見る

E L I D達もそれを追おうとするが動くのは目だけで身体は縛り付けられたように動かない

ビースト「…いつまで遊んでるんだ？」

そんな中どこからともなくビーストが現れた

アウターミッション46

ビースト「いつまで遊んでるんだ？」

ビーストの声がいやに響く

先程まで戦闘でうるさかったから、というのもあるだろう

トモエ「…何に怒ってるんですか？」

トモエの言葉にゼノモーフが隠れる

怒っているビーストに近付いてはいけない

BLACKWATCHなら誰でも知っている

現にそのビースト（インセクトもいたが）に喧嘩を売って両足が義足になった人形がいる

ビーストは進路の邪魔なELIDを殴り飛ばしながら進む

殴られたELIDは他のを巻き込み吹っ飛ばされる

ビースト「さつき面倒なのに絡まれてな、姿見せないし気配も何も無いしでかなりウザかったんだよ」

トモエ「そんなの居たんですか…とりあえず渡航者は無事です」

絶対に違うとトモエは思ったが無視する

触らぬ神にんとやらだ

ビースト「それは何よりだ……とりあえず邪魔だからオマエら消えろ」

ビーストが言うのとELIDの身体は力無く倒れ落ち崩壊した

シュテル「…さすがというかなんと言うか」

ビースト「…ああ、お前らが今回の渡航者か、随分と物騒な魔法使いだな」

ダイアーチェ「見ていたのか、ならとつとと終わらせて貰いたかったものだな」

ビースト「知らんヤツの戦闘を観察するのは基本だぞ？何も知らん相手に勝てると言える奴はただのバカか相手が本当の雑魚な時だけだ」

ダイアーチェ「くくつ、違ういな」

シュテル「ひとまず礼を次いでに自己紹介も、助太刀ありがとうご

ざいます」

ビースト「気にすんな、アレの駆除も俺らの仕事だ…そんなじゃとりあえずなんか自己主張の激しい水色から自己紹介どうぞ」

レヴィ「ふっふっふっ、僕は力のマテリアル！レヴィ・ザ・スラッシュャー！そしてこの戦斧はバルニフィカス！」

シユテル「良く噛まず言えました」

レヴィ「エツヘン！それd…モゴツ?!」

シユテルがレヴィの口を塞いで喋れないようにする

ビースト達は？を浮かべ聞こうとするが

シユテル「すいません、タイムお願いします」

デイアーチエ「少し待っておれ！」

2人が言うと同時に渡航者の全員が飛んで100m程離れる

ビースト「…飛べんのかつてか魔法使い？なら普通か？なんで飛んで逃げなかったのかは気になるが…」

ノーツ「むしろ貴様が追わないことに驚きだがな」

気付くとノーツが近くにいた

いつ来たのかはさておきノーツは若干不貞腐れている

ビースト「100mなら逃げるより早く捕まえられるからな」

トモエ「ですね、そういえばそろそろ太平洋に向かったヘリが戻って来ると思いますよ、そのうち無線が入るのでは？」

ビーストが地面にマップを写すと太平洋上のヘリのマークがこちらに近づいているのが写っている

すぐにでも無線の範囲内に入る距離だ

そして入ったとほぼ同時にコールが入る

ビースト「ナイスタイミングだな…状況は」

？『負傷者3名艦種は駆逐1に重巡が2！いずれも大破状態！』
ビースト「ノーツを合流させる、指定ポイントのビルを通過しろ」

？『了解！それと深海棲艦の死骸と生きた個体の回収出来た！』

ビースト「良くやった、アウト」

ビーストは無線を切るとノーツに言う

ビースト「喜べ、駆逐1の重巡2が大破状態だ、かなり切羽詰まっ

てるからヤバい状況だろうな、指定ビルはそのこのビルだ」

ノーツ「良くやった！」

言うやいなやノーツは全力疾走でビルを駆け上がって行った

2分後、ハインドが通過するタイミングでノーツはハインドに飛び乗っていった

…心做しかその顔は笑顔に見えた

アウターミッション47

渡航者が話し合ってる頃

B L A C K W A T C H本部の地下実験室ではある物の性能テストが行われていた

実験室内には修復が終えたタイラントが動作チェックをしている
テスト内容は主にタイラント各種チェックともうひとつあるがそれは後だ

タイラントが動作チェックを終えモニタールームのある窓を見ると研究員の説明が始まった

研究員「よし、まずはお前からだ、模擬ターゲットを出すからいつも通り倒してくれ、こちらから指示を出したらそれどろりに頼むぞ」

タイラント「……」

タイラントが頷く

すると床が何ヶ所か開きそこから軍用人形が出て来る

その中にはイージスやマンティコア、ヒュドラやテュポーンも居る
研究員「始めてくれ」

言うやいなや人形達が起動しタイラントに攻撃を加える

開始直後にイージスが接近し装甲の強化された二ーمامやケリュニティスがそれを援護しサイクロップスがそれらに隠れながら撃つ

そして離れた場所ではマンティコアやヒュドラがテュポーンを隠しながら擲弾をタイラントに浴びせ隠されているテュポーンは主砲をチャージする

通常ならかなり苦戦するであろう的確な動きだがタイラントには関係ない

タイラントは接近してきたイージスを殴り蹴りで破壊し鉄クズと化したイージスを二ーمام達に投げ飛ばし壊していく

サイクロップスが避けながら攻撃した後方からマンティコア等の擲弾の援護もあるが全く動じず最後のケリュニティスを破壊し次いで近くにいたサイクロップスも破壊する

残ったサイクロップスはマンティコア達とは逆の報告に移動しタ

イラントわ足止めしようとするが全く効かない

タイラントがサイクロップスに近付こうとした時テュポーンの主砲が撃たれた

タイラントはすぐに楯でビームをガードする

もつともタイラントに光学兵器の類は一切効かないのでガードする必要は無かつたりする

とは言っても今は修復後のチェック、可能な限り色んな動きで動作を確認する必要がある

研究員「テュポーンを投げてみてくれ、投げ方は任せる」

雑な指示が入りタイラントはサイクロップスを無視しテュポーンに近付く

数は5、色んな投げ方ができる

タイラントはマンティコア等を押し退け楯を地面に突き刺しテュポーンの主砲を掴み力任せに上に投げる

投げられたテュポーンは天井に激突し砲台とキヤタピラが分離し移動していたサイクロップスを巻き込み地面に落ちる

次にタイラントはテュポーンの側面を持ちちやぶ台返しのようにひっくり返そうとするが勢い余って回転しながら壁に激突して爆散した

途中にケリユニティスが2体いたがそれ等も巻き込んで壁に当たった

それを確認すると次のテュポーンの主砲を掴み巴投げの様に後ろに投げてたまたま後ろにいたテュポーンを潰して爆発した

研究員「最後のはパイルバンカーで破壊だ」

指示にタイラントは楯を回収しテュポーンの側面に向かい楯を突き出し当たると同時に爆散型バンカーを打ち出した

爆散型のバンカーはテュポーンに打ち込まれると勢い良く爆発し近くの人形を巻き込んで数メートル程吹き飛んだ

残りはマンティコア2体

タイラントは楯の上部を持ち剣の様に振り回し一体をぶった斬った

楯の側面は切れ味どころか刃も着いていないが勢いとパワーだけでぶった斬った

最後のマンティコアに近付いたタイラントは楯をバットの様に持ち面の部分でマンティコアを打ち上げた

打ち上げられたマンティコアは60m程先の天井近くの壁に激突し爆発すること無くバラバラになった

研究員「……ホームラン」

研究員の呆れた声の実験室に流れたがタイラントは打たれた球（マンティコア）の軌道に満足行かなかったのか不満そうに素振りをした

アウターミッション48

H & R 社跡地

戦闘の後、ここはBLACKWATCHが調査をしていた
各方面から色々と言われたがキフスと言うクレーム処理屋（現役の
政府の人間）に丸投げし続行していた

上の方は問題ないが地下は問題だらけだ

と言うのも高濃度の放射能が検出されたり不発で残ったトラップ
が合り急遽幹部が呼ばれる事態があつたがそれ以外はそこそこ順調
だった

チーフ「……めぼしい物は余り無いようですね」

チーフが発掘された物を見る

発見されたのは解析が出来るか分からない状態のPCがそこそこ
と紙の設計図がいくつかだ

設計図は大量生産向けの物の設計図のようだ

他に見つかったのは解除したトラップや生活用品等

チーフ「ハズレですかね」

チーフが中に入って行く

中は瓦礫や岩等がある程度撤去されそれなりに進む事が出来る
進んでいると奥から爆発音が聞こえてきた

チーフ「…誰か掛かったんですかね？」

眩きながら進む

周りには発掘作業をしている隊員達がいる

1部はテンション高いが問題は無いだろう

そんな中瓦礫の中にある物を見つけた

チーフ「…手伝いなさい」

チーフが言うのと近くの隊員達がチーフの近くの瓦礫の山を発掘し
始める

そして1分も立たずに発掘された

チーフ「……アタリ……ですかね？」

それはアサルターの手足だった

胴体が無いのは疑問ではあるが恐らく1番の収穫だ
更にその後近くで同じくアサルターの削岩機も発見された

隊員「これはアタリですよ！」

チーフ「出来ればまるまる欲しかったのですがまあ良いです、回収を」

隊員達はそれらを持って外に向かう

それを見送りチーフは奥に向かう

進んで行くと放射能探知機が嫌な音を上げ始める

この辺りから汚染は酷いらしい

最も人形であるチーフには関係ないが

進んでいると奥から防護服を着た隊員が歩いてくる

隊員「お疲れ様です」

チーフ「先の状況は？」

隊員「恐らくですが最奥まで行く事は出来ませんがそこが本当に最奥かはまだ調査中です、防護服組は自分で最後です」

チーフ「分かったわ、早く外で流して来なさい」

隊員「了解です、それでは」

隊員を見送り奥へと進む

五分くらいで奥につくと高濃度放射能の中を防護服無しで作業していた

チーフ「…もう爆薬の設置ですか？」

隊員「ここが最奥とインセクトが判断してな」

奥の行き止まりに目を向けるとインセクトが壁の隙間から出て来た蟲と喋っているように見える

チーフ「…ここが最奥なんですか？」

インセクト「掘られた形跡はあるけど途中で辞めたみたい、これ以上は行っても何もなし、放射能の漏洩場所も分かったしとつとと埋めるに限るね」

チーフ「…臭いものには蓋を、ですか」

インセクト「実際臭いし」

そう言っつてインセクトはチーフの横を通り過ぎ欠伸をしながら外

に向かう

チーフ「……臭い……ですか、放射能に匂いがあるとは驚きですよ」

見送るチーフが呟くとインセクトは片手を振り進んで行った

隊員「設置完了だ」

チーフ「他の発掘が終わり次第爆破」

隊員「了解」

チーフと隊員は外に向かう

その1時間後、BLACKWATCHが撤退したと同時に爆薬は炸

裂

周辺が崩落する程の威力でこの場所が二度と使えないようにした

アウターミッション ■■■

僕は死んだ

仲間たちに看取られネットの世界で現実では病院のベッドで確かに死んだ

落ちていく感覚があった

酷く暗く冷たい中へと落ちていく感覚

これが死んだという感覚かのもしれない

目を開いても何も見えない

自身の体も見えない

それどころか体が動いているのかさえ分からない

目を開いて、と言ったが開いているのかも分からない

もう、何もワ カ ラ ナ ……?

そう思った時何故か意識がはつきりした

体を動かす感覚もあった

目を開いても相変わらず何も見えないが

? 「…なんで?」

喋ると彼女自身の声も聞こえた

落ちていく感覚もあるが底に着く様子はないので手探りで確認する

指を動かしてみる

ゲームならこれでメニューが表示されるが何も出ない

? 「ゲームじゃない?」

次は手探りで着ているものや持ち物を確認する

調べる

? 「ふむふむ…なるほど」

着ているものは死亡時ゲームで着ていたものようだ

左腰には剣があった

柄を握り剣を抜き刃で切らないように注意しながら触って見る

刀身に触れた時ヒヤツとした感覚があった

今まで無かった初めての事だ

? 「…僕の剣だ…でもなんで？」

剣を戻し他を調べてみるが何も無い

少し考えある事を思い出した

ゲームで飛べたという事だ

とは言っても今の状況で飛べたとしてもなんの役にも立たない

だが今現在落ちる感覚を楽しむくらいしかやる事がないので物は

試しと言うのでやってみる

ゲームの感覚で羽を出して

? 「よっ、と…飛べるんだ」

飛ぶ事ができた

それにより落ちる感覚は無くなった

気持ちに少し余裕が出来たので周囲を見渡してみる

? 「ん…：…やっぱり何も無いや…」

周囲は完全な暗闇で失明を疑うレベルだ

少しでも明かりがあれば…

そう思うが明かりなんてない

魔法を使えば！とも思ったが魔法なんて殆ど覚えていない

考えた結果スキルを使う事にした

? 「ふう…はあっ！」

突きの連撃を放つ

? 「……………」

放った彼女は沈黙する

ぶつちやけると使うスキルを間違えた

? 「…あれ？」

しかしあながち間違えてはないのかもしれない

というのも放った所にヒビが出来てそこから光が漏れていた

彼女はヒビの周りを剣先で突いてみるが壁がある訳でもない

? 「バグかな…でもとりあえず…！」

彼女は躊躇なくヒビに斬撃を入れた

するとその場所は砕け人が通れるくらいの穴になる

しかし穴がすぐに修復し始めた為彼女は喜ぶよりも先に開いた穴

へと入る

穴の先はまさにネット空間、という感じだった
様々な文字や映像などが飛び交っている
スゴい、と思ったがすぐに現実が見えた

というのも様々なものが飛び交っている為何処へ行けばいいのか
全く分からないのだ

飛び交っているモノは右へ左へ、上へ下へ、前へ後ろへと縦横無尽
に飛び交っている

? 「どうしよう…」

周囲を見渡してみる

飛び交っている全てがいきなり軌道を変えてある程度飛ぶと消え
る、を繰り返している

そんな中振り返るとあるものが見えた

それは様々なモノがコピーなのか2つに別れ一方が扉に入ってい
く、というものだ

扉はたまに現れコピー?を入れると消える

? 「うくん…どうするかな…」

考える

扉の先がどうなっているのかは分からない

ただゴミ箱の様な削除待ちにはならないだろうか

? 「…行っちゃえ!」

彼女は扉が出現するが辺りに位置取り現れるのを待つ気でいたが
扉はすぐに現れ開く

彼女は他のものを一緒に中に入りそれ等を追っていく
追っていったいたい2分くらいたった

今だ某大乱闘ゲームのボスステージの様な所を進んでいる
しかし遠くに光が漏れている

? 「もう少し…:…へ?!」

まだ距離があると思いき最大速度で飛んでいたが急にホールの様な
場所に着いた

彼女は急いでブレーキをかけるも間に合わず壁に激突する

ゴンツ！といい音が響くのが彼女にはわかった
？「くくつ!!？」

頭を抑えうずくまる

1分後

ある程度痛みが引いたのでぶつけた所を触る

タンコブが出来たかも知れないが血は出ていない

？「つく……ここは？」

見渡すと広いホールかと思ったこの場所だが高めの本棚が何列も

奥まで続いていた

？「：図書館？」

彼女はネットワーク内の図書館らしき場所に着いた

アウターミツション49

数十分後、チヌーク機内

ビースト「：長い、3行で」

ディアーチェ「レヴィにもわかる様に話したのだぞ?!」

ビースト「ある程度知っている奴と全く知らん奴を一緒にするな」
簡単な自己紹介が終わった後へりに乗りこみ帰り際に色々聞いていたのだがビーストが殆ど理解していなかった

ジャックはそもそも話を聞いておらずトモエはビーストとは違いある程度理解出来てはいたが理解出来ない所が多い

そんな中シユテルが少し考え

シユテル「分かりました

私達紫天の書と

ギアーズ

転移先間違え帰

れない

帰るまでギブア

ンドテイク

こんな所です」

ディアーチェ「まとめおった：いや！それで分かる訳なからうが！」

ビースト「把握」

ディアーチェ「分かったのか?!」

ビースト「何か知らんが転移装置？見たいなのを使って行く場所があったが装置のバグか何かで一種のパラレルワールドに転移した、戻る為に必要な装置の魔力が足りないからそれまでここに居させろ、つて事だろ？」

ディアーチェ「……………」

ビースト「それで？どれくらいで魔力が溜まるんだ？」

納得いかないディアーチェを後目にアミティエ（アミタ）に聞く
ビースト

アマタ「そうですね…早くても1年ですね、ここは魔力が少ないので時間がかかりますし」

キリエ「本当なら私達の魔力を与えられる様にしたかったのだけれど試作だからねえ」

レヴィ「つまりぶっつけ本番だね！」

トモエ「それが原因なのは…」

アマタ「…ともかく、ともかく！私達を置いてください！何でもしますから！」

ジャック「え？今なんでもすr：「技術とか戦力関係を提供するので！」：おしいっ！」

ビースト「遊ぶな、戦力は良いとして技術は？」

シユテル「主に私達の使っているデバイスと呼ばれる、いわゆる魔法の杖ですね」

ビースト「随分と近代的な杖だな」

そんなこんなで基地に着くまで話し込むのであった

■■■■、■■■■から西■■■■に■■■■km

とある島

？「…なるほど…確かに■■■■と言われるだけはあるな、思わず見入ってしまった」

？「君にもそういつた感情が残っていたのか…だが確かに素晴らし
い」

彼等は周囲を見渡す

周りは誰もが見入ってしまう様な美しいところだった

花が咲き、適度な木々

余り風景に見入る人物では無い■■■■だがこれは見入ってしま

まるでこの世のものとは思えない

？「俺も驚いている…だがそれ以上に気味が悪い…」

アウターミッション50

■■■■、数時間後

?「……何で出来てるんだ?」

全身黒づくめの人物は番傘を肩に担ぐ

数時間攻撃しているのだが効果は薄く数時間攻撃した結果は10kg程欠けた程度

この塔は少なく見積もっても50mはある

?「出直すか?」

もう1人の人物、ではなくバックを背負った犬が聞く

なんで喋れるのかは聞いてないので知らない

?「だな、1つ目だが場所が分かっただけでも儲けものだ、ついでにコレの破片も回収しておくか」

数分後

回収した彼等はこの場所を去った

それを見ていた者がいたが彼等は気付かなかった

BLACKWATCH本部

本部のヘリポートにビースト達が乗ったチヌークが着陸しビースト達が出てくる

ビースト「やる事が山ずみだな、とりあえずトモエは近衛隊に合流して:コレ、片しておけ」

トモエ「:了解です」

トモエはビーストから端末を受け取るとどこかへ行った

?「スキあり!」

ビーストがマテリアル達に向かった瞬間、ビースト後方の物陰から誰かが飛び出しナイフでビーストを刺そうとする

だが相手はビースト

ビーストは上半身をずらしナイフをかわす

ナイフを避けられた襲撃者だが想定内らしく靴先の刃でビーストの首を切ろうとするが

ユーリ「…：邪魔です」

ビーストの前にいたユーリが悪魔の様な手、魄翼を出し襲撃者を掴まえそのまま地面に叩き付ける

ズンっ！という音と共に周囲が少し揺れる

襲撃者が生きているかは分からないがビーストは魄翼に叩き付けられ押さえ付けられたままの襲撃者の顔を気絶する程度の強さで踏み付ける

ビースト「とりあえず中に入るか、腹減ったし」

ユーリ「私もお腹ぺこぺこです」

流れる様に襲撃者を無力化したビーストとユーリは何事も無かった様に話を進める

他の5人は2人に若干引きつつ周りを見渡す

見ていたであろうBLACKWATCHの隊員は感心しているか爆笑している

中には襲撃なんて無かった、と言わんばかりに他の隊員と話している者もいる

ビースト「いつまで突っ立ってんだ？早く来い」

ビーストの声に5人は先に向かったビーストへと走って行く

レヴィ「…あ、ゴメンね？」

レヴィがバランスを崩し襲撃者を踏んでしまうと周りは大爆笑で包まれた

???

？「この世界には複数の特異点があるんだ、その1つが2つの古代文明」

暗い部屋で誰かが椅子に座った誰かに話す

椅子に座っている者は手足を縛られ頭に布を被せられている

？「1つは殆どの者が知っているがもう1つの方は知るものが少ない、そりやそうだ、教えた所で誰も信じないしナ」

話す者は縛られた者の周りをゆつくりと歩く

？「だがそのせいで世界は剥がれそこから色々と漏れ出している、オイラ達のような連中が持つ能力もその内の1つ」

縛られている者の呼吸が荒い

恐怖しているのかそれとも…

？「他にもELIIDの上位種がこの恩恵？ともいえるものを受けテ
ルし」

呼吸がどんどん荒くなっていく

そして震え出す

？「…有り得ないと思うか？けど事実だ、おたくらは本当の歴史を知らなすぎる…：まあオイラも完全…：とまでは行かない、だが知ってしまった、オイラ達が知ったのは何割だ？」

逃げ出そうと藻掻くがキツく締められている為まともに動く事もできない

？「おたくは答えを知っているはずだ、オイラ達が何を知っているのか、どれだけ知っているのか…：…：教えてはくれまいか？…：」

語りかける人物、少女は縛られている者の後ろで止まり耳元で呟く
？「死蟲さん♪」

アウターミッション51

レヴィ「そういえばなんで時間かかるの?」

カレーを食べながらレヴィがアマタに質問する

ビーストへの襲撃者を流れ作業の様に倒し無視した後飯の為に本部内のファミレスに来た一行

アマタ「なんの事ですか?」

レヴィの質問の意図は伝わらなかったがシユテルが助け舟を出す

シユテル「転移装置の話ですよ」

アマタ「なるほど…ってへり乗る前に言いませんでしたか?」

レヴィ「覚えてないよ!」

ディアーチエ「威張るな威張るな、後へりの中でも言ったぞ」

レヴィ「そうだっけ?」

ビースト「コイツ脳筋か?」

ユーリ「…えーと…」

アマタ「この世界の魔力が少ないからですよ、それが何でかまでは知りませんが」

ビースト「あー」

アマタの言葉にビーストが反応する

シユテル「…へりの時も思いましたが何か知ってるんですか?魔法に関してからっきりの筈なのに」

ビースト「憶測ではあるがな、後魔法では無いがその手の事はある程度知っている、一応この世界にも魔術的なのはあったしな」

その言葉にユーリ以外が反応する

反応の無かったユーリを見るがビーストは続ける

ビースト「あった、と言つてもかなり昔の話だ、解りやすく?いえば神代の時代が終わるまでだ」

シユテル「神代の終焉はアーサー王伝説の5世紀ごろの事ですよね?神代がどういうものかは詳しくはありませんし経緯も分かりませんが終わりは確か神代の終焉を理解した幻想種達が世界の裏側に移動し地上を譲り渡した、と聞いています」

ビースト「そう、だがそれと同時に魔術等の神秘も無くなった、まあすぐではなかったらしいが……もう魔術師とかはいないだろうな、居たとしても絶滅危惧種」

ディアーチエ「それがどう関係が？」

ビースト「また憶測だがマナが流れる霊脈が無くなる若しくは限りなく小さくなりそこから漏れ出す魔力が少なくなった、と考えているが憶測の域を出ない」

ユーリ「それが正しいかは分かりませんが少なくとも霊脈は無くなつてはいません」

ビースト「……その根拠は？」

ユーリ「霊脈が無くなるというのは星の死です、危ういとはいえまだこの星は生きています、詳しく調べれば分かりますがこの辺りには霊脈が無いのでなんと……」

ビースト「なるほどな、まあ霊脈探しは置いて……そこの脳筋に説明してやれ」

全員がレヴィを見ると？マークを浮かべながらカレーを食べていた

キリエ「レヴィもそれなりに頭はキレるんだけどね」

キリエのフォローはビーストには届かなかった

？「……ただの観測者だったヨ……そうそう……しかもシユレーデインガの猫になつてルシ……そうだね、生きてもいないし死んでもいない……正直に言うわからないヨ？いくら調べても最後の目撃情報は4年前、まアやつてはみるケド……それはいつも通りにネ……そういえばグリフィンが外部に人手を求めていたけど……なんかどつかの過激派の掃討ダツテ……その辺はオレッツチは知らないよ？……あいよソレじゃ、オネーサンは忙しいんだからナ……」

アウターミッション52

本部地下、実験場

研究員「……………モニターでは異常はないが楯以外で何か違和感とかはあるか？」

タイラント「……………」フルフル

研究員の言葉に首を横に振るタイラント

楯に違和感があったが先に言われてしまった

改修したのならば説明があるはずだ

研究員「ならいい、まずはお前の気になっているであろう楯の説明をする、楯は前回蛮族戦士に切られたから更に強化した…が蛮族戦士のあの攻撃にはある程度しか耐えられん、他の変更点は楯を三重構造にして間にハニカム構造と衝撃が加わると瞬時に硬化する液体金属が入っている」

タイラントは楯を軽く押してみると僅かながら動いた

研究員「ハニカム構造と液体金属でクッションの様になっているから前のよりかは衝撃を緩和出来る筈だ、それと縁の部分はかなり強化して剣のようになっていたが切れ味は皆無だ、まあ斧みたく使ってくれ」

楯の縁を見ながら楯をふる

研究員「次は、楯のグリップの横にあるボタンを押してみろ」

タイラントは楯の内側にあるグリップ横のボタンを押す

するとパイルバンカーの杭が40cm程飛び出してきた

研究員「それは接近戦様だ、上手く使えば高硬度の装甲も貫ける、試験では万能者の装甲を容易く貫いた代物だ」

タイラントはそのままトリガーを引き杭を打ち出す

杭は更に60cm瞬間的に打ち出された、それも音よりもかなり早くだ、合計1mの未知の黒い金属の杭が楯から伸びている

トリガーを離すと杭は40cmまで戻りスイッチをもう一度押すと杭は完全に収納された

研究員「今回の杭は1種だけだが研究が進めば複数種の杭が使える

様になる」

タイラントは完全に収納された状態からトリガーを引き杭を打ち出す

反動はあるが楯の重量とタイラント自身のパワーで完全に相殺されている

研究員「杭はビーストから許可が出たからソレを使ってる、強度は十分過ぎる筈だ、それと…」

研究員が言おうとした時別の作業員がフォークリフトで何かを運んで来た

フォークリフトの爪に乗っているのは3m近いアタッシュケースの様なものだ

フォークリフトはケースを降ろすと実験場から出ていった

研究員「ちようどいいなタイラント、お前専用だ、開けてみる」
タイラントがケースを開ける

中には2・5m程のコンバットナイフの形をした大剣の様なものがあった

タイラントは大剣を手に取りっていると研究員から説明が入る

研究員「全長約2800mm、刃渡りは約2300mm、重量は大體132キロだ、お前専用につつてあるし刀身は黒い金属、因みに鉈で切れ味はお察しレベル」

100kg超えの代物だがタイラントは片手で難なく降る

どう見ても片手剣では無いがタイラントは右手に大鉈、左手に楯で軽く動いてみる

研究員「因みにその大鉈だがお前の背中、若しくは楯の内側に収納出来るようになってる、使わない時はどっちかに閉まっておけ、取り出す時は大鉈を持てばいい」

言われて楯の内側を見ると留め具の様なものがあり大鉈をそれに当てるとカチャン、と留め具が閉まった

大鉈を持つと留め具が外れた

次に大鉈を背中に持つて行く、その時に何処に留め具があるかわからない事に気付いたがカチャン、という音が聞こえ手を離しても落ち

なかったのである程度適当にやっても大丈夫だろうと納得する

だがタイラントは研究員を見つめる

研究員「…わかつてる、お前がこの大鉈に満足しないのはわかってしお前自身の改造が成されていけない事も、改造は待ってくれ、幾つか案はあるがそこはお前と決めるのと新しい技術が入るからそれまで待ってくれ」

タイラントは不満げだが新しい技術という言葉に納得する

研究員「大鉈に関しては予備だ、メインとして回収された削岩機を魔改造しているところだ、出来上がり次第テストしてからお前に渡す予定だ」

ある程度納得したタイラントは身振り手振りで研究員に伝える

研究員「ならいいが、とりあえず訓練しとくか？」

タイラントが頷くと研究員は実験場から出ていった

その数分後床からイージスやテュポーン等が出て来た

それ等が動き出すと同時にタイラントも動き出した

アウターミッション53

ある程度の訓練を終えたタイラントは敷地内をブラついていたりやる事を終え暇を持て余していた

そんなタイラントは敷地内を流れる大河に來た

岸は軍港の様になっており小型の攻撃船や果てはイージス艦まである

他にも複数の固定砲台や大口径の銃座、各種ミサイルと武装も充実している

それ等の近くでは非番なのか私服のBLACKWATCH隊員が何人か釣りをしている

一応釣れるには釣れるだろうがたまに魚類系のELIDが釣れる事がある

それならまだいいが前にビーストがどうやったのかりヴァイアサンを釣り上げたことがある

釣り上げられそうになったりヴァイアサンが抵抗し船や兵器が破壊され多大な被害が出た

そんな事を思い出しつつ釣りをしている隊員を河に突き落としていると無線が入る

ブレイン『何非生産的な遊びしているんですか？まあそれは良いです、仕事です、UNMPに向かってください』

無線が切れるとタイラントは急いで向かった

BLACKWATCH地下、UNMP本部

タイラントが扉を文字通り潜ると大量のモニターが壁を埋めつくした大部屋に着く

中では自身のデスクのモニターと壁のモニターを見ながら無線で指示を出している者たちが何人もいる

？「こつちです」

呼ばれてそちらを見ると車椅子に座った銀髪の少女がいる

彼女はBLACKWATCH幹部で内部組織、UNMPのトップのサツキだ

詳しくは知らないが元は国連軍警察のトップで頭のキレる実践派の人物だったらしいがその関係で恨みをかなり買ったらしく大戦中に拉致られ両足を太腿から切り落とされ右手も付け根から切り落とされたらしく残ったのは左手のみ

だが慕われていたようで彼女がBLACKWATCH入りする時に彼女の部下が100人近くサツキと共にBLACKWATCH入りした

「そんなサツキの近くにはブリッツがいる

電磁波とか大丈夫だろうか、等と考えているとサツキが説明を始める

サツキ「呼んだのはちよつとした依頼です、実はグリフィンから人類人権団体過激派関係の仕事が来たのですが人手が足りないので貴方たち2人に出てもらいたいですよ」

何故か笑顔のサツキに嫌な予感が過ぎるタイラント

サツキ「何となく察してると思うけど今回の作戦には複数のPMCが参加するんですよ（笑）、因みに何処が参加とかは分かりません」

2人とも逃げたかったがタイラントはサツキに捕まれブリッツは近くに居た隊員達に抑えられる

サツキ「それともう一つやって欲しいことがあって可能な限り資料とか持つてきて欲しいんですよ、ちよつと調べ事がありますよ：お願いできますか？」

2人は同時に首を縦に振った

拒否権は2人にはなかった

サツキ「ではお願いしますね♪、近くまでは輸送機を出させるのでそれで向かってください、ブリッツはバレない程度の距離で待機しておいて下さい、それとタイラントはブレインを中に容れて行ってください」

タイラントは渡された端末からサイバーブレインのコピーをイン

ストールする

サツキ「他のPMCは攻撃された場合のみ殺して構いません、それと今回は支援はありませんので」

2人は頭を抱え部屋を出た

その際にタイラントはサツキに中指を立てておいたが笑顔を返さ
れた

アウターミッション54 (コラボ回)

騙された

タイラントはそう思った

というのも出発前、タイラントは自信を何で運ぶのかを疑問に思っていた

何故かと言えばタイラントの重量と大きさの為だ

タイラントは全長約3mで重量は戦車並だ

タイラントが乗る場所によっては輸送機がバランスを崩すかも知れないし床の接地面が少ないので輸送機の床に穴が空くかもしれない、と思っていた

C—130等か或いはクリサリスか

C—130等ならタイラントを寝かせて運ぶかもしれない

クリサリスだったら吊り下げられるか上に乗せられるか

そう考えていたが正解はタイラントの予想にはなかった

B—2 爆撃機 だった

しかも乗せられたのは爆弾の格納部分

タイラントとブリッツ以外何もないとはいえ扱いはまるで爆弾だ

ブリッツも同じ事を思っているのか頭を抱えている

ブレイン「しょうがないじゃないですか、向こうが対空兵器を持っている、なんて言われたんですから」

サイバーブレインの声が無線からではなくタイラントから聞こえ
タイラントは驚きブリッツはタイラントを見る

ブレイン「貴方の中にスピーカーを組み込みました、なのでこんな事も出来ます」

ブレインが言う音楽が流れ始めた

らん らんらんらんらん♪と少女が黄金の草原でスキップし
そんな曲が流れる

どんな曲かは知らないが少なくとも戦闘前に聴く曲では無い事は
2人とも分かった

ブレイン「この曲ではダメですか?でしたらこれを」

別の曲が流れ出す

流れた曲を聴いて2人は何故かAR15の事が頭に浮かんだ

理由は分からないがとりあえずAR15の為に曲を止めさせた

ブレイン「とりあえずグリフィンの作戦内容はまず先遣隊が対空兵器を破壊、その後爆撃し本隊が生き残りの駆除、という流れです」

言い終わるとそれっぽい曲が流れ始める

迷惑な事だがどうやら気に入ったようだ

とりあえずソレを無視する

ブレイン「我々は先遣隊ですね、適度に対空兵器を破壊しつつ情報収集です、爆撃は…何とかなるでしょう、バンカーバスタークラスでない限り傷一つ付きませんし光学兵器の類なら完全に無効化出来ますしね」

パイロット『降下3分前』

ブレインの自由さのため息が出そうになるがパイロットの言葉に装備の最終チェックをする

楯を取りグリップ横のボタンを押し杭を出す

何回かボタンを押し杭の出入りを確かめそれが終わると大蛇を見る

軽く訓練はしたが初の実戦投入である

刃を軽く見てから掴み柄と逆方向に加減して捻ってみるが動かないのもんだいなし

パイロット『降下1分前、ハッチオープン』

パイロットの言葉と共に下のハッチが開く

装置で吊り下げられている2人が落ちる事はないがタイラントは下を見て固まる

パイロット『高度13000フィート、戦車級重量の人形初？のHALO降下だ、降下30秒前』

ブレイン「パラシュートあるので安心してください」

先に言え、と思ったが言ったところで何も変わらない

タイラントは色々と諦めた

パイロット『5秒前…4…3…2…1…降下』

同時に装置は外れ2人は落ちていった
タイラントは落ちると同時に減速用のパラシュートが複数展開する

これで何とかブリッツと同じ速度で落ちる事が出来る
数分後

高度600mになった所でメインパラシュートを展開

これにより落下速度がかなり遅くなる

遅くなったのを確認しふと下を見ると戦車2台とパワーダスーツ
数名、トラック3台が見えた

ブレイン「パワーダスーツはP・A・C・Sと判明、ターゲットで
す」

過激派連中はまだ気付いていない

タイラントはパラシュートをコントロールし過激派の真上でキ
プする

そして高度1000mになった時パラシュートを切り離し自由落下
する

タイラントは楯を構え戦車に着地と同時に真上から戦車を楯で殴
り付けた

戦車はくの字に折れ曲がり爆発を起こす

いきなりの事で間抜け面を二人に見せ放心した所をブリッツの電
撃が襲う

いくらP・A・C・Sを着ていようとブリッツの電撃はその限
界を超えたもので防ぐ事は出来ず一瞬で丸焦げになる

タイラントは大銃を抜いて折れ曲がった戦車から降りると同時に
トラックを横一線するが切れ味はお察しレベルの大銃ではトラック
を10m吹き飛ばして終わった

次にタイラントはもう1台の戦車に近付きパイルバンカーを打ち
出す

パイルバンカーを打たれた戦車はひっくり返りエンジン音が消え
る

どうやらエンジンを打ち抜いた様だ

振り返ると残りのトラックに雷が落ちた

雷音と共にトラックが爆発した

ブリッツ「ガアアア!!」

ブリッツが咆哮を上げると同時にひっくり返ったトラックと戦車が爆発した

ブレイン「とりあえず1番手は貰いですね、それでは対空兵器を破壊しながら施設を探しますか」

言い終わるとブリッツは雷を纏い姿を消した

それを見届けタイラントは移動する

敵はいくらでもいる

アウターミッション55 (コラボ中)

ブレイン「……メンバー間違えましたかね？」

そんな声が聞こえたがタイラントはシヨベルカーになった腕からの攻撃に集中しているので無視する

無視されたサイバーブレインだが実際の所頑張っていたりする

というのも先程から連中がタイラントをハッキングしようとしておりその対応をしていた

コピーとはいえタイラントをハッキングされてはサイバーブレインの名が腐る、というもの

幸いにもジャミングされてはいないのでBLACKWATCHのネットワークであるラビリンズに送って本体に丸投げしている、名が腐るとは一体……

頑張る？ つつタイラントを通して状況を見る

タイラントは頑張れば何とかなるかも知れないがブリッツの方が少しヤバイ

まさかガチガチに電気対策して来るとは思わなかった

ブリッツは存在が存在なだけにある程度隠されてはいたが……

情報が漏れている、かと思ったが向こうの会話的に全くの偶然のようだ

どうするか考えているとタイラントが連中の1人をアツパー見たく下から腹を楯の先端で殴る

重さかタイラントが手加減したのか向こうは吹き飛ばされず楯の先端でくの字になっている

タイラントはそのまま楯の上に掲げ

ブレイン「逝ってこい」

サイバーブレインの言葉と共にパイルバンカーが打ち出され真上に打上げられた

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
??!？」

間抜けな声を上げ打上げられた奴は10m程飛びそのままタイラ

ントへと落ちて行く

落ちながら何とか体制を立て直そうとするが真下ではタイラントが大鉈をバットの如く持つていた

「ちよっ?!」

攻撃やガードよりも早く大鉈で打たれた

打たれた者はブリッツと戦闘していた者とその近くに居たのを巻き込み吹き飛ばされた

ブレイン「ヒット一罌、って所ですかね」

ブリッツはタイラントの横まで下がる

連中を見ると全員が生きていた

巻き込まれた連中はともかく打たれた奴もだ

ブレイン「まあ大鉈の切れ味はお察しレベ r…おや?」

音声を切ったサイバーブレインに疑問を持ちつつ敵を観察する2人

「ヤッベエ!腰の痛みが無くなったんだけど!」

「マジかよwwあれか?確かタイとかにあるめっちゃ痛いらしい整体みたいなやつかw?」

「あのデカいのも捕まえるか?このまま戦い続けたら俺らの身体が癒されそうなんだが(笑)」

「さつきからハッキングしてるんだけどなんか妨害されたり別の所に飛ばされたりしてるんだよな…それはそうとちよっとな変われ、俺も腰が痛いから癒したいんだ!」

「巫山戯んな!次は俺だ!」

「……………」

親近感があり過ぎて逆にやりづらい、2人の心境はそんな感じだった

連中がBLACKWATCHにいてもやって行けるだろう

寧ろ天職かもしれない

ブリッツは連中から感じた恐怖を空腹状態のインセクトに三日三晩襲われ続けた恐怖を思い出し打ち消していた

あれ程の恐怖は他にはない

ヨダレを垂らしたインセクトが腹の音をBGMに「ちよつとだけ！先つぽだけだから！」と言いながら迫ってくるのはやばかった……
ブレイン「何を思っているのかは知りませんが連中の正体がわかりました」

未だに言い合っている連中を後目にサイバーブレインが言う

ブレイン「連中はレギオーナーリウス、言ってしまったら頭のネジを入れ間違えた建設業？の連中です、タイラントは負ければ建設材料に生まれ変わりますよ、ヤバいかどうかで言われれば幹部達の劣化版、つまり勝てるかもしれないがかなり面倒、という感じですよ」

2人同時にゲンナリする

ただでさえ色んな意味でやりずらいのに面倒ときた

そんな2人を無視してサイバーブレインは音量を下げて話を続ける

ブレイン「因みにこの後爆撃があります、通常兵器の爆撃かは知りません……」

サイバーブレインが急に黙った

疑問に思ったがすぐに理由が分かった

??? 『はっははははははははッ!!』

急に笑いが聞こえレギオーナーリウスの面々は2人を見る

そしてその2人は固まった

サイバーブレインでは無い男の笑い声

声の人物はすぐに分かった

この声の主はビーストだ

ビースト『いやゝ笑った笑ったwやつば馬鹿つてどこにでも居るんだな（笑）』

「誰だお前？」

ビースト『聞く時は先に名乗るのが礼儀らしいが……まあどうでもいいか、BLACKWATCHで幹部やっているビーストだ』

名乗りを上げたビーストにレギオーナーリウスの面々は止まる

ビースト『おや？俺も有名になったな（笑）、それは兎も角だ、お前からBLACKWATCHに來ないか？』

「……は？」

ビースト『戦闘員かはともかく戦闘には問題ないレベルだし、お前らはなんか建設関係出来るっぽいし？うちは本部にその辺出来るのが少なくてな、ああ、ちゃんと給料は出すし手当も出すぞ、うちは給料分働けばその月は働かなくても良いしそれ以上働けばプラスして給料出すぞ』

置いてけぼりの2人は頭を抱えた

ビーストはたまに気に入ると敵だろうが何だろうが勧誘するのだ

それこそ相手がこちらに恨みがあるうとも相手が味方を殺した奴でもだ

後者は滅多にないが勧誘自体はかなり多い

中には今でもビーストを殺そうとする者もいる

ビースト『それに建設関係の材料はこちらで要望があれば可能な限り作るか調達するし道具やらも製作調達可能だ、お前くらいバカ連中も揃ってるし、まあお前らが裏切らない限りは多分お前らにとっても良い話の筈だ、裏切った場合は……それはいいか、そんで？どうする？急がないとこの辺り一帯は爆撃されるぞ？』

普通に情報を流したビーストだが誰も気にしない

「お前ら馬鹿だろw？」

ビースト『馬鹿やってなんぼだ、因みにうちの敷地は廃都市を占拠して得た場所だから造るも治すも改装も許可さえ取ればやり放題だ、因みに許可は基本俺が出す、デメリットとしては……お前ら以上の馬鹿が幾らでもいる事だ、頭のネジが溶けた連中なんて両手でも数えられない程度にはいるぞ(笑)、因みにお前らの今の雇い主の情報は出すも出さないもお前らが決めろ』

2人は溜息をつきレギオナーリウスを見る

彼らの出した答えは……

アウターミッション56（コラボ中）

ビースト『……状況は』

回収部隊『タイラントは何とかですがブリッツは弱点の臭いで完全にダウンしています！』

ビースト『……サイバーブレインは』

オペレーター『最悪の状況です！コピー体だったのか幸いな程です！本体のサイバーブレイン自信がすぐに外部との全て完全にシャットダウンしたので外部に漏れることはありませんがデータバンクが異常を起こしています！ラビンスの半分以上が侵されて操作を受け付けません！AIの発狂状態なんて最悪ですよ?!』

ビースト「出来ることは全てやれ、使える奴は全て使え」

オペレーター『りよ…了解です、あらゆる手段で復帰まで持ちこたえます』

旧式の無線機で連絡を取り合うBLACKWATCH

現在、創設以降の最悪の状況になっており各隊員達が自身で出来る範囲でこれを取り戻そうとする

そんな中、社長のプランも全ての書類を投げ捨て問題解決に各所を走り回る

敷地内にいた殆どの幹部も同様だった

複数の旧式無線からの要件を全て聞いて的確に指示を出していく

UNMPも最大級の協力をしている

今回の件は彼女らの所為では無いが責任を感じこの状況を1番の最優先事項として様々な事をやっている

医療関係や防衛システムは元々遮断されているので問題はないだろう

人的被害が出ていたら連中のあらゆる全てが無くなっていたらどう

だが創設以降最大級の被害は免れない…

各所を走り回っているプランだが実は全く別の事が頭から離れなかった

それはこの状況が起きた直後に本部全体に広がった殺気である
それは2・3秒の出来事だった

その僅かな時間で入って1年以内の者は全員がぶっ倒れた
それ以上の者も隠してはいるが顔色が悪かったり四肢が震えてい
た

誰のかはわかっている

そして問題はその殺気を放った人物、ビーストが何処にも居ないと
いう事だ

ブラン「ビースト！早めに戻ってこいよ！」

ブランは無線機にそれだけを言う

もうビーストは止められない

核を使おうが崩壊液をぶつかれられようが止まることはない
そもそも崩壊液なんてビーストには一切効かないが

BLACKWATCHが撤退して約30分後

レジオナーリウスのテツは揺れる身体に意識を覚醒させた

テツ「…あ?…:…ツツ?!」

それと同時に右手に激痛が走り見ると右手が肩から無くなってい
た

まるで引きちぎられたように…

テツ「…あー、そうだったな…」

「?!おやっさん！目を覚ましたんですね！」

テツを担ぐ部下がテツが起きた事に気付き喜ぶ

周りを見るが部下はたったの3人だけだった

テツ「…他はどうした…」

「…:…ビーストに全員殺されました」

テツは記憶を探り何が起きたかを思い出す

どれくらい前かは分からないがBLACKWATCHの撤退を見
届けて10分か20分位たった時それは起きた

部下の1人がなんの前触れもなくELID化して襲いかかってき

ただ

驚いたがテツはその部下だったモノを倒した

思えばそれが始まりだった

それから20秒位してまた別の部下がELID化した

その部下は左手からELID化し始め左手が完全に変わったと同時に自身の首をねじ切った

この時になってようやく周囲の崩壊液汚染濃度が急上昇し始めた事に気付いた

急いで撤退する

P・A・C・Sは汚染に対してはある程度しか耐性はない

もしかしたら無いのかも知れないほどだ

移動し始めた時奴、ビーストは現れた

どこからともなく現れたビーストはタイラントの大鉈を持った部下を虫を踏むように殺して大鉈を奪い楯両手を持った部下達を瞬殺した

ビーストは奪い返した両手を鎖で体に括り付け足の部品は持って来たバツクに突っ込む

大鉈と楯をビーストが構えるとどちらも紅いひびびのような亀裂模様が出来それを見ながらビーストは言った

ビースト「今、ようやく全てチャラになった、今からは俺の八つ当たりだ」

ビーストからは殺気も怒りも全く感じない

本人曰くチャラになったからなのか

或いは元から存在しないのか：

どちらにせよこの言葉が一方的な殺戮の始まりだった

あの化け物はタイラントやブリッツよりも遥かに強かった

時は戻りテツが目を覚ましたころ

ビーストはレギオーナーリウスと戦った場所にいた隙を付かれて逃げられたが追う気はなかった

ビーストの周囲は酷い有様だった

周囲の食部は完全に枯れ木々は力無く倒れている

地面には5 m近い深さのクレーターがあり夥しい量の血で紅く染っている

だが不思議な事に死体は疎かレギオーナーリウスが使っていた道具やP・A・C・Sが何処にもなかった

ビースト自身は服はボロボロで血がべつとりと付いているが全くの無傷

だがビーストはふらつきそのまま倒れた

何とか上半身を起こしタバコに火を付ける

？「それが貴方の唯一の弱点ですか…」

どこからともなく声が聞こえる

だがビーストは驚かない

ビースト「…そうだ」

？「他には言いません、今は休んでください、周囲は我々が警戒します」

ビースト「…ああ」

タバコを深くゆつくり吸いゆつくりと煙を吐き出す

吐き出された煙は少しだけ赤かった

アウターミッション57（コラボ中）

ビースト「……………んじゃ頼むぞ」

タイラントとブリッツをドローンを動かしている所に任せ吸い終わったタバコを血の海に投げ捨てる

仲間がやられイラついていたビーストだったが休憩中にある事に気付き大笑いしていつも通り笑みを浮かべながらやる事をやる為に戦場へと戻って来た

護衛である??はその理由が分からなかった

何であれ知らぬ誰かがバカをやらかしたのだろう

そんな事を思いながら気配も姿も何もかもを消してビーストの護衛をする

そんな??を後目にビーストは絶好調だった

戦車隊に遭遇したが砲弾は大銃で切り落とされるか楯で防がれそのまま戦車をたたつ斬る

「なんなんだよアレは?!」

頭の理解が追い付かず悲鳴に近い叫びをあげる団体の人間

離れば地面を叩きクレーターを作り出し近付けば楯が大銃の餌食

最早万能者と戦ってるみたいだった

そんな中1台の戦車がビーストを轢き殺そうと突っ込んでくる

だがビーストは戦車へと同様に突っ込みそのまま大銃を戦車へ突き立てた

大銃は戦車の装甲が紙だと言わんばかりに戦車を貫き中の操縦士を貫く

「操縦変われ!」

早く変わったらしく戦車の勢いは落ちない

ビーストは後ろに下がり楯を構える

そして突っ込んでくる戦車とタイミングを合わせ大銃の柄尻を楯で殴り同時にパイルバンカーを打ち出した

音速を超えるパイルバンカーにより大銃は戦車を貫通し後ろにい

た戦車のキャタピー部に突き刺さった

大鉦が貫通した戦車はエンジンかどつかいがイカれたのか停止する

「ひっ?!」

操縦士が最後に見たのは誰かが使ったいたであろうアサルトライフルの銃口だった

ガガガガガガツ!!

銃声が止むと戦車も完全に沈黙する

ビースト「次はどれだ？」

周りを見渡すが生きている者はいなかった

そんな中爆発音が聞こえそちらを見て困った様に頭を掻く

ビースト「……確か敵司令部って」

? 「あの方向ですね」

アチャー、と面白がるように呟くビースト

一応任務は敵司令部にあるであろう情報の回収だ

だがその司令部が破壊されてしまった

ビースト「……まあノリで何とかなるだろう」

? 「先行しますか？」

ビースト「いや、このまま向かう、急いだ所で、だ」

ビーストは2台目の戦車に突き刺さった大鉦を回収しついでと言

わんばかりに戦車をぶった切る

ビースト「んじゃ行くか」

そう言っつてビーストは歩いて司令部に向かう

姿の見えない護衛も恐らくそれに続く

2人が居なくなつた後、切られた戦車からはオイル類と混じつて大量の血が流れてきた

残党を片しながら司令部に着き物陰から様子を伺う

以外にも司令部は結構形を保っていた

そして生き残りも多い

ビースト「……………」

何も言わずにビーストは物陰から出ながら無線をオープンチャンネルにしながらか歩く

そして生き残りが気付くと同時に言った

ビースト「1番！BLACKWATCHEビースト！いつきまーす！」

この声は色んな所が聴いたかもしれない

謎の掛け声を共に虐殺が始まった

同時に護衛は中に潜入する

大銃で切り楯で殴りパイルバンカーで打つ

P・A・C・Sだろうが戦車だろうがビーストの前では何ら意味をなさなかった

寧ろ小火器等の方がある程度役立っていた

言うのもビーストが小火器持ちを後回しにしているからだ

だがそれもすぐに終わる

ビーストは大銃と楯を地面に突き立て近くにいた敵の2人を掴むと

ビースト「そら、行つてこーい」

敵が多い所へと投げる

投げられた2人は地面に落ちると同時にELIID化し周囲の敵に襲い掛かり司令部は阿鼻叫喚となる

何人かでELIIDを倒すもビーストが倍のELIIDを追加する

しかもELIIDは何故かビーストを襲わないうえにビーストはその間も攻撃し続ける

？「余計な物も含めてかなり回収しました」

どこからともなく護衛の声が聞こえる

それを聞いたビーストはニヤリと笑い

ビースト「そんじゃ手伝え、1匹も逃がすな」
？「了解」

それから3分もしないで司令部は完全に壊滅した
ビーストが造ったELIIDを含めて

そんなELIDを見て

ビースト「：コイツらは適当に誤魔化すか、情報関連はこつちに渡せ後見つかるなよ？」

？「問題なく、気配も姿も何もかも消すのは得意ですのぞ」

ビースト「ならいいが油断はするなよ、……とりあえず休憩く、疲れた」

そう言つて殆どビーストは護衛が持つて来た情報等の資料が入つた箱に腰をかけたバコに火をつけ鎖を外しタイラントの両手を落とす

ビースト「敵司令部は絶滅させた、少なくとも俺が来た後は誰も逃がしてはいない、情報とか欲しいんなら取りに来く、ある程度集めてあるが欲しいのがあるかは知らん」

ビーストはオープンチャンネルの無線にそういうと無線を切り死体の血を呑みながらタバコを吸うのであつた

アウターミッション58（コラボ中）

BLACKWATCH本部

ブラン『「八割だ！それ以外は残して向こうに向かわせる!!」』

ブラン「こんなんじゃないや足りねエよ！もつと崩壊液持って来い!!」

ブラン『「ノーツ！テメエも急いで迎え！」』

サツキ『UNMP準備完了、先に出る』

ブラン『分かった！各部隊の救出と情報収集だ！』

ブラン『グリフィンに爆撃中止命令を出せ！今やれば味方しか爆撃しねエぞ！』

オペレーター『りよ、了解です!!』

ブラン『イーグル!!準備はまだか!』

イーグル『あと2分です!!、ヘリや各戦闘機を先行させ見張らせませす!』

ブラン『1分でやれ!』

BLACKWATCHは過去最大級の慌て具合だった

サイバーブレインの方がある程度落ち着いたと思っただらこれだ

原因は正体不明のナニかにビーストがやられたのだ

あのビーストが、だ

そんな状況なのでブランも複数の無線機を使い近ければ叫んで指示する

指示と言っても強制ではあるが

オペレーター『AODも救出部隊を出すとの事です!』

ノーツ『ならこっちは医療チーム総出で行くぞ』

イーグル『準備完了です！ヘリをそっちにまわします!』

ブラン『すぐ行く！準備出来次第随時向かえ!』

ブランは自身の武器である処刑斧を持ってヘリに乗り込む

数十分後

グリフィン撤退場所近く

現在ここにはBLACKWATCHが建てた仮設住宅と救護テントが広場を埋め尽くし仮拠点のベースとしていた

中は阿鼻叫喚だった

負傷者の悲鳴や苦しむ声などが響きあっている

『複数の負傷者を確保した！何人かは四肢が無くなってる！』

ノーツ『最低限の初期治療をしつつ此方に来い！』

『ヘリの残骸を発見！何人かは生きているぞ！』

『負傷した人形が居たぞ！修復準備は出来てるか！』

『出来てる！急いでこっちに送れ！』

『ビースト発見！両足が無くなってるが再生中！だが意識が無いぞ！？』

ブラン『ビーストはあたしが何とかするから離れた場所に持って来い！！』

ノーツ『医療器具が足りない！グリフィンでも何処でもいいから持ってこさせろ！』

『北東に負傷者を確認した！部隊とヘリを送れ！』

『暴れるな！傷が開くぞ！』

『手が?!俺の手が?!?!!』

『鎮静剤持って来い!!興奮してるのが多過ぎる！』

『麻酔が足りない!?!追加は何処にあるんだ!』

『追加はまだだよ！意識が無いならそのまま始めろ！文句は言わせねえー！』

『抗生物質は何処にある!』

『持ってきます!』

『後5分で追加が到着する!それまで何とかしてくれ!』

『心肺停止?!電気ショック急げ!』

ノーツ『その間に治療を進めろ!今なら出血も少ない筈だ!』

『傷口が汚い!破傷風の薬はどこにある!』

『追加待ちです!傷口を綺麗にして先に治療を始めて下さい!』

『軽傷連中が来たぞ!』

ノーツ『軽傷なら応急処置だけで後回しだ!文句は言わせるな!』

AOD隊員「負傷者を8名連れてきました！」

「空いているベットに寝かせろ！手が空き次第重傷者じゆんに治療する！」

AOD隊員「わかりました！」

『近衛隊周囲に展開確認！アリ一匹も通すな！』

『『『了解!!』』』』

「ベットが足りません！」

「向こうに簡易ベットであるからそれ使え！」

オペレーター『グリフィンから通信！爆撃部隊からの連絡が無いと
のこと！恐らく落とされています！』

ブラン『爆撃部隊を捜索しろ！生きれれば回収だ！急げ！』

「追加です！後発電機も持ってきました!!」

「輸血の血は?!」

「本部にある全ての血液型の血液を持ってきました！」

「こつちにO型を寄越せ！」

「こつちはA型だ！」

「hrはあるか！」

「少ないですがあります！」

イーグル『此方イーグル!!ベースより北北西4kmにて爆撃部隊と
思われるヘリを発券した！回収チームを向かわせろ！』

オペレーター『キフスより入電！医療チームを大量の物資と共に向
かわせたと報告！』

ノーツ『急がせろ！』

飛び交う声も無線も何とか持ちこたえるレベルで響きあう

医療現場の声が止むことは無い

少し離れた場所でブランはビーストが運ばれて来るのを待ってい
た

2分程待っていると一機のヘリが着陸しビーストを下ろすとその
ままベースに向かう

見た感じ足ではなく下半身が無くなったようだ

後右手の肘から先

どちらも再生は終わっている

下ろされたビーストにブランは大量の崩壊液を無理やり吞ませたり注射で打ち込んだりして自身の処刑斧のミートハンマー側で狙いをつけ

頭へと振り下ろした

ミートハンマーはビーストの頭を果物の様に潰し脳漿やら頭蓋骨やら血液やらを周囲に撒き散らし地面に深さ5mのクレーターを作り上げる

ブラン「……再生が終わったら連れてこい」

近衛隊『了解』

ブランはベースに戻って言った

アウターミッション59（コラボ回）

上空 チヌーク機内

BLACKWATCH本部に戻っているチヌークにはパイロットを除き4人：いや、5人が機内にいる

中央辺りにタンカに乗せられた意識不明のビースト

そのビーストを囲む様に左右の座席にはブランとノーツ、そしてサツキが車椅子に座っている

ビーストの状況が状況のため先に本部に戻るのだ

？「……で以上です」

そして姿の見えない護衛がいる

護衛からの報告聞いたブランは苛立ちを覚える

ビーストはこの状態なのに護衛は無傷

ブラン「……なら護衛であるテメエが無傷なのはなんでだ」

？「ビーストの危機より敵の情報を最優先、それが決め事です、因みに護衛とは一言も言ったことがありません、誰かが勝手に勘違いしただけです」

その言葉にブランがキレる、よりも早く

サツキ「解ってる情報をまとめます」

サツキに邪魔され怒りを引っ込めるブラン

サツキ「敵の詳細は不明、ですがFANNIESという組織？という事はわかっています、これは○○○と運ばれた負傷者の話から確定しています、恐らく過激派の上の組織、もしくは雇われている、と推測できます」

サツキは続ける

サツキ「また、それとは別のナニかをビーストが察知しています、これはBLACKWATCHを騙った奴と同一人物です、FANNIESは現状の我々よりも遥かに高い技術を持っています、これについては○○○の話だけなので詳しくは不明ですがビーストの崩壊汚染を受けた大錠をガード出来た事、そしてビーストを半精神崩壊及び意識不明にさせた事によるものです」

ノーツ「連中については？」

サツキ「回収出来た情報だけでは何もわかりませんでした、ですがシユレーディングの猫は見つけられましたのでそちら頼りで少なからず情報が入るかもしれません」

が、余り期待しない方がいいわね」

ハア：とため息をつくサツキ

それを見た3人もため息をつく

サツキ「……それと、ある意味1番の問題だけど……」

ブラン「何も言うな……」

ノーツ「外の問題より中の問題がデカイとはな」

中、つまりBLACKWATCHで起きる問題だ

ビーストというデカイ歯車を失ったBLACKWATCHがどうなるかはある程度想像がつく

だがそれよりも厄介なのは他の幹部達だ

サツキ「トラチヨ、アツチ、チーフ……まあこの辺は……ね、大丈夫だけれど……」

睡を飲み更に続けるサツキ

サツキ「インセクトにヤト、他にも初期メンバーには油断ならないのが多いわ……」

かなり厄介な初期幹部達、トラチヨがこっちにいないのが気になるがブランとノーツは気にしない

インセクトとヤトはビーストが初めて仲間にした2人でビーストとは家族に近い関係だ

ヤトは現状ないので多分大丈夫なはず

問題はインセクトだ、下手すれば現状を知っているかもしれないもし暴れられたら抑える事は出来ない

サツキ「……それともう一つ問題が……」

インセクトをどうするか考えているとサツキが言いづらそうに

サツキ「実はサイバーストレインが発狂してから百式の中身が行方不明……」

現在改造中の百式はその間、メンタルをサイバーストレインが預かつ

ていた

これは百式本人の希望でなんでも勉強と訓練のためらしくBLA CKWATCHのネットワークであるラビリスにいたのだが…

ラビリスの半分以上が侵食され一切の操作が不能になった為ラビリス内にいた百式を見失ったのだ

「……………」

現状問題しかない事に2人は黙り込んだ

そんな中、それは急に現れた

他のBLACKWATCH隊員はキフスが送ってきた医療チーム等と一緒に働き続け翌日の夕方に全てが終わり一部の調査メンバーを除き撤収した

ビーストが回収した情報関連は残っているUNMP隊員が他の部隊の面々に確認させてから欲しい情報だけを渡した

そして調査メンバーとして残った1人

ユーリがビーストがやられた場所で調査をしていた

ユーリ「……………これは…急いで倒した方が良さそうですね…」

魔法を使い調べていたユーリは結果を見て軽く冷や汗を流す

調べた結果は、まずこの現象？は100以上の回数で起きている事

そしてこの現象は物理的なダメージと概念的なダメージを発生させる

というものだった

まだ詳しくは調べられてないがコレだけでも十分にヤバイ

ユーリは更なる調査を始める

場合によってはビーストが二度と起きない可能性がある

それだけは阻止しなくてはならない

アウターミッション60

翌日

BLACKWATCH本部で緊急の幹部会が開かれた

集まったのはビースト、ヤト、トラチヨにアツチ、そしてハウンドを除くメンバーだ

ブラン「…部隊の状況はどうだ」

切り出したのはブランだった

ビーストという歯車が無くなり全体的にどうなったのかを確認したかった

そしてそれに応えたのは意外にもインセクトだった

インセクト「……現状問題なし、正確には合ったけど無くした」

ブラン「無くした？」

インセクト「一応このナンバー2よ？ビースト程ではないにしろ代わりの歯車になる事は出来るわよ」

ブラン「……ならいいが……」

正直言うとうと不安ではあったが言った通り、インセクトはナンバー2、ある程度なら大丈夫なはずだ

ブラン「なら次だ、連中については」

サツキ「昨日も言った通り名前とある程度の事しか分からないわ、その辺は資料にしたから後で見といて、それと回収した情報はクズが殆ど使えるのは殆どなし」

ブラン「だがシユレーデインガーの猫は見つけられたら？」

サツキ「生死不明だけどね、こればかりは実際に行かないと」

ハア「…とため息をつくサツキ

徹夜したのか目の周りに隈が見える

既に何徹かしているのだろう

ブラン「次、調べられた範囲でのビーストの状況は？」

その言葉に幹部達の視線はノートにいく

ノート「ユーリ曰く魔術関連の可能性が高く意識不明の理由も含めて分かっている事は殆どない、ビーストをまともに調べられてないか

らなんとも言えんがな、なんだったらユーリの調査報告の方が分かることも多いだろうな」

ユーリ「入りますよ?」

ノーツが言い終わるとユーリが入って来る

ブラン「ナイスタイミングだ、結果は?」

ユーリ「結論から言うとも魔術関連の攻撃です、意識不明なのは概念的なダメージによるものです」

ノーツ「…概念は範囲外だ」

ユーリの報告を聴いたノーツはお手上げ状態、と言わんばかりに両手を上げる

ユーリ「現状ビーストを調べていないので断定はできませんが若しかしたら消された下半身と右手は動かない可能性があります」

ブラン「…:おい、冗談でも笑えねエぞ…」

ユーリ「冗談だったらどれだけ良かったか…」

何時キレてもおかしくないブランを後目にユーリは机に水槽の様なガラスケースを乗せる

中には60cm程のムカデが居る

インセクト「…これは?」

ユーリ「解るとは思いますがムカデのELIDです、恐らくビーストが汚染区域を作った際にELID化したのでしよう、このムカデはビーストがやられた近くで捕獲しました、とりあえずこのムカデを見てください」

幹部達が疑問を浮かべつつムカデを見る

ELID化したムカデは外殻の硬質化や牙が大きくなっている事を除けば特に何も無い

だがインセクトは気付いた様だ

インセクト「…このムカデに何かした?」

ユーリ「私達は何もしていません、恐らくですがビーストと同じモノを食らったのだと思います」

ブラン「…:分かるように説明しろ」

ユーリ「このムカデ、下から40cm程飾りのように動かしてない

んですよ」

言うところインセクトを除く全員がムカデをもう一度見る

ユーリの言う通り、ムカデは下の足も何も動かしていない

ユーリ「概念的な攻撃の例を上げると不老である存在に、寿命の概念を上書きして、不老性を無効にするという感じですよ」

ブラン「…つまり文字を塗りつぶして別の文字を上書きする、って事か」

ユーリの説明をブランが簡潔に説明する

ここにいる幹部達はユーリの説明で分かったであろうがブランは癖で簡潔に言う

ユーリ「そんな所です、問題はこういった概念が何に上書きしたのかわからない事です」

全員が固まった

ビーストにどういった概念がどの概念に上書きされたのかわからない

つまり最悪ビーストは二度と起きない

起きたとしても下半身と右手は二度と動かないかもしれない

という事だ

アウターミッション61

B L A C K W A T C H本部、会議室

ユーリ「…それでビーストを調べたいのですが、どこに居ますか？」
話を終えたユーリはビーストの居場所を聞く

調べれば何かしら分かるかも知れない

そう思い聞いてみたのだがブランが頭を抱えたため息をついて答え
た

ブラン「…：アイツはクオンが持っている筈だ…」

ユーリ「クオン？」

初めて聞く名前に疑問を持つユーリ

ブランが頭を抱える程なので恐らく問題児なのだろう

ブラン「ビーストがどつからか連れて来た黒い半透明の狐みたいな
兎みたいな奴だ、理由は知らんがそいつがビーストを飲み込んだ、お
かげで調べる事も現状を知ること出来ない、生きてるのは分かっ
てはいるがな」

ユーリ「飲み込んだって…：」

ノーツ「調べたければやってみろ、まだ病棟の屋上にいる筈だ、もっ
ともアイツには一切の接触は出来ないし触ろうとしてもすり抜ける、
まともに触れるのはビースト位だ、言ってしまうえば本当にソコに居る
のかすら分からない」

ユーリ「…とりあえず会ってみます」

そう言つてユーリは会議室を後にする

チーフ「我々はどうしますか？」

口にしたチーフにインセクトが答える

インセクト「情報収集と殲滅、サツキはキフスと話し合つてあの話を
進めて、ノーツは世界各所から概念系の症例を探して、ブランはU
N M Pと共に情報の解析よ、部隊と艦隊はもう動かしているからチー
フはそっちの指揮を任せる、あのゴミ共の拠点はどんなに小さかろう
と徹底的に潰せ、連中からは全て聞き出せ方法は一切問わない」

ブラン「お前は どうするんだ？」

インセクト「使える全てを総動員させるから獣共を放って来る、問題ある？」

ブラン「……勝手にしろ」

簡単に言うがインセクトの言う獣共は幹部達でもまともに制御出来ない悩みの種だ

獣共の殆どはビーストが連れて来たのでビースト関連であればある程度は制御出来るはずではあるが…

ブランの回答を聴くとインセクトは出て行く

それを見送る他のメンバーは大きいため息をついた

幹部会が終わって少し

東シベリア海

沖合で過激派の船四隻、今は三隻の船が正体不明の敵と交戦していた

「第三護衛艦エンジン停止！火災止められません！」

「艦を放棄！第二護衛艦に救出さs」「魚雷3接近！」「全員捕まれ！」

鼓膜を破る様な爆発音と共に船が大きく揺れる

「状況報告！」

「船底に穴があき浸水しています！排水間に合いません！」

「だ、第二、第三護衛艦魚雷直撃！通信ロスト!？」

「目視で第二、第三護衛艦沈んでいるのを確認！」

状況は最悪だった

突如としてソレは襲ってきた

レーダーに一切の反応も無く複数の砲弾が第一護衛艦を襲い沈めた

その後も未知の何かからの爆撃に海底からの魚雷攻撃

それにより護衛艦は全滅

本艦は一応武装は積んではいるものの大口径の銃座に150mm

の艦砲だけだ

それに対して向こうは第二次大戦頃の大きさの艦砲に爆撃機、そして恐らく潜水艦までいる

「爆撃来ますー!」

「海底より魚雷接近!」

「……クソつたれ」

艦長の毒づきと共に船は大爆発を起こし数分で暗く冷たい海底へと姿を消した

? 「:敵艦殲滅を確認」

? 「生き残りはいるっぽい?」

? 「ふんっ、いたとしてもいたとしても凍死だろうな」

? 「:同士を傷付けたんだ、これ位はやらないとね」

何とか生き残った過激派メンバーは海面に浮いている少女達を目撃し驚く

だが海中から何かに海の中に引きずり込まれ二度と浮いてくる事はなかった

? 「……しかしよくもまああんな奴を味方に出来たものだ」

? 「ビースト曰く、化け物同士気があった、らしいよ」

? 「……ハラショー」

白いセーラー服を着た少女は白い帽子を抑えながら言う

言葉と表情が合っていないが気にする者はいない

だってビーストだから

その一言で全て終わる

? 「とりあえず空母達と合流するっぽい!」

黒いセーラー服を着た犬耳みたいなくせっ毛の少女の言葉に全員が頷き海面を滑るよう移動して行った

静まり返った海に残ったのは船の一部と死体だけだった

アウターミッション62

UNMP本部、作戦司令部

幹部会后、ここでは回収出来た情報と前回の作戦で得た情報を解析していた

壁に設置された無数のモニターの映像が数秒単位で変わっていくのを見つめるサツキ

サツキ「…モニターE-37を止めて、カイン、モニターC-22で同じモノを流すな」

サツキはほぼ一瞬で無数の30型モニターに写っているモノを全て理解出来る

これは昔からの才能だ

これにより何度も命を狙われたが…

サツキは他のモニターを見ながら止めた映像を手元のキーボードを使って解析する

正直、手は足りている、だが目が全く足りない

まだ目があればモニターを増やせるのだが…

サツキ「…ほんと、サイボーグが羨ましいわね…」

この眩きは誰も聞こえなかった

BLACKWATCH、コントロールルーム

チーフ「Ω-8と？-3はB3地区に向かいB9の援護に向かいなさい、A-2、4はK9地区の敵基地の殲滅です」

コントロールルームではチーフが各地区に向かった部隊の指揮をとっていた

相当数の部隊が人類人権団体等のテロリストを殲滅しに向かっている

チーフ「△-3、損害が大きいからΦ2と入れ替わりで本部に帰投せよ、T-5、近くにいるΛ-6の援護に向かいなさい」

各部隊の状況を把握しながら的確な指示を出すチーフ

元々ここまで指揮能力は高くなかったが幹部達の英才教育により

高い指揮能力を手にしたチーフ

とは言つてもBLACKWATCHの指揮能力を持つサツキには到底及ばない

それでもチーフは最大限に引き出せる能力を發揮し的確な指示を出し続ける

チーフ「Ψ―1、E―9の増援へ、E―9はΨの到着まで時間稼ぎをしてください、イーグルはN1地区の敵基地へ爆撃を始めて下さい」

全隊員のバイタルを見ながら指揮を続けるチーフ
どちらかが根を上げるまで殲滅は続く

■■■■、■■■■

クオンに飲み込まれたビーストがここに居た

周囲は黒いがビーストを含めてこの場所にいるモノ達とある物だけはハッキリと見える

まるで漫画などである背景だけを黒塗りにした様などころだ

?「……おこせ」

様々な骸の山の上に座っている黒い王冠を被った少女?の謎の言葉に1人が意識の無いビーストに近付き禍々しい魔力で覆われた手をビーストの鳩尾に乗せ

その魔力を一気にビーストへと注ぎ込んだ

ビースト「ツ?!、がつ…は…ハア…ハア…クソがッ!」

?「…きぶんはどうだ?バケモノ?」

ビースト「…最悪だな、寝起きでテメエの顔を拝むとか…」

起きたビーストに何かを言う少女

少なくとも地球の言語では無い言葉だがビーストは分かっている
ようで普通に返す

?「あのていどのれんちゆうにやられてもいせいはいつちよまえだな」

ビースト「……何が言いたい」

？「わたしはきさまをかだいひようかしすぎたようだ、たかだかがいねんこうげきをされたていどでこのざまか」

ビースト「…黙れ、こっちは概念への対策なんて知らねエンだよ、そもそもあんのかすら危ういがあつたとしてもどうせ概念で対処しろ、とかだろうしな」

？「かだいひようかさせただいしようはでかいぞ……だが、まずはきさまのちゆうとはんぱなのをどうにかするか」

ビースト「…どうする気だ、下手な事すれば表には出れないぞ」

ビーストの問いに王冠の少女は隙だらけの獲物を見つけた獣の様に悪い笑みを浮かべ

？「貴様を次のステージに上げて正真正銘のバケモノにしてやる、そこらに湧いている下等種何かには負けないようにな、なあに時間はたっぷりある」

中途半端な地球の言語で宣言した王冠の少女の左目は人間のモノではなく蛇の様な縦長の瞳孔

右目に関しては瞳孔があるのか、というレベルの模様の様なものがある

それはこの少女が■だから

正確に言えば■、恐らくこの地球上最後の■にして■

アウターミッション63

グリフィン本部、社長室

クルーガー「……これが今回の報酬、そしてそちらから要望のあった重装部隊の設計図と資料だ」

クルーガーは2つのアタッシュケースと1つのファイルを机に置きこれらを取りに来たもの達をみる

まずドア付近には内と外に見張りや護衛としてサムライと騎士が1人ずつの4人がおり目の前にはBLACKWATCH幹部のトラチヨとアツチが居る

今回の作戦での報酬を取りに来たのだがクルーガーはBLACKWATCHが報酬を取りに来るとは思わなかった

しかも来たのが近衛隊なら尚更だ
というのも近衛隊は基本戦闘しかやらずこのような事はまずやらない

そして理由は分からないがBLACKWATCHはどんなに報酬があろうが受け取らない事が多い

そんな事を考えているとトラチヨが設計図と資料を取り確認する

トラチヨ「……間違いないようですね」

トラチヨは書類をファイルにしまうと出ていった

アツチもすぐにアタッシュケースを取り後に続く

2人が出ると護衛のサムライと騎士もクルーガーに一礼して出ていった

クルーガー「……ふう……」

誰もいなくなるとクルーガーは一息つく

BLACKWATCHの詳しい被害は解らないが痛手を負ったらしくピリピリしているのがわかった

恐らく誰かが負傷したのだろう、それも上の方のメンバーが

誰かが殺されていた場合は報酬なんて取りには来なかっただろう

クルーガーに出来る事は飛び火がこちらに来ない事を祈るだけだった

■ ■ 地区、廃都市

ここは前は賑わっていたのだろう

オシャレなカフェや服屋、ブランドショップ等の店がある

だが崩壊液の影響で高濃度汚染地域になり今は僅かなELIDが出る程度のゴーストタウンと化している

そんな中1件の喫茶店で何人かが話し合っている

もちろん、この喫茶店も放置された店で誰かの為に営業している訳がない

つまるところ不法侵入である

もつとも捨てられた店に不法侵入があるかは疑問であるが

そんな喫茶店にいるのはBLACKWATCHの最高幹部であるインセクト

そしてその対面に座るのが褐色肌の少女、エルダーブレイン

その斜め後ろにはエージェントが、その後ろの席にはハンター、処刑人、アルケミストの3人がインセクトとエルザを見ている

数分程の無言の後、インセクトは黒い大型のアタッシュケースの様なものをテーブルに置く

インセクト「寄越せ」

エリザ「良いですよ」

エージェント「エルダーブレイン様?!」

驚くエージェントを無視しエリザはケースを開けて中に入っている装置を軽く見てそれに繋がっているコードをとり自分の首元に接続する

エリザ「つけてから言うのもおかしいですが理由は？」

インセクト「何処そのサルにサイバーブレインが狂わされた、それを治す為よ、役割は違えどサイバーブレインとは姉妹AIだから合うはずよ」

エリザ「…彼女もかなりの手練のハズですが……とりあえずは良いですが確認が一つだけあります」

インセクト「……」

インセクトは無言だがエリザは続ける

エリザ「あの人はどうしたのですか」

言った瞬間、喫茶店の至る所から這いずる様な、何かを引き摺る様な音が響き渡りエリザを除く鉄血組全員がそれぞれの武器を構え見えない何かを警戒する

エリザ「……失礼、今のはなしにしてください」

言うとエリザはポケットから何かのチップを取り出し装置の横に置く

インセクトはそのチップを取り観察していると

エリザ「それはチーフ用の鉄血支配権のチップです、それをチーフにアップロードすればハイエンドモデルの支配権は無くなりますが鉄血の全ての一般人形を強制的に操る事が出来ます、元より強力で支配権の範囲も広がっています」

とんでもない物をBLACKWATCHに渡したエリザだが後悔はしていない

もつとも今BLACKWATCHの装置にコピーしているのは正規軍が血眼になって求めている自身のAIなのだが

エリザ「こちらはアナタ方が何をしているのかは知りませんがそれは役に立つはずです」

インセクトは何も言わなかった

アウターミッション64

あの作戦から1週間たった

BLACKWATCHの猛攻を受けている過激派組織

戦闘ではなく一方的な、殺戮虐殺、蹂躪だ

とある場所の過激派基地でも殺戮が行われていた

その殺戮を何とか生き延びた過激派の兵士は使えるMG、二連装のM2を見つけ約500m先にいる2人のBLACKWATCH兵士に狙いを付ける

見た感じ普通の兵士だが相手はBLACKWATCH

警戒するに越したことはない

過激派兵士がトリガーを押し込む寸前にBLACKWATCH兵士達は気付き過激派兵士へと向かっていく

「クタバリやがれ！クソツタレがあ!!」

二連装のM2から12.7mm弾が2発つつ撃ち出されBLACKWATCH兵士達を襲う

しかし2人は撃ち出される弾を避けながら過激派兵士へと近付いていく

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

雄叫びを上げながら撃つが弾は掠りもしない

そして、ガチンツ！、とボルトが止まり弾切れする

それと同時に2人は止まる

過激派兵士はコッキングし再度トリガーを押し込むも弾は撃ち出されない

距離は50m

兵士は周囲を見渡し弾を探すが何処にもない

BLACKWATCH兵士達が走り出す

過激派兵士は最後の抵抗として持っているAKを撃つ

「ク ソっ！ ク ソっ！ くっ

そオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!?」

悲鳴混じりの声を上げながら撃つがやはり当たらなかった

そして距離が5mを切った時BLACKWATCH兵士達は口を大きく開け通りすぎざまに過激派兵士の両腕に喰らいつきそのままもぎ取った

「っっ??!」

兵士が悲鳴を上げるよりも早く何処からともなく3人目が現れ喉元を喰いちぎった

喉元を喰いちぎられた兵士は声をあげる事も出来ず死んだ

「……こちら、軍隊アリ、ポイントΦΩ制圧」

『了解、残りはマンティスに……まで……了解、予定変更だ、1時間後にΔ-3と合流後ポイントEに向かいルート33に向かえ、それまで待機せよ、ポイントΔπへはヘルハウンドが向かう、死にたくなければ待機せよ』

「軍隊アリ了解、待機する」

この殺戮はこの1週間でユーラシア大陸の過激派組織が五割近く壊滅させられる程の勢いがあつた

アップグレード完了……再起動開始……システムチェック

……オールグリーン

ラビリンスチェック……破損箇所多数……再構築後アップデート……ラビリンス再構築開始……完了……アップデート開始……完了

エリザAIアップロード……完了……連動開始……システムチェック……傘確認……ウイルスコード書換……成功

各システムチェック……クリア……

サイバーブレイン再起動……不可……データコピー後サイバーブレイン再構築

再構築開始……再構築完了……アップデート開始……完了

……システムチェック……クリア

サイバーブレイン再起動……完了……全アクセス権復帰

全データにアクセス……完了

全システム復旧完了

ケイオスラビリンス起動完了